秋田叢書

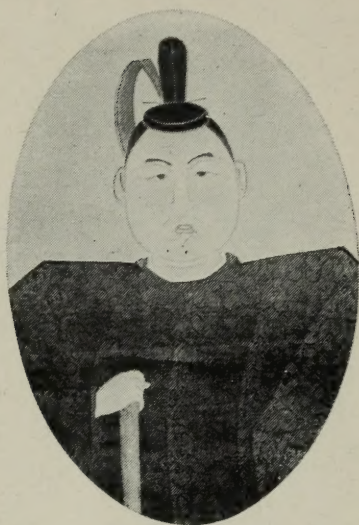
第十二巻

秋田遷封後の佐竹氏歴代藩主像（一）

初代
淨光院殿義宣公

二代
鑑照院殿義隆公

三代
德雲院殿義處公

四代
天祥院殿義格公

五代
圓明院殿義峯公

六代
通霄院殿義眞公

（秋田市　天德寺藏）

秋田遷封後の佐竹氏歴代藩主像（二）

七代
恭溫院殿義明公

八代
源通院殿義敦公

九代
天樹院殿義和公

十代
宏德院殿義厚公

十一代
憲諒院殿義睦公

十二代
顯德院殿義堯公

（秋田市　天德寺藏）

故本會代表者深澤多市小照

明治七年四月十八日秋田縣仙北郡畑屋村に生る。東京二松學舍及び仙北郡飯詰村醉經學舍等に漢文學を修め、明治三十三年仙北郡役所に入りしより秋田縣屬、宮城縣屬、京都府屬を歷任し京都府熊野郡長に任ぜらる。大正十年退官歸鄉し後平鹿郡横手町助役及び名譽助役に就任昭和六年病の故を以て辭す。是より前日露戰役に出征し陸軍一等計手に陞る。其間好みて詩文の作多く、京都時代特に史學熱に拍車を加へ、歸縣後、縣史蹟名勝記念物調査委員を囑託せらる。偶大正十一年祝融の爲、多年蒐集の珍籍史料を烏有に歸せしより貴重史料公刊の急を痛感し、目に觸るゝに隨つて之を謄寫印刷に付し同好に頒つを常とせり。尋で昭和三年「秋田叢書」出版を敢行し、同五年よりは「菅江眞澄集」を續刊し、幾度か經濟上の難關に遭遇しつゝも苦心慘澹編輯と經營に膺り、前者は其最終卷第十二卷、卽ち本卷の編輯を了りて原稿を印刷所に廻附し、後者は第六卷を發行して更に材料を蒐集中、昭和九年十二月二十日病革りて永眠す。法號篤學院釋紫水居士、横手町清水澤無量壽院墓地に葬る。小野寺盛衰記」、「仙北郡史瑣談」、「金澤柵阯と縣社八幡神社」等、發表せる史論數十篇、其公刊せる史料は本叢書及び眞澄集の外「小野寺氏研究資料」(十三篇)「仙北郡史研究史料」「秋田氏研究資料」等、貴重なる古文書類多し

秋田叢書第十二卷　目次

羽陰史略卷之六

羽陰史略卷之七（江戸）

羽陰史略卷之八（江戸）

羽陰史略卷之九

羽陰史略卷之十

◇巻頭寫眞版

花のいではぢ

○花のいではち

松藤日記

松原　兩（ふた）村の　つはら
藤倉の　事　か也

、田（た）中（なか）　、搦（から）み田（でむ）

、濁（にごり）川　、添（そひ）河

○秋田ノ郡山内ノ莊

○松原村

添河村の山堺を踰え來れば山内ノ莊也。此旭川を泝洄に、添川村に聞たりし本乘淵に來る。いつの世ならむか、その法師が身を落したるあたりも田變り路と化りて、河も、ことざまに流たり。弓手の片岨に、いや茂りたる杉原の木の間より補陀洛寺の坂のみぞ見えたる。おなじ松原てふ村ながら、そこに門前、中村、通尻、石龜なンどの四箇村ありてみながら松原とはいへど、郡邑記には山内村とありて、枝郷に藤倉、石上、下臺、タネ臺の四村と見えたり。むかしと今のたかひあり。村に至れば門前、中村、通尻、石龜の村々、いとしげき柿木の苑の中に家どももあるが、ほのかにぞ見えたる。此山里の朱菓は、浦村の名に負ふ烏帽子柿にもいやまさりて、是や松原の虎彪柿とて、烘柹、烏柹てふものもせず、露霜の奧山ふかく紅葉するころ、おのづから熟柿と成りて肆に持出てひさぐを見れば、珠なす珊瑚の色して、味は

木練、明丹に劣らず。さゝやかの朱菓ながらさらに核子なく、愛しきくだものなり。此柹はもと補陀寺の開山古心禪師の殖給ひしが、としふり老木たるを壓貼として殖初しを人々見ならひて、實生あらねば根生ひを採り、あるは寄枝として家々の苑にうゑにうゑて繁き林をなせり。柹苑に早熟あり、晩熟ありみな同柹ながら、そが中に金四郎柹とて、石龜村の佐々木金四郎が吾家苑なるはわきてよけむ、自もほこりかにいへり。文化五年の秋ならむ、公、此柹を國つものとて武藏へのつとにめし給ふたるよし、恐みよろこぼひて村民みなかたり傳ふ。家の坂、通し尻を經て石龜村になりぬ。こと木は木のめ春めきうちけふる中に、いや立ッ柹の苑生はいまだ冬枯のさま見せて、春に似げなきこゝちぞしたる。旭川の岸に雌雄の大岩ならびたり。牡石の頭には石ノ大黑天をすゑ、牝石の上へには石觀音をぞ居たる。是を夫婦石とよびまた石神ともまをし、また石龜と云ふ。其石、兩石ながら龜形したればしかいふといへり。來つるゝ人の云ク、明和、安永のころならむか、此川端にて、くゐまりの大サの石割リければ魚の飛出て流れたり、こは、世にいふ水魚石といへるものならむかと云り。うべならむかの「雲根誌」てふ石ノ書、都、また近江、肥前、伊勢、遠江なンど國々ところ〳〵に、石の中より魚出、龜の出たりし事どもを記シたりと語らひて休らふ。うちむかふあなたの河岸に、瀧の細くかゝりぬ。こはさゝやかの瀧ながら、不動明王をすゑて不動の白瀧といへり。かくて行ク左の山本に、湯神とて石佛を小祠の內に祭る。むかしはよき溫泉ありしが元祿のころ地動大にして埋れはてて、たゞ、けしきばかりいづるといへり。如來石とい

ふ岩あり。そは佛のさまかたちもなき岩を、なにのよしありてかさはいふと云へば、其地震(なゐ)にふり落
されて石ノ形も碎ければ、如來石は名のみにて、此堂の湯神ぞ誠は如來石なるなど、なにくれとかたりも
て、たど、のくれやまくれわけ行ほどに、片岨たかき處を毘沙玖(びしゃく)といふ。あやしき山の名也、蝦夷辭など
にやあらむかし。東階臺(とうかいだい)といふに登れば朝日川の水のすがたもことに見なし、また、瀧のうち霞みたる
見やりイ(たゝず)めば、ことしは、れいよりも寒くて花も遲き事よと、こゝろありげに、あないが云ひつゝ、けふ
りうちくゆらすもをかしく、

　花もみちいかにたのしき春秋やいさしら瀧のかゝるやまみち。

なほつばらかに分見まほしくて、補陀洛寺近づきて門前と云ふ村の三浦氏の家にまづ宿づきて、日も
高ヶればまた出たつ。田の中路をしはし行ヶば弓手の方ダに大黑田といへる田あり。此山田より石工作(いしにきりたる)
大黑天の像を掘り出してとし久しく補陀寺にすゑまつりしが、今は根笹山の西來院に納めて、茂木知敎
のふみにその來由を記せり。おのれも「水の面影」にも其事いへり。路のかたはらに石ノ觀音ひとはし
らならずすゑたるに、高からずさゝやかなる瀧落たり。杉のむら生(だて)る中なる石階をやゝ登り得れば、右
に禁葷酒の碑あり、左に大黑天の像を安置(すゑ)たり。樓門に二王立(たち)、そが層(うへ)には十六ノ阿羅漢をおけり。此
門のかたはらには石地藏菩薩、また小高ヰ處に祉ありて、内には太上神仙を齋奉りて寺の鎭守とせり。
元祿の棟札一枚のみぞ朽殘たる。門に入れば經典庫建り、東陽大士、普建、普成の木像なゞどいと〳〵舊(ふり)

たり。右のかたに樅、鷄冠木、榧木、海榴なンど生ひたち、泉の湛たるは古永福山嶺梅院といふ其寺跡の林泉なりしといふ。そも〳〵此補陀寺は、德治、延慶のいにしへまで北比內ノ莊長走山のこなた、糟田ノ鄕の枝村白澤の松原といふ地に在りし寺也。今も埋れて礎なンど殘れり。さりければ村民そこを寺の澤といふ。其松原に在りしころは、法相宗にて松原寺とも云ひたりけるにや。その松原寺いたく荒廢て狐、梟の栖家となりしを、本ト法相の僧たりし月泉和尙といふあり。佛心宗にこゝろさし其門に入りて、月泉、迷ひ雲たちまちに晴れて心の月自己が泉に潔く悟て、なほ深く禪定に入りて十方佛を見奉らむと、龜倉山とて人しらぬ奥山に草を結て菴とし、木の實を拾ひ草の根を掘りて粮とし、やがて白澤ノ寺を遷し觀音を安置て龜倉山ノ松原寺といひし。こゝを今ノ世かけて松原と云ふ由縁しかり。いつのころならむ龜倉山に野火かゝりて寺ノ回祿しかば、麓なる枝寺の嶺梅院にうつりて月泉和尙行ひすめり。かくて嶺梅院は土崎の浦にうつせり。今かゝる、補陀洛寺といふ四字の額は月泉和尙の筆跡。かくて龜倉山補陀洛寺といひしが、中興龜倉山の文字を改めて龜像山とはいふ也。禪堂に古き觀世音ノ像を安置て、補陀洛山のゆゑもて補陀寺とはいふ也。此寺の長押、懸魚なンどに鷲の二羽をかさね、雁の飛び行ねたるさまに編る檜扇の紋を刻み、また巴の紋ぞありける。こは秋田家阿倍姓をいふ代々の菩提寺にこそあらめ。此開山月泉良印和尙は陸奥ノ國ノ熊谷氏たる人なりとも、また大和ノ國人なりとも云り。延文のはじめより陸奥ノ國江刺ノ郡黑石ノ鄕、捻華山正法寺の鼻祖無底和尙の室に入りて助住て、康安の夏に飯

り給ひつれどその寺の二祖とも云り。月泉良印和尚いさゝかの病おこりて、應永七年庚辰ノ二月廿三日、世にふる壽八十二にして遷化給ひき。かくてのち後土御門ノ院御宇明應八年己ノ未ノ七月二日、佛覺古心禪師と謚を給りしは此月泉良印和尚の事也。古心禪師つねに龜倉山のいなだきに登り、石頭にあならをむすび給ひし處を石の峯、また石長嶺ともいふ。坐禪石あるがゆゑ也。古心禪師石床に結跏趺座して、諸聖不求、己靈不重、巖前愛雲、溪頭洗踵」といふ四句は、應永七年の正月廿四日、みづからものに記して、そのきさらぎに寂れ給ひぬれば、これを禪師の遺偈と唱ふ。佛覺禪師に紫衣のかつけものありしかど、道元禪師の例の如に身は麻の衣にやつれて、墨染の伽梨に行ひすぎやうし給ひしとなむ。その墨染の大衣は、能登國總持寺の二祖峨山紹碩和尚のたまものなり。そは布の墨衣にして、馬歯、鳥足の跡としふり殘りぬ。古心禪師、弘徳圓明國師と峨山紹碩禪師の兩像を藕絲の布に画り、まことに愛たく、繪佛師なンどの及べうもあらじ。よき什寶ながらいと〳〵ふりたり。此補陀寺の二祖を無等良雄和尚といへり。まさにしるべし、良雄和尚は萬里小路ノ中納言藤房ノ卿をこそまをし奉るなれ。其むかし都をしのび出て、「住すつる山をうき世の人とはゞあらしや庭の松にこたへむ。」と岩倉の庵のさうじにかいのこし、また高志の鷹ノ巣山にて、「こゝも又うき世の人のとひ來れば空行雲に宿もとめなむ。」と石の上にかいのこして、いづこにかかくろひ給ひけむ。また、大納言實世卿のもとへ草刈り童のもて來る文にこめて、「君かすむ宿のあたりを來て見ればむかしにぬらす墨染の袖。」一實世

卿いそぎ皇居へまゐり給ふて、大和、きのくに、かはち、關々にみことのりしてすぎやう者をとゞめけれども、それとおぼしきもあらさりけらし。」など、芳野拾遺物語をはじめ、この君の事くさぐ〵のものがたりあり。此藤房入道は大納言宣房卿の子にておはしけるが、才智世にすぐれ給ひて、君にも御おぼへのあさからず中納言まで成り給ひしが、建武きのえ戌のとしの春、にはかに世を捨たまひしなどしるし聞えたり。藤房入道陸奥をすきやうし出羽におもむきて、補陀寺の開祖月泉良印和尚の法を嗣給ひしとなむ。また云ふ、正法山妙心寺の二世のぜじ受翁宗弼和尚を中納言藤房ノ卿と云ひ、あるは近江ノ國石部ノ驛に近き妙感寺の開祖をも藤房入道として、いつのころならむ神光寂照禪師と勅謚を給りぬ。此寺は三雲といふ村の邊りに在り、そこにおはして「一世のうさをよそに三雲の奥深く照る月影や山ずみの友。」となかめたまひ、やかて康曆二年三月廿八日、つもる齢八十五にして遷化(かくれ)給ひしよしをいへり。かく二箇寺にも藤房入道の由緣(ゆゑよし)のあれば、こと處にもまたもあるべし。此事「勝手の雄弓」といふ日記の松應寺のくだりにつばらかなれば、こゝには精しからず。大平ノ莊八田といふに再び閑居の地をもとめ、としは七十あまりにて貞治元年壬寅ノ冬十月ノ十日終焉(をはり)給ひしと云へど、良雄和尚の墓碑それとさだかならず。松原にもありけるものか。また嶺梅院の緣起てふものには、笈をかけて再ひ斗藪したまひしと見えたり。名高き君なれば、開山とし二祖として共靈も勸請(いはひまつる)事あり、さることもやあらむ。又補陀寺に藤房入道の笈とて殘りぬ。良雄和尚に、師はいづこの

國にておはし給ふと問へば、角額の人なりと訶すくなにのたまひしとなもいへる。さばかり世にかくろひ給ふこゝろもて、なじかは都路近く二祖となり開祖となり給ひてむ。「開祖禪師、諱ハ良印、號月泉、姓ハ熊谷氏、奥州之人也。」と此寺の錄にしるしたり。又、母一子なきことをなげき、その國の横山の不動明王にいのりまをして生る子也、十七にして鹽竈教寺にまなびたるよしを記せり。又、無等良雄和尙の編誌書に「良印和尙行狀記」といふものあり。其書のはじめに、「補陀開山月泉禪師語錄門人　良雄等編」としるして、此書、からぶみのさまにしていと〳〵長し。そのふみの中に、禪師のはじめの名は暉通と云ひ月泉と云へり。もと大和國吉野の人とあり。さるよしみをもて、藤房入道こゝに尋ねおはして師弟とむつびおはしつるものか。又藤房卿、己身を師の月泉和尙になずらへて書給ふものか、みちのくの人と見え又大和の人と云へり。名を隱し身をかくせるさま也、また良印も吉野の落人なンどにや。無等良雄和尙みちのくすぎやうのとき、その妻ならむ、あるじの菩提とて、鬱多羅僧をわが夫の衣にて縫ひしとて良雄和尙に布施にまゐらする。其伽梨の裡に「江刺壹岐守平淸秀公寄附」とあり、こは良雄和尙の手ならむといへり。良雄和尙みづから寺を此山中に建て少林山西來院といふ。延文のころ師の良印はみちのくにいたり給ふにふたゝび會ことあらで、貞治の霜と十月に消えはて給ひ、少林山の二世は龍谷良靑和尙也、永享元年己酉ノ七月遷化り。良雄和尙補陀寺の二世となり西來院を闢き、また太平ノ莊、今八田村といふ里中ながらそのころは木々ふかく松原の山より人里遠く、きし高く山川

の淵に臨ミてよき處地とて、此處に終焉おもひ定て、小寺を建立龍淵山松應寺といふ。そも〳〵出家のむかし岩倉にて、「住すつる山をうき世の人とはゞ嵐や庭の松に應む。」とながめ給ひし家出のはじめをおもひ出て、終焉の地なれば、松ニ應ヘムと、松應の二字をもて寺の號とやさため給ひけむものか。強言ながら心のまに〳〵しるしぬ。また松應寺は靈魂勸請まつる寺とも云り。西來院の二世は補陀寺の三世龍谷良青和尚也。四世ノ圓鑑良昭和尚康正二年丙子五月十二日寂五世ノ機外良玄和尚長享二年戊申三月十九日寂六世ノ鑑能勇照和尚大永五年乙酉正月十八日寂七世ノ雲峯慶集和尚天文四年乙未十月廿七日寂八世ノ察心壽鑒和尚天文廿三年甲寅二月二十一日寂九世ノ草菴守瑞和尚永祿七年甲子二月廿五日寂秋田軍記に、城ノ介實季卿檜山ノ郡今云ふ山本郡浦ノ村に在る花嶽山石頭院を一日市ノ村にうつして、此九世ノ和尚艸庵守端（マヽ）を住僧にそおかれけると見えたり。十世ノ光室源瑞和尚天正八年庚辰七月八日寂十一世ノ天室宗龍和尚慶長十一年乙巳九月十五日寂　後陽成院の御宇ならむ、此宗龍和尚に大圓珠明禪師と勅謚たまはりぬとなむ。其年、今の廿九世にあたれりといへり。いとふり立る木牌あり、そを見れば、「當寺開基海壽院殿南嶺瑞策大禪定門」と雕つけ、此裡の方には、「安倍ノ貞任ノ次男安東太郎貞季ノ後胤安東下國ノ太郎守季　應永廿一年甲午二月卒　行年九十六　補陀寺開基ノ大檀那也」と彫せり。此補陀洛寺の舊寶多かる中に、八幡太郎義家公の薄衣の御旗とて、紅に白キ日の圓形あるあり、いと〳〵大キにして幅ひろく、保侶などのさませり。寺はものふりいと閑なるに、木の樋高くかゝりて遠くひき、はる〳〵流れて寺の水舟に落る音のこゝろ清し。寺の後なる小高きところに世々の墓誌石ともならびたちて、かみさびたり。あるし善長和尚を別

れて、ふた丶ひとて寺を出、門前をよこぎれて行ヶば袁奈碁の溪といふところあり。こはおなじ秋田ノ郡五十ノ目山内村に、安藤右衞門尉柵山の下追手なゞどのありし處にや、そこにも尾長子ノ林とて魔王ノ神といふませり。袁奈古は宇奈古にや、いにしへ宇奈古といへる人ありし、えみしなゞどにやあらむ。續紀ノ卅六卷、寶龜十一年八月乙卯、出羽國鎭狄將軍安倍朝臣家麻呂等言、狄志良須、俘四宇奈古等欵曰、己等據ニ憑官威一久居ニ城下一、今此秋田城遂永所レ棄歟、爲レ番依レ舊還保乎、者下レ報曰、夫秋田城者、前代將相僉議所レ建也、御レ敵保レ民久經ニ歲序一、一旦擧而棄レ之甚非ニ善計一也、宜下遣ニ多少軍士一爲レ之鎭守上勿レ令レ衄ニ彼歸服之情一、仍卽差ニ使國司一人一以爲ニ專當一、又由理柵者賊之要害承ニ秋田之道一、亦宜遣レ兵相助防禦一、但以寶龜之初國司言、秋田難レ保河邊易レ治、者當時之議依レ治ニ河邊一、然今積以ニ歲月一尙未ニ移徙一、以レ此言レ之、百姓重レ遷明矣、宜下存ニ此情一歷ニ問狄俘一、並百姓等具言上ニ彼此利害一。」云々と見えたり。宇奈古ところ／＼住たるにや。桑澤の水をわたり家の坂といふあり、傘松の岡に澤口の庚申とて石にてすゑたり。通し尻といふ處になりぬ。むかし補陀寺は山奥に在りし、其ころつかひし水の潛リ來るよりしかいふ。斐陀ノ國の突通し山、津輕の千歲山なゞどに似たり。此處は田ノ字、村名にぞなりぬ。聖リが坂を登れば、としふる楢の群生中に内外ノ御神座り、麓あたりをなべて聖が澤といふ。また聖か坂てふ名もあり、高野聖なとの由緣あるにや。ところ／＼に聖が澤てふ名はあるなり、聖とていと／＼多く國々へ巡りしものなれど、近き世となりては、さるほふし商人はありかず。少林山西來院のありし跡に至れば萱葺の

ちひさき四阿めける堂に、觀音をはじめよろづの石ぼとけを、ところせきまですゑならべたり。少林山といふ山の號はよしある事にや、「待ッ人になどかたらはで時鳥ひとりしのびの岡に鳴らむ、とよめる河内ノ國岡山（名所忍岡）にも、少林山見性寺といふ寺ぞありける。無等良雄和尙こゝに寺を建て行ひ給ひし少林山西來院は、いと大によかりし寺なりしを、つぎて住むべき住僧もあらねば、いつとなく寺のあばれて倒れしかば、近キ世に、かゝるしるべばかりの庵は作りたりといへり。四方は杉むらながら、平均(たひらか)にして寺跡とぞおもはれたる。あやしき事あり、天明のころ、山本郡能代の湊なる長慶禪寺五百阿羅漢を建(たて)立(む)と、良傳といふ僧今道心にや、月代の跡ありく見えて少シもの足らぬ三十(みそ)斗の靑法師の、五百羅漢建立とて日每にありくを、人みな、いつの世に良傳は五百ノ羅漢を作り奉らむ、三とせ四とせになれど一體もいでこぬを、いほはしらのほとけをと、うち笑ふ人多かりき。いかなるよしにかありけむ、また公の仰にや、又こと人の願にやあらむ、五百羅漢を建(たつ)とならば能代の地は不祥(ふさはし)からじ、根笹山を闢(ひらき)て建立(するゑ)奉るべしとて、やがて良傳法師がふかき志ぞしられたる。かくて補陀洛禪師（寺ならん）の枝寺少林山西來院を根笹山に遷して羅漢寺とし、良傳法師を中興とせり。此良傳は無等良雄の良の字自然(もじをおのづから)つきしも、あやしくめづらしき事也。埋れ給ひし良雄の光り、此五百あらかむよりぞあらはれたる。かゝる事ども、「水の面影」に精シけれど、なほ記シたるなり。此西來院の跡に垣ゆひ回して井あり。水いと淸く、其世は閼迦にむすび井花(はな)や汲給ひけむかし。又櫻も影ひち散浮びつらむと、しらぬ世の春まてぞ偲れたる。四

郎臺といふに登る。こゝなむ鐘樓の在りつる跡ならむを、四郎臺とは訛り云ふ名也。こゝより見わたせば子の方に毗沙久ノ澤、そなたに臼が澤、苅馬、また瀧の澤といふあり。瀧あれど木々いと深く、分入る事こそかたからめ。羽貝の澤と云ふあり、申酉の方に池の澤あり、龜倉山と云ひ、また龜倉澤と字音にも唱ふる地あり、こゝなむ龜象山補陀洛寺のむかしの跡也。石の峯、袁奈碁ノ澤、東階臺、小松原、燒山なゞど、みなみね〳〵を連ねたり。又こと山路に分入りて、添川の山境なる湯臺のこなたに大岡あり。道祖神とて石積の杜三ッあり。いにしへはこの添川の湯澤より、此岡に登りて往復せし處といへり。その古ル道もはつかにぞのこりたる。丸森といふ山を右に見なして峯續きよぢて、石のみね、あるはいふ石長峯といふになりぬ。月泉禪師つねに結跏趺坐ておはしたるといふ大石にのぼれば、乾方に寒風山いまた雪寒く、酉方に赤神が嶽、土崎ノ浦、午に勝平ラ山、卯に大平山、いと近きは寅の丸山、坤の藏王山、卯の龜の池あり。此池は中ノ臺といふ處の群松山の中に在り、雌池、雄池とて兩池うち並びたり。女池には大龜のすむといへり。昔ある夜、佛覺古心禪師の方丈の室に端正處女の入り來て、願ひのまにまに血脉をかきしたゝめてたうばりしかば、三たびぬかづき血脉を咥へて龜となり、大波の音して女池にや入りたりけむ、かいけちたりといへり。女池は龜池の上路にや、又雌池に女龜、雄池に男龜のすめるより池の名におへる事か、また池の大小によれる名にやと池の邊に彳て、

松原の松の千とせもよろづ代もつきせざらまし龜の池水。

一五百石　宗福寺

一百拾三石弐斗五升三合　國清寺

一廿弐石　淨光院

一廿六石　楞嚴院

一十八石　長耕寺

一十二石九升七合　常信寺

合百九十三石三斗四升五合

一九十五石三斗一升三合　補陀寺

一六十石　万郷寺

合百五十五石三斗一升三合

右之旨ヲ以御門前衆書出之表

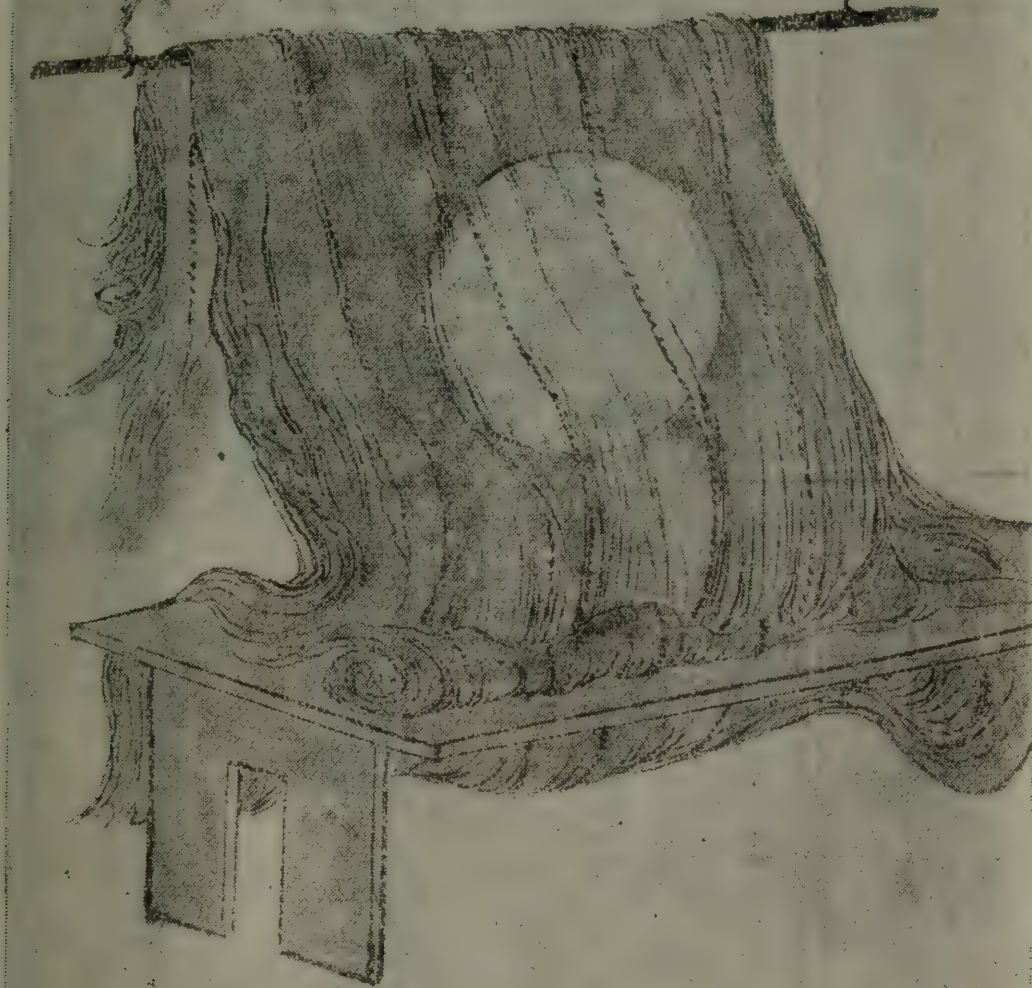
永定之条爲御中之以来

ニ而可有勤者也

慶長[illegible]年卯月日　秋田[illegible]

補陀寺家蔵二
枚ノうちにし
秋田代々城介の名
あり秋田城介ハ出羽
介之安部家代々ニ
城介ありけるがくし
て、宣下ありしなへ
し　宣下なくして
城介と名のれる
ましさりしく　押領司
の名ありしなれは

羽州補陀寺周泉長老
城介任奏
聞　勅特賜佛覺
古心禪師號
天氣執達如件
明應八年七月二日
權中納言　花押

義家公の出陣

此飯さは、かの大黒天と字ぶ田づらのあたりに分出れば、いまだ雪のまだらに殘りたるあたりは、やゝ堅香子の花咲て春めきたり。道のかたはらに「開山禪師の御茶水」としるしたる高札立り。龜の池を潜り出て、そを樋にとりて御寺にぞ落したる。此事は前にも記したるは此處の事也。寺井の上へのかたかごの花とこゝにうちすゝしつゝ、門前を經て中村にいたる。こゝに三浦彦三郎といふあり、此家の林苑へわきて茂く古たり。此三浦が家は、その世に義家卿に仕へまつりて功ありし三浦ノ和四郎某が後胤と云り。君よりのたまものもあまた持つたへしが、なかむかしの火に家の系譜、感狀なッどもやかれ亡び、殘りしものは、上祖よりの重寶のしるしばかりにむかしをしのぶとて、碎たる鞍の前輪、後輪、また鳩胸にきちかうの鐫たる鐙、轡あり。また備前長船ノ則光がうちたる一尺八寸、また天正二年八月に伯耆ノ廣賀が作りの九寸五分なッど、山賤の翁が、からうづの中よりとうでゝぞ見せける。補陀寺に見たりし義家公の御旌といふも、三浦和四郎か家より寺へ寄附せしものにやとおもはれたり。ふたゝび門前に來て宿りて、此宿に二三日ありて、

○藤倉村

おなじ山內ノ莊藤倉へ行とて松原を出たり。此藤倉と云ふ名雄勝ノ郡河向ナノ莊の枝郷にもあり、ところ〳〵に聞キし名也。小松原といふ處の九折を下りて衢の地藏立り。乾の方なる山の細路を七曲とて、

古道にしてつねは往來道(ゆきかふ)ならねど、旭川の洪水、あるは橋落、きし崩れなゞどせしときは、すべなう今も行通ふと云り。けふのあないはこゝろさとくて、なにくれとねもごろにかたれり。白水澤(しろみざは)と云ふあり、此澤水に毒涌キ流て、高野の奥の玉川にひとしと云り。白水澤といふは、おなじ秋田郡の浦大町にならびてもありき。また七變(なゝかはり)の水、また毒流るてふ事はところ〴〵にいと〳〵多し。旭川のあなたには楯(たて)會ノ山(あひ)、小増澤山なゞど見ゆ。段陀羅(だむだら)淵といふに臨て行ヶば、ほどなう鏡臺といふに登る、杉むら立て神さびたり。近き世まで此杉の根にふりたる花稜鏡ありしが、今はうせたり。むかしは多く掛て、神に手祭(たむけ)し處となもいへる。さるゆゑもて野の名、澤の名、岡の名に負ふ處也。

　春の日のうつるかゝみのをかのべにいとはや見ゆる雪のむら消。

しばしとてこゝに彳て四方八方を見やれば、小升澤山の麓あたりは櫻が淵とて、むかしはいと大なる櫻の、淵に臨て生ひたりしものかたりをし、また藤倉權現社は旭川のあなたにいにしへありて、そこにまうづる人みな、此旭川の櫻淵の石の上にて身をきよまはりて、うち群れ登りたりといへり。また小櫻は今多かる處也なゞど云るに、

　きしに寄る波を花とやかくはかりやかて櫻のふちにちらまし。

小増澤は低く大増澤は山高し。鞍掛森といふあり、うべも、しづくらぼねに似たりける。鐙山といふあり、篠のみいたく生ふるより、今はそこを鐙篠山(あぶしのやま)といふ。鞍鐙の名におふもよし處(マヽ)にや、鐙しのをあぶ

しのと唱ふは、かの鐙川を虻川と今云るに似たり。旭川にかゝりし白鷹ノ橋落わたれは、淺瀬もとめてかちわたりして、したか長根といふ處の岨傳ひして行〳〵、遣水澤といふ艮にあり。鈴が森山なッどはいと高し。洪鐘が淵といふあり、また鐘が瀧といふも落たり。

山川の岸にかゝりて絶すたゞ鳴りこそわたれかねのたき波。

旭河にかゝる一王子の橋とて、いとあやうきを渡りて岡に登れば、さゝやかの萱ぶきの四阿の内にちひさき祠あり、石地藏菩薩を祭る。そを一王子と唱へまつれり。そも〳〵皇都の祇園ノ社の一王子ノ宮は祇園ノ第二殿にして、祭神は天照大神ノ子五男三女神をも齋奉りとまをす。その御神をうつし奉るにやいと多き社也。こは、三浦和四郎某か靈をもともに祭るといへり。此一王子の山溪いと〳〵ふかし。旭川をへだてて御休といふ山田の字あり、むかし殿や休らひ給ひし處にや。勘之丞淵とて田ノ中に字あり、こゝなむ、いにしへは川にて其人や落たりけむ。田中に一ッ石といふあり、ゆゑよしありげ也。藤倉村なる下ノ臺、下村なッどいふ處の家ども見ゆ。虻篠山の麓あたり狐臺の東を鄕士館とて、藤倉將監某こゝに居れり。軍書に、秋田城介實季湊せめのくだりに、豐巻備中守季重、泉玄番入道源齋、藤倉ノ將監を先として、二千餘人のいくさいたして寺内山に陣を張ル。」なッど、天正のいくさもの語りあり。麻呂木橋と云ふ地あり、其わたりに原貝といふ名あり。こはそも、藤倉ノ神ム社ロ其奥山に在りしとき秡川ありつるよしをいへば、原貝は秡禊川のあやまりなるべし。下モ臺村になりて田の中に新キ金剛童子ノ石像を

すゑ、また不動明王を祭る。こは寛文のころまで藤倉權現の別當たりし十方院といふ修驗たりしが、身にをかしありてさすらへ、其家の後胤今ハ鈴木孫六とて、此地に住て田佃(たつくり)となれり。それがむかしの家の跡にやあらむといへり。此堂も回祿(やけ)て元文の棟札のみ殘りたる。湯野後(ゆのしり)といふ岨つたひの路あり。右のかたの下ダなる小田の畔にいさゝか溫湯(いでゆ)のあれば、湯ノ尻の名はありける也。地藏前といふ處あり。こゝらの石ぼさちを、さゝやかなる箱のごとき堂にすゑにすゑならべて、これも硯筐に筆の多かること、ちと、いにしへ人や笑はむとひとりほゝゑまれて、いさゝか行ヶば觀音ノ杜リ也。うちむかふひむかしの方ダは花水澤と云ひ、西を堂の澤といふ、此兩溪(ふたさは)の中に藤倉權現ませり。群立る杉の中に、とし舊(ふ)りたてる大樅の枝たれ繁りぬ。二王門のみがたは壹丈二尺(ひとつゑふたさか)にして運慶が作るといふ。そのふたばしらもなから朽たれば、さをとゝし佛工(つく)りが丹(に)ぬり、うるしぬりて、あやしくも彩(いろどり)なしぬ。れいのわら沓、はぎまきをいと／＼大キやかに作りて、ところせきまでかけふたぎたるは、いづこの手向もおなじ。左に舞殿、右に齋燈殿ありて、除夜より正月四日まで柴燈、たてあかしして、淸火(いもゐ)齋籠(ごもり)の行ひぞありける。此堂の中には、源義家將軍の兜の內にひめ給ひし、一寸八分の黃金ノ觀世音を納め給ふといへり。また、それよりいとはやく仁壽、齊衡のころにや、圓仁大師の作り給ふ千手觀音もおはしきとなもいへる。堂の後なる地に、親杉とて周圍四丈斗なるが、寬政のなからならむか、あらかりし風の夜吹折れ倒れふしぬれど、その株の一丈斗も立のこりし。其空木の中心に山櫻一トもト生ひ出て、うつほ木は藤蔓のはひまつはり

櫻咲みだれておもしろく、その花ちりぬればやがて藤咲かゝり春長く樂しかりしを、此とし古ル杉とて、いとかくばしくて沉水香にひとしかりければ、此堂まゐりの人とらみな寄りたちて、此杉をかき採り去ぬ。煙酒火やおとしたりけむ、文化八とせといふとしの春、霞とともにやけ登りたり。あな恐、此母杉こそ藤倉權現とも、かむざねとも中世よりは齋ひ奉らめ。藤倉の神と權に現れ給ふらめど、誠は大汝ノ命にして三輪の御神もひとしく、雄勝の杉ノ宮、添河の杉ノ生ノ社もひとしかりき。枝神とて、左の方にいとふる八幡ノ御神形を祭り、右ノ方に辨財天女祠あり。空海大師の作り給ふといへり。又白山ノ社あり。秋田の巡禮に此藤倉觀音は廿二番にして、「紫の引ク糸長き命寺藤倉山の杉の神體。歌はあた歌ながら、その世より藤のかゝりしさまぞしられたる。藤倉山長命寺、別當喜寶院といふ修驗也。洪鐘を見れば、「藤倉山長命寺別當十方院　施主出羽秋田窪田天命屋　冶工江田彦兵衛藤原助定　寛文七丁未九月吉日」と鐫たり。また堂に掛たる（以下無し）

○手形莊

○田中村

田中、加羅美田、稲澤、大澤、小澤なンど手形ノ鄕の枝村なるよしを郡邑記のせたり。國々に田中といふ名いと〳〵多し、そは田中に家居あるよりも云ひ、又田中氏あり。古事記傳七卷七十七丁倭田中直、處は高

市ノ郡にも添ノ下ノ郡にも今々田中村あり、此ノ内なるべし。書紀舒明ノ巻八年の所にも田中ノ宮とあるも、三代實錄十四ノ巻に大和ノ國田中ノ神と云あるも同地なるべし。神樂歌に、殖槻や田中の杜とあるは添ノ下ノ郡なりと云り。」云々と見えたり。此手形の田中に「前田中「奥田中と、大橋といふを隔て兩村と並び住り。前田中に酒肆三戸あり、舊家長谷川久兵衛、西村太郎兵衛、升屋六右衛門、戸田莊兵衛の四戸と云へり。

○五社大權現ノ社　棟札二枚あり、一板に「正徳二年辰七月七日別當高善院。亦一板札ニ「寛延二巳年正月五日、願主石鄕岡與右衛門、別當高善坊圓呈」と記したり。此與右衛門は石鄕岡杢之助ノ後にて、沖田中に今も與衛門とて有る也。秋田家ノ分限帳に石鄕岡杢之助「百二石一斗五升」を給と云り。秋田軍記に石岡と有るは鄕の文字落したる也、また石子岡とも書たり。その軍記に、石子岡主典は淺黃色の旗に横木瓜ノ紋の綬章して檜山をぞ攻たりける。」云々と見え、「異本秋田軍記」に、「御家を守る侍には石鄕岡主水某、松田兵部介光友、小野寺權右衛門尉正時、加賀民部大輔某、此四人の人々は阿倍ノ愛季（近季とも見えたり）殿より國の成敗を承り、かくて湊にぞ有ける。」云々と見えたり。其世は主水とも云ひしにや、家譜うせたれば石鄕岡氏の事つばらにしられず。また舟越の軍に田中源八、山田喜六など、原に伏兵せし事見えたり。其田中も此地より出しや、いなや。

○虎ノ尾ノ堀（り虎口に對へ云へる事か。）　**○山伏屋鋪**、高善坊家跡也。

○搦田村

加羅美田は鑪場には鐵液を加羅美といふ、鐵液なンど田に掘リ出るにや。また搦手といふ角力の手あり。新猿樂記十四丁に、六ノ君ノ夫ハ高名ノ相撲人也云々、内搦、外搦、亘、繋、小頸、小腋、逆手等ノ上手也。」云々と見えたり。からみてにや。又山に古柵の跡あり、むかし犀濱六郎某すめり。本城は念佛坂の上へに在り、此處は其搦手ならむか。からめ手田と田地の字もひとつに云ふにや。郡邑記に、向ヒからみ田見ゆ。

○御別業　國君の御別莊にして蒋むす巖、としふる木立よしあるさまながら、つねは鳥の聲しづかに神さびたる處也。

○大日如來座り、此緣起は小倉主水敬月堂。

○新山今眞山といへり田　むかし赤神を遷したる處也、田ノ實千刈と云ひ傳ふ也。

○舞臺田　神の御輿掛田ともいふ、百刈三枚たりしをまたひらきて六枚となしつ。田の中に、つむれのごときものに躑躅を殖たり。さびらき殖初るときはこゝに赤飯を手祭る。早處女うゑいたれば、こゝに泥水の手を突き神樂歌を唄ふ。神唄聞キ知らぬ丁女は田歌を唄ひて手酬とせしが、いつとなくさる事止みて、田殖唄うたふ早丁女もなしといふ。むかしを捨るはをしき事かな。なほさる事はあらまほしき事になむ。

○**養老田**　此小田は此村に居(をる)鎌田淸左衞門孝敬、大松澤と云る處に新墾(にひばり)せしあら小田を、春は益等雄うち耕し夏は娘女(をさめ)がうゑわたし、秋はあら雄ら苅りをさめ、そのあらしねをしごき、つきめがつきをへ、神無月廿日といふ日酒にかみし餠につきたるを、村にありとある老のかぎり男女にあへすといへり。千穗ノ屋ノ長秋養老田ノ記あり、鎌田正家ノ歌あり。おのれも「おゆのわかゆ田」といふふみかきたり。養老田の由縁、愛(めでた)き心うるはしきことになもありける。

○**犀ノ濱田**　犀濱の六郞の館跡ノ山ノ麓に在り。古棡ありしあたりは小松むらたち寒水(しみつ)あり、馬冷し場といへり。念佛坂、石名坂、灸(やいと)坂なンどいふ處あり。また神足(かなせ)ノ莊の下タ刈村ノ枝鄕に犀濱とて二戶あり。寛文二年のころ、岩瀨村の小野氏なるものこゝに新墾(ひらき)田佃(たつくり)住ぬ。そは小野筑後守源盛吉の後胤なりと云へり。西佛師のかきけるあみだほとけの像あり。正月十五日、七月十五日これを拔て家に掛て、人みなむれまゐる。こゝをも犀濱てふ名あるは、念佛坂落城の後こゝにや潛(ひそ)みけむ、又ゆかりある犀濱氏なるか、なほたづぬべし。

○寶永二年の頃得月庵八景ノ詩あり。搦田夕照　東谿田綽（飯田左中）　漠々平田與水通、西山蘸影晩煙空、農家未解斜陽落、隔岸遙望一片紅。」と見えたり。

○濁川村

濁河てふ名いと多し。信濃國淺間が嶽の血ノ池より流れ出る川を濁川と云ひ、血を濁りといふ方言あり、なほ川も濁ればしかいふべし。松前の東シ浦箱館に近きに有川、濁川と並びて小川あり、村もあり。有川を人みな邊切地と云ひ、蝦夷人はベケレベツといふ。ベケレは淸たる事也、ベツは川也。濁川を人クネベツと云ひ、蝦夷辭にはクムネベツといふ。クムネとは黑キ色をも鼠色をも曇たる事をも濁リたる事をも云へり。クムネベツは濁川といふこと也。南部にも仙臺にも津輕にも濁川あり、山本郡檜山ノ枝鄕にも濁川あり。其外郡々にもいと〳〵多かるべし。

○**廣田大神宮**（内ニ毗沙門天を祭るなり） 蛇走山の麓に座り、夏祭四月二日、冬祭十二月二日也。

○**白石社** 白石をすゑて白山姫神を祭る。

○**神明宮** 鬼踰山の山脚に座り、春祭三月十六日也。」蛇走、鬼踰、恐き山の名ども也。鬼踰は鬼首といひしをしかいふとも云へり。陸奥ノ國栗原ノ郡一ノ迫に鬼首村あり、是も多く有る名也。

○**若宮八幡** 中ノ目といふ枝村にませり。此村はなし、元文、寛保ころまでは七八戸も家ありし處也。今はたゞ木ノ下トに石一ツをすゑて祖神（道祖をしか申也）と齋りて、五月五日は馬牛を曳てまゐる。馬の病あれば、うまうしの沓を木に掛ていのる也。

○「**田地字**」 草薙場、堀尾田、三升作、中野目（村跡をいふ）田、石田、龍毛澤、幡福（はたふくといふ名ところ〳〵にあり） 雷臺、御宿ノ前などあり。りうげも多し。

○「山ノ字」　田ノ澤、小澤、堤ノ澤、東ノ澤、荒田、險南（けなむ）作リ。「濁川」といふ小川は蛇走山の麓より流出しが今は流も幽に、むかしと源も替たりといふ人あり。

○寺跡あり、一乘院こゝに在りとも、又その閑居地ともいへり。塋誌石あまたならび立り。其碑ども「法印義曉天和二年壬戌四月十六日」、「義映」、「義堂」、此二碑は年號見えず。「義勇寶永辛卯歳」、「義覺正德四年八月七日」、「義儔享保十一丙午天正月廿八日」、「十四世義康享保十六辛亥天五月十有二日」、「義亮享保三亥六月初二日」。いまだ殘りけるやいなや、あらましにしるす。

○「御腰掛石」「鑑照院殿の御腰かけ石なり」　此石に注連曳（ひき）はえて祭る事あり。そのゆゑよしは、瘧（わらはやみ）の人ねきことすれば、たちまちそのやまふいゆとそいへる。むかし佐竹廿二代にあたりて義隆ノ公と聞えさせ給ふ君おましましき。此わたりの野山を御鷹狩し給ひて、ずんざともにさきだちて此石にしりうたげし休らはせ給ふ御前を、米負ふせたる牛を引もて過るを、やよ翁、ほぐすもたらば火をうちてとあれば、翁は君ならむとはゆめ知り奉らず、人々もゐておはしまさねば近くよりて、これめせとて火なむ奉りてともに蹲りけふりうち吹ぬ。公のたまふは、米は久保田へこそもて運ぶへけれ、など翁は、よねつけ牛を曳歸るぞ、いぶかしき事かなとあれば、さればこそさふらへ、此米は御ム館の君の御飲料（みかしきれう）の米なれば、うからやからかゝりて一粒撰りにえりたる米ながら、かゝるよからぬ米を貢（おものなり）に奉るものか、にくき奴かなと御藏守リ大にいかりのゝしり給へば、けふも牛引もどりさふらふ也。是にて三度もとされさふらひしなり。

いかゝし侍らむ、なく子と地頭には勝れぬといふが、まことにさふらふ也とうちなげゝば、君、そのよね見せよとのたまへば翁、俵の腹に手をさし入レてたなひらにのせて、これ見たまへ、いとよき米也とて奉れば、君、われにえさせよとて御ふところ紙に包みて袖にうち入レ給ふをりしも、鷹すゑ、たゞむきをいからして犬引つれ、人あまたうちむれ來りて、御前(きみ)なるぞ、なめげ也と聲あらゝかにいへば、翁は魂消(たまぎえ)身もくだくこゝちやしけむ、あしをそらにふしまろび、牛を捨てにぐるを、なしかりそ、牛ひかせ、ものとらせよとのたまひて、やがて歸らせ給ふ。明るあした藏法師（米役人をいふ、今の世にいふ坊仕、卯時などに此事にや）をめして、庫によきかぎりの米をみなもてこと仰あれば、某(なに)の料にかあらむと升ながら御前にとりならべたり。かくて君、たもとよりたゝむ紙に包みたりし米をとうだして、此米にくらべ見よ、いつれか劣りいづれか勝る。こはいと〳〵よき米にてさふらふ也、これにまさる米こそ外にはさふらはね、君はいづこよりかもておはしさふらふと人々あきれたるに、うちゑみ給ひてしか〳〵のよしとのたまひて、米來らば知らせよ、庫に入りて撰り試ミてむとのたまへば、いそき藏の内しらひ一段高く作りなし、あつだゝみしきて公(お)の御坐(なし)とはまうけたり。其翁か貢に獻りし米は御試米とて、庫の中柱にゆひ添て近きまてありしとなむ。そのくらは嫗庫(うばぐら)とて、鉋ノ丁ゥの旭川ノへたなる藏どもの中にては、としたかき藏也といへり。かゝるゆゑよしある石なれは人尊むあまり、やまふもいえ、わらはやみもやみけるにこそあらめ。

○文化八年辛未の秋のころ、ひるうち過るほどより万之丞といふが家ふり動く。すは地動(なゐ)ならむと家

のかぎり外に迯出てさはげば、こと家よりも人出て、某事（なにごと）なれば、しかく〱のよしをこたふ。うべこと家は露もうごかず。人々あきれて家に入れば又ふりうごけば、たれもく〱家には恐れて入るてふ人もなければ、たゞあるじのみ三四日あれど、ふりにふればふしもつかれず。ふりそめてより七日といふ日ゆかりの人々集りて、家こぼちぬれど某（なに）ひとつ住みたる事とも見えね、さゝやかなる穴ひとつ家の隅に有りたるのみと云へり。今は万之丞跡には人住（すま）ずぞありける、あやしき事也。これを考に文徳天皇實錄にいはく、天安元年六月のころ參河國ヨリ上言ス、今月六日廳院の東の庫振動（くらふりうごき）ぬ。」と見えたり。また江源武鑑といふ書には、ところ〱の宮寺のふり動きし事多く見えたり。むかしは多かりし事にこそ。

○陶（すゑものつくり）作家が栖（すみ）し事は寛政の事ならむといへり。

○梅津宮門某の別莊苑の跡とてあり。

○添川村　枝鄕　湯澤、三本松、湯澤臺三村也

倭名抄に秋田ノ郡添川、率浦、方上、成相、高泉と見え、また式ノ副河ノ神ム社ロは山本ノ郡（今いふ仙北郡の事なり）に在り。三代實錄卅四卷元慶二年七月十日ノ條に、十日癸卯、出羽國飛レ驛奏曰、云々、率二上野國見到兵六百余一、屯ニ秋田河南一、拒二賊於河北一、又秋田城下賊地者上津野、火内、榲淵、野代、河北、腋本、方口、大河、堤、姉方、方上、燒岡十二村也、向レ他俘地者添河、霜別、助川三村也、令下二此三村俘囚并良民三百余人一、拒中賊於添河上

云々と見えたり。此十二村の考は「水の面影」、また、こと書に精に記しぬ。その俘地三村の添河、霜別、助川ノ三村の內、霜別は爾別の誤字ならむと高階貞房ノ云り、よき考也。爾別も蝦夷語也、そは仁別のくだりに云ふべし。此助川は山ノ字にも川の字にも田畠の名にも聞えず、濁川の誤字ならむかとおもへどさだかならず。倭訓栞四ノ巻宇之部ノうぢのをさノくだりに、天智紀に氏ノ上をこのかみとよみ、天武紀に氏ノ長と見ゆ。今の氏ノ長者也、宇文周の時の宗長に近し。文武紀に氏ノ上の副を助ともいへり。」と見えたり。是をおもへば、副河も助川もおなしものかとおもはれたり。なほ尋ぬべし。

○杉生ノ神　三輪ノ御神を齋キ奉りて杉ノ宮とひとし。杉尾ノ社ともまをし奉れど、栂尾、松ノ尾も本ト栂ノ生、松ノ生をしかいへり。ある人、栂ノ尾、松ノ尾は栂ノ尾ノ上へ、松ノ尾ノ上へならむかといへり。うべなる事から、栂ノ生、松ノ生、杉ノ生と云へらむこそ、其言も意も穩ならめ。此御神の舊地は村よりは北なる岡の邊長田といふ處に座しを、洪水に山崩れて宮地迫まりしかば、長田ノ岡より古城回といふ高岡へ寶永四年のころ遷し奉りしは、いまのみやしろ也。いと〳〵舊き神社ながら、野火にいくたびとなく燒れおましまして、唯大永の棟札のみぞ殘れる。其世にはいと〳〵社も大にして、秋田城介實季ノ卿、社領卄八併餘の稻田を寄られし神也。○杉生大明神僢殿二間ニ三間也祭夏冬六月十一月朔日也。此神の○三貫ノ神門高一丈二尺九寸三輪鳥居を俗言也は三諸ノ山にひとし。○社地東西三十間あり南北五十二間御階の左右より杉ひし〳〵と生ぬ。○舊社地に小社ありて「大永二壬午」の棟札のみ在りしを、小社こぼれし後は大永ノ棟札今ノ社に在り。○長田ノ邊を宮田と

てむかしの神田ながら、正徳の頃より此事止ぬと云り。〇枝神「竈神」二尺四面也。杉生社ノ神司ノ古川氏、上祖ハ古川ノ三郎四郎、伊勢、伊勢守元祿六年位階若狹守正徳二年位階。

〇**神明宮**　社地東西三十間南北十七間鷄栖七尺二柱祭祀三月廿一日也。

〇**いさなみのみこと**　古佛の如意輪觀音也、祭禮三月十九日也。

〇**聖觀世音菩薩**　佐竹廿三代源義處公御寄附ノ佛也。御寄附ノ舞殿二間ニ五間半也、御寄附の祭具いと多し。此記祿等別當驗者（マヽ）

〇**高木明神**　大なる（マヽ）木ノ根の空の内に幣立て祭る。岸に水流て木の根を灌クが如ク、水いと淸クしてをのづから御手洗川をなせり。高木ノ神と申ス御神號は他國にも聞え奉る也。古事記云、是高木神者高御産巣日神之別名と見え、また三代實錄卅四卷に、筑後ノ國ニ高樹ノ神といふあり。高木は姓にもありき。此處には、としふる高樹を齋る也。

〇**黄金ノ社**　此神いかなる御神にてこがねの社とはまをし奉るや、いつの世に齋き奉りし事ともさらに傳へなく、今はこがね堂と申て田畠の名のみに殘り奉る。よしある御神にや。雄勝ノ郡ノ小野村に、いにしへ小野ノ良實卿の建立の熊野ノ社今は舊地にあらず回祿して別地に座りの枝神に、和歌ノ社、黄金ノ社とならひて座り、此神の別當も其由緣をしらずといへり。是を考ふに、てむひやう廿一年といふとしのきさらきのころ、陸奥守百濟ノ王敬福はじめて黄金を掘りて貢しとき、黄金山彦ノ神を齋ひてみちのく山に祭る。それにな

らひて、こがねの社もところ〴〵ありけるものかとおもはる。猶考ぬべし。
○湯澤山乘福寺曹洞宗派といふあり。此寺、湯澤の山奧地藏平とも藏王平ともいふ處に在りて、むかしは眞言なンどにやありけむ、そこに石ノ藏王、石ノ地藏の二柱ませり。地藏は小池の岸に立り。藏王ノ石像に(マヽ)……………とゑりたり。いつのころならんか古城回リにうつせり。開山は(マヽ)
寶物の中に、弘法大師の作とて延命地藏菩薩の像あり。こは小菅山城主白坂右近太夫某の念佛寺たりしが、落城の後、水口村の新屋敷といふ處の三浦甚之助は白坂氏の家來末にて、此地藏大士を家に藏めしが家に病人絶ず、あるは不具子産れなど、ふさはしからぬ事のみ多ければこれを占すれば、家に、身におはぬ尊キ佛あり、それ恐みもせで、汚ある身をもて、貴き人のになうあかめまつりし一柱の佛を、清からぬ栖家の隅にすゑまつるよしなりとうらふ。此うらひせしは近きにすむすぎう者の法師なれば、幸なる事とて、そのすぎやうほふしに此ぼさちをとらせ奉れば、ほふし、いと〳〵よろこびて菴にすゑて、朝夕經よみ香花つゆもおこたらず、念珠くりぬかづきて月を經るほどに、すぎやうほふしが夢に、朝よひわか名となへて供養怠らぬこゝろさしは見ゆれど、われもとの家に皈らまく思ふ、返してと見たり。こはあやしき事から、始めはそら夢かとて心にも入らさりしが、二夜ならず三夜ならず見え奉りてとく〳〵のたまひおどろきて、明るを待て水口に至り甚之助にしか〳〵と云へば、すべなう又汚けなる家にすゑまつらむもかしこければ、添川に來て乘福寺にそ納め奉る。そも〳〵此地藏は白幡大明神と

て、水口(みのくち)の小菅山の白阪館に座(ませ)る御神の末社にて、山崎の鏡の澤中ヵに愛宕ノ神ませり。其神のかみさねと秘おける地藏の木像なりしと、白旌(しらはた)ノ社のかみぬし河ハ後リ祝部の家に、其鏡ノ澤ノ（紐鏡の御正體座しをもて鏡の澤といふ）おたぎの神も菩薩もおましませし事記したる書(ふみ)あるてふものかたりあり。白坂氏の家士にて泉村の石塚新左衛門（里長なり）今名刀を家藏せり。水ノ口の村三浦治左衛門も白坂の家士たりしか後なし、分家ところ〳〵にいと多し。

○**天岡楯**　天館と云ひ尼館なッど云へり。いかなる人か、城主さだかならず。麓に月山を遷し奉りて月山か澤と云ひ、また湯殿をうつして湯殿山といふ字(な)ども聞えたり、みな旭川のあなたに有る山也。それに曳連りて山あり

○劒臺(つるぎだい)といふ。此山の內に五ッ森といふあり。また○祖神ノ森(みなそうじむと)（いふ、道祖神也）こゝに三本松といふあり、また馬頭觀音堂あり。旭川のこなたなる

○古城回リ、石山、鷲森などは湯澤山乘福寺の後ロあたりに在り。山高からねど、古ルきわたりと見えて古き名とも多し。

○**田地字**　飛鳥田(あすか)、鳥鳴ノ澤、池ノ內、水押シ、眞海田、舊宮(もとみや)、延內(えむない)河原、內河原（館の下タなり）、沼田、藏ノ後ロ、着到(ちやくたう)、鳥屋ノ澤、菰筒聲、湯ノ澤、狼几(をいぬはげ)、藤結ビ、黑場、湯澤河原、湯殿（天岡館の下なる處なり）、沖田面、黃金堂、石名坂、長田（此あたり杉生神舊社地なり）、本乘淵(ほむじようぶち)（こは松原村近くに在り、今田畠となりぬ。此淵にむかし本乘法師か落たりといふ。）此山田ノ字(な)どもの中に「飛鳥田「着到ハよしありげなる名也

菰筒聲もあやし。津輕にも菰槌と云ふ處あり、波斯鷹のこもつちころに聞ゆ也とよめる歌也。藤結びの坂といへる處あり、ゆかしき名也。黄金堂は前キにも云ひしか、由緣ある名ならむかし。

○枝鄕湯澤村　溫泉あり。「熊野大權現社二間三間社地東西廿九間南北廿二間。祭禮三月十五日「花祭といふ人あり。花のときは花をもて祭る、紀ノ國の花ノ窟のためしに似てたとし。

○溫泉大明神、祭事夏祭四月八日、八月八日を秋祭とせり。此社は貞享元、此村の（マヽ）　忠兵衞といふものゝ夢のみさがに溫泉ある事を知りて、そのとき齋奉りし神也といへり。

○藥師ノ十二神將を佐竹義處公御建立也。武藏なる祐天和尙のもとへ、此十二神開眼の事を田中喜助とまをす人を御使者として、其事をへたる事とも申傳ふ也。

○枝鄕湯ノ臺村（以下無し）

別本

花の出羽路

花の出羽路へ　秋田、山本　此二郡の事あり

花の出羽路といふことは、かならす春のみをかきなしたるにはあらず。秋田の里のたねまき櫻咲しより、田うち櫻と花の發きかはり、わきてこの郡は花のいとも／＼多く、また吉野櫻といふが、やかのその／＼に多かるは、み吉野の花のたねを種たる物語あり。山本のはつ花さくら折かざし、夏艸にまじりたる早百合、なてしこの花までも、秋のもゝくさ、ちくさの盛り、花かつみかつ見る／＼わけて、六の花さく木々ふかき山々もふみしたき、また、うたかたの淡雪花とちるまでもしるしたり。

月の伊傳波遲へ　河邊、仙北　此二郡の事あり

月のいではぢといふは、いづこも／＼月はおもしろけれど、秋に見しなさけ深かりしよりおもひわたる川ノ邊のかけきよく流れ、むかしはいふ山北の溪水、いさぎよく行めぐり、いで入る月の朧と霞み花にかくろひ、むすぶ手に凉しうやどれる影のなへてならず。秋はほのめく三日のゆふべより、もちのこよひと見る／＼めぐり／＼て、みちのおくの國近ふふねわたりして分まよひ、あるは、をもの川波たちて見、ゐて見、引舟の楫の音つばら／＼にしるしたり。

雪のいてはぢへ　雄勝、平鹿　此二郡の事ありき

雪の出羽路、いづこも雪は零べけれど、此郡どもは高志の國にことならずいやふりにふりて、名に高き平鹿の御鷹雪のつはさをとばし、雄勝の橇ひきわたり、踏分る雪の尾越え岨つたへは、たぐひ有乳の山にまさりて初深雪より雪車にのり、あるは雪のしたに冬籠りして、やゝ待うる春より夏かけて、消あへぬ雪のたかね／＼を四方八方に見つゝし行て、豐としの來なんしるしを三冬までしるして一まきのうちにはのせたり。

花の出羽路の目な

勝手の雄弓　此一まきは、勝手の社にぬさとり奉らまくまゐるその山口より、みちく\の事つばらかに記したり。

月のをろちね　こはふたゝび太平の莊に入りて、そこの御嶽にのぼりたる山路ことぐ\にしるしぬ。

あさ日川　御膳川の水門よりはじめ、この川にたぐふすぢく\をなごりなうしるしたり。

水のおもかけ　寺うち、矢ばせなンどの村々のふることを、とした かき處人にたつねてかきたるふみなり。

をもの浦風　土崎のみなとにたぐふことのみをあげて、さとびごとも傳へのまにく\此日記にはしるす。

花の以傳波路

はしたかの出羽の國をしいはゞ、南はみゆきふる高志のみちのしりにとなりし、ひむがしきたは玉ぼこの道奥にとなりしていやたかくつらゝぐ山々を堺とし、莊、郡なンどは、千曲とめぐりめぐる川々を隔とし、あら海の浪のたちよるきはみ礒邊、浦回を限りとせしそのあたりも、地震にみなふりこぼれ瓦濤てふものにうちやられて、山は岡と變り、里となり原となり、潮湍は山とおひのぼり、あるは沼池、あるは田畠と化り郷となり、川のながれはゆふつゞのかゆきかくゆき、行かふ道の衢ももゝたびちたびや踏かへぬらんかし。むかしの驛、肆の地とて木々生ひたち艸高く茂り、あるは稻田粟生佃り、あるは潮沫や掛たらん浪や來寄りし跡ならん、高山の巓、谷川の底なンどに八稜蛇かゝり、藻蟲、片栢貝やうの虚貝いと多くかい埋れたるが、海遠き奥山にもありけり。これをおもへば、海川野山の狀もありしそのいにしへざまのものともおもほへず、今を見て、しらぬいにしへぞおもひはかられたる。そも〳〵この伊傳波の國の號は、蝦夷等が此地にその世は栖家して、鷲の尾羽あまた十毛とせしころの時世より、もはら

云ひそめたる名にこそありけめ。そをなにくれとあげつらひ、また、しひごとなッどいひけることどもゝありしとか。「諸國名義考」石見國濱田ノ家人齋藤彦麻呂誌といふ書に云出羽の國の條に云、和名抄、出羽以天波、國府在平鹿郡名義は越の道の尻、また道の奥などよりの出端ノ國なるべし。續日本紀、元明天皇和銅元年九月丙戌越後國言、新建二出羽郡一許レ之云々、同五年九月己丑大政官議奏曰、建レ國辟レ疆武功所レ貴、設レ官撫レ民文教所レ崇、其北道蝦狄遠、憑二阻險一實縱二狂心一屢驚二邊境一、自二官軍雷擊凶賊霧消一狄部晏然皇民無レ擾、誠望便乘二時機一遂置二一國一、式樹二司宰一永鎭二百姓一奏可レ之、於レ是始置二出羽國一。また、同年十月丁酉朔、割二陸奥國最上、置賜二郡一隷二出羽國一とあり。國造本紀に、諸羅朝御世和銅五年、割二陸奥、越後二國一始置二此國一也とあり。さて或書に引る風土記の文には、上古此地貢二鷲鷹之羽一故曰二出羽一といへるは、字になづみたるがごとききこゆ。」といへり。さることから、伊傳波を出端(いではし)ノ國といはんもうべくしからぬやうにぞ聞えたる。「偲ぶやま木立の奥に育(か)ふ鷲のその羽ばかりは人にしらるゝ十題百首定家卿とよめり。信夫山は陸奥に在り。しのふ山すら鷲の羽を産(いだ)せり。その世はそこにも鷲をとりて養ひ育たりけむ。今も松前の嶋蝦夷は、かゞなく鷲を柵に籠て飼ふがごとなり。「道奥の蝦夷か千嶋の鷲の羽に妙なる文字もありとこそきけ夫木集権僧正公朝なッどよめる歌あり。〔天註——妙なる文字といふは、鷲の後羽に八幡府とて、矢形の芒見るがことに八文字の文ある鷲の羽出る事あり。そを、ほくゑ經の八巻によりなずらへて妙なる文字とはよめるなり。この事おのれ、蝦夷のてぶりといふ書にも云ひつるなり。〕此出羽の國に羽黒山あり、黒羽の鷲や巣(すみ)たりけむ。母衣羽(ほろは)山あり、そこに鎮座神の御號を波宇志別(はうしわき)とまをす。また羽山あり、羽川の流あり、羽の浦あり、羽廣の村あり。これら

も出羽にたぐふ名ともにこそあらめ。また鷹の羽を貢（たてまつり）し事のもはらとは聞えねど、紅の御鷹をはじめ逸物（よき）鷹の産（いで）たりし事は、手を折るにいとまあらじ。左兵衛尉源朝臣齊頼ノ卿出羽ノ守たりしときも、此卿ゆゝしき鷹飼にて、出羽陸奥の名たゝる鷹を翫び給ひたりし事なンども人しれり。扇にのせし鷹の羽の家標（かた）なども、まさしくはこれも鷲の後羽（はね）を献るさまにやあらんかし。其は、秋田家にゆゑよしのあるをもてもおもふべし。かにかくに、羽の出るよしをもて出羽（いでは）といふが穏（おだひ）しう、すなほなるやうにこそきこゆなれ。出羽の國いにしへの郡は十一郡なりき。和名抄（管十一とあり）に、最上（毛加美）村山（牟良夜末）置賜（於伊太三）雄勝（乎加知）平鹿（比良加）山本（也末毛止）飽海（阿久三）河邊（加波乃倍）田川（多加波）出羽（伊天波）秋田（阿伊太）としるせり。こは奈良の京都（みさと）の時代なる式どもをしるし殘れりと、宣長の翁のいへり。いづれのころにかあらむ、飽海、村山、置賜、田河、最上、由理、雄勝、平鹿、山北、河邊、秋田、山本、この十二郡をそ定められたりける。そが中にも雄勝（袁賀知）平鹿（比良迦）仙北（夜麻伎多）河邊（迦波能倍）秋田（阿伎多）山本（夜末母登）しか此六の郡は、佐竹ノ侯の封（しら）す六郡（くに）なり。こたひふりはへて、かゝる六の郡を、淺茅原つばらゝゝにわきめぐり見なんとせちにおもひたちて、かしのみのひとりたどりて、まづ秋田ノ郡（和名に阿伊太、有城企治）に入なん。阿伊陀、もと齶田（あいだ）としるし、あるは飽田なンど紀に見えたり。飽田といふ郷の名飽海ノ郡にもあり、また筑前の國怡土ノ郡にも飽田あり、また肥後の國にも飽田ノ郡あり、その外にもところゞゝにあるべし。出羽なる秋田の郡なんいと廣くして、六の郡の長たり。そのゆゑをもてやことくにうど、六の郡をなべて秋田とのみぞいひける。秋田は、うべも富草のとみさかゆくよしの名にこ

そありけめ。久保田の早苗採りうゝるより秋田の穗波うちなびき、八束にしなひよりむつび、賑はふ御代の樂しともたのし。四方の民艸ふしなびき、君のみめぐみの露かゝらぬたもとやはある。かゝる豐さとき世に、幸(さき)び生れ會ることをおもふべし。よろづの道のひらけとひらけて、さらにふみまよふ人しもなう、ちまたにたどる旅人もあな心やすくにと、こゝろほこりかに行めぐりうちともなひ、おのれらも、雲ばなれ遠きくにべにあらたまの年のいくとせを經て、君のみめくみをおもひとおもひ、思ひ艸のつゆばかりも世にたつ事しもあらば、海路わけ來て波かけ衣たちぬれしうらふれもいとはず、わけめぐりし山のかひありと見る人しもあらばと、管(つか)短くこゝろみじかきふみでのつたなきあとをのこして、此いではなる六の郡を月雪花になすらへてかき集は、三河の國乙見(おとみ)の里人菅江の眞澄なり。

文化十とせといふとしの春

○世に出羽陸奥を遠國といへり。都にいと〳〵遠きよしをもてしかいふ事にこそあンなれ。延喜民部式に、近江、美濃爲近國、飛驒、信濃爲中國、上野、下野、陸奥、出羽爲遠國」とあり。さるゆゑにや。

○此出羽の六郡のいにしへを知るは六國史、また、ふるきみふみのまき〳〵、あるは物語冊子なンと、また、いくさのふみどものまき〳〵、また、いと近き世のものから○永慶軍記 永祿慶長のとしなる陸奥出羽の兩國の戰ひをつばらかにしるしたり。選者は戸部正直なり。雄勝郡横堀村に生れて、若かりしときは名を權三郎と云ひ、としたけて淸左衞門と云ひ、老て僧となりて名を一憨齋といひし人なり。○柞山みねの嵐 後撰集に、はゝそ山みねのあらしの風をいたみふくことの葉をかきそあつむると、紀貫之のよめる歌のこゝろを引たるふみの名なり。其は六郡の事をふた卷に、岡見知愛、老て靑龍翁とも云ひしか作れり。此柞山に云く「五十城の舊圖に雄鹿の二城、秋田、仙乏の九城を検出し、又秋田の舊記に六城を検出す。此事秋田古城記等にも見えたり。其他壁壘のごときは富有の鄕士の宅地と知るべし」といへり。知愛は延享のとしの人なり。○飽田六郡村日記 これも岡見知愛の編集なり。其は中むかしより今にいたりて、村々のうつりかはり行たるさまをいへり。○秋田

故事艸 箕山堂隠士、長雄院、北陽の撰なり。此優婆塞は檜[illegible]の里に在りし人なり。この北陽元祿十一年のとし「役行者講式」を刊本にせり。寛政十一年己未のころ役小角の千百年忌にあたりしかば、敕して諡を神變大菩薩とたまはり、元祿のとしのむかしまで「万木斗擻に却を積」とありつる條を「葛城斗擻」と書記あらため、また「神變大菩薩講式」と醍醐にてぞしるされたる元祿の梵本の行者講式に其名あれば、世に北揚を人知れり。

○「秋田城ノ記」云、羽州本國、北面之一巨州也、領郡十二、南曰羽陽、北曰羽陰、本郡隷焉、羽陰之地、南北三百里、東西七十餘里、去西京、千五百里（三百六十歩曰一里）北距于靺鞨不遠、地僻寒多、人悍愛少、雄勝、平鹿、仙北、謂之仙北三郡、蓋劇郡也、四顧皆山、南僅通一道、曰院内關、山相屬三十六里、出于最上、乃得平地、其途、草木蓊欝、日色晦冥、逆阪、如緣垣、或欹石如升階、臨不測之谿、踏無窮之崖、激湍雷轟、危橋消魂、詭石虎蹲、怪木龍蟠、一夫當關、万卒難進、河邊、山本、隷于本郡、謂之秋田三郡、四塞皆險、峰横嶺倒、岩嶢嵂崒、飛鳥難過、走獸苦攀、西濱大海、逆浪浸天、所謂天府之國也、昔王靈之隆也、築秋田雄勝二城、以爲東北之管轄、其後廢之、寶龜十一年、復城于秋田、知羽州者、爲城介、或時兼鎭守府將軍、或兼奥羽按察使、方面之重撰、分憂之要職也、昌泰二年罷之、永承五年、九月、以平繁成、爲城介、厥後又廢焉、建保六年、三月、藤景盛任之、其子義景、孫泰成相繼、近世織田信忠兼之、其爲重任可知也、先時承戰爭之餘、民人流散、土地曠蕪、寇賊衡行、商旅不行、沍寒積雪、僻在荒遠故也、指本州、爲陋州、仕者不肯來、行客不肯遊、雖有小鹿嶋之勝景也、無知焉、吁慶長七年秋、羽林中郎將、佐竹公、自常州、遷封於羽陰六郡、乃招流民、興水利、闢田數万頃、指揮將士、驅夷群盜、禁民挾兵器、坑於山獲金銀銅鉛之利、資於海、有魚蝦鹽石之饒、材木不可勝用、禽獸不可勝食、關譏而不征、澤梁無禁、仕者世祿、卒伍以上、皆賜釆地、官無冗員、而政事治、國用足、於

是嚮陋者去、而四方之遊士願立于其朝、遐遠之商舶、爭湊于其浦、伎工雲聚、行旅蟻來。

○新道田斯牟陀字陀　此郷はむかしの深田、今云ふ大澤のこなた、小澤の北、千草山の麓、朝日川のへたに近くぞ有ける。舊進藤田と、しかいふ文字にこそ書なしつれ。こは、秋田城介實季の臣進藤豐前守某といへる人ありし、此家のゆゑよしなどやあらむ。また、そのぬしの墾ける田にや。こゝに大村、高野、向村、河原村とて四村ありしか、元祿十一年の洪水に川ぎしくづれおし流て、川原村に住つる人とらみな大村高野にうつり栖て、今は三村あり。なへて新道田といふ。寅卯の山に神の森あり、内外の御神と稻荷の神とを齋ひまつる。飯形の社は三月十五日に祭をし、うちとのおほむ神には九月廿一日に祭し、いつれも御神樂を奏るなり。つかへまつる神ぬしは添川村の古川若狹正、副別當もおなし添河に在る大藏院の優婆塞なり。岨の木の中に、朱の鳥居と二柱の鷄栖と混雜立り。そも〳〵此處のはじめは三浦氏、木曾氏にして、凡てこと家はまれなる村にて、三浦淸左衞門といふものゝ家こそわきて舊りたれ。近き世となりては此家の後胤の絶行しかば、家にちなみあるものゝ、こと氏なりしがその家の後を續て、淸左衞門とてあり。此家の背のかたに鳥居を建て靈祠あり。上祖より齋る神なりといふ。見ゆる山の上に、幸の神とて石積の堆あり。こはところ〳〵に多かる神にて、そこなむ、いづこも古にし道にこそあらめ。山の名に大治郎澤、小次郎澤、田の字には祭り田、小田、屋敷田、前田、まゝのした、杋田などあり。菩提樹生るもとに月心庵とて菴あり。寛永のむかし宗眞といふ法師が建りしといふ。宗眞大德元祿八

年乙亥四月三日寂と彫たる木牌あり。本尊は釋佉佛、石の小佛は數しらずおしならべたてり。鉦鼓一面、また磬子のめぐりに、寛文四年甲辰四月吉日、梅室村叟代、爲父母井野岡總右衛門とゑり、また延命地藏大士の木像あり。弘法大師の作り給ふとなむ。こは、今住む陸奥の良雲法師がいと若かりしとき、武藏の護國寺に在りつるころ、世に尊き法の會ありけるに加賀ノ國ノ守の北の方よりとかよせたまひたりしを、さちありて法師にたまはりしとなむ。良雲やゝ老て、こゝにすゑて拜み奉るといへり。此菴ももとは眞言たりしが、今は添川寺乘福寺をいふなりの流をくむとなむ。」

○藤倉布遲玖良は松原と一郷にして凡て山内と云ふ○小松原といふ處の九折をおりて、岨のちまたに地藏ほさちたてり。乾なる山の細路を七曲りとて、もとも古道にしてつねにもはら往復せねど、旭川の水の深かりけるとき、またその川の橋落たるときなどすべなきをりは、行かふ事となむ。かくて白水澤と云ふ處に來けり。此澤水に毒涌き流て汲人さらになく、高野の奥の玉川の水にひとしかりけるよしをいへり。かゝるものかたりはいづこにも〱いと〱多かりき。朝日川の流を隔て栖會の山、小増澤山など見ゆ。だんだらの淵に臨て行ば、ほどなう鏡臺といふ岡に登る。杉の群生るもとに、近き世まで花稜鏡一面ありしを、神のごといたゞき祭りし處となむ。さるよしをもて野の名岡の名とはよぶとぞ、山賤等が物語にせりける。

春の日をうつすかゝみの岡の邊にむら消見ゆる四方のあは雪。

しばしとて立やすらひて四方八方を見やるに、子鰆澤山の麓には櫻が淵とて、むかしは花の木多くあり

つるよし。その世は藤倉の神社も旭川のあなたに在りて、そこにまうつる人此淵に手あらひ身もきよまはりて、藤倉山にまゐりたるよし。

　　きしによる浪を花とやかくはかりやかて櫻の淵にちらまし。

おしならびて大増澤山あり。いと高きは鞍掛の森とて、うべも山の形のしづくらぼねにぞ似たりける。小笹のふかく生ひたてるは虻篠山といふ。師鷹野の橋より朝日川を渡り、したかなかねといふ岨つたひして行ば、艮に遣水澤（やりみさは）といふ處に、鈴箇森山などわきて高けむ。左に鐘淵といふあり。そこに洪鐘に似たる瀧もまたおちたり。

　　山川の岸にかゝりて絶すたゝ鳴りこそ渡れかねのたきなみ。

一王子の橋とてまた旭川を渡りて岡にのぼれば、さゝやかの萱葺のうちに少祠（ほぐら）ひとつあり。此ほぐらに石地藏菩薩をおけり、これを一王子と唱ふ。こは皇都（みさこ）の祇園の社にも一王子の宮とて、ゆゑよしあるおほむ神を齋ひ奉れり。こゝにも、そのみさとの神を遷し祭るにやとおもふに、處人の云、こはそもそも神にて、三浦和四郎國輔か亡靈をいはひまつるといへり。ふるき傳に、こゝを藤倉といひて、はじめて觀世音を安置（すゑ）て藤倉權現と齋ひ奉りし處ともいへり。またこゝより御前山にうつし、また花水山にうつし奉りしといへり。一王子の澤とて谷の戸奧ふかし。旭川を隔て御憩亭（おやすみ）といふ字ある田あり。むかし殿ありて、そこにやすらはせたまひし處と話り傳ふ。また勘之丞淵と呼ぶ田の字あり。そこなむ

昔は淵にて、その人のおちしづみし處といへり。藤倉の郷なる下野臺、下村などいふ家ともの見ゆ。虻篠山の麓あたり狐臺のひむがしを、合子館(がうしだて)といふ古城の跡あり。藤倉將監こゝに居れりといふ。軍書に秋田城介實季湊ぜめのくだりを見れば、豐巻備中守季重、泉玄番入道源齋、藤倉將監を先として、二千餘の人をいたして寺内山に陣を張るなど、天正のむかし物語ぞありける。丸木橋といふ名ある山中に、原貝といふ處あり。その奥山に、藤倉の神社のありたりしときの秡禊(はらひ)川なり。それを訛りて、はらがひとは云ふとなむ。左の田の中にあたらしき金剛童子の石の像を建て、また堂のうちに不動明王を祭るこは、むかし藤倉の神の別當たりし實法院（十方院或十寶院など書なしたる事あり）といひしが、罪ありて今土民となりはてゝ、その末を鈴木孫六とて栖めり。祖は優婆塞なれば、しかすかに不動明王堂はありける。此堂もやけて、近き元文のとしなる棟札のみそ殘る。金掘り澤の溫泉後(ゆのしり)といふ處の岨路を行に、下なる田の畔に溫湯(いでゆ)のあれば、しか、ゆの尻とはいふになむ。かくて地藏前とて、こゝらの石佛を堂に立ならべたるが、道のかたはらに在り。いさゝかこゝを行ば觀世音の森なり、うちむかふ東は花水澤、西は堂の澤といふ。堂のあらざりしむかしは花水山、花水の峰ともいひしとなむ。此兩(ふたつ)の溪(さは)の中に、藤倉權現の杜とて群杉生ひ立る中に、としふる樅の高やかに枝たれてまじりたちたり。雲慶が作るといふ、一丈二尺とたかき二王の像の雨露にくちぬれば、去々年ばかり佛工が丹ぬり漆ぬりて、見おどろくばかりあやしくも彩なしつ。此門には、れいのわら沓、はぎ巻などを、ところせきまで掛ふたぎたり。左に儛殿あり、右に齋燈舍

あり。こは除夜の夕より正月の四日の夜まで、柴燈とて、炬火(たてあかし)して清齋籠(いもゐこもり)の行ひぞありける。そも〳〵こゝは圓仁大師の、齊衡、天安のころならん、をさめ給ふ千手觀音の像をひめたり。かくてのちなむ、源義家卿の兜の内なる、一寸八分の黄金の觀世音をおき給ふとなむこゝに傳へり。また、松原の補陀寺に藤倉山緣起といふものあり。其記文に云、「鎭守府將軍源義家公、貞任、宗任、追罰奥州御下向。此節、奥州勢之大將出羽守師淸を將軍之御被召、今度之戰、父子兩度數箇年攻戰といへとも敵不降事、武力ノ不及所。依て、我元服より以後片時も身を不離、本尊二寸五歩の觀世音を懷中より取出し、是、汝此國之內何方なりとも靈地を見立、一宇建立し此本尊を安置し奉り、國家安全朝敵退散之祈願いたすべしと出羽守へ被渡けり。出羽守畏て申候は、御尤之思召立、幸ナル哉拙者領內は此金澤城より三十里斗北門にあたり小守勝手ノ明神之奥院、毗沙門澤の內に藤倉山といふ處あり。汚穢不淨之不至地なる故、是へ安置可申之御請をいたして御前を罷立て、從弟信夫太郎光景を同道にて彼地へ立越へ、頓に七間四面之御堂建立いたし彼本尊を安置し、大將軍御祈願之通奉念、罷皈リ右之次第を言上せり。此年號、人皇七十代後冷泉院ノ御宇康平三年、庚子三月廿七日也。同五年壬寅、十一月廿九日貞任ヲ誅罰ス、宗任ヲ生捕リ朝敵皆々亡びたり。義家公、これ大悲觀音の加護と御感の餘り、爲御代參相馬ノ五郎常晴、鎌倉ノ四郎景村、幷爲案內結城出羽守師淸被相添、又、爲御供料豐嶋ノ莊被下置之御教書頂戴也。猶爲守護御家人三浦和四郎國輔を差置れ、御堂可相守由にて三浦代々相務たり。三浦沒落之後、其菩提所補陀寺ニ於て、弘治二年丙辰九月

十七日より觀音御堂を守護いたし奉りしかど、大檀那太郎殿三春へ御引移りの已後、在所の山伏願行坊といふは慶長八年のころより別當に相成り、その末々の事は明白に知れがたかるべきと、和四郎系圖のうちより寫とるなり。和四郎以後のため書添置ものなり。明暦元年乙未三月四日　松原龜藏山補陀洛寺十三世運渚書レ之花押とそありける。藤倉山の別當が云ふよしとは、ことなり。此ひめたる觀世音堂の後に、親杉とて周圍三丈にあまりて生ひ立たりしを、近き寛政の、風あらかりしとし吹折られてむなしかりけれど、その株一丈斗も僵れ殘りてたてり。此うつほ木の內より山櫻の寄生ひともと生ひ出て、花ことにおもしろく人々めをとゞめ、この花散りぬれば、此木にまつはる藤のめでたく花咲きて樂しかりしを、此杉の根のいと〱かくばしく沉水香のごとなるとて、堂へまゐる人とらみなこゝに寄り來て、いさゝかづゝ土産に採りもていぬ。烟酒火(たばこび)やおとしたりけむ、文化八とせといふとしの春、霞とともに燒のぼりたり。あなかしこくも、此一株の大杉こそそも〱藤倉權現と齋ひ奉り、かむざねは、うまざけの三輪の神を遷し奉りて大汝命とまをし奉るなれ。また三柱の神の寶殿あり。其は、左にいやはたのおほむ神の木像あり。こは三浦和四郎が在りし世よりつたふともいへり。右に市杵嶋姫の神をするゑたり。こは空海の作り給ふ、そのゆゑよしもありとなむ。また白山比賣のみやしろぞありける。此堂の秘菩薩は秋田の寺めぐりには廿二番にあたりて、かの敎圓の詠歌とて、「紫のかゝるも長き命寺藤倉やまの杉の正躰(みかたち)。」と、こゝに巡り來てまふつる人は、まづ此歌をとなふ事となむ。今此山を守るは、

役優婆塞の流をくむ藤倉山長命寺喜寶院なり。洪鐘には、藤倉山長命寺、別當十方院、施主、出羽秋田窪田天命屋、治工、江田彦兵衞藤原助定、寛文七丁未九月吉日」と鐫たるは、かの、道のかたはらに見し不動堂守ッ鈴木孫六が祖の十方院にて、寛文のむかしまでは此藤倉山の別當にこそありつれ。堂に貞享五年の戯場の画あり。いと近き世のものから、今し世のさまとはことなれる、その世の風俗をしのぶ。三十六歌仙の繪あり。こは、よしあるおほッ方より掛て奉り給ふとなむ。此神は、大宿禰阪上田村麻呂の蝦夷平給ひたりしをりしも、おぼろげの願ひならず、大和の國大三輪の神なむこゝに遷し齋ひ奉りたりしを年經て源義家ノ卿、たゝかひにしかまのかちを得たまひて、その君出羽ノ守たりしころ、修理を加へられしみや處ともいへり。三浦和四郎、佐藤嘉兵衞尉なにがしとともに、奉行し建たりしといふ物語もありき。舊社の跡は堂社のとて、旭川のあなたなる正面林といふ處におしならび、木々深く生ひて御前山ともよぶ、それなりといふ。觀世音山といふべかりしを、ごむぜやまとは訛りていひならはせり。そこに在りし宮殿を、こゝに、承應二年のころうつし奉りたるとなむ。三月十七日には觀世音菩薩の祭あり、おなし月の廿七日には藤倉權現の祭あり。六月、八月もおなし十七日にも觀世音を祭る日にして、神にことかはらず神樂を奏るは、添川のかみぬし古河若狹なりとか。花水澤といふ處に櫻のいと多かれど、花はいまだめぐみもやらず、こゝに至りかしこにわけて、うち見やり休らひて、

こやさくらいつをみやまの春ならむ花みづさはの名のみ流て。

內外のおほむ神の座す社あり、九月廿二日ごとに神事あるてふ。この廣前にも、古河のほふりが幣奉るとなむ。別當は長命寺の優婆塞にて、村の本居(うぶすな)にまつる御社なりといへり。此神山に登れば巳午のかたは正面林、また東に嗽水といふ處あり。方はおなしくして御前山ぞ見えたる。大同のそのいにしへはしらず、康平の御代には、三浦和四郎國輔、佐藤嘉兵衞尉なと、奉行しいとなみ造營(たて)たるよし。それか後胤ともの此山里に殘れりといふ。かの御前山の舊社あまたのとしを經て、ことごとにあばれしかば、花水山に遷し奉らまくとしごろおもひ、百日のいもゐをしてその日もやゝはてゝ、承應元年壬辰冬十二月盡に、別當實寶院、佐藤嘉兵衞とともに遷し奉らむとせしに除夜にもなりぬれば、うばそこ十方院は、としのはじめの事だつことにたづさはりて、すべなう家に皈りいにけれど、まさしき夢のみさがあれば

(以下なし)

勝地臨毫

出羽國秋田郡
全四册

出羽ノ國秋田ノ郡　一

△手形莊△迦良美傳牟△藤森坂△聖德太子ノ社△泉ノ郷△八ツ柳ノ郷△鬼踰山ノ見亘シ△八幡田郷舊跡△水ノ口ノ郷△白幡ノ社△黑駒形神△白駒形ノ神△卒野△寺裡ノ見亘リ

出羽國秋田郡　二

△眞藤田邑△濁河邑△中野目邑跡△鬼踰山△添川ノ天館△同杉生ノ社△添河村眺望△同藏王山△同藤結山阪也△高樹ノ空木△杉生ノ舊地

出羽國秋田郡　三

△松原郷△萬里小路中納言藤房卿古蹟△少林山西來院ノ跡

△藤倉郷△三輪大明神ノ舊社△櫻淵△一王子ノ社

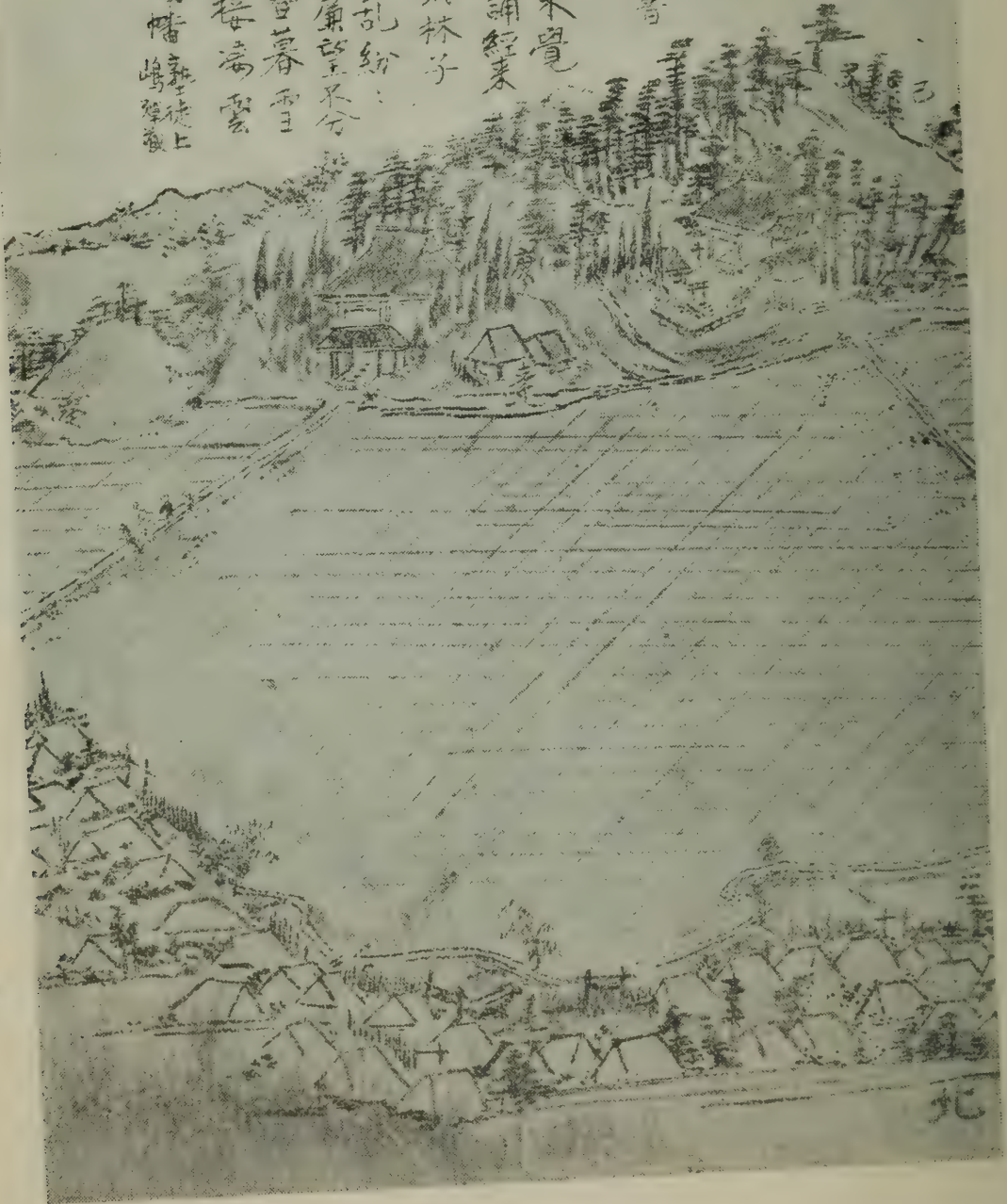
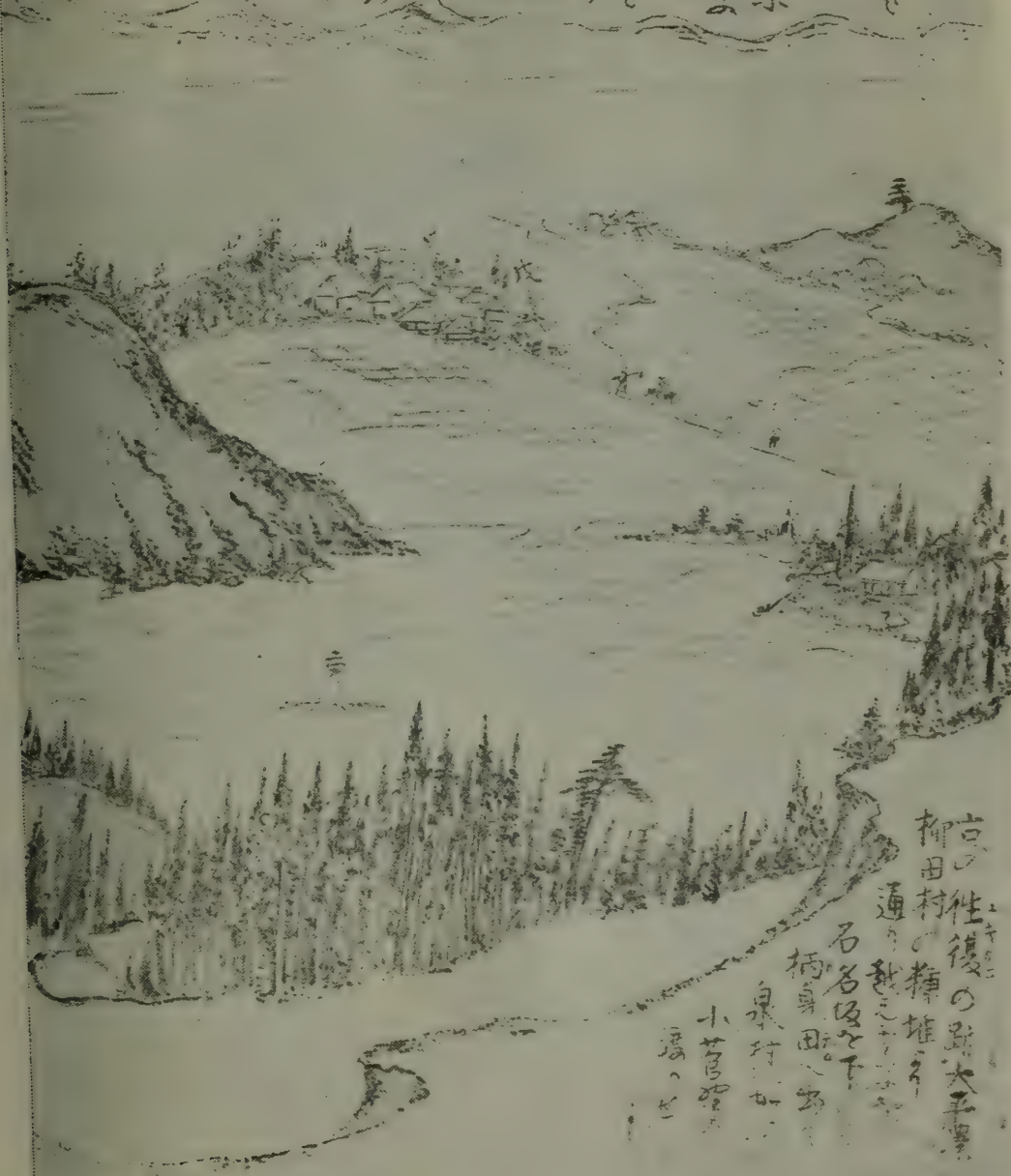
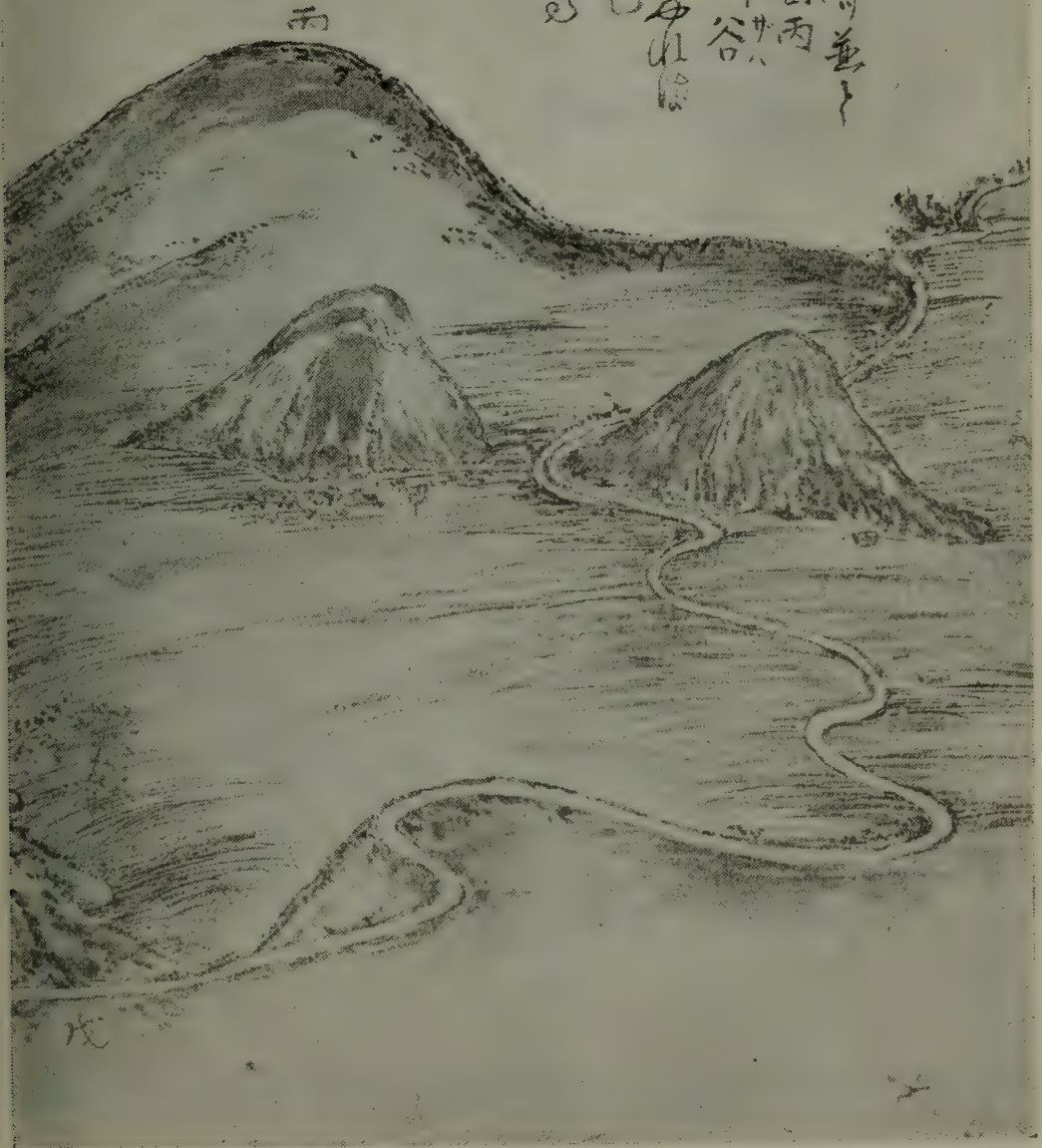
△仁別郷△日陰ノ淵△旭川△仁別河△櫻澤△蝦夷館△染メ瀧△大瀧△小瀧△船瀨ノ瀧△銚子瀧

出羽國秋田郡　四　冬

△大平莊鍋倉山△山内松原ノ時平臺△岩野目澤ノ飛泉△愛染山同溫泉浴舍△笹岡山ノ雪景

手形ノ一
甲 閻信寺 乙 正洞院
丙 白馬寺 丁 聖徳太子社 戊 大澤村 己
伊呂波臺 庚 觀音臺
辛 小澤村 壬 蛇野村
癸 稲荷社

勝地臨毫（秋田郡 一）

巳
丁
甲

推古山秋月
怡軒岡張
月晴嶽面宿雲收
推古曾聞物色幽
若得樂山仁者壽
清光不變約千秋

四
古城跡
両馬冷し
場
小池あり
丁 白坂館
己 泉館
庚 中野

泉郷

泉八景
翠陰田 強太田丹下
醉裏悠然攜手行
泉村花月有芳盟
農間皆化邦君德
一曲高歌是頌聲

泉郷甲泉福院
乙大日如来堂三間四面
丙十三佛堂戊稲荷社
丁青面金剛童子堂
巳大山祇田ノ神
庚神樂殿
辛有賢
法印碑

勝地臨毫（秋田郡 一）

三
高野山傳燈無盡

勝地臨毫（秋田郡 一）

空海大師住文曰
我山所送置亡者之舎利我
毎日以三密加持力先送安
養靈貝利當来我山可為慈
尊説法之聽衆菩薩

仙福雲深隔世塵
千章夏木緑精神
繁華争似新陽静
自是山僧不惜春
右菊池武雅

五
萬固山天徳寺の

上
泉村甲の
乙熊野社舊地
八丁村丙
丁金沙寺
富田小路古名 戊
己天徳寺ノ往還

泉邨清風
煙外悠然山色
清西窓別占
好風情農歌
高曲斜陽裡
遇得暖雲雜
喜聲

神田
荒屋敷村
弁天
大蛇澤長峯
高林
五十日子澤

神田村

勝地臨毫（秋田郡 一）

一
八神ノ荘
地蔵堂
白山姫ノ社
若宮八幡宮
田中村
四ツ屋村

勝地臨毫（秋田郡一）

西村 田中村 大橋
庚申堂
雨池

勝地臨毫（秋田郡 一）

八柳荘三

東

八村
新屋敷
屋敷田
神明宮
八百刈
中神田
沖村

鬼踰山より見亘

勝地臨毫（秋田郡 一）

八幡田邑

勝地臨毫（秋田郡 一）

白坂館の甲
大森ノ乙
黒駒社丙
鶏鳴臺
五十日兒澤丁
二箇杜ノ辯財天戊
森己
靈神ノ松庚
氐山居辛
水口壬
笹岡沼癸
南澤
甲

勝地臨毫（秋田郡 一）

水口郷

秋田郡八幡田村神明社ノ棟札よとめる名ども多し其ニ名をイイナイイイイテ
一人リて二人の名を待つ事しとてごうとせしし八幡田の平内傳帝
堺田の三郎次郎など境田村今はなし左衛門四郎ハ今土崎湊近き史跡
邉の砂山の
稲荷の社の
名も殘しぞ
左衛門四郎の
齋用ひをしし
稲荷ならんも

合天中
中
卞囲
聖主天中天　大行事帝釋天王
加陵頻伽聲　今日戒師殊勝菩薩
　　　　　　羯文殊師利菩薩
惣戒師釋迦牟尼如來
哀愍衆生者　證誠事大梵天王
　　　　　　諸行事普賢菩薩
我等今敬禮　戒行事觀世音菩薩
願以此功德
普及於一切
奉新造立
我等與衆生
皆共成佛道

天照大神宮社頭一宇二世成就祈處
寛永廿一甲申年
九月吉祥日
大工宇崎吉兵衛
別當　甚兵衛
願主
境田村　五郎次郎
　　　　太郎治郎
　　　　左衛門四郎
　　　　右衛門五郎
菅原村　白兵衛
　　　　左右衛門
八幡田村　平内信市
　　　　清左衛門
　　　　利右衛門
　　　　源右衛門

秋田ノ郡水ノ口村白幡ノ社の額臨書
筆者しらず

水口村ノ十王堂福壽庵といふ福壽庵の額も
某人といふ事しらず又此庵に六字ノ名號あり
南無阿弥陀佛と書けり清人の書なるよし額に曰
文化六年己巳發生ノ善導寺樂譽上人ヨリ
得之同寺法弟林道舎[illegible]しるしたり

南無阿彌陀佛

甲 宜祥寺
乙 觀世音堂
丙 大野澤山
丁 濁川村 戊 添川村
己 新道村
庚 漆澤 又云湯殿澤
辛 經藏澤
癸 稲荷社

中野目村

其二
鬼踊山
鬼首山
濁河村
鐵庵
進藤田村
金沙寺
土埼浦
神田
二ツ森

勝地臨毫（秋田郡 二）

其ノ二
添川ノ天指山
神明社
五ツ森
旭川
大黒

勝地臨毫（秋田郡 二）

其三
甲 添河村
乙 杉生社
丙 神明社
丁 熊野社
戊 高木社
己 觀音
庚 大黒松
辛 旭川
壬 天楯山
癸 湯澤村

勝地臨毫（秋田郡 二）

添河
同名山本郡ニ有り
甲藤結の圖より
乙坂あり 丙蔵王山
丁亀ノ水 戊
鷲森
己湯ノ澤
庚温泉村
辛白鳥野社
壬湯泉明神

漆川
長峯

添河流螢
見嶽宗卿
螢火逐風密又
踈璣璣隊木衍
堪連燃波照岸
添光景勝地品
題名不虛
右見于翠陰堂主
人記中

甲湯澤村乙
湊川村丙高木
岩山丁湯泉社
戊旭河己澤水庚
揵水

勝地臨毫（秋田郡 二）

高木の室

乾
杉生大明神
内外宮
大黒松
尼館
黒羽ノ淵
古川跡
旭川
五ッ森山

勝地臨毫　秋田郡二）

松原郷 一

勝地臨毫（秋田郡 三）

甲石亀乙通後
丙中村丁門前
寺己少林山西来
辛八田村羽黒山
添川枝村

松原郷 三
甲小林山西来院

勝地臨毫（秋田郡 三）

林山西来院
の舊蹟杉群の
太平庄
澤
丁
甲

○松原
五

松原郷 六

勝地臨毫（秋田郡 三）

松原郷八
甲牝牡亀石
乙石亀両三戸
丙白龍不動
戊西東院古跡
甲
丁

勝地臨毫（秋田郡 三）

○藤倉ノ郷ノ一
乙藤倉ノ社観世音
神明庭 己花木澤
庚不動明王 辛
一王子ノ社 壬地蔵堂
癸旭川
甲
癸

甲小鱒澤
乙辻地蔵堂

勝地臨毫（秋田郡 三）

○藤倉 三
甲 旭河擢淵
乙 鏡臺
丙 一王子社
丁 下之臺
村
乙

○藤倉四

○藤倉　五
甲　一王ノ社
乙　御休場
丙　勘之丞淵
丁　旭川

○藤倉 六
繪馬堂ゝ一
甲郷士館又舎字館
乙狐比良丙下ヶ村
丁藤倉社戊
和四郎自暑村
巳湯小屋庚
下モ墓辛
神明社
壬繪馬堂山
癸松長岸より
見亘
甲
乙

○藤倉 七

勝地臨毫（秋田郡 三）

藤倉 八
甲 和四郎白田村
乙 釜箇淵
丙 岩小屋臺
丁 旭川流
甲
丁

勝地臨毫（秋田郡 三）

○藤倉 九

勝地臨毫（秋田郡 三）

藤倉 十
甲 岩小屋
乙 横走瀧
甲

勝地臨毫（秋田郡三）

○藤倉
十二葉上
甲 繪馬堂
溪
乙 屏風岩

勝地臨毫（秋田郡 三）

仁別 一
ニベツ
甲田蔭淵
乙石淵
両寄ッ會ロ
旭河
丁舊
巣山

○仁別 二
甲五輪淵ノ
立石
乙奥西部溪
丙寺ノ溪
丁梳碑
坂

勝地臨毫（秋田郡 三）

○仁別 三
西勝寺

○仁別 四

勝地臨毫（秋田郡 三）

○仁別　五
甲山伏森　乙
寺ノ澤丙葭箇澤
丁馬場山嶽
戊戸澤己古柵跡
庚西勝庵　辛
神明宮壬仁別邑
癸仁別河
栖家あり艮旭川
太平山蛇峯より
朝日股とて
渓より出て村落の
乾
艮

仁別ノ六
甲薬師森乙
蝦夷館丙
水麻沢
丁文殊山
七曲坂

勝地臨毫（秋田郡 三）

仁別 七
丁
甲櫻澤
乙長瀧
丙金壺瀧
丁鬼箇倉
戊峯ノ池
己納涼長嶺

勝地臨毫（秋田郡 三）

仁別、八
甲 染ゝ瀧
乙 戸澤殿
柵跡
乙
丁
戊

丙白子澤山
丁鴨比良
丙
甲

仁別 九
甲 山伏杜 乙
仁別川
丙 踏鞴澤

○仁別 十
甲小瀧溪
乙山伏森
丙六倉山
丁駒頭嶽
戊賀良溪

○仁別　十一
甲船瀨瀧
乙加賀羅溪
丙仁別川
乙
丙

○仁別

銚子瀧

仁別
十三
上

甲一枚
岩山

其一
鍋倉山より大江平
前嶽 鶴ヶ峯 寶蔵ヶ嶽
弟子坂 大峯 駒塲目嶽

勝地臨毫（秋田郡 四）

其三

勝地臨毫（秋田郡 四）

其四
稲荷祠
春子が澤

勝地臨毫（秋田郡四）

其五
甲 愛染明王堂
乙 寺
丙 温泉並浴舎
丁 傘松
戊 女瀧
己 愛染村
庚 中堂
辛 神明山

其一
月ノ澤
尼楯
八幡太郎館趾
長沼
湖
土崎ノ浦
四屋村

勝地臨毫（秋田郡 四）

笹岡
其二
銭形阪
月ノ澤
君ヶ澤
館村
湖水
尼ヶ館
綱手ヶ埼
小南澤
大南澤
飯田村

勝地臨毫（秋田郡 四）

東

笹岡 其三
甲 月の澤
君が澤 乙

勝地臨毫（秋田郡 四）

笹岡 其五
矢橋日吉宮舊社
鞍掛山
尾塚ノ地蔵
古館ノ跡

勝地臨毫（秋田郡四）

勝地臨毫

出羽國河邊郡
全一册

出羽ノ國河ノ邊ノ郡、此郡、中古豐嶋ノ郡とそ云ひたる。おほ江戸に豐島ノ郡あれば、そをおなしさまに云ひなさむもなめげなれば、寛文四年といふとしなむ舊ノ河邊郡に復（いひかへ）られたるにこそあらめ。遠江、駿河、美濃、常陸、讃岐、美作、陸奥、また出羽ノ國出羽ノ郡にも河ノ邊ありと倭名抄に見えたり。萬葉集四巻相聞吹黃刀自ノ歌ニ、河上乃伊都藻之花乃何時々々來益我背子時自異目八方といふ歌は、此處にしよみつるよしあらねど、河のべの名にしあれは記したり。續記卅六巻十九丁寶龜十一年八月乙卯出羽國鎭狄將軍安部朝臣家麻呂等言云々、又由理柵者賊之要害承ニ秋田之道一亦宜レ遣ニ兵相助防禦一、但以寶龜之初國司言秋田難レ保河邊易レ治者、當時之議依レ治ニ河邊一云々と見えたり。これをもて考（おも）ふに、秋田より河ノ邊のひらけしははやかりけむかし。

○

出羽國河邊郡 一

△雄生潟（をながた）△二戸屋（ふたつや）△猿田橋去田川に掛る、今御茶屋橋といふ △三家（みつや）△中嶋ノ三狐ノ坊△牛島咩呂理觀音 △柳原ノ社△大野村△二井田村△古川ノ流△御膳川△金照寺山△櫻山△姨塘△具流米岐賀多△荒牧△福嶋

井田村
目名形村
横山村
寳量崎村
苗代澤村
大蛇峯
御膳川ノ舊水

勝地臨臺（河邊郡）

花郷
優婆塞

寶龍崎村
雙兒澤
觀音堂
大日堂

仙齢泉
鶴ノ湯
細谷村

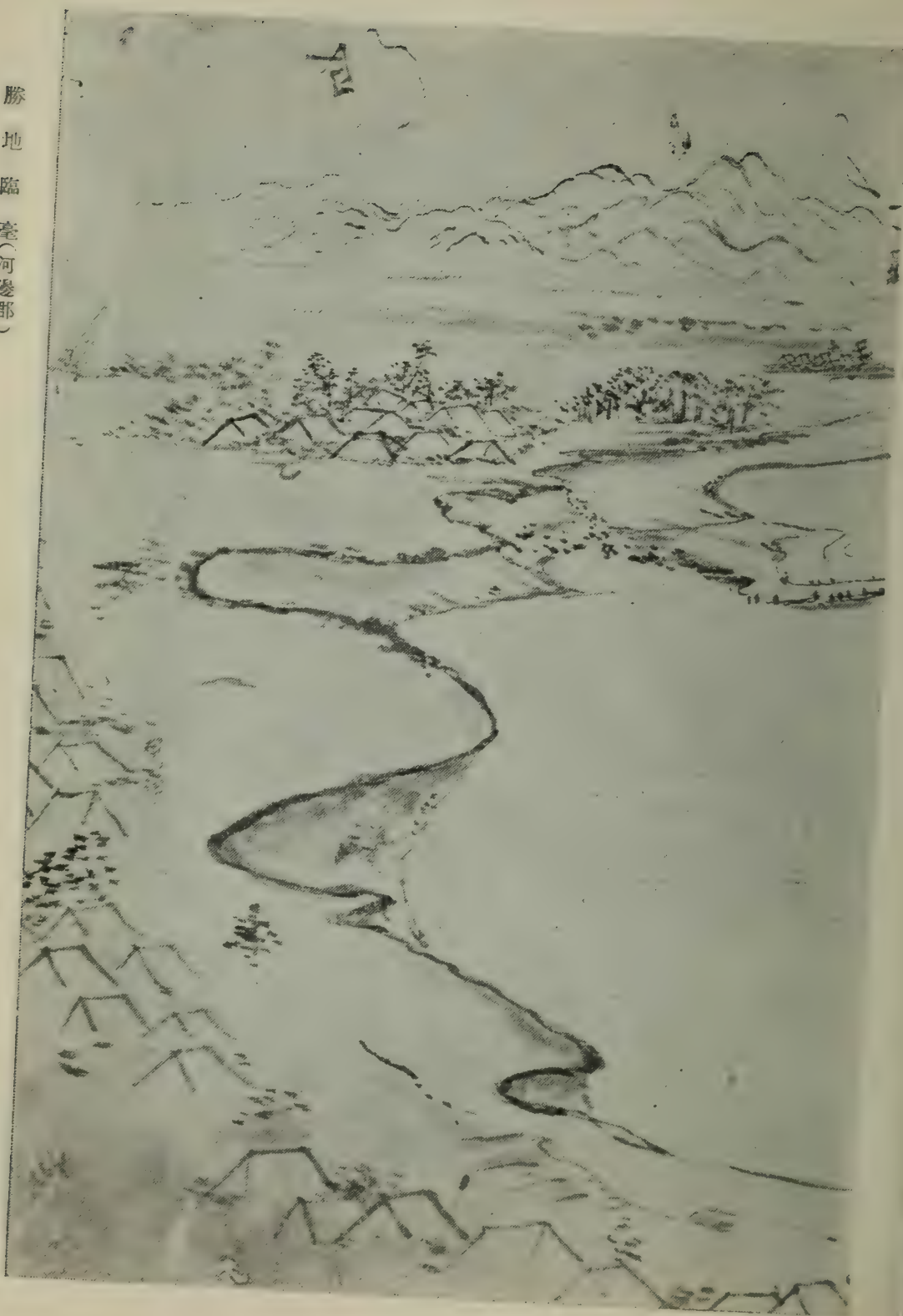
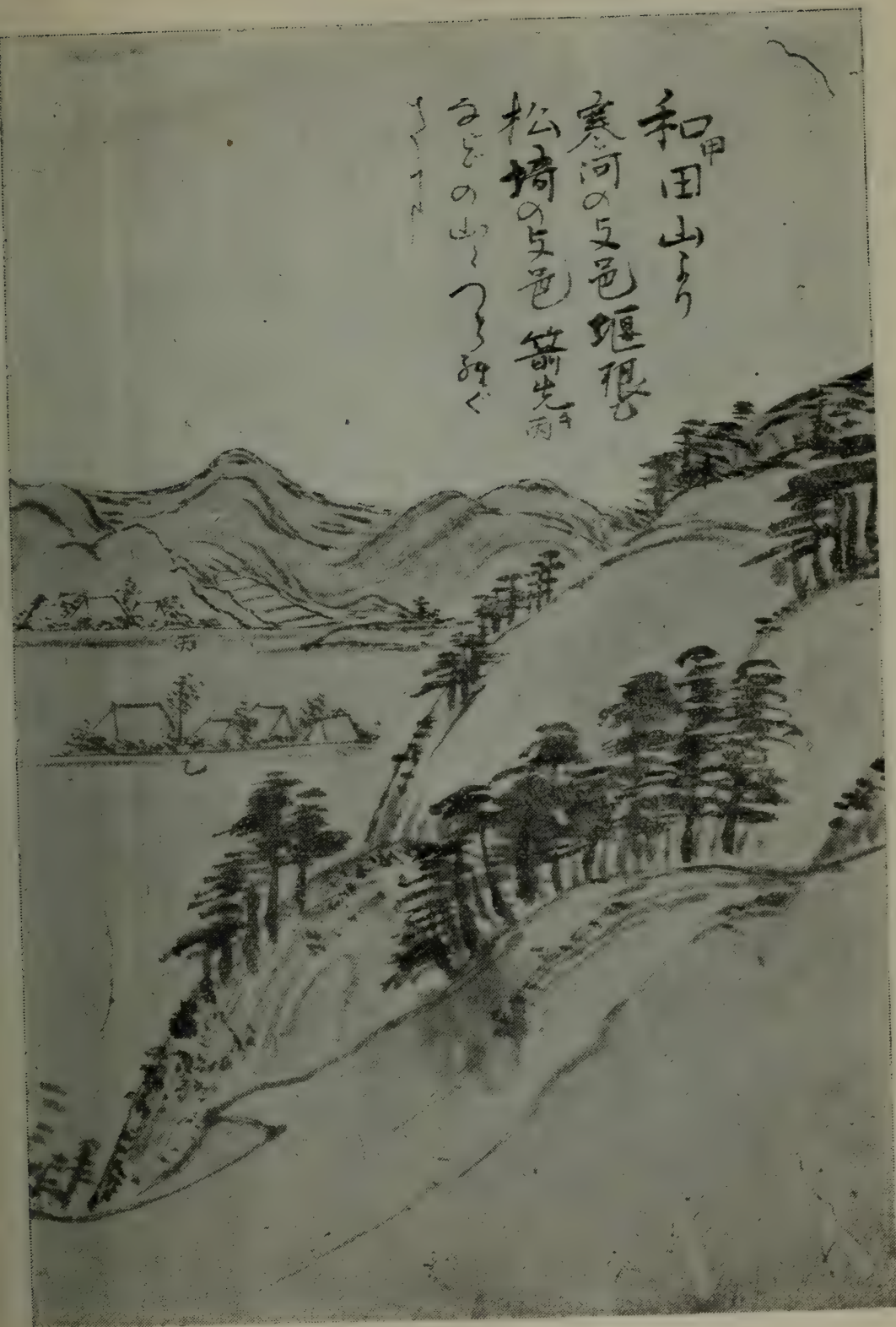
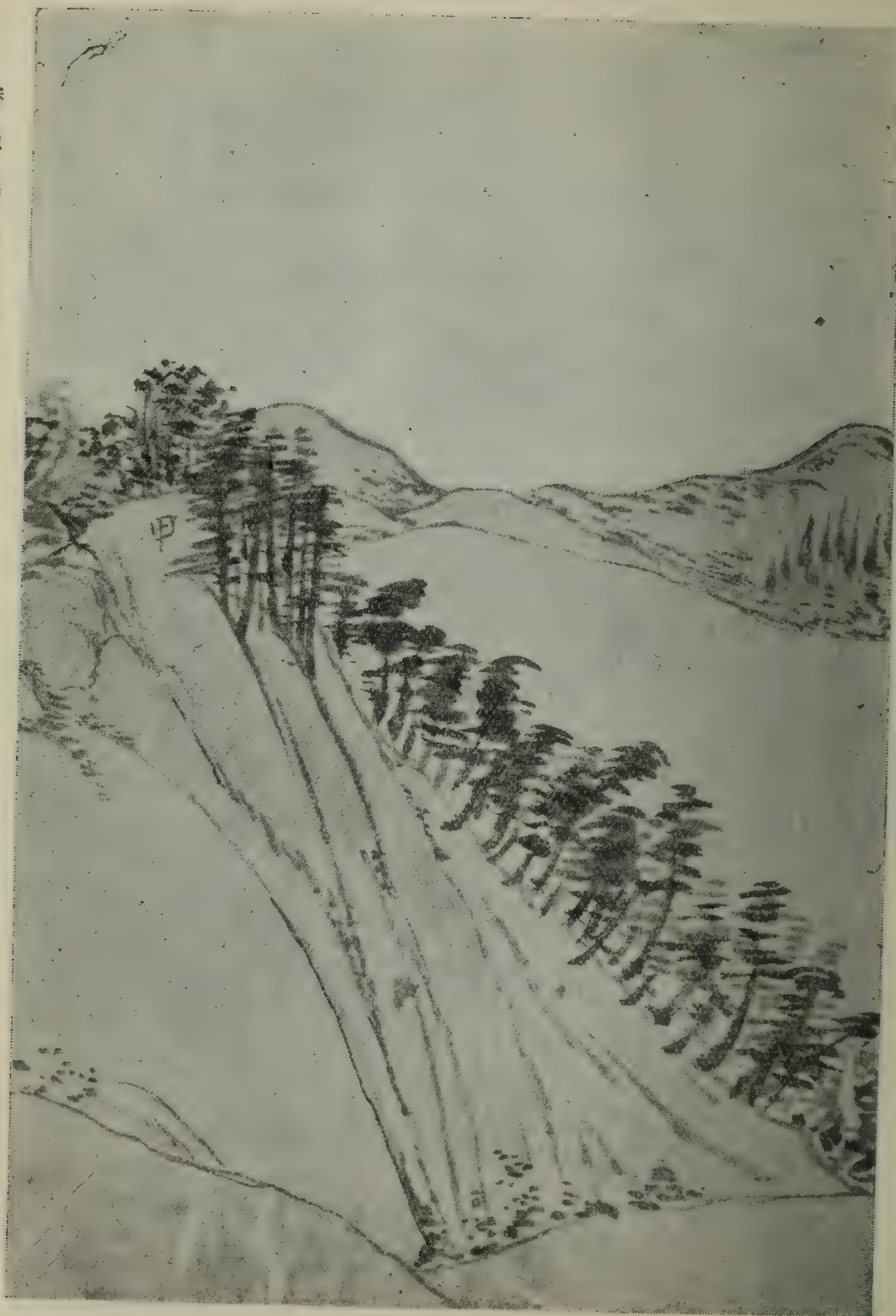
勝地臨毫（河邊郡）

甲櫻山の中
大森
師如來
河邊郡
松崎
秋田郡
蛇尾
蛇野
庄内
柳田

勝地臨毫（河邊郡）

和田山より

勝地臨臺（河邊郡）

河邊郡 巻湾湖又云
鶴子ノ滷
甲 雨戀長峯
乙 阿野ノ澤
丙 榊樹森
丁 通澤枝村
嘉川村
保長 孫四郎家
午

羽陰史略

後篇

羽陰史略　卷之五

○寶永元 甲申

一正月元日　御目付衆え、式日之通熨斗目着用切支丹改役以上罷出。

一同七日　江戸御老中より御目付衆え當三日御日付にて、公方樣益御機嫌能御重歳之由御奉書到來。

一二月三日　御目付衆角館御巡見に付澁江內膳始役人道伴、同九日御歸。

一三月廿六日　江戸より、御老中廿二日御日付御目付衆え御奉書到來於江戸御屋鋪え被相渡、御飛脚今朝持參仕候。

一月晦日　於御城御饗應御拍子在之、何も熨斗目着之。

一二月十八日　於江戸岩城伊豫守樣重隆御閑居、御家督御孫采女秀隆被仰付。

一四月三日　御目付衆治左衞門殿、三郎兵衞殿、當地別事無之に付江戸え御歸府被成候。依之、左衞門、

中務、老中御相手番初諸役罷出候。院內迄梅津半右衞門、御勘定奉行一人、御用人御見送往。
一同十日　宇都宮帶刀仙臺ぇ御使者、此度松平陸奥守吉村御入部に付て也、今日出足。當天德寺十九世榮純、初て上州御嶽永源寺ぇ傳法に登。
一同十七日　西家六郞義方妻緣約御先代被仰出、覺照院様御妹、大嶋小助江戶より同道久保田着。
一同廿四日　强地震。別て山本郡野代大地震、家數千百十三軒破損、潰〻同七百三十一軒、燒失同四百二十二軒、土藏百十六軒潰〻、米四千七百五十石燒失、男女五十八人死。午刻也。
一六月廿二日　江戶邊大雨、栗橋土手御番處流失。
一七月二日　此度岩城釆女殿御入部に付御使者梅津喜太夫龜田ぇ被遣。
一同三日　江戶淺草、本庄等洪水。
一同廿六日　東山城養母昌壽院死去年七十七。右爲悔上使御名代向源左衞門、御香奠銀十枚小野寺桂之助。
一十月廿一日　於江戶、戶根川新川御普請御手傳於御城屋形様ぇ被仰付。御相役松平土佐守様、松平隼人正様、相良志摩守様。此段廿七日江戶より申來。
一十二月五日　甲府中納言様、公方様御養君に被爲成西ノ丸ぇ御引移由。今年御國許旱魃、田畠不作。

○寶永二乙酉

一正月中旬　白雉二ッ出、御餌刺取。

一三月六日　於江戸將軍綱吉公左大臣御轉任、家宣公初ハ甲府中納言任大納言。依之、京都ゑ爲御禮上使酒井雅樂頭殿上京、禁裏ゑ一萬石被增進。從大納言樣御名代松平隱岐守殿定直。

一去年御國本不作に付、今年百姓田地仕付籾作食訴訟に付、米一石當時銀三十八匁直段に被借下。此銀八百貫目、六郡村々ゑ被借置。

一閏四月朔日　於江戸御城、去年被仰出戸根川御普請相濟に付、屋形樣義格公御奉書にて御登城御目見、御時服三枚御拜領。

一同五日　於御城岡本又太郎時服三、白銀五十枚御羽織一ッ入、時服二、御羽織、銀二十枚添奉行澁江十兵衞、右同斷にて何も本方役寺崎彌左衞門、澤畠十郎右衞門、留守下山田新五郎、廣瀬忠右衞門、物頭大久保多四郎、中田治太夫、同樣時服二、銀十枚目付羽石助十郎、本しめ酒寄彌兵衞、右之通拜領被仰付御老中被仰渡。

一七月朔日　江戸より申來候、先月廿二日桂昌院樣一位樣御逝去。御國本鳴物五十日停止、式日御禮相止。

一九月廿日　寺社奉行江戸ゑ登、天德寺と松原之補陀寺相論有之に付て也。

一十一月六日　山方太郎右衞門御守被仰付。前同役梅津藤太夫、澁江十兵衞、江戸は兩人詰交替。

○寶永三丙戌

一去秋も旱魃不作有之、百姓とも種作食願出候。和田妹川村一ヶ村、御足輕米斗にて銀二貫九百五十四匁六分被貸置候。

一御會所より町々ゑ御催促にて罷出候。以前より御家中知行高之內四ヶ一被借置候、以御條目被仰渡候は、當暮より御免可被成置候。先年より拜借物年賦可被召上候、御家中萬一急々御軍用、御公務、何も引立罷成間敷候間、分限に應し以御割償銀當暮より可被仰付候。

一七月廿一日　屋形樣御緣組、松平安藝守樣綱長之御息女御願之通被仰出。此御地ゑ廿日申來ル。

一同日　於大館古內茂右衛門義陳初義包卒、年三十一。跡目戶村十太夫弟佐惣治、知行三百七十石之內二百五十石にて被立置。

一十一月九日　屋形樣緣組松平安藝守樣ゑ御結納、御祝儀之御使者梅津與左衛門勤之。

一十二月廿四日　江戶より鈴木勘解由、御目付片岡角右衛門被差下。梅津半右衛門忠昭不行跡に付御家老役御免、澁江內膳宅にて同廿五日申渡ス。

○寶永四丁亥

一三月廿一日　松原補陀寺任雅意に付十二所茂木筑後に御預ヶ、其外同宗追院等有之。

一同廿六日或は廿五日　御城御座之間、陰之間、御茶屋、御法度書之間、御中之口迄御立替。大奉行御物頭黒澤喜右衞門、小野崎織部、中奉行大番頭、小奉行同組より八人被仰付。

一五月七日　梅津半右衞門閑居被仰付。知行高八千石之内三千石被召上、五千石小太郎に被下置九歳之時家督、半右衞門儀遠慮仕可罷有被仰渡。

一同八日　於御會所此度初て役割被下、副役人五十石、吟味役、路地役、御臺所役、御勘定組頭、御金藏役御作事役二十石充、御検地役、物書。

一七月十一日　於江戸西丸若君樣御誕生、御大名より御祝儀もの獻上有り。無間も御逝去、九月廿八日也。

一同廿一日　久姫樣黒田隱岐守樣え御婚禮、御附人益戸助左衞門。

一八月十九日　五畿內、四國、中州邊大風、損亡稲に當。

一十一月廿七日　疋田齋死ス年七十。

一同廿二日　駿河國富士山燒、江戸え右燒砂降ル。同廿三日江戸邊降ル。

一十二月十一日　岩城月峰老死年八十三、依て龜田え御名代同廿七日宇都宮帶刀、御香奠御物頭大越長右衞門被遣。

○寶永五 戊子

一正月十九日　從御會所番乘今年より被仰付。

一閏正月十九日　於此御地在々え被仰付、去年富士山燒砂駿州、相州、武州之田地え降埋、御救諸國え百石に付金二兩充被召上、御當領は百石に付八十目可被仰付と被仰渡。

一三月　去ル八日九日京都大火にて、禁裏始二條殿、近衛殿御類燒由。此頃天德寺數年願之通法談執行此度相濟。

一同十六日　御城御座之間柱立御祝儀あり。

一四月　山方太郎左衛門、梅津藤太夫、澁江十兵衛、右三人御守役此度御相手番並被仰付。

一五月七日　御城御座之間御棟上御祝儀あり。

一同九日　屋形樣御家督爲御祝儀御老中土屋相模守樣、秋元但馬守樣、井上河内守樣、其外六人御招請、御能あり。同十三日、十九日、廿四日御振舞有り。

一十二月十八日　屋形樣敍任四位侍從、口宣請取京都御使者大越十郎兵衛被仰付。同十九日、御名大膳大夫御改之儀御留主居を以御用番え被仰達、則相濟。

一同廿一日　順姬樣御緣組松平正五郎樣出羽守樣御事御願之通被仰出。

一同廿二日　於西丸若君樣御誕生有章院樣。大目付衆より、此度は不及登城由御廻狀也。

○寶永六己丑

一正月二日　御城御廣間御着座松平若狹守様少將、細川越中守少將綱利、松平伊豫守少將綱政、松平肥後守侍從、織田越前守信久、上杉民部大輔吉憲、松平安藝守吉長、屋形様義格公、有馬玄蕃頭則維、松平土佐守、右十人。外に松平薩摩守中將吉貴御指合にて御延引。

一同四日　大越十郎兵衞京都ぇ登。

一同七日　屋形様御官位御禮被仰上。此節公方様御不例故大納言様御代官にて御禮被仰請候。

御獻上物

公方様ぇ時服十、御太刀金馬代

御臺様ぇ白銀二十枚

大納言様ぇ時服、金馬代

御簾中様ぇ白銀十五枚。

一同十日　將軍綱吉公常憲院様薨去、御年六十四。依て普請、鳴物停止。同十八日秋田に達ス、式日御禮被相止。

一同十二日　秋田より御家中近進御官位御悦吉川幸右衞門賴爲相登候。一步判七十償遣。

一同廿六日　於江戸松平備前守樣御前樣岩姫樣御事御逝去、眞岳院殿御歲（マヽ）

一二月廿一日　此度御代替に付諸大名神文、依て屋形樣にも、御老中小笠原佐渡守樣御宅にて今日御神文被成候。

一正月廿八日　常憲院樣御尊骸御城より上野え御葬禮。

一三月八日　式部樣御敍爵、此時御大名二十五人諸大夫被仰付。

一同廿一日　大越十郞兵衞京都より江戸え着、口宣御頂戴江戸表之儀に付日數相延申之由。

一同廿二日　於御國本主計、中務、淡路、六郞、石塚主殿、大山因幡、戸村十太夫、小野岡市太夫、古內左惣治、御枝葉酒出一學、宇留野伊勢千代、眞崎兵庫、今宮文四郞、同伊織、小瀨縫殿之助、小田野又八郞、前小屋市郞右衞門御證文被下、其外御印判天神林內藏、大澤彌五兵衞、高垣彥右衞門、高久治右衞門、大館組下大澤主水、上平彌左衞門、是はかたへと被成。此節、御文書御用掛に付岡本又太郞御腰物被下、役人御加增御扶持等被下。

一同廿八日　於久保田御城下三組之番乘此度始てあり。公方樣御代替諸大名御裝束にて御登城、眞御太刀秀光代金七枚金馬代御獻上。

一五月朔日　將軍宣下勅使登城。依て諸大名登城。

一七月十九日　屋形樣半御元服、大嶋助兵衞右御祝儀御用被仰付。

一八月四日　將軍宣下御祝儀に付御老中御饗應、御老中土屋相模守樣、大久保加賀守樣、井上河內守樣、外に七人御客、御能有り。此時御家來十二人御老中御盃被下御肴被下、返盃何も被仰付。同六日御一門方、同十二日御女中樣、此兩日ともに御能有り。

一九月十日　於秋田番乘有り。

一十一月四日　小野崎權太夫火本にて西風、御馬屋、侍屋鋪十七軒燒失。

一同六日　江戶にて屋形樣御前髮被爲取、岡本亦太郞勤之、大嶋助兵衞介添。

一同廿二日　須田內記盛富京都ぇ御使者被仰付金五十兩被下登。禁裏御造營御祝儀御使者也。

○寶永七 庚寅

一正月五日申來、舊臘新院御所崩御、依て鳴物三日停止。

一二月十一日　於江戶壹岐守樣義長公芝口御門御手傳、御相役松平飛驒守樣、田村下總守樣。依之壹岐守樣ぇ金二千兩御合力被遣候。

一同十九日　去々年御官位爲御祝儀、松平越後守樣御上客にて御振舞有り。

一五月十日　從御會所被仰渡、於江戶當四月被仰出只今通用金步判小判小ヶ成候得共、金從御改兩替本之通引替可申被仰出候。

一同廿日　於大館西家六郞義方死ス、年二十八。跡目申立有之、因て中川宮內、御目付小野崎刑部右衞門被遣。

一同廿五日　三組之番乘有り。此年諸國巡見使七組、四國幷陸奥、出羽、松前迄、細井佐治右衞門殿、北條新左衞門殿、新見七左衞門殿、御當領大澤口より御入り六月三日久保田御町一宿、同八日津輕へ御通り。江戸より當四月二日御出足被成候由。

一同廿六日又は廿七日と　六郞跡目小場勘解由處員長子元千代五歲、本知九千石之內三千石被召上、六千石元千代に被下。幼少之內勘解由大館え引越可罷在被仰付。

一七月三日　大館え上使平元小一郞正久、同日小場氏も大館え行。

一同廿日　谷橋歸命寺、公方樣御靈屋被付置候に付寺領五十石被下。

一九月廿一日　壹岐守樣芝口御門出來、今日御目見御時服御拜領、御家老役人にも於御城拜領有之候よし。同廿四日三組之番乘在り。

一十一月十八日　江戸え琉球人御代替に付來、今日登城。松平薩摩守殿御同道。

一十二月十一日　屋形樣來年御入部之御願秋元但馬守樣え被仰入之、御相談可被成御答也。

○正德元辛卯

一正月七日　南淡路義安京都ぇ出足。舊臘四日江戸ぇ上着、天子御卽位御元服御祝儀御名代に登ル。

一同十八日　眞壁甚太夫安幹死年四十四。

一四月九日　正德と改元、諸御大名登城にて被仰渡。

一同十二日　屋形様御入部御暇上使井上河内守様御出、御時服五十、白銀五百枚御拜領。爲御禮御登城之處、公方様御代替に付備前元重之御太刀代金三十枚御拜領。

一同十五日　寺崎彌左衞門、久々御本方奉行相勤候に付一代廻座御免。

一同十九日　闔信様百ヶ年御法事於闔信寺御執行、去年寺御立替被成御法事。

一四月廿一日　御入部御祝儀御能在り。

一同廿二日　御下國に日光御社參御暇被仰出。

一同廿三日　晝時、奥州中村にて長門守敘胤公死去御年三十六申來ル。五月朔日迄御忌中。同三日屋形様江戸御立、御家老澁江宇右衞門、御守山方太郞左衞門。梅津藤太夫、右藤太夫中村ぇ御使者に被遣候、御道中ぇ罷歸御供。兩番頭、御本方奉行一人、御用人二人、御小姓頭二人、御膳番一人、御物頭四人、御步行頭二人、御納戸役二人、御刀番、御醫者本道、外科、針四人、御側小姓十二人、表小姓、大小姓添役一人、御中間頭一人。五月十五日院内ぇ被爲入御一宿、十六日横手御城御泊。此處ぇ藤太夫中村十三日出足着御供。十七日刈和野、十八日戸嶋御一宿。十九日朝久保田より小野崎權太夫罷出、宇右衞門同

前御相伴御料理相濟、御先ゑ將監、權太夫御暇、夫より戸嶋御立久保田御着城。御歸國御禮御使者、戸村十太夫義辰横手より直々江戸ゑ登。御供於御前御熨斗頂戴御暇にて退出。今晩御料理中務、老中御相手番御相伴。

一同廿日　天德寺御靈屋御參詣。

一同廿四日　御會所ゑ御成、御家老中初御守、三奉行、御用人、御小姓頭、御膳番、御歩行頭、御納戸役、其外御加增被下置。

一同廿七日　御引渡、廻座、御入部爲御祝儀御樽代差上獨禮、御帷子二、單物白臺にて、部屋住時服二御臺、於御前被下之。廻座ゑは時服廣蓋にて被下之、部屋住には獨禮斗、其外三奉行、御兵具奉行、御物頭より切支丹改役御免。

一同廿八日　右何も御祝儀御禮御料理、御側廻御小姓迄大般若之間にて御料理、給仕大番より出御吸物迄被下、御拍子あり。北主計、將監、南淡路始御□被下、金乘院、中務、岡本又太郎、澁江宇右衞門、小野崎權太夫、御守役山方太郎左衞門、梅津藤太夫、澁江十兵衞、御吸物御臺物御拍子あり。

一同廿九日　向後江戸登に大石田、笹屋可罷通由被仰渡。

一同廿九日　小田野刑部江戸ゑ登。

一同晦日　黑田隱岐守樣より御使者登城於金之間出ル、披露眞崎兵庫、御吸物御盃被下置返盃被仰付、御

廣間にて御料理御引物。老中、式部少輔様御使者御座之間にて御目見、披露白川七郎兵衞。

一五月廿二日　御引渡、廻座出仕家督御禮、小野岡市太夫長子是三郎、古内茂右衞門跡目左惣治、藏人に改、眞壁甚太夫跡又十郎、鹽谷民部跡彌六、矢田野藤三郎跡藤三郎、廻座和田掃部助、小貫儀右衞門、松野彌十郎、小田野刑部、福原彥太夫、梅津半右衞門跡式小太郎、外六人出仕。今宮又三郎、前小屋源太、此外三人。八朔御使者江戶ゑ鹽谷民部。

一六月朔日　大館より元千代罷登御目見。

一同二日　大番大小姓組獨禮。

一同三日　大番大小姓組獨禮相濟。

一同四日　諸役人在々給人、表御醫者、番外町醫、右一人宛罷出、町人御通りに御目見。

一同五日　寶鏡院、一乘院始寺院御禮。

一同六日　江戶ゑの御使者矢田野治部被仰付今日登。御進物之覺。

智清院様ゑ白銀百枚、御時服十、御樽一荷

芝御前様ゑ養眞院様巻物十、御樽代千疋

壹岐守様ゑ御時服十、白銀千枚、御太刀馬代、二種一荷

求馬様主膳様ゑ御太刀馬代、治部勤之。

一同晩長野にて三番御馬乘、一番石塚主殿、二番小野岡市太夫、三番宇都宮帶刀、七ッ半過相濟。御前にも御責馬其外御馬共御覽。尤中務、將監、又太郎、宇右衞門、權太夫、御相手番御餅茶被下。
一同八日　天德寺、鱗勝院、正洞院寺院御禮、社家山伏御禮。
一同十一日　江戶、當秋朝鮮人來朝に付公儀被仰渡、御馬十疋被爲登置。
一同十四日　岩城御使者登城。
一同廿日　江戶より申來、此度御裝束侍從以上薄紫、四品濃紫、諸大夫淺黃と御定被仰出之由。
一同廿九日　屋形樣御社參、八幡宮、御入部初て、先頃迄御服有之御延引。稻荷、金砂、諏訪えも。
一七月朔日　松前志摩守殿御使者登城。
一同七日　御兵具藏え御出、御代々之御武具御覽。
一同八日　諸士家督御禮。
一同九日　大八幡、上野惣社御社參。
一同十二日　津輕土佐守樣御使者登城。同日多賀谷彥太郞格重家督御禮、家來二人被召出。
一同十七日　小田野刑部土用伺御機嫌御使者仕廻、矢田野治部上々樣御使者相勤下着。
一同廿一日　城下御町、湊町踊、御城御臺所前にて上覽。
一同廿三日　御廣間におゐて御施餓鬼有り、諸士相詰。

一同廿七日　相馬讃岐守様より御使者登城。同日江戸より戸村十太夫下着。
一八月六日　戸村十太夫長子伊勢千代出仕、名大學に相改。御一字被下、御刀被下、家來七人被召出。
一同十三日　能代ゑ御渡野。御供岡本又太郎、澁江十兵衞、御用人大澤彌五兵衞、御小姓頭梅津與藤治、望月伊太夫、其外役々被召連。九月三日御歸城。頭役以上町々二人宛登城、於御廣間御法令御條目被仰渡。
一九月十三日　御目見、右は先月御渡野故東將監、老中、御相手番、兩番頭、三奉行、副役迄被召出。暮過御廣間にて御拍子有り。
一同十九日　東中務宅ゑ御成、御相伴又太郎、宇右衞門、市太夫、源左衞門、藤太夫、十兵衞林立、豫廣間にて家來十人被召出。
一同廿五日　三組番乘上覽。
一十月十五日　澁江宇右衞門宅ゑ御成。
一同十八日　江戸ゑ朝鮮人來ル、東本願寺旅宿。
一同十九日　勤功之者に御加增幷近進御免。今日朝夕近進以下古來之通御料理、菱喰御汁、鮭燒物、御廣間上段下御坐敷より二通に並居、御前にも膳中一度、酒之內一度右兩度共に、御座敷中何も居候所御通り、老中御執成。

一同廿一日廿二日同斷、同晚には御步行以下幷被下之。
一十二月二日　來年頭御使者伊達九郞三郞登。
一同十一日　來春御參勤之御供觸有り。
一同十五日　寶鏡院え御成。
一同廿八日　北左衞門義命弟東野又八郞三百石分地出仕、御一字被下。

○正德二 壬辰

一正月元日　年頭之御祝儀八木淸之允勤之。御料理御相伴老中、御膳相濟御手前之御濃茶被下、御側廻御法度書之間御料理被下、御座敷え罷出同斷御茶被下、畢て老中御盃被下、畢て御側廻、御小姓相濟。大廣間え御出御祝儀御熨斗、山峰、御土器獻之。今年古來之通役頭迄熨斗目長上下着用。

一番座

北左衞門　石塚主殿　大山因幡　戶村十太夫

古內藏人

二番座

東中務　眞壁又十郞　多賀谷彥太郞　鹽谷孫六

南淡路　宇都宮帶刀　茂木筑後　矢田野藤三郎

廻座和田掃部助始、畢て三奉行、御兵具奉行、物頭、夫より順々。今暮御香會、御一門衆、處持、老中、御相手番、同並、兩番頭當番斗、以下諸役人、御側廻一人宛罷出。

一同二日　朝御座之間御相伴相濟御廣間御出座、部屋住御引渡、御廻座、畢て大番、大小姓御土器被下。同晩御引渡、御廻座御料理、大般若之間にて三奉行、御側廻御料理被下、於金之間中務、將監、老中御料理。暮より御廣間御拍子、左衞門、淡路御盃返盃被仰付、數之御土器何も拜領、畢て御暇被下之。夫より金之間え被爲入御吸物等出御拍子、中務、老中御盃被下御返盃、畢て數之御土器出ル。三奉行初當番組頭迄罷出頂戴、御側廻兩方より出御土器拜領、畢て何も御暇。

一同四日　太平え御初野。

一同十四日　今晩年始之御祝儀相濟候に付於小書院御相手番並衆中斗、大小姓頭當番斗、三奉行一役一人、御側廻當番御小姓迄麻上下、御拍子有り、臺物等出ル。

一同十五日　朝御祝儀八木淸之允獻上。

一同十六日　天德寺初寺院御禮。

一二月十二日　岡本又太郎大病に付被爲成、辭退申上御目見無之。

一同十六日　又太郎死ス年五十二。家督、子共卯五郎に二歲之時無相違千五百石被下置。又太郎死去に

付鳴物三日停止。依て卯五郎宅ゑ爲悔被爲成御意有之。
一同廿七日　湊ゑ御渡野。
一三月十一日　八幡宮ゑ御社參、御代々神體一度御拜禮被成候。
一同十八日　八幡御影御繪御表具古キ付、此度於江戸御修覆に付金乘院より差上ル、御持參被遊候。
一同廿二日　江戸ゑ御登、此間雨降洪水有之今晩戶嶋御泊り。御共御家老小野崎權太夫、騎馬二十三騎外に副役人、御中間頭御道中より。
一四月八日　野州日光山御參詣、同十二日江戸ゑ御着、卽御老中御勤。
一同十三日　上使土屋相模守樣御出、同十五日御登城御參勤之御禮。
一同十八日御奉書にて同十九日御登城之處、御代替御判物御頂戴。
一六月廿一日　順姬樣御結納松平出羽守樣より參候。
一九月中旬　江戸より八幡御影表具出來御下向、同廿日寶鏡院加持。
一十月朔日　長野にて番乘。
一同十四日　於江戸將軍家宣公薨、同廿日申來。會所より手紙、鳴もの、普請停止、式日御禮延引申渡。
一十一月六日　梅津與左衞門忠經死ス。
一十二月十三日　梅津藤太夫金忠御家老被仰付。江戸より澁江十兵衞立歸昨晚被差下。

一同廿七日　十兵衞江戸ゑ登。

○正　德　三　癸巳

一正月元日　屋形樣御在江戸。舊臘於江戸、將軍家繼公、十二月十八日正二位大納言御任官。諸大名御目見御太刀馬代御獻上。

一同二日　屋形樣御登城御時服御拜領。

一四月二日　於江戸將軍宣下、屋形樣御登城。

一同五日　公家衆御登城御饗應。

一同七日　勅使。

一同十五日　諸大名登城御饗應、御能有り。

一同十六日　屋形樣御歸國御暇上使土屋相模守樣御出、銀五百枚、御時服五十御拜領。卽日爲御禮御登城、備前吉包代金三十枚之御刀御拜領。

一五月三日　江戸御立。

一同七日　久保田聲躰寺ゑ遊行上人來着。

一同十九日　屋形樣御着城。右御禮御使者石塚主殿登ル、廿二日江戸ゑ出足。

一同廿六日　於御城遊行上人ゑ御振舞、相伴澁江宇右衛門、小野崎權太夫。
一同廿八日　會所ゑ御成、老中、役人ゑ被下ものあり。
一同廿九日　屋形樣遊行上人ゑ御見舞御對面。
一閏五月朔日　戸村十太夫御家老被仰付。先日十太夫、久保田より召候嫡子大學儀、横手御城代可相勤御藏出高五百石被下。上使御物頭淸水嘉兵衛、御目付小川茂左衛門、同十一日兩人御條目被渡置候。
一同八日　八木作助、親作助代廻座御免被下候通着座御免。
一同十四日　八ッ時過急に大風。
一同廿七日　屋形樣下口巡見に御出、御供澁江宇右衛門、御側廻澁江十兵衛初十騎、御醫者二人。八月廿二日御歸城。
一九月廿四日　山方太郎左衛門泰護御家老被仰付。
一十一月六日　來春江戸御供觸有り。
一十二月六日　湊御渡野、御供戸村十太夫、同十三日御歸り。
一同廿九日　江戸より御飛脚、去廿二日江戸御屋敷御類燒申來。同廿五日御老中御連名之御奉書到來、右爲御禮茂木佐太右衛門金子五十兩被下江戸ゑ被差登。幷信太十左衛門被仰付智淸院樣御機嫌御伺御使者に登ゝ。淺草外兩御屋敷ともに三ヶ所燒失。

一同晦日　御奉書來、八月中御參府被仰出。

○正徳四甲午

一正月元日　御在國。年始御規式如舊例。
一同二日　晩御料理御拍子共に、江戸之儀に付被相止。
一同四日　御初野、手形御休所抔其外御供。
一同七日　寶鏡院一乘院初院家御禮、畢て會所ゑ御成。同晩江戸御老中御連名之御奉書、舊臘御屋鋪類燒付、當四月御參勤被延置、八月中御參府可被成よし申來ル。右御請、小野寺長太夫兼て春之御機嫌伺御使者被仰付候所、右御禮可罷登同八日被仰渡、十一日出足。春之御使者酒出孫十郎金子十五兩被下被仰付、同廿二日出足。
一同八日　北主計江戸被仰付、右は兩度之御奉書御禮。金子二百兩被下。同日町々より、舊臘御類燒に付知行高之内可差上願御會所ゑ申立。
一同十一日　江戸御供觸直シ、六七月之内御登可被成よし。
一二月廿八日　東將監義本嫡子富千代後求馬壹岐守御城於陰間元服、袴着御前にて被成下、出仕名源六郎に改御脇指被下、畢て退出。依て舊例中務宅ゑ被爲成。

一三月七日　於一乘院、大八幡神前に御假屋立御家御代々之御旗仕立、屋形樣今朝より大八幡宮え被爲入御旗勝裁。御手傳役戶村十太夫義覺、蓁目山方多郞左衞門泰護素襖にて勤之、後見御物頭生田目喜內御旗奉行、矢役笈川南右衞門物頭、御旗仕立方差圖三村正右衞門、後藤正左衞門、縫物役杉山彌生、其外小役人。右旗出來、萩庭市左衞門、右は御旗指役故襟掛御蓁目之內御旗半を立。其時三獻御規式御膳番獻し、御搾方菊地新左衞門勤、御銚子平藏御膳番御加、御小姓筆頭熨斗目長上下にて勤之。

一三月十三日　鹽谷民部方綱死。

一同十一日　北主計義命長子乙菊出仕、次第東源六郞に同。名亦四郞義據に改家來七人被召出。

一同十三日　一乘院にて御旗加持於金之間御覽。今晚御祝儀御料理。銀三十枚、時服三戶村十太夫、同二十枚、同二山方太郞左衞門、銀三枚生田目喜內高年、鈴木平藏重乙、銀二枚萩庭市左衞門、其外三村、後藤、同五枚宛被下。

一四月十一日　大山因幡義次死、爲悔上使嫡武吉え眞壁造酒被遣候。十二所茂木筑後知量死歲四十一。

一四月廿八日　於長野三組番乘上覽。

一五月廿八日　一日市村御渡野。

一同　東中務閑居、今日嫡子將監義本家督御禮、御刀拜領家來七人被召出。

一七月朔日　大山武吉家督之御禮、名平八に改御一字被下、家士四人被召出。

一同二日　御社參。
一同七日　小野崎權太夫宅ぇ御首途被成置。
一同九日　夜中三丁目より出火、大火に相見得屋形樣御出馬。二丁目、上米町、東通茶町、柳町燒失。
一同十九日　屋形樣江戶ぇ御登。御供山方太郎左衞門、御相手番並澁江十兵衞、外に騎馬十三騎。御醫者、本道、外科、御側廻七人、御中間頭一騎、御鐵炮弓鑓都合百。同廿二日角館御巡見、主計宅御一宿。主計、鹽谷兩組下獨禮、御用人岡半之允披露之。主計家來十七人御前ぇ被召出、組下二百人餘出。同廿五日院內御山越。
一八月六日　江戶下谷七軒町御上屋鋪ぇ御着、同日晚御老中御勤。
一同七日　上使土屋相模守樣御出。
一同十一日　御參勤之御禮。
一九月廿四日　於秋田御妾腹に源之助樣御出生、十月三日江戶ぇ達。
一十月二日　須田伯耆盛富死ス。
一同廿二日　大番頭今宮外記、酒出孫十郎、小田野刑部、番組支配之儀に付御改易。
一十二月二日　江戶ぇ琉球人來ル、諸大名直乘にて登城。松平薩摩守樣御同道。
一同四日　於御城琉球人之樂有之。

一同六日　琉球人御暇、依て諸大名直乘にて登城。

一同十二日　此度御出生源之助樣御死去之段、廿日申來ル。御法名如雲心嚴童子。

○正德五 乙未

一正月元日　御在江戶。年始御祝儀、八木作助舊臘より罷登勤之。暮より御香會有り。

一同二日　明半時御登城、暮より御拍子、壹岐守樣、式部少輔樣御出、細井佐治右衞門殿御盃事御取持。山方多郞左衞門御盃被下返盃、左治右衞門殿御取持。御臺物數之御土器御側兩方より罷出頂戴、御家老御相手番弁御肴。

一二月廿一日　將軍宣下御饗應、御老中土屋相模守樣、井上河內守樣、若御年寄大久保長門守樣、森川出羽守樣、御奏者初九人。御膳中此度之御能相止、御拍子弓八幡、東北之內。御家老、同並番頭、御用人、御留守居、御小姓頭、右十二人御老中より御盃被下御肴被下返盃。八ッ半過御老中御歸。

一四月十五日　屋形樣御歸國御暇、上使土屋相模守樣御出御時服五十、白銀五百枚御拜領。日光山御使者大番頭小貫儀右衞門、御香奠御物頭半田佐右衞門、先日此御地より直々被遣候。

一同十七日　權現樣御百ヶ年御法事於日光山御執行に付、井伊掃部頭樣御名代。當十一日被任少將、御名備中守と御改を被仰付。

一五月朔日　屋形様江戸御出立、御家老山方多郞左衞門、外に騎馬十五騎。
一同十二日　院內ゑ被爲入直々南淡路宅ゑ御一宿。
一同十五日　戶嶋。
一同十六日　朝何も御料理被下相濟。御步行、御庭ゑ被召出候て御酒被下、給仕は御刀番等拘取御酒被下。戶嶋御立、去年御門出小野崎權太夫宅ゑ被爲入御祝、夫より御着城。於御座之間御熨斗頂戴御暇各退出。
一同十七日　御歸國御禮使者東將監江戶ゑ出足。
一七月六日　八朔之御使者眞崎兵庫處純江戶ゑ登ル。
一同十六日　御鷹野、御歸城。其夜中より御不例御水氣有之、同十七日町々より御機嫌伺罷出ル。同十八日御快氣之方に被成御座候に付、一町より一兩人宛登城可仕旨御會所より被仰觸。
一同十九日　御機色御重り、江戶ゑ御醫者御願遠山理助早打登。御大切被爲成候に付、御跡目御願梅津藤太夫被差登。其夜九ッ頃諸士御廣間ゑ相詰罷在候處老中罷出、御養生御叶不被遊御逝去之段申渡、御跡之義は御下國被仰上候御假養子、壹岐守樣御嫡子求馬樣被仰立候よし被申知、何も無是非退出。右爲御知御使者御步行頭眞崎新左衞門被差登。
一同廿八日　御城より御尊骸天德寺ゑ御出棺。

一同廿九日　江戸より御老中御連名之御奉書以宿繼達ス。
一八月朔日　御飛脚參着。先月廿四日梅津藤太夫江戸え着、同廿六日求馬様御暇被仰上、屋形様爲御看病江戸御立杉戸迄御出被成候所に、御逝去相知江戸え御歸、御老中井上河内守様より御服忌御請可被成被仰渡。同廿七日爲御悔上使高木主水正様御出、御香奠白銀三百枚御拜領。求馬様御道中故、壹岐守様、主膳様、岩城伊豫守様御三人、御上屋敷え御揃御頂戴被成候。
一同六日　秋田え松平出羽守様より御歩行使。
一同九日　上杉民部大輔様より御歩行使病氣御見舞、此方年寄衆より向方御家中え、江戸え可申達旨返答、金子等被下。當四日求馬様御上屋鋪え御移之段申來。
一同十六日　義格公御葬禮、御法名克讓院殿別傳武翁。翌年被相改天祥院殿實巖圓眞大居士。
一同廿二日　澁江宇右衞門處光死ス、年五十一。
一九月十二日　松平安藝守様より御使者物頭上下廿三人にて着、天德寺え同道御燒香仕候。時服三、銀十枚被下候。
一同十八日　江戸より御飛脚申來候、當十一日御老中より御奉書、翌十二日阿部豐後守様御宅え屋形様御出之所に、御家督無御相違被仰渡候に御月代御取御出、御歸りには表御門より被爲入御供は御借人にて御歸。何も月代御免、御供廻り御先代之通被召連。

一同廿七日　久保田え矢田野治部被差下、天德寺御廟え、御遺領御拜領之爲御知御使者被仰付。殊に御家中諸士於御城御廣間、御意之趣治部申渡候。

一十月八日　江戶より申來候、先月廿八日屋形樣御家督御禮被仰上候。

公方樣有章院樣

一御太刀　黃金五十枚　綿

克讓院樣ヨリ御遺物

公方樣え眞御太刀豐後行平代金

三幅對御掛物牧溪筆

佐竹主計義命、同將監義本、同淡路義安、石塚主殿義行、戶村十太夫義覺、右何も時服、御太刀、御馬代獻上、小野崎權太夫、梅津藤十郎、此兩人御太刀馬代獻上、御前え被召出御目見七人相濟。此度御悅諸士名代齋藤作左衞門賴爲相登、金三十兩償遣候。十月十一日爲相登候。

式部少輔樣え元祿十四年被預置候福富兵部殿御嫡子虎之助斗御免にて江戶え登。

一十二月四日　秋田湊永覺町東之方町屋廿六軒出火、借屋五十軒、土藏三、寺二ヶ寺燒失。

一同晦日　江戶より申來、當十七日於江戶御奉書同十八日御登城之處、屋形樣侍從御官位、御名右京大夫樣と御改之由。

○享保元年 丙申

一正月元日　屋形樣御在江戶。

一閏二月廿八日　東將監、嫡子源六郞同道江戶ゑ出足、御用に付て也。先立被仰渡金子五百兩被下、外に七百兩拜借之由。道中本宮泊、三月十六日江戶より旅宿ゑ申來、是より直々久保田ゑ下着。當分不及罷登由申來。

一三月廿七日　御家老山方太郞左衞門江戶ゑ登ル。

一四月二日　御家督爲御祝儀於江戶井上河內守樣、久世大和守樣初外に九人御饗應、御能有之。

一同晦日　將軍家繼公奉稱有章院樣薨御御年八歲鳴物普請御停止。此御地ゑ五月十日申來。紀伊中納言吉宗公被爲得天下御讓御立被遊。依之六月廿七日諸大名登城御禮。

一七月二日　江戶於御城年號改元被仰出。

一同十九日　昨今於天德寺御法事、克讓院樣御法名御改天祥院樣と奉稱、此旨可申傳由被仰渡。

一九月十一日　於江戶御城御代替爲御祝儀諸大名登城御饗應、御能有り。

・一同十五日　屋形樣御婚禮有り、黑田伊勢守樣長淸御息女也、此方ゑ廿七日申來。右御悅、御家中より名代大塚新左衞門賴爲相登候。

一十月三日　向源左衞門京都御使者に出足、右は御入内御歡御名代御使者。
一同廿二日　東將監御用侯間、源六郎同道可罷登被仰渡金五百兩被下候。外に五百兩拜借。
一同廿八日　東父子江戸ゑ着、當春拜借は可被下置由被仰渡。
一十一月十八日　於江戸、源六郎殿御事壹岐守樣御養子可被成置御願相濟。御名求馬樣に御改、今日公方樣ゑ御目見濟。
一十二月十一日　眞崎兵庫處純御家老被仰付、夏中より在江戸にて罷有。
一同十九日　大澤彌五兵衞御近習より一代廻座御免被仰渡。

○享保二丁酉

一正月　屋形樣御在江戸。
一四月七日　於御屋鋪將軍宣下御祝儀御饗應、御老中阿部豐後守樣、戸田山城守樣其外十人、御能有り。御家來十二人被召出、御老中御盃御肴にて返盃被仰付。
一同十五日　爲上使戸田山城守樣朝明半時御出、御入部御暇御拜領。御時服五十、銀五百枚先規之通御拜領。卽爲御禮御登城之所、御代替に付備前兼光金三十枚御刀御拜領。
一同十六日　將軍宣下二度目御振舞御能有り。御上客松平伊豫守樣、松平安藝守樣、上杉民部大輔樣、

松平大和守樣、松平信濃守樣、松平筑前守樣、此外御振舞。
一同廿一日　三度目御振舞、御上客松平大和守樣、其外有り。三度之御振舞濟。
一同廿三日より有章院樣小祥御忌月御法事增上寺に有、依て御參詣。
一同廿九日　公方樣增上寺え御參詣。當十五日夜九ッ時、於久保田長野宇都宮帶刀、荒川久平宅燒失。
一五月朔日　昨日迄增上寺御法事相濟候に付、屋形樣御裝束にて御登城。
一同十五日　屋形樣江戶御立、御供之御家老眞崎兵庫、御相手番伊達九郎三郎、大番頭戶村大藏、御近習頭大澤彌五兵衞、御用人岡半之允、御小姓頭小介川正左衞門、駒木根丹下、御膳番鈴木平藏、御步行頭赤須平馬、清水織部、御納戶役一人、御刀番五人、同並二人、御納戶並一人、御側御小姓十人、御先道具鐵砲五十挺大越源右衞門、御弓二十鷲尾彥九郎、御鑓三十田代源太、御目付二人、御醫者、側役人、大小姓、御中間頭一騎。
一同廿九日　久保田御着城。
一七月九日　江戶小傳馬町より出火、南風にて壹岐守樣御屋敷、兩屋鋪、上御屋鋪燒失、南西之方御長屋殘り申候。
一同十一日　御用番御老中より御留主居被爲召、御類燒に付秋田え御連名之御奉書被渡置、根岸惣內請取罷歸。卽傳馬丁え御物頭吉成彌右衞門持參問屋え相渡。

一同十五日　御歸國御禮使者多賀谷彥太郎上着。
一同廿日　御奉書之御返書秋田より御用番ゑ參候由、千住より爲御知仕候。
一同廿八日　彥太郎登城蠟燭、白鳥差上、自分御太刀馬代獻上御目見相濟。
一七月二日　秋田ゑ御奉書之御禮使者松野彌十郎上着。先月廿八日、於秋田宇都宮帶刀、大越十郎兵衛御家老被仰付、同日戶村十太夫、小野崎權太夫、梅津藤太夫御役御免、江戶ゑ七月六日に申來。其外寺崎彌左衛門、根本正右衛門、茂呂喜左衛門、野尻德兵衛御役御免。
一同三日　彥太郎登城御奉書被相渡、御時服三、內一御羽織拜領。
一同廿六日　多賀谷彥太郎於江戶死去、年二十五。
一八月朔日　淸水忠兵衛上着、彥太郎被召出候御禮。同日、御祝儀御使者梅津小太郎去ル廿四日上着、今日登城、名小右衛門に改相勤。
一同十六日　江戶邊大風、天水桶吹落破損多し。
一同廿日　於秋田御步行御加增被下置御役替被仰付、今宮、酒出、小田野、御步行被返下。
一九月朔日　於江戶御城御在江之御大名、御代替に付御判物被下。
一同十二日　御在國御大名御判物被下候に付主膳樣御登城、屋形樣御名代に御頂戴御上屋鋪ゑ御持參、山方多郞左衛門請取之拜見。先日秋田可被差下申渡御物頭黑木權右衛門、御目付長瀨德右衛門、明日

出足可仕由。外に御步行四人、御足輕八人、通夫四人、小御長持入行連にて十月朔日久保田え相達候。
右御禮澁江源藏同十五日上着、明日御老中相勤候所、同廿一日御城え罷出、檜木之間にて時服三被下之。上杉樣御同格。今日初冬伺御機嫌御使者梅津五郎左衞門登城。
一十二月十一日　御上屋鋪奧御殿出來、今日御前樣御引移。
一同十三日　寒中御使者宇留野源兵衞上着。
一同十四日　年頭御使者佐藤忠左衞門上着。當十一日於秋田來春御供觸有り。大越十郎兵衞名改甚右衞門に成。
一同廿二日　小野崎權太夫死、六十六歲。同夜久保田御町一丁目より出火二丁目川端迄燒失。此月大澤彌五兵衞永代廻座被仰付。

○享保三 戊戌

一正月　屋形樣御在國、年始之御規式御不快に付御出座無之。
一同廿九日　黑田伊勢守樣え、御婚禮以後初て御料理奧御殿にて被進候。
一二月十四日　眞壁又十郎卒、年二十歲。跡目同氏造酒被仰付。
一三月朔日より三日迄、年始之御規式にて於御廣間諸士御盃被下。

一同十五日　屋形様江戸ゑ御登、御供之御家老大越甚右衞門、御相手番石塚主殿。
一四月朔日　明日は隅田川邊御鷹野御沙汰にて、夜九ッ時過御參府。
一同二日　朝御老中御勤。
一同三日　上使水野和泉守様御出、同十三日御登城御參勤之御禮。當二月四日須田政三郎上着、春之伺御機嫌御使者。
一五月廿八日　淺草御屋鋪之内壹岐守様御拜領、壹岐守様柳原御屋敷は此方様御拜領、今之御中屋敷是也。
一九月六日　於江戸壹岐守義長様御閑居、屋形様にも御登城被仰渡求馬様御家督被仰付。
一十月廿五日　岩城伊豫守様御死去。閏十月廿九日御使者福原彥太夫、御香奠木野小右衞門持參。
一同廿八日　求馬様御家督御禮。
一十一月二日　小野岡市太夫義伯御家老被仰付、本知五百五十石御加增被下、償御役料被下。
一同八日　江戸ゑ琉球人來。
一同十三日　登城之よし、御大名天和之式にて御登城無之。
一同十五日　會所より、此度從江戸金銀位替被仰出御觸有り。乾字金二寶、三寶、四寶銀、新金目形古來之通四匁八分、新銀百目四寶銀四百目に替ル。當八日壹岐守様、御老中ゑ被仰遣兵部少輔様に被爲成

候、宇都宮帯刀より頭役以上ぇ以手紙申來候。
一十二月十八日　求馬様敍爵被仰付壹岐守様に御改。

○享保四 己亥

一正月　御在江戸。戸村十太夫閑居濟、大學に家督被仰付。横手ぇ上使御物頭平塚惣兵衞、御目付大和衞士。
一四月十三日　御歸國御暇上使水野和泉守様御出、御拜領物如例年。
一同廿九日　江戸御立。
一五月十五日　御着城。此節御家老代石塚主殿御供。
一同廿七日　眞壁造酒家督御禮、名甚太夫に改。御腰物被下家に候得とも、御儉約に付御證文にて被下家頼一人被召出。
一六月十日　眞崎兵庫病氣願に付御家老御免。
一同廿一日　八幡、金砂、諏訪、大八幡、惣社ぇ御社參。
一七月十八日　御用に付山方多郎左衞門江戸ぇ登、大越甚右衞門に交代。
一同廿二日　於御城町々頭役不殘御廣間ぇ相詰〻。御不如意無御據、御家中迷惑可申候得とも半知可被

借置旨被仰渡。

一八月朔日　戸村大學義見家督御禮。

一同四日　梅津半右衞門御勘當御免。

一同廿五日　半右衞門閑居候得とも御財用之儀被仰付。

一九月廿七日　江戶ゑ朝鮮人來。

一十月朔日　登城、同五日吹上ヶにて曲馬上覽。

一同十七日　龜田ゑ御使者佐藤忠右衞門、御香奠今井藤次持參、御法事有之に付。

一同廿日　梅津半右衞門御家老格被仰付、御役料四百石被下。

一同廿四日　後藤理左衞門宅ゑ御茶湯御成。

一十一月十五日　於御城諸士鎧切合上覽。今宮氏、茂木氏、白川氏、吉成藤兵衞、何も弟子召連罷出。

一同廿一日　中川宮內嫡子百助、右は知行差紊之儀に付(マヽ)

一十二月四日　年始之御名代使者眞壁甚太夫江戶ゑ罷登。

一同十一日　岩城月峰老十三年御法事に付、龜田ゑ玉生八兵衞御使者、御香奠鈴木與市左衞門。九日彼地ゑ往く。

○享保五庚子

一正月元日　屋形樣年始之御規式始て御詞。

一同十一日　御文書所元祿十年德雲院樣御代岡本又太郎被仰付、御系圖御講記等出來役人吉成藤兵衞、渡邊奥右衞門差上候所、爲御褒美銀子被下。

一同廿三日　黑田伊勢守樣長淸御卒去。

一二月廿五日　梅津半右衞門忠昭死ス、年四十九。

一三月廿二日　江戸ゑ御登。此度御儉約に付御先道具被減、御鐵炮三十、御弓十張、御鑓二十筋に被成置、御供廻御家老代澁江宇右衞門格光御相手番にて登。

一四月四日　江戸より御飛脚、先月廿七日中橋より出火南風、御上屋敷類燒申來。

一同六日　御類燒に付、江戸御老中より御奉書宿繼當三日山形へ相達、秋中御參府可被成被仰出。四日山形御逗留、江戸ゑ右御禮御使者小瀨縫殿助被差登。上々樣ゑ駒木根丹下登。

一同七日　院内ゑ被爲入湯澤御泊り、御不快故御逗留、御供廻御用無之もの御暇被下。

一五月六日　屋形樣御快然に付御着城。

一同廿一日　石塚主殿江戸ゑ出足、此度之御禮使者。

一六月　南部ゑ人返し有之岡見藤治右衛門、大和衞士、御足輕十二人召連往く。
一七月廿日　江戶ゑ御登、御供宇都宮帶刀、外に十五騎。
一七月　多賀谷主馬隆經死、年六十四。
一八月六日　御參府。
一同七日　上使井上河內守樣御出。
一同十五日　御登城御禮。
一同十六日　上使以曾我平治郎殿雲雀三十御拜領。
一同廿六日　右雲雀御披露有り。
一九月廿一日　順姬樣松平出羽守樣ゑ御婚禮。
一十月十九日より大雪四五日降、仙北邊稻雪下に成。
一十一月四日　山方多郞左衞門於江戶卒ス、年五十九。
一十二月五日　鑑照院樣五十年御忌御法事天德寺にあり。當朔日主膳樣御家督御禮相濟。同十八日敍爵豐前守樣に御改之よし。

○享保六 辛丑

一正月　御在江戸。
一三月三日　江戸御上屋鋪御類燒、同九日申來。
一同十五日　御歸國御暇爲上使井上河内守樣御出、卽日御登城之處に度々類燒之儀上意有之旨。
一四月十六日　江戸御立。
一五月二日　御着城。
一同十二日　澁江宇右衞門格光御家老被仰付。
一同十四日　於江戸赤坂御前樣御逝去、御年（マヽ）
一六月十八日　豐前守樣駿府御加番被仰付。
一閏七月五日　於江戸丹羽正伯と申町醫者藥種見分御用被仰付、出羽、奥州見分今日大澤口より入候。此方役人被遣案内申。生保内口より奥州罷通り候に付、同八日正伯、此方御境四段坂駒ヶ嶽罷通仙臺御領え出ル。
一同廿一日　今宮亦三郎光冬御家老被仰付。本知三百石、二百石御加增、千石御償被下置。後名大學に改ム。
一八月四日　東中務義秀卒ス、年七十六。同九日爲上使梅津久四郎香奠五十枚被遣。
一同廿一日　江戸より被仰渡候、御領内田畠町歩可申出よし、此方御檢地役人に被仰付。

一九月　豐前守樣駿府御交替御發駕、十九日御替り定日。同當四日御會所御壁書被改ル。

○享保七 壬寅

一正月元日　御在國、年始御祝儀。

一同二日　晩御料理、御引渡、廻座、役々は一役一人宛。

一同十四日　於御城御妾平產、御女子御出生。

一三月十一日　去秋半知被借置候所三ヶ一被仰付候、於御城被仰渡候。

一同十九日　御領國御繪圖幷郡境鄕村御改可被成置今宮大學被仰付。被付置役人御勘定奉行田崎治左衛門、御境目奉行今村小隼人、眞崎五郎左衛門、鷲尾彥九郎御前ゑ御披露。

一同廿日　屋形樣江戶ゑ御登、御供澁江宇右衛門。此度御道具御鐵砲五十挺、御弓鑓同前減候。

一四月七日　御參府。

一同十二日　爲上使戶田山城守樣御出。

一同十三日　御登城御禮。

一七月三日　於江戶御城諸大名に被仰渡、來卯年より江戶半年詰在國一ヶ年半に被成置、御國持四組被成置交替可被仰候。上之御藏入不足御旗本御切米等御不足に付、新田之義水野和泉守ゑ被仰付、右之

內高壹万石より米百石宛御借可被成候。常府之大名三ヶ一御借可被遊、右米は江戶、大坂にて金子成とも勝手次第當秋より上納被仰渡之旨、於御城御大名え被仰渡候。

一八月六日　三百石以上之面々於長野番乘上覽、三組にて六十二騎有之。

一八月十七日　本方奉行田中勘兵衞妻子、江戶え引越被仰付六月中罷下り、今日出足に付金子百兩被下置、上下六十五人罷登候。

一九月二日　江戶より申來、慶長年中より寬永年中まで御城廻御普請仕用注文御相掛り等、相知次第可被仰上候。

一同廿五日　豐前守樣駿府去年秋より御詰、市橋壹岐守樣御交替同廿八日江戶え御歸府。

○享保八癸卯

一正月　御在江。

一三月十三日　御歸國御暇上使安藤對馬守樣御出、此度被改置白銀五十枚、卷物二十御拜領。去年御改に付右之通に御座候。

一同廿六日　江戶御立。

一四月十二日　御着城。御歸國御禮使者東將監同十三日出足。

一六月廿五日　久保田邊洪水、長野沼方田地之上水上ヶ、東手形御堀端屋敷打越中城土手際迄水一面に洪水、長野土手押切楢山ゑ水落申候。此水土手下屋敷窓より家に入、楢山俄に水有之、保戸野新橋之上まて水上り申候。

一八月六日　始て番乘於長野上覽。三ヶ一被召上候馬持不足ゆへ一番廿騎、二番十八騎、三番廿四騎。

一同七日　仙北邊大風急に洪水、横堀、深川村居百姓家之内三四尺水上ル。江戸道中も洪水有之候。

一十月十六日　今宮大學宅ゑ御立寄御成、御相伴將監、甚右衛門、宇右衛門、御相手番、御拍子有り。

一十一月五日　延壽丸樣御誕生。

一十二月廿二日　南淡路長子竹之助出仕、名三郎に改御一字被下號義貫。家來七人被召出。

○享保九 甲辰

一正月元日　御規式畢て御廣間御出、一番座二番座濟、御廻座其外相濟。所持衆參府御免。同晩御香會有り。

一同二日　部屋住御引渡濟、同晩御料理御拍子有り、淡路、三郎御返盃、其外御作法濟。

一同四日　御初野。

一同廿六日　於御城御妾腹之御姫樣御本ノマヽ死去御出生。同日暮前より大風、川口にて出火御材木場御材木

燒失。
一二月廿六日　此度御出生之御姫樣御逝去、闐信寺に御送り。
一三月十五日　屋形樣江戸ゑ御登、御供今宮大學、御先道具百。
一四月七日　御參府。
一同九日　上使水野和泉守樣御出。
一同廿三日　式部少輔樣御亂心に相見得候。小野岡市太夫、今宮大學を以被仰斷御隔座、御内々御老中ゑも被仰達候。
一五月廿六日　雄勝郡之内西馬音内村、仙北堀廻等洪水、家五十六軒流失。
一七月二日　於江戸雲雀三十御拜領、上使保科甚四郎殿御出。
一八月七日　夜眞崎駿河死ス、年六十五。
一九月十三日　爲上使安藤對馬守殿御出、御歸國御暇。銀五十枚、卷物二十御拜領。
一同十五日　御登城御禮。
一同十八日　江戸御立。
一十月六日　御着城。御歸國御禮使者(マヽ)
一同七日　岩城河内守樣御入部に付、御使者梅津久四郎被仰付。

一十一月十五日　將軍樣長福樣御世に被立置候御廣目、同廿四日秋田に達。安藤對馬守樣、若御年寄松平能登守樣其外被附置。同十八日御三家ゑ御對面、同廿一日諸大名御登城、依て御名代御使者梅津久四郞被差登。

一十二月十九日　小野岡市太夫死ス、年五十七。嫡子是三郞ゑ上使伊達九郞三郞被遣、鳴物三日御停止。

一同廿一日　御廣間ゑ諸士罷出、御條目にて、御借高三ヶ一今年斗四ヶ一可被召上被仰渡候。此冬雪不降、三月始に有之、廿六日大雪。御下國之節御鐵砲三十挺、御弓十張、鑓二十筋に被成置候。

〇享保十 乙巳

一正月元日　御規式、此年所持參勤御免。

一同十三日　今宮大學義透本席御引渡被仰付。

一二月十五日　於江戸式部少輔樣義都御死去。

一四月　於江戸長福樣家重公任大納言。御祝儀御使者五月二日佐藤忠左衞門被差登。

一五月十五日　御城御廣間にて御家中ゑ、此度御會所御城内ゑ被移置候、御政務之義以御條目被仰渡。

一七月二日　谷橋にて大筒鐵砲上覽始て有之、大筒役人に御目錄被下。

一同廿日　大風大木吹倒。

一同廿九日　御足輕鐵砲弓向後可被分置被仰渡。同日梅津藤太夫、閑居名民目庵金忠死ス、年五十二。
一八月三日　於御城、諸士知行之内三ヶ一可被借置被仰渡。
一同八日　御城内ゑ御用所名付御引移御祝儀有之、御拍子三番あり。奉行小書院御夜食、老中相揃御拍子五番有り。
一九月六日　於江戸豊前守様御婚禮、有馬玄番頭樣御養女、實は谷出羽守樣之御女也。
一九月中　七月廿日大風にて落葉して、諸木之花春のことくに開、花見有り。

○享保十一　丙午

一正月元　三年御在國御定にて被成御座候。年始之御規式如御嘉例、所持衆、其外在々罷登者御免。御廣間一番坐始て今宮大學、小野岡卯兵衞、岡本又太郎、二番座東將監、眞壁甚太夫、伊達九郎三郎、矢田野藤三郎、御廻座小野崎藤太郎始三十五人三銚子出、畢て三奉行始五銚子出ル。
一同十一日　北主計義命死ス。
一同十六日　主計嫡子又四郞ゑ爲上使岡本亦太郎、御香奠銀五十枚戸村一學被仰渡。
一同廿三日　於御城久保倉使者被仰渡候は、太神宮ゑ永代御供米三百俵御寄附可被成置被仰付。昨廿二日御領内御嶽山、高岳山社御座候に付、神領三十石宛御寄附可被成置被仰渡、社人頭大友治部少輔

奉之。

一二月十三日　去年松前ゑ船乘二人、同船十六人難風にて朝鮮國ゑ被吹付其國ゑ上り、釜山湊ゑ段々參候義對馬國に相達、江戸公儀ゑ被仰立此方ゑ被仰渡。此方能代之ものに有之。

一三月八日　北又四郎義富（後改據）家督御禮、左衞門に改家來七人被召出。

一同十日　本庄六鄕伊賀守樣より御使者田代市兵衞昨日町宿ゑ着、御小役人衆ゑ逢申度由。依之、吟味役山崎曾兵衞差出候得は、此方御家老中ゑ本庄御老中より、去春御米二千俵借用之處に去秋も不作に付、於江戸、六鄕主馬を以御家老中まて申伸候通之由申來候。未此方ゑ沙汰無之由御年寄衆より返答申遣候。

一同十一日　屋形樣江戸ゑ御登。御供宇都宮帶刀、御先道具五十、亦御儉約に付如斯。

一同十六日　御山越。

一四月八日　御參府。

一同九日　上使水野和泉守樣御出。

一同十五日　御登城御禮濟。

一九月十三日　御歸國御暇上使松平伊豫守樣御出、御拜領物近年之通。

一同十五日　御登城御禮。

一同廿一日　江戸御立。
一十月七日　御着城。御禮使者茂木彌三郎今日江戸ゑ出足。
一十一月四日　横手より小瀨縫殿助尹信久保田ゑ召候て、御相手番被仰付會所ゑ出席可仕被仰付。
一同十五日　東將監嫡午千代出仕。於御前元服袴着、源六郎に名改披露山方内匠、東家來七人被召出。
同日八ッ時過將監宅ゑ御成、銀三枚、時服被下、御相伴御家老御相手番三人、家來十人被召出。御拍子有之、夜四ッ時御歸城。

○享保十二丁未

一正月元日　御規式如例年。
一同四日　御初野。
一三月四日　小瀨縫殿助尹信御家老被仰付、御加增二百石、御役料都合千五百石に被成置。
一五月十三日　田邊勘兵衞六ヶ年以前より江戸妻子召連住居仕候處、此度江戸一人役被仰付候、依て妻子引連同道罷下ル。
一六月三日　糸賀九八兵衞を去々年於江戸小野治郎右衞門殿弟子被召抱、御步行百石被下後九左衞門に改。

一同十六日　於江戸澁江宇右衛門格光死ス、年三十四。右に付、江戸におゐて假御用山方内匠承候様に、壹岐守様ゟ御勘定奉行鈴木平藏御伺被仰渡。依て大越甚右衛門廿七日江戸ゟ登。宇右衛門死去に付鳴物三日停止。

一同廿五日　嫡子數之助方ゟ上使須田政三郎勤之。

一七月十一日　手形御休にて足輕鐵砲上覽。

一同廿九日　於横手戸村攝津守義輔卒ス。

一同十十五日（本ノマヽ）　戸村方ゟ上使土屋富之允被遣。

一八月四日　今宮攝津守卒ス、八十三。

一同十五日　御目見有り。

○享保十三 戊申

一正月元日　御規式如例年。

一同十日　橋場總泉寺ゟ祠金二百兩可被遣被仰定。

一三月七日　江戸ゟ御登、御供小瀬縫殿助。

一同廿四日　御參府。

一同廿七日　上使水野和泉守様御出。
一四月朔日　御登城御禮濟。此度御登、公方様日光御社參御道筋宇都宮迄御普請有之、奥州矢吹より御廻り水戸御城下御通り江戸え御出。
一同十三日　公方様吉宗公日光山御參詣、同廿一日相濟江戸え還御。
一同廿八日　明時より御登城、日光御社參相濟候御祝儀御能有り。
一五月二日　遊行上人院内より龍泉寺え着、御馳走江田九左衞門勤之。六月十四日龜田え移ル。
一七月廿二日　於江戸雲雀三十御拜領。
一同廿四日廿五日　秋田大雨にて御城下洪水、久保田鍛冶町川端より横手迄舟にて通用。
一九月二日　江戸表大雨にて下谷筋違橋等流失、御屋鋪之内小舟にて通用、御屋鋪四方ねり屏崩御幕にて張切。本庄、深川、兩國橋三ヶ處流失。
一同十八日　屋形様御歸國御暇、上使安藤對馬守様御出御拜領物如近年。右爲御禮御登城。
一同廿五日　江戸御立。日光山御社參之義被仰立、仍て廿九日日光山御社參。
一十月三日　久保田御着城。御歸國御禮使者多賀谷左兵衞江戸え登、同廿八日上着。
一十一月十五日　左兵衞登城。白鳥、蠟燭三百挺差上、西ノ丸え蠟燭二百挺上ル。左兵衞公方様え、大納言様御同座上段被成御座御目見、自分太刀馬代獻上。

○享保十四、己酉

一正月　屋形様御在國、年始御不快にて表ゑ御出座無之。

一二月四日　於江戸、水野和泉守様御用人より此方御留主居ゑ切紙にて大嶋助太夫罷出候處、秋田ゑ御鷹の鶴御拜領にて、御奉書幷宿次御まくり和泉と有之御一印形にて被相濟、其心懸にて御歩行御中間等召連御足輕も同前に罷出、右鶴請取先拂等行列にて罷歸り、表御入より則傳馬町ゑ申遣候て千壽ゑ之人夫觸申候。御屋敷ゑ馬込勘解由罷出、其内鶴之覆大工拵出來、右問屋馬込に御奉書幷鶴等同前に御留主居相渡、右鶴同十一日久保田ゑ相達ス。右御禮使者須田政三郎被仰付、名主膳に改同日出足登。

一同日　於湯澤南淡路嫡子三郎卒ス。

一同十二日　多賀谷左兵衞峯經御家老被仰付。

一三月二日　須田主膳登城、干肴一箱獻上。

一五月廿五日　江戸ゑ異國より象到着、長サ八尺、尾頭共に一丈二尺、吹上に被差置。廿七日於江戸御城上覽、依て諸大名御登城。

一閏九月十六日　於湯澤南淡路義安死ス。

一十一月三日　御老中より御留主居被召寄、此度御國本御獻上之白之御鷹、野先にて公方様御慰に罷成

候由御吹聽被仰渡。

一十二月廿四日　南淡路次男竹壽跡目にて於御前元服家督、出仕名淡路に改御一字被下。

○享保十五 庚戌

一正月　御在國。年始御規式如御佳例。

一同三日　於江戸御城御謠初如例年。奈良臺押御土器一ッ、御酒代銀一枚獻上。

一三月十一日　屋形樣江戸ぇ御登、御供今宮大學。

一同廿八日　御參府。

一四月三日　上使松平左近將監樣御出。同日晩、大森村大持寺住僧宜山公事江戸ぇ登、三ヶ寺立合僉議之上大持寺非分極り、宜山誤ㇼ證文出ㇲ。依て御國ぇ被差下筈、御引取被成置候。天德寺ぇ三ヶ寺六十年以來證說にて返翰參候由、同十三日秋田より江戸ぇ相達ㇲ。去ㇽ六日久保田一丁目より出火、大工町茶町、大町五丁目迄燒失、町數廿九町、家數千十七軒、竈九百、土藏八十四燒失。

一同十五日　御登城御參府御禮。諸大名より上米御免にて來亥年より如本候。一ヶ年詰參勤被仰出。昨日大目付衆御廻狀、今日御禮相濟候以後御扣被成候樣御觸。

一同十九日　戸嶋家數百十二軒燒失。

一五月十一日　江戸御屋敷御覧可被成由にて、去年異國より參候象御見物被成候。

一六月十六日　江戸住人志賀瑞翁長命にて、元織田信長之小姓にて今年百三十六歳にて死ス。此節實説也。

一同月廿六日　御國本郷村帳村名書違等、此度萱橋御領分之内被召上候御代知、郷村帳御改被差上候に付、此御序に右村名御改被成度御願松平左近將監様え小野治郎右衛門殿御賴被仰立候。

一七月七日　御鷹之雲雀三十御拜領、上使諏訪靱負殿。

一八月十一日　大森大持寺宜山弟子二人依出訴秋田え被相下ル。右は先達てより三ヶ寺え隱出、亦中處非分に付。

一九月廿二日　御老中松平左近將監様え大嶋助太夫罷出候處、先達て小野治郎右衛門殿御賴被仰立候秋田御領内村名違御書改之儀相濟、國繪圖も御改正可被成被仰渡候。

一同日　上使酒井讃岐守様御出、御拜領物如近年。

一同廿三日　御登城御禮。

一同廿八日　江戸御立。

一十月十五日　御着城、右御禮使者石塚主殿同十六日登。當六日於角館、元祿十四年式部少輔様御預り福富兵部殿、中風にて死去之段十五日江戸え達。御老中え被仰達、江戸より御徒目付高木金右衛門（マヽ）

權右衞門と申もの御檢使に罷下。

〇享保十六 辛亥

一正月元日　御在國、年始御規式如御嘉例。同晩御香會御儉約に付被相止。
一同二日　御料理相止御吸物斗御引渡廻座諸頭被下之、御拍子有り。
一四月十一日　於江戶、日暮里に被成御座候聖相院樣御大病、河野松庵老被仰分候に付秋田ゑ御飛脚參着。
一同十三日　於江戶壹岐守樣、豐前守樣、神尾內記殿、細井左治右衞門殿御相談にて、屋形樣御看病御登被成度御願書小野治郞右衞門殿御賴左近將監樣ゑ被差出、壹岐守樣、豐前守樣御出御願被成候。尤御兩樣より之御願十四日相濟秋田ゑ御奉書出ル、因テ御步行御飛脚にて被差越候。若シ御登之時房川御關所夜中御通り被成候御證文、左近將監樣より出申候。
一同十五日　目白より出火、大風にて櫻田邊御大名上下御屋敷之內ともに六十軒燒失。
一同十七日　秋田ゑ當十二日立御飛脚參着。屋形樣御持病之脫肛、御供觸被仰出候得とも當分御延引之由廿四日江戶ゑ達ス。
一同廿二日　聖相院樣御卒去、御年七十三。肥前平戶之御生。

一同廿四日　秋田より廣瀨嘉八郎早打にて御使者十八日晩出足。廿九日御奉書之御禮御物頭中田彥太夫罷登。

一五月七日　酒井讚岐守樣より御留主居ゑ、御悔御書秋田ゑ可遣候、中田彥太夫罷下りに被遣候。同日御家中月代御免。

一同十三日　古宇田忠藏御使者上着、右は秋田出足御奉書之御禮、御持病に付御延引之內御不幸相達候故出府御延引申候。明日御老中相勤候筈。

一同九日　聖相院樣御葬禮、總泉寺に御土葬。御法名聖相院殿妙道常光大姉。

一同廿一日　御城ゑ諸大名御旗本被召候。大納言樣家重公御緣組、有栖川親王姬宮頃宮御定御入輿被成置候段被仰出。

一同廿九日　秋田ゑ之御奉書御禮御物頭白土嘉右衞門上着、今日御老中ゑ出ス。

一七月十三日　黑田甲斐守樣御養母樣養眞院樣御逝去、御年四十二。德雲院樣御末女也。

一九月廿七日　夜於御城御休所御平產、御男子御誕生。御名奉稱仙壽丸樣と。

一十二月五日　大納言樣御入輿被遊候。

一同十六日　諸大名昨日爲御祝儀、二種千疋、西丸御本丸ゑ御獻上。

一同廿九日　眞壁甚太夫孝幹閑居にて卒ス、年五十七。

○享保十七壬子

一正月　御在國。
一同廿五日　天英様御百ヶ年御法事天德寺にあり、於江戸も廣德寺、宋雲院にて御施行あり。御回香料銀十枚被遣候。當二日八木淸之允廻座部屋住御座、去ル廿九日御免之由。
一二月四日　秋田え鶴御拜領、酒井讃岐守様にて宿繼御奉書幷御卷り共被相渡。
一同七日　右御請御狀千住罷通爲御知申上、秋田えは十一日着。右御禮松野彌十郎登、同廿七日上着。
一三月七日　彌十郎登城。
一同十二日　於秋田御宮參。同日知行被返下、御加增、御褒美等數多被下置。同夜五ッ時過御城下上龜之丁出火、大工町、中通町五丁燒失、家數百七十八軒。御出馬。
一同廿一日　屋形様江戸え御登。
一同廿八日　江戸淺草寺町より出火、觀音前、淺草此方御下屋鋪御殿御長屋燒失。此火西丸え燒御櫓一ッ燒失。
一四月六日　淺草御下屋鋪智淸院様御假屋出來、御移被成候。
一同七日　屋形様江戸え御着、御供大越甚右衞門。

一同九日　上使松平右京大夫様御出也。
一同十五日　御登城御禮相濟。
一五月四日　細井左治右衞門様御賴御用番ゑ、屋形様豐前守様御養子被成度御願被仰立。
一同八日　晩御老中より、御用之儀候間御登城可被成由。依て九日御登城之處、御願之通豐前守様御養子被仰付、則御同道御屋鋪ゑ被爲入候。若殿様と可申上旨被仰渡、同十二日御名修理大夫様と被仰進御改也。
一同十五日　御登城御養子之御禮。公方様ゑ巻物五、西丸ゑ巻物三御獻上、御目見濟。
一同廿七日　若殿様濱町御屋鋪より御上屋鋪ゑ假に御引移り、閏五月十七日、濱町本之御家中ゑ被仰渡候は、當分式部様御跡不立置候間自分只今之通御擬被下、段々御國本ゑ被差下次第に江戸秋田共相應之勤可被仰付、追々可被仰出候得共先於江戸被仰渡旨。
一同廿四日　壹岐守様駿府御城御加番被仰付。
一六月九日　於秋田仙壽丸様狂風にて御逝去、同十五日江戸ゑ達。
一同廿一日　江戸柳原御中屋鋪と西御中屋鋪中に小路有之、西御屋鋪と淺草御屋鋪間ゑ酒井左衞門尉様御屋鋪と細小路小門有之處、此度只今西御屋鋪と御中屋敷間に小路、酒井御門幷に被成置度由御願先日被仰立相濟、今日改御役人衆右柳原御屋敷ゑ御出、若殿様御出合御請取相濟。

一同廿八日　御中屋敷御殿、御長屋出來、今日若殿樣、若御前樣、永壽院樣御移徙被遊候。
一七月七日　爲上使米倉六郎右衞門殿御出、御鷹野雲雀屋形樣御拜領。
一八月六日　法皇崩御。同十一日相達三日鳴物停止。
一同十五日　秋田より榮姬樣、常姬樣江戶ゑ御上着。去廿四日久保田御立、小瀨縫殿助交替登に付御同伴頭。
一同十九日　京都ゑ御使者御物頭川井左太夫登、法皇崩御に付て也。
一九月十二日　此度若殿樣御養子相濟候爲御祝儀御家門樣御招請、御上客有馬中務大輔樣初御振舞有り
一同十九日　壹岐守樣駿府御加番に江戶御立。
一十月廿四日　爲上使永井將監殿御出、御鷹之鴈二御拜領。當秋西國大不作虫付にて、公方より大社ゑ御祈禱。
一十二月十一日　來正月御年男八木淸之允江戶ゑ着。
一同十六日　昨夕御老中より御奉書、若殿樣御登城之處ニ被任四品。依て京都ゑ御使者根岸惣内被仰付。

○享保十八　癸丑

一正月元日　於江戶、屋形樣若殿樣御揃御年頭、御祝儀八木淸之允獻上、詰合之御家老大越甚右衞門、小

瀨縫殿助。

一同二日　兩殿樣御登城御時服御拜領、今暮より御謠初有り。

一同七日　御本丸ゑ、若殿樣舊臘御敍位御禮被仰上縮綿五卷御太刀馬代、西丸ゑ御太刀馬代御獻上。屋形樣右爲御禮御老中ゑ御出。

一同八日　若殿樣より、京都ゑ所司代ゑ御老中より御奉書被遣候付、根岸惣內同九日出足。

一同廿三日　左近將監樣より此方御留主居ゑ、秋田御國繪圖御改正先可被相止候。境內名所、鄕村名達等書付等、御勘定奉行ゑ可相伺被仰渡。

一同廿四日御奉書廿五日御登城之所に、屋形樣、松平長菊樣、溝口出雲守樣御一同に、常盤橋邊御堀浚御普請御手傳被仰付。

一二月七日　御普請場ゑ此方奉行、本〆役御用人御物頭御目付御用達小役人御步行御足輕引移、御留主居兩人內一人宛替々相勤。

一同十三日　根岸惣內京都御用相勤、口宣請取江戶ゑ下着。當十二日夜中より十三日迄、秋田湊にて下酒田町より出火、永覺町、下酒田町、上酒田町、加賀町、小鴨町燒失、町數六丁、家數二百四十九軒、長屋借屋五百十軒、土藏二十九、寺十三軒之內十軒燒失。西北風也。

一五月十八日　江戶御普請所吳服橋鍛冶橋之內御堀浚出來、御奉行衆入御覽、松平左近將監樣御出御覽

之由。半藏御門浚同廿八日限極ル。

一六月十八日　壹岐守様奥様御産後御卒去、是は屋形様實御妹也。秋田え廿四日申來、廿七日迄鳴物停止、殊月代右同斷。

一同廿三日　御浚出來、同廿四日兩奉行衆御見分、同廿六日左近將監様御覽也。

一同廿六日　御奉書、廿八日御登城之處、御手傳相濟候に付御時服三十御拜領。依之於御城大奉行銀五十枚、御時服五添、奉行銀三十枚、御時服三梅津藤馬、本〆田邊勘兵衞、二葉勘左衞門、御留主居大嶋助太夫、布施新助、矢野孫太郎、大越長右衞門、銀二十枚、御時服二宛右十人同前に拜領。

一同廿九日　御歸國御暇御拜領、上使松平右京大夫様御出御拜領物近年之通。此節御國元時行引風煩、江戸も風邪時行、此方御用所七月十七日には御年寄衆不殘差入、役人三人押て相勤候。江戸表も當十三日は往還も無之ほと、尤國々奥州筋道中、右煩にて人馬出兼候由申來。大納言様も御本丸え御出も御馬にて出御。

一八月十一日　屋形様江戸御立、廿六日御着城。御歸國御禮使者東將監、廿七日江戸え登ル。

一十月三日　大納言様御簾中薨去。此御地え十一日申來、鳴物停止普請不苦。

一十一月廿六日　於江戸、若殿様え爲上使米倉六郎右衞門殿御出、御鷹之鳫二御拜領。十二月五日此方え申來。

一十二月廿八日　於御城、當夏中御手傳御普請相濟候御料理役人迄被下候。御法度書之間拜領、於御廣間御拍子有り、御夜食小書院にて御東始被下置候。

○享保十九 甲寅

一正月元日　屋形樣御在國。

一同二日　晩御料理被相止、暮より東山城初登城御諷初有り。

一八月六日　夜中湊町出火、加賀町小路火本にて永覺町、小鴨町、萱村町、蒲町燒失。

一同十一日　大館住古內藏人嫡子德千代出仕、名左惣次ニ改御一字被下家來三人被召出。近進出仕家督名改共六十五人。横手住山縣淸右衞門養子甚七郎出仕御下字被下、中之御座敷多賀谷左兵衞相渡候。

一九月十日　湊小路狹候に付、其角々之町屋一軒宛被召上候て、其物屋敷同所畑高之內町屋敷に被仰付候も、町奉行え被仰渡新屋敷え引移候者被下置候。

一同十二日　小田野刑部正純御家老被仰付。御加增二百石被下六百石に被成、御役料等にて千五百石被下候。

一同十五日　屋形樣江戶え御登。御供御家老今宮大學、御先道具御鐵砲三十、御弓十張、御鑓十筋。

一十月朔日　江戶え御着。

一同五日　上使酒井讚岐守樣御出、同十五日御登城御禮。

一十一月廿八日　夜中馬口勞町より出火、酒田町、鍛冶町、向馬口勞町、楢山御足輕町組々にて百二十軒燒失、其外龜町ゑ火飛新庄町、丁數九町、百十軒本家、借屋七十軒、土藏十三、焚炭三万貫目一兩日燒申候。右に付御足輕假長屋被建置候。

一十二月十七日　於江戶御老中御連名之御奉書到來同十五日御禮御扣被成候處、御白書院に於て、萱橋御知行之内村替一ヶ村入候に付御朱印被出置御拜領被成候。

一同十六日　松平伊豆守樣ゑ御留主居御呼出し、御老中御連名之御添目錄被渡置、請取。御代替斗御居御判、村替等御朱印、然し御老中御連名御添目錄無之儀に候。

○享保二十　乙卯

一正月元日　御在江。

一三月廿四日　夜中横手町大火。

一同廿五日　於御城御休息御男子樣產、同廿七日御夭死。

一同晦日　當廿三日御奉書にて御登城之處に、榮姬樣御緣組、松平隱岐守樣ゑ御願之通被仰出。當三月廿一日今上（御諱名慶仁 御歲三十五）御讓位、天子（御諱名昭仁 御歲十六）御受禪相濟。此地ゑは四月八日申來。

一同十三日　屋形樣御歸國御暇爲上使松平伊豆守樣御出、御拜領物近年之通。始て從大納言樣爲上使本多中務大輔樣御出、卷物十御拜領。當十二日於江戶屋形樣、大御前樣、御姬樣方御中屋鋪ぇ被爲入、若殿樣、御妾腹左吉樣ぇ初て御對面。

一同廿一日　屋形樣江戶御立、五月六日御着城。御歸國御禮使者小野岡宇兵衞。

一六月廿三日　德雲院樣三十三年御法事昨今より天德寺に有り。

一七月三日　町奉行ぇ被仰渡候は、此度御儉約御振も御改被遊候に付、只今長町町奉行假屋二軒之內一軒被成置、每日共假屋ぇ出勤仕御用相辨、外は自分宿所にて可承相極候。

一同十一日　於御城御引渡、御廻座、役人、其外町々兩人宛、御廣間上段次引渡、御敷居之外廻座、其後御物頭始諸士押込罷出候に、山城、老中先御緣通扣、屋形樣上段御着座被仰出候節、御引渡着座之內入御右筆御條目讀申候。大小姓番頭被相改如古來被相止、組頭筆頭と名付御番方差引被仰付。御物頭、御步行頭被相減、御鷹方支配名被相止、御刀番之內より御步行頭役御鷹方支配被仰付御目付上に被立置候。御中屋敷御刀番共に都合十二人、御兵具奉行都合二十五組被定、御小性頭御用人名付、御側醫、御側小姓人數被相定只今迄相勤候內、御物頭、御步行頭、御鷹方頭、御醫者、御小姓之內も御免被成置。此節御廻座詰番每日兩人宛登城、大小姓御番帳披露等勤被仰付。

一九月廿三日　公方樣御三男小五郎殿御名刑部卿樣と御改。右御悅同廿五日惣出仕、諸大名、諸番頭、

布衣以上御登城、在國在邑御面々以使者御悅可申上候。此時小田野刑部、名齋に改。
一十月朔日　東山城京都御名代出足、御卽位御祝儀十一月三日御吉日御太刀御獻上相勤候に付、十二日に勤之。
一十一月廿五日　上使淺野內膳殿御出、十二月七日申來。右は於江戶、若殿樣御鷹野鴈二御拜領に付。
一十二月十五日　小野岡宇兵衞嫡子龜千代出仕、源四郞に改御一字御刀拜領、家來二人被召出。梅津小右衞門嫡（マヽ）

○元文元　丙辰

一正月元日　屋形樣御在國、年始御規式。
一同二日　幕より登城御拍子。
一同三日　御廣間相濟、入御之節町人御禮。
一同十三日　東山城儀京都御名代相勤下着、屋形樣御廂上下にて御逢被遊候。
一二月十八日　佐竹石見儀、此以後西家と唱可申旨被仰出。
一三月十五日　勤功之もの御加增、御褒美、御加扶持被下置。
一同十六日　屋形樣江戶ゑ御登、御供詰家老大越甚右衞門御物頭兩人被召連。此年御參勤思食を以、大

番與より御先供六人被仰付、薄井伊右衞門、淀川多右衞門、吉川嘉六、神原彥七、小柳傳之助、吉川藤右衞門能登ル。御步行之內へ四人相加へ御供相勤候、御供番之次え他所にて相列し候。一ヶ年相勤相止候。

一四月五日　御參府。

一同九日　上使本多中務大輔樣御出。同十五日御登城御目見濟。

一同廿二日　御先手小野治郎右衞門殿御賴被成、松平左近將監樣え若殿樣御入部御願被仰入。

一五月六日　江戶より申來、先月廿八日、兩殿樣御登城之所若殿樣御入部御暇被仰出、卷物二十御拜領、西丸より卷物十御拜領。先月廿六日に御敍位御祝儀有馬中務大輔樣、相馬彈正少弼樣、津輕出羽守樣其外御客御振舞有り。當十六日若殿樣江戶御立。御供之御家老今宮大學、御番頭山方內匠、御用人御道中被付置候根岸惣內、同役眞壁十兵衞、御膳番羽石權兵衞、御物頭大山平右衞門、小野崎五右衞門兩人、御鐵砲御弓御鑓、御刀番村野治右衞門、平野兵左衞門、酒寄舍人、生田目喜內、御納戶役諸橋吉兵衞、吉村杢之允、御目付小貫山忠兵衞、御用達關五郎左衞門、御小姓木村惣八、平澤重右衞門、關口藤太、佐藤彌市兵衞、小林武左衞門、三森喜內、大嶋助右衞門、大番組より濱田鄉右衞門、梁市三郎、大小姓岡見左平次、井上淸右衞門、相澤左平太、遠山利助、森谷平右衞門、大番組より八代彌太郎、那可與一左衞門、竹內惣八、御使役中村主稅、大番八人、御醫者鎌田道鐵、門脇全庵、御針師阿曾村養宅、御中間

頭假川崎文太、御臺所役清水忠右衞門。

一同廿七日　御領内院内え被爲入御一宿。依之御所持衆、其外在々より久保田え相詰。

一六月朔日　御入部、戸嶋より晝過御着城。大番所御玄關御式臺え山城、帶刀、左兵衞、齋、當番大番頭、寺社奉行、御側御用人、御側廻、御小姓御緣之上相詰。若殿樣御玄關にて御下乘、山城、年寄共御意有之、山城御先立御案内次第、御番所より御廣間御緣、夫より御座之内、夫より金之間御廊下、御座之間長爐間に御着被遊。御熨斗出山城斗御自身被下置。御供今宮大學罷出候て、御前え御引渡差上ル御銚子出ル。被召上畢て、御熨斗大學え御小姓持參頂戴、中ノ御座え御小姓差置大番頭頂戴、夫より次御座え右熨斗出ル、御供之面々順々頂戴。畢て御供方御意御暇被下、御料理、山城初御相手番。御歸國使者小野崎大藏出足。

一同二日　何も御目見。今日天德寺え御參詣、公儀御靈屋えも御參詣、服忌御改。

一同五日　津輕出羽守樣所御入部にて當町御通、湊御一宿、御使者被遣候。

一同七日　御入部爲御祝儀、御一門衆、御引渡、御廻座獨禮被仰付相詰申候。御廣間御出前於御座間、屋形樣より御進物二種一荷、御太刀金馬代、御使者根岸惣内、披露番頭。大御前樣より御時服五ッ、二種御樽代五百疋、御使者山縣波負、智淸院樣より御時服三ッ、二種三百疋、御使者白土治左衞門、榮姬樣、常姬樣より御箱肴、御樽代二百疋宛、御使者山本喜右衞門。畢て上段御着座獨禮、御家老御樽代獻上、

御時服被下。其外御用人より御茶道迄相濟大廣間え御出、主計、石見始一番座濟、山城、淡路初時服臺にて被下之。畢て廻座、三ッ目御座敷御敷限二疊目に獨禮、御樽代獻ス、御時服被下之。部屋住は被下物獻上も無之獨禮斗、畢て三奉行始切支丹改役、右相濟入御。

一同十二日　右御祝儀御料理御廣間出御。御出以前壹岐守樣より御使者御太刀馬代、兩種三百疋、御使者御賴大番與頭兵部少輔樣御添口上、御肴御添御口上御直答。畢テ御座間御引渡、部屋住共に二十人、廻座、大般若間役人、切支丹改役迄四十四人、二番座御側廻八ッ過、別て御吸物御酒被下南方御緣え相詰、御拍子三番有り。御年始之□相濟金之間え可相詰由能出候、山城、年寄衆右同斷、役人御臺御土器頂戴、年寄衆御肴。畢て山城始御暇何も退出。

一同十三日　大番組、大小姓組與頭始獨禮、御敷限より四疊目にて御禮申上、出人四百九十二人。

一同十六日　大番、大小姓、御小姓獨禮、五百三十九人。

一同十七日　御右筆より御醫者、近進、諸役人、番外、角館本御家中、在々給人迄近進並は二疊目獨禮、四百九十五人。畢て御座間にて町人罷出進物前置御禮、御法度書間久保田町人、湊町庄屋、其外御用所町人、御入部御祝儀箱肴、御樽一荷斗入四ッ、湊町同斷斗入二ッ。

一同廿日　寺院御禮。御入部已前於江戸、今宮大學御養子之儀に付辛勞仕候由、此度爲御祝儀御加增二百石被下、其外御加增御側廻被下置。當六月、於江戸金銀栫被仰出。

一同廿六日　若殿樣御社參、五社ゑ。
一七月六日　津輕出羽守樣より御使者登城、御料理被下御直答。
一同七日　御兵具藏ゑ被爲成御武具御覽。
一同廿五日　御町踊、湊町踊御覽、御臺所前にて入御覽。諸士勝手御見せ被成候。
一七月廿二日　於江戶屋形樣雲雀三十御拜領、上使筒井主殿殿御出。
一八月三日　若殿樣、於谷橋大筒上覽、山城、老中、御相手番、奉行罷出候。同三日、岩城河內守殿より御飛脚御進物參候。
一同十四日　於江戶、銀引替之儀大御目付衆より御廻狀有り。
一九月十日　若殿樣諸士弓御覽。
一十月二日　松前志摩守樣より御步行にて御狀參候。
一同三日　玄猪之御祝儀諸士登城。
一同七日　江戶より申來候、先月十五日服忌令御改被仰出申來候。
一同廿七日　春御參府、御供觸有り。同日於江戶屋形樣鴈御拜領、上使舸田源七郎殿御出。十一月十三日申來。
一十一月十五日　天子女御入內、依て諸大名五万石已上賀儀被仰上。京都ゑ爲御使者宇留野源兵衞、在

江戶金百兩被下被差登。

○元文二丁巳

一正月元日　屋形樣御在江戶。若殿樣始て御國本御年頭御規式、御座ノ間老中御盃被下、御側廻迄相濟御廣間ゑ出御、御熨斗八木淸之允獻上、御銚子御膳番御杓御引渡。在々衆御免故、一番座石塚主殿、岡本又太郞、二番座東山城、眞壁掃部助、伊達外記。畢て廻座酒出金太夫始三十五人、畢て三奉行始大番大小姓御小姓迄。

一同二日　暮より登城、役人は一役一人宛御吸物被下御諷初、御拍子三番。畢て金之間山城、將監、老中御盃被下返盃被仰付、御流、御土器御臺物拜領。

一同三日　御步行已下御掃除坊主迄御盃被下。

一同四日　御初野大平本町迄御出。

一同七日　院家。

一同十六日　天德寺寺院御（マヽ）

一二月十二日　若殿樣八幡宮ゑ御社參。御歸城直々東山城宅ゑ御成、御儉約に付御立寄と唱候。

一同十四日より御實父源照院樣御十三回忌、闐信寺にて御法事有り、十五日迄御帳。

一同十六日　江戸より申來、當七日、榮姬樣御緣組松平隱岐守樣ゑ御願之通被仰出。

一同十八日　大山若狹跡目嫡子左源太被仰付、院內所司、組下共に不相替被仰付。被賴御物頭ゑ老中直々申渡し、組下ゑ御物頭今村五郎右衞門、御目付椎名雲九郞院內ゑ被仰渡、廿三日出足。先日、大山左源太方ゑ上使梅津百助院內ゑ往。

一三月十二日　若殿樣江戸ゑ御登。御老中小田野齋、御先道具御鐵砲二十、御弓十張、御鑓十筋、御物頭二人、御用人一人、御膳番一人、御刀番四人、御目付一人、御納戶役二人、御用達一人、御小姓九人、大小姓六人、御使役一人、大番九人、御醫者本道外治御針師共四人、御右筆二人、御臺所役人、御用所物書、御用人物書、御膳番物書、已上三人、支配目付三人、御荷物持參役兩人、御茶道四人、御中間頭一人、御膳奉五人、御時計坊主、御茶屋坊主兼四人、御馬乘二人、御馬醫一人、御步行三十三人、御茶屋六人、御足輕百四十七人、御中間八十四人、御厨屋十四人、御草履取五人、駕籠者十二人、御厩者十人。

一同十九日　院內御一宿。

一同晦日　江戸表金銀引替、午正月より只今迄金百兩は三十兩增候て引替、銀十貫目は增步合にて當十二日迄引替可申由被仰渡。

一四月二日　若殿樣江戸御參府。先月十一日、壹岐守樣御嫡子延壽丸樣、御名求馬樣と御改。御目見御願、屋形樣御添書被成候て壹岐守樣御願被仰上候所

一同廿七日　御奉書。翌廿八日壹岐守様、求馬様御登城、公方様御目見相濟候よし。
一四月十三日　屋形様御歸國御暇上使松平伊豆守様御出、同日若殿様御參府御禮相濟。
一四月十五日　屋形様御歸國御禮相濟。
一同廿一日　屋形様江戸御立。
一同廿六日　江戸より申來候は、當十一日於京都仙洞様薨御、於江戸鳴物三日御停止。依て於秋田御城下斗鳴物三日御停止。
一五月七日　御着城、御供御家老大越甚右衛門。
一六月廿二日　於江戸西丸若殿様御出生、竹千代様。御大名より御祝儀之獻上物有り。
一同廿三日　於江戸、此度御誕生竹千代様御祝儀、十萬石以上御老中御饗應可有之由被仰渡候由。
一同廿七日　大山左源太家督御禮、名を十郎に改御一字御道具被下、家來四人御前ぇ被召出。同日小野崎伊織格通養子、東山城義本四男也、出仕、上段にて御盃御一字被下、名藤太郎峯通と云。
一七月十一日　御歸國御禮使者戸村十太夫、今日下着。竹千代様御誕生御悦使者細井傳右衛門、同十六日下着。
一十月七日　夜四ッ過湊町加賀町東側半分、永覺町東方無殘小路限燒失、二ヶ寺、土藏一ッ燒失。
一閏十一月四日　八ッ過三丁目より出火、雨降候得とも大火、茶町、大町不殘。御出馬被遊。通町、肴町

御留〆切。本家百七十六軒、潰家十二軒、長屋借屋百廿八軒、同潰家八軒、店借七軒。
一同十六日　江戸より申來、當四日若殿樣鷹二御拜領、上使三淵縫殿助殿。
一同十八日　大壽院樣百ヶ年御法事昨今天德寺に有。是は多賀谷修理大夫從五位下重經御女。
一十二月六日　江戸より、先月廿四日松平將監樣より、御國本にて鑄錢座被成置度御願之通被仰出候由申來候。
一同十五日　小田野齋嫡子右馬之助出仕、名亦八郎に改、古格之通御相酌にて御盃被下。此節梅津小右衛門忠榮次男半五郎、四百八十石之分地にて被召出。

○元文三 戊午

一正月元日　屋形樣御在國、年頭之御規式如御嘉例。
一同十四日　强風吹、御家中、鎌倉大禁可相止旨被仰渡。
一三月六日　向右近政美初武御家老被仰付。
一同七日　茂木彌三郎申立、當四日十二所侍屋敷出火にて家數二百十九軒之內四十七軒、侍屋敷同三軒寺同三十一軒、足輕同百三十七軒、町家、御關番迄燒失。
一同十六日　屋形樣江戸ゑ御登、御家老宇都宮帯刀、此度御物頭兩人。

一同廿日　今宮大學御用にて江戸ぇ出足。
一四月二日　御參府、御登城御禮。
一同六日　爲上使松平右京大夫樣御出。
一同廿九日　秋田久保田にて上野に錢鑄吹始ル。
一五月六日　於江戸、左吉樣若殿樣御嫡子に被遊度御用番ぇ御賴、細井佐次右衞門殿を以被仰立。
一同七日　左吉樣御名德壽丸樣と可被爲成よし、宇都宮帶刀御使者にて若殿樣、左吉樣ぇ被仰進。
一五月朔日　若殿樣御歸國御暇於御城被仰出。
一同八日　江戸より申來、德壽丸樣御弘目被成置候に付、御附人、町奉行より田崎治左衞門、右格合にて御近習頭役と被仰付。
一同十六日　御家中諸士於御城右之段被仰知、在々ぇは以上使被仰遣。
一同廿日　諸士麻上下にて御廣間ぇ罷出御歡、御帳に付。
一六月三日　當十六日若殿樣江戸御立、久保田御着城。御供今宮大學、御先道具御鐵砲十挺、御弓十張、御鑓十筋、御物頭二人。御歸國御禮使者玉生八兵衞江戸ぇ出足。
一七月十一日　壹岐守樣奥樣御卒去。
一同日　御家人衆金井六右衞門嫡子六助不行跡に付、御老中ぇも被得御內意秋田ぇ被相下。

一同十九日　以上使雲雀三十御拜領。
一九月二日　於江戶竹千代樣御誕生爲御祝儀御老中御招請。本多中務大輔樣、若御年寄板倉佐渡守樣、御奏者戶田山城守樣、高木主水正樣、大御目付稻生下野守樣、山田奉行木下伊賀守樣、御作事奉行美濃部八郎右衞門殿御招請、御能有。此度御家來七人、中務大輔樣御盃被下御返盃被仰付。
一同五日　二度目御振舞、御上客安藝守樣、土佐守樣、中務大輔樣、南部修理大夫樣始外五人、御旗本十三人。
一同九日　於御城、竹千代樣ゑ屋形樣始て御目見。
一同十二日　於秋田湊菻町出火、家四十軒燒失。
一十一月廿三日　牖二、屋形樣御拜領、上使米倉六郎右衞門殿御出。當三日大館町出火、家數二百軒餘、借屋二百軒餘、都合四百軒餘燒失。
一十二月廿九日　夜五ツ過淺草田原町より出火、折節大風本庄ゑ飛移り、此節淺草御藏御請取。夜九ツ過鎭ル、御歸殿也。
一當十一月十九日　於京都大嘗會行ル、近代無之御禮式之由。

○元文四 己未

一正月元日　屋形様御在江、若殿様御在國。

一二月廿二日　富姫様常姫様御事松平丹波守様ぇ御婚禮。御附人池田才兵衞、手代山本喜右衞門。御行列御大小、御弓、御鑓二本、御供押御家老大越甚右衞門、御乗物廻歩行御供、引馬二十三疋。御跡乗求馬様、神尾市左衞門殿。

一同廿五日　丹波守様御聟入御道具被進候。

一同廿八日　屋形様昨日御奉書にて御登城御婚禮之御禮。丹波守様にも御禮、巻物五ッ御獻上、西丸ぇも御登城御禮。

一三月朔日　屋形様丹波守様ぇ御舅入御出、大御前様にも被爲入御揃御祝儀濟。

一同十六日　屋形様御賀之御祝儀有り、何も奉詩歌御壽申上候。今日若殿様江戸ぇ御登、御供小田野齋。

一同廿日　御山越。此頃東將監、名主馬に改。

一四月二日　若殿様御參府。

一同十一日　屋形様より若殿様ぇ、徳壽丸様御事御嫡子に被成度旨、御用番松平伊豆守様ぇ細井佐次右衞門殿御賴被仰立、御聞屆被成候よし相濟。依て從屋形様若殿様ぇ宇都宮帯刀爲御使者、徳壽丸様御嫡子可被成由被仰進候。御祝儀有り。同日御家中ぇも被仰渡。

一同十五日　屋形様ゑ爲上使本多中務大輔様御出御暇、西丸より上使松平能登守様御出、御拜領物如前也。同日若殿様御參府御禮御登城。

一同十七日　德壽丸様、御嫡孫被爲成御祝儀上々様へ御取通し有之、右御使者田崎治左衞門勤之。屋形様ゑ御太刀馬代、大御前様ゑ卷物三ッ、御干肴二種、若殿様ゑ御太刀馬代、銀五枚、若御前様ゑ卷物二ッ、御干肴一種、智淸院様ゑ干肴一種、永壽院様ゑ干肴一種、御内々より金子千疋、右之通治左衞門勤之。榮姫様ゑも干肴一種被進、御刀番御使者。兵部少輔様、御母儀様吳服橋奥様、壹岐守様、求馬様、何方も干肴一種宛。德壽丸様ゑ從屋形様御使者を以、大嶋助太夫爲御祝儀御大小御拵箱入、御時服、御熨斗目、御下召、麻御上下御目錄にて被進候。大御前様より干肴二箱、御樽代三百疋、生肴一折、御使者中村藤右衞門、若殿様より御箱肴、御使者大嶋助右衞門、若御前様より同斷、御使者村井五兵衞、榮姫様より同斷、中村藤右衞門御使者御添口上、永壽院様同斷、御使者武藤與惣右衞門。秋田にて直姫様、壽姫様、今日日付奉札以御箱肴一箱宛田代新右衞門申達。兵部少輔様、求馬様、御母儀様吳服橋奥様より爲御祝儀御使者。

一同十八日　屋形様御暇爲御禮御登城。

一同廿一日　江戸御立、御供宇都宮帶刀。

一五月六日　御着城、御禮使者東主馬。

一同七日　主馬出足。
一六月朔日　主馬登城、公方樣御前ぇ被召出自分御太刀獻上。
一同十四日　仙臺御領海面ぇ異國船見得候に付秋田ぇ相達、御物頭御足輕召連、湊幷能代ぇ被遣候。
一七月十二日　小瀨縫殿助尹信卒ス、年六十七、鳴物三日御停止。當三日角館より今宮伊豆久保田ぇ引移
同氏大學願に依て也。
一九月十二日　今宮大學宅ぇ御立寄御成、右は今年普請有之に付。
一十月四日　多賀谷左兵衞宅ぇ御寄御成。
一十一月二日　於江戶竹千代樣御髮置御祝儀、諸大名より獻上物有り、依て惣御出仕。
一十二月二日　若殿樣御鷹之鴈二ッ御拜領、上使曾我五左衞門殿。
一同月　於秋田宇都宮帶刀、大嶋甚右衞門兩人ともに數年相勤、御加增二百石宛被下置候。

○元文五　庚申

一正月元日　屋形樣御在國、御年頭御規式如御嘉例。若殿樣御在江戶。
一同二日　若殿樣御登城、御時服二御拜領。
一同廿二日　昨夜中、當十五日御目付御奉書御鷹之鶴宿繼を以御拜領。右鶴、院內より組下付添參候に

付今八ッ時過着。御玄關ぇ澁江内膳、梅津小右衞門罷出請取、金之間ぇ差置御頂戴。右御禮使者山方内匠登ル。

一同廿九日　三人飛脚參候、若殿樣當九日より御不例之由。依て此方より御醫者等被指登。

一二月十日　若殿樣御順快、長尾文哲老御藥此方ぇ廿一日申來。

一三月四日　矢田野庄吉家督之御禮、名四郎左衞門に改。其外早川兵馬、茂木小四郎、前古屋小四郎家督之御禮、外近進六十人餘り有。

一同廿日　屋形樣江戶ぇ御登、御供多賀谷左兵衞、御番頭代大越十郎兵衞。

一四月朔日　秋田十二所茂木彌三郎組下侍屋敷出火、四十軒程燒失。同人下長屋も三通、同家人屋敷燒失。

一同六日　江戶御參府。

一同七日　爲上使本多中務大輔樣御出。

一同十八日　天榮樣御臺樣百五十年御忌御法事、正洞院に有。

一同十三日　於江戶若殿樣御病氣御快方、爲御保養御願相濟御上屋敷ぇ被爲入。

一七月朔日　若殿樣御病氣後始て御登城。

一閏七月朔日　於御城若殿樣御歸國御暇御拜領。

一同五日　雲雀三十御拜領。

一同六日　松平伊豆守樣ゑ細井佐治右衞門殿御催促御出之所、去年春屋形樣御願被遊候、德壽丸樣御嫡孫二本御鑓、御勝手に可被成被仰渡。

一同十二日　德壽丸樣始て御上屋敷ゑ被爲入候。

一同十六日　若殿樣江戶御立、御供小田野齋。

一同廿九日　御着城。御歸國御禮使者酒出金太夫。

一八月十六日　金太夫御使者相勤。

一同十八日　御奉書出〃。

一同廿三日　久保田通町ゑ雷落火事、大風にて雨降廿五軒燒失。

一九月廿七日　德壽丸樣初て御宮參、神田明神、鳥越明神ゑ御社參。御供山方內匠、御付添田崎治左衞門、惣御供廻御上屋敷之通。

一十一月五日　屋形樣御鷹之鴈御拜領、上使森川主水殿御出。

一同廿八日　照姬樣（榮姬樣御名改）松平隱岐守樣ゑ御婚禮、御付人仁平宅右衞門、手代石川又左衞門、御輿御供多賀谷左兵衞、大越甚右衞門、御跡乘岩城河內守樣、松平大和守樣御兩人御出、惣御供引馬御持道具御格之通。

一十二月三日　御婿入隱岐守樣御振舞、御前樣にも被爲入候、隱岐守樣ゑ御道具被進候。御取持山本十右衞門殿。
一同七日　夜兵部少輔樣義長公御老病にて御卒去、御年八十六歲。同日爲御悔上使高木主水正樣御出、御門ゑ御迎御意、御召物御服綿物、麻上下、右爲御禮門之內にて御禮儀被遊候。此御禮、御老中御門前ゑ御留主居御案內被仰置。
一同十五日　於江戶御城、從公方樣竹千代樣ゑ御名乘家治と被進候。然は來年御元服に付、井伊掃部頭眞定中將御理髮、松平肥後守容貞、來年右御祝儀御調に付今年御役懸被仰付候。

○寛保元 辛酉

一正月　屋形樣御中陰、若殿樣御在國。
一同廿一日　大納言樣家重公御長子樣竹千代君御袴召爲御祝儀、御大名方より御樽、干鯛御獻上。
一同廿二日　惣出仕。
一同廿八日　昨日御奉書に付御登城、御婚禮相濟候御禮、御獻上物有。
一二月五日　隱岐守樣ゑ御舅入、屋形樣大御前樣被爲入。
一三月十三日　若殿樣秋田御立。

一四月朔日　御參府、御供小田野齋。

一同十三日　御登城御禮、御長上下。同日屋形樣御歸國御暇、上使松平右京大夫樣御出卷物白銀御拜領。

一同十五日　御登城御禮。

一同廿一日　屋形樣江戶御立、御供多賀谷左兵衞。御歸國御禮使者石塚主殿、同廿日江戶着。(マヽ)

一四月朔日　奧州南部領土遠郡夜中山俄に崩潟出來申候、御領內十二所より人遣見分申處に、鹿角郡土遠郡山朔日夜中長くろと申所山崩、右澤水上より一里程隔候杉雜木大石右之澤築塞、水夥敷溜り水面橫□間長二十丁斗有之、深サ七尺程有之、折節杣人登山申出候。風雨も無之、震動も無之よし。

一六月朔日　茂木彌三郞久保田え登、名宮內に改、嫡子幸南出仕、彌三郞に改。

一八月七日　於江戶公方樣吉宗公右大臣に御轉任、大納言樣、右大將御兼任。依て、御大名束帶にて御登城、勅使冷泉大納言、葉室大納言、准后使五辻三位、宣使平松少納言、御身固土御門三位、御衣紋高倉中納言　依之若殿樣御供袍衣三人、素襖着侍八人、御引馬紅厚總御懸被遊候。

一同十二日　竹千代樣御元服勅使公家衆登城、仍て若殿樣にも御直乘にて御登城。

一同十三日　勅答被仰上、竹千代樣正三位大納言樣に被任。此節井伊掃部頭、松平肥後守御勤在之。

一同廿一日　惣御出仕。

一同廿五日　右御祝儀御能一萬石以上登城。此度之御祝儀爲御使者秋田より御使者梅津藤馬被差登。

一八月十四日　於秋田仙北大曲火事、家數六十軒燒失。
一十一月廿三日　於江戸若殿樣御鷹之鴈御拜領、上使遠藤宮內殿御出。御不快故、壹岐守樣御代御挨拶御勤被成候。
一十二月九日　御不快、此御地國社ゑ御祈禱、其外寶鏡院、一乘院ゑ被仰付候。
一同十三日　茂木宮內實弟一學、分地百石御廻座出仕被仰付候。同北主計養子左膳、名又四郎に改家來七人被召出。
一同廿一日　御中屋敷御不例、御刀番根岸與市江戸ゑ早打にて登。

○寛保二　壬戌

一正月元日　屋形樣御在國。年頭御祝儀御太刀馬代、若殿樣、德壽丸樣より御進上。
一同二日　晚暮より御東始登城、御吸物にて御拍子、御臺物、數之御土器御引渡、御廻座頂戴。畢て金之間、東始老中、役人、御臺物、御土器頂戴御拍子有。
一同六日　江戸より若殿樣御不例、御同邊之內重被成御座之由舊臘廿七日御飛脚申來。右に付、今日於御城御帳出諸士罷出。
一同八日　多賀谷左兵衞急々江戸登被仰付、若殿樣御重病に付て也。金三百兩被下候。

一同十三日　御家中より、御祈禱御守札御用所ゑ差上。當六日於江戸、從公方樣以上使永井伊賀守樣御大病御尋、大病之由養生可致旨上意、壹岐守樣御挨拶答被仰上候。以後若殿樣御寢之間ゑ伊賀守樣御通、再應上意請度よし伊賀守樣ゑ御意被成、御肩衣斗にて御床より御下り、以前之上意御拜伏被爲聞候て御請、部屋住にて御用にも相立不申上意難有奉存候。本覆仕御奉公仕度趣も有之樣に相聞得、此旨御老中方ゑ宜御賴御口上之由。右御禮則壹岐守樣を以被仰上候。右之段秋田ゑ被仰遣候。

一二月四日相達、爲御禮宇留野源兵衞被仰付。

一同五日　夜中江戸より小野崎多右衞門早打にて下る。御容躰小田野齋申付候趣、去廿九日御氣御失被遊候事有之、御大病爲御知相聞得候。

一同八日　宇留野源兵衞出足、江戸ゑ登。

一同九日　田崎治左衞門御用被仰付、德壽丸樣ゑ被爲登置江戸ゑ出足。

一同十日　江戸より御小姓淸水織部早打にて罷下、當四日若殿樣慈雲院殿御逝去に付、同日七ッ時之事にて則出足仕候、御年五十歲。御悔之御奉書此方御留主居御老中より被相渡候て、大番與頭小田部縫殿右衞門同日下着。

一同十三日　慈雲院樣御遺骸江戸柳原御屋敷御出棺、御付添多賀谷左兵衞。右御奉書御請、御物頭岡藏人被差登。

一三月二日　御遺骸天德寺ゑ御着棺。
一同三日　御土葬。
一同七日　御葬禮、德壽丸樣御代香東主馬被仰付。
一同十一日　大法事天德寺に有。
一同廿日　屋形樣江戶ゑ御登、御供御家老今宮大學。同日澁江內膳峯光、山方內匠泰該御家老被仰付。
一四月五日　御參府。
一同七日　上使松平右京大夫樣御出。
一同十五日　御登城、御參勤之御禮。
一同十六日　屋形樣、德壽丸樣御事御嫡孫御承祖被成置度御願、御用番本多中務大輔樣ゑ細井佐治右衞門殿御賴被仰達候。
一同十八日　御奉書にて御登城可被成由申來候。德壽丸樣御病氣分に被遊壹岐守樣御賴。
一同十九日　屋形樣御登城之所、御願之通德壽丸樣御事御嫡孫御承祖之義被仰出、德壽丸樣御名代不及之由。
一同廿一日　德壽丸樣御事、可奉稱若殿樣と御家中ゑ被仰渡。
一同十八日　秋田より江戶ゑ申來、當朔日朝五ッ過日喰にて闇夜之樣に有之、途中行逢候面色も難見得、

番所禮帳付高燭付候之由。江戸表は大曇り申候。

一七月廿六日　雲雀三十御拜領、上使遠藤宮內殿御出。

一八月朔日　大雨、夜中又大風雨。翌二日本庄、深川邊洪水、兩國橋損、川舟も往還不相成。橋場總泉寺邊之水一尺二尺有之、十五年以前申ノ年より增申候。此日、御屋敷御門前三味線堀一面に成御屋敷之內え入、柳原御屋敷前も三日兩國川往還不相成、本庄津輕樣御屋敷は二階迄水付候よし。此度栗橋大洪水、家居不殘流失。角館より御中屋敷へ交替罷登申候者、當二日千住迄急參候得とも大洪水にて逗留、屋根之上に罷有生米咀候て罷有、同八日夕立三人上着申候。此洪水森川權太郞、田崎忠四郞、岡權九郞登候に、阿久津より舟にて十三日晚上着申候。

一八月四日　德壽丸樣御誕生御祝儀被遊候所に、此度より重き御精進日故、今年より三日に右御祝儀御調御格被成置候。當朔日之大風雨、出羽、奧州、關東邊吹申候由。

一九月十八日　去年公方樣御轉任大納言樣御兼任、竹千代樣御元服爲御祝儀御老中御饗應、御能有り。松平右京大夫樣御老中格、若御年寄西尾隱岐守樣、水野壹岐守樣、御奏者松平豐後守樣、永井伊賀守樣、御留主居年寄三宅周防守樣、大御目付朽木山城守樣、山田奉行嘉藤飛驒守樣、佐渡奉行松波平右衞門、以上此方御家來七人出ル。

一同廿五日　二度目御振舞御能、御上客松平土佐守樣、有馬中務大輔樣、藤堂和泉守樣、松平伊豫守樣御

客。
一十二月十四日　石塚主殿義行卒ス。
一同廿六日　御吉辰に付屋形様より若殿様え御名乘被進候、稱義眞公申候。

○寛保三癸亥

一正月元日　江戸御上屋敷御規式。屋形様、若殿様義眞公御同前被成御座御祝儀、御相伴御膳被召上、御手前御茶迄被進。御相伴今宮大學、向右近兩人。
一同二日　屋形様御登城。
一二月廿三日　夜中秋田久保田御町西風にて五丁目より出火、川端へ燒六丁目迄燒失、五丁目橋も半分燒、大風にて楢山御足輕屋敷も飛火燒申候。御町家惣家數六十五軒、町(マヽ)二十二軒、土藏五ッ燒失。
一三月八日　御中屋敷表御殿え、吉日にて當若殿様御移り被遊候。
一同廿三日　於秋田大館町火事。
一四月十三日　屋形様御歸國御暇、上使松平右京大夫様御出、西丸より上使松平能登守様御出也。御拜領物如例年。
一同十五日　御登城御禮。

一同廿六日　江戸御立、御供今宮大學。

一閏四月十一日　久保田御着城。右御禮使者茂木宮內、今晩江戸ゑ登。

一六月朔日　石塚源一郞家督之御禮、御取次山方助八郞部屋住にて被仰付、家來六人被召出。同日宇留野源太郞家督御禮。

一八月朔日、二日、三日　江戸邊大雨洪水、奥州、出羽境猶下山洪水崩新道造〻所有之。

一九月廿三日　夜能代町出火。御休、御米藏、在府屋兩御屋敷千二百二十四軒、借家二百五十七軒、寺十ヶ寺、社二ヶ所、土藏六十七、板藏物置四十一、土藏雨除斗百三十七、右之通燒失。此外、米、雜穀、材木燒失。

一同廿一日　於江戸壹岐守樣御息女猶喜世樣松平賴母樣ゑ御婚禮。

一十一月廿七日　於御城御儉約被仰渡、且諸士木綿服、來四月より可被相改被仰渡候。御用寄合御評定所可被貸置御條目出〻。

一同廿六日　下筋森岡出火、御休共に燒失。

一十二月廿一日　於江戸御用番樣へ御留主居御呼出、秋田ゑ御鷹之鶴御拜領之御奉書、御卷り、宿次にて。

一同廿八日　久保田御城ゑ罷達御頂戴、右御禮使者福原彥太夫登。

○延享元甲子

一正月元日　屋形樣御在國、年頭御規式如御嘉例。若殿樣より御祝儀之御太刀馬代被進。

一同六日　御初野、御先格四日之所今年より被相改。於江戶元朝若殿樣御祝儀、御家老大越甚右衞門、山方內匠御相伴、御盃被下。同晩御謠初。

一同十四日　雪無之、鎌倉可相止被仰渡。

一同廿二日立江戶より申來候、吳服橋御奧樣御疱瘡にて御逝去、廿二日明半時之由、廿九日申來候。此方より生田目喜內御使者被遣、江戶より御悔御使者松塚幸八郞二月朔日下着。

一二月四日　昨今慈雲院樣三回御忌御法事天德寺に有。

一三月八日　西石見嫡子長菊大館より被召登出仕、御前にて髮はけさき御差圖にて戴、上下着御前ぇ同道罷出、袴腰御手付添候。是にて元服相濟、則於御座之間出仕、名左膳に改、御一字被下稱義繁と。

一同十三日　橫手町大火、大町、四日町不殘燒失。

一同廿日　屋形樣江戶ぇ御登、御供小田野齋、御物頭二人。

一四月六日　御參府。

一同九日　爲上使本多中務大輔樣御出。

一同十五日　御參勤之御禮濟。

一五月廿五日　津輕出羽守樣御在所にて御卒去、御歳二十六。御跡目御妾腹岩松樣今年八歳被仰上濟。

一六月八日　於湯澤南淡路義伯卒ス、實子二歳故看坊實弟壽六申立被仰付。

一此六月諸國引風流行多し、江戶にて御大名御勤も御延引。

一七月朔日　御城御廣間九人、柳之間七人御禮有之候由。南淡路知行高八千何百石之內、二千七百石被減壽六被下、石塚孫太夫御名代湯澤ゑ被遣。

一同十二日　若殿樣御兵術中西忠太御傳授。同日於秋田、今年も半知被借置へく被仰渡。

一同十七日　直姬樣壽姬樣秋田御城御立江戶ゑ御引越、御供那可忠兵衞、田代新右衞門、御供其外有之。

一八月八日　江戶ゑ御着、御老中ゑ御屆在之。

一七月廿三日　雲雀三十御拜領、上使遠藤宮內殿。

一同廿二日　於横手戶村十太夫義見卒ス、年四十八歳。嫡子八郎年十八歳家督被仰付候。

一八月十三日　御老中本多中務大輔樣ゑ、若殿樣御目見御願前に御客對に付御太刀金馬代、御相役方同斷。屋形樣御同道御見舞、夫より酒井雅樂頭樣御登城前被爲入御對面、尤御太刀金馬代。今日より御供定御守役一人、御刀番二人、大小姓三人、御小姓二人、大番三人、御步行八人、同組頭、御目付兼一人、御引馬二疋、御用馬一疋、供鑓三人、押五人。是迄は御持鑓二本御挾箱三、是等前々常式、替之事記之。

一同廿五日　屋形樣より向右近御使者、若殿樣御名次郎樣に可被爲成被仰進。則御改、御上屋敷淺草ぇ御見舞被遊候。

一同廿七日　今朝御用番本多中務大輔樣ぇ若殿樣御目見御願書、御先手梶川三之允殿を以被仰立候。

一同廿九日　御老中御連名御奉書、明日御同道御登城之由。

一九月朔日　屋形樣、若殿樣御同道御登城。公方樣ぇ御太刀金馬代、紗綾五卷、右大將樣家重公御太刀金馬代、同三卷、右は若殿樣より。屋形樣より公方樣ぇ銀五枚、綿二十把御獻上、此外御老中ぇ御太刀金馬代、紗綾三卷宛、鯛一折宛、若御老中ぇ御太刀金馬代、紗綾三卷宛、御側衆ぇ太刀馬代、銀五枚宛。其外御進物所處ぇ被遣候。

一同十五日　松平左近將監樣ぇ、五節句若殿樣御登城御願、小笠原縫殿之助殿御賴被仰入。同晚御留主居御呼出能出候所に、御願之通五節句御登城相濟。

一當八月廿日　御國元聲躰寺ぇ遊行上人津輕より廻着、九月九日龜田ぇ出足。先月廿一日、茂木宮内在府屋燒。

一十月廿日　多賀谷左兵衛、秋山喜右衛門御用申上罷登、十一月十四日御用相濟罷下ル。

一同十五日　御鷹之鴈二ッ屋形樣御拜領、上使松植三四郎殿。

一十二月十六日　昨晚御奉書にて今日屋形樣御登城之處、被任少將旨被仰出候。此冬御國元大雪、當七

日久保田出足之御飛脚牛嶋村に一日逗留之由、前代未聞事に候。

一同廿八日　御登城、公方様、右大將樣ゑ、屋形樣少將之御禮、御太刀金馬代。

○延享二 乙丑

一正月元日　兩殿樣御在江戶。

一同三日　若殿樣御無官御登城筈に御座候得共、御時服無御臺御拜領、如何敷御風邪被仰立御延引被成置候。

一同廿三日　大御前樣御急病、御養生不被爲叶四ッ時御逝去、御歲四十四。

一同廿五日　爲御悔上使朽木土佐守樣御出、兩殿樣ゑ上意。依之御老中御門前迄爲御禮御勤、屋形樣御不快壹岐守樣御名代御勤。

一同晦日　大御前樣御遺骸總泉寺ゑ御出棺御土葬、御法名桃源院殿。二月三日四日、御法事總泉寺に有り。

一二月二日　右御不幸之儀秋田ゑ相達ス。

一同十二日　權太原より出火大火、いさゝ(本ノマヽ)之細川越中守樣御上屋敷、松平志摩守樣、同賴母樣御一所故燒失、其外數多有り。此間五日宰府天神、同日小石川丸山大火、同六日本鄕丸山大火。當十二日火事、

二十年に無之大火之よし。
一同十五日　西丸にて御次男御誕生、御名松平萬次郎と申上候。今日京都より口宣受取御使者罷登、那可忠兵衞下着御頂戴。
一同十六日　宣旨御拜見被遊候。
一同十七日　松平左近將監樣え此方御留主居御呼出被仰渡候は、秋田鑄錢可相止被仰渡候。
一同廿日　增上寺前大火。
一三月三日　於江戸御城紅葉山、權現樣來月十七日百三十年御年忌、依之八講御法會御執行。
一同十五日　御大名御豫參、御太刀黃金馬代御獻上、御部屋住御方銀一枚御獻上。
一同十八日　御城え爲御祝儀二種一荷御大名御獻上、御部屋住は一種一荷御獻上。
一同廿一日　於御城右爲御祝儀御能有り、諸大名御饗應、金銀飾御膳に在之。
一四月十六日　爲上使松平右京大夫樣御出御歸國御暇、西丸より上使松平能登守樣御出。
一同十八日　御登城右御禮。
一同廿七日　屋形樣江戸御立、五月十三日久保田御着城。右御禮使者石塚孫太夫江戸え出足。
一六月十五日　戸村八郎家督御禮、名十太夫に改。
一同廿八日　江戸より申來、當廿日壹岐守樣御娘松平賴母樣奥樣御死去、御年十九。

一七月七日　於江戸公方様吉宗公被仰出、今明年に西丸ゑ御隱居可被遊被仰出。
一八月二日　御足輕知行二十ヶ年以前より御藏入に被仰付候所、當秋より、前々之通地形にて可被下被仰渡。
一同六日　南壽六家督出仕御禮。名淡路に改、御一字被下義持、御道具被下家來七人御目見。同晩多賀谷左兵衞御家老職被召上候。福原彥太夫、瀨谷勘兵衞を以被仰付檜山ゑ可罷越被仰渡、御役儀不相應之被仰渡。
一同廿七八日之頃、於龜田岩城河內守淸隆主卒去。御跡目養子、仙臺御家中伊達下總嫡子數馬殿御願被仰立候。
一九月二日　多賀谷左兵衞養子彥太郎卒、年二十三。實戶村十太夫義見次男也。
一同八日　江戶より申來、右於江戶當朔公方様吉宗公御隱居被遊候、天下之御政務右大將様家重公ゑ御讓り之由申來ル。同二日御大名惣出仕。
一同十三日　屋形樣御誕生御祝儀。前々は十五日御祝儀、十三日御本來之御誕生日に在之故、此以後十三日に被遊候。
一同廿三日　龜田ゑ御使者御物頭野尻忠三郎被遣候。
一同廿五日　於江戶表、公方樣右大將樣御城御殿御移替被遊候由。

一十月朔日、二日、四日には御年始之通御三家、御家門方始、御大名御祝儀被仰上御登城有之。御大名始上之御代替に付御部屋住共に御神文被仰付候。御老中御宅にて相濟。

一同九日　松平左近將監樣二十三年御老中御勤之處、不宜之由御役儀御免。

一十一月二日　於久保田宇都宮帶刀典綱、依病氣訴訟御役御免。

一同八日申來、先月廿六日若殿樣御神文酒井雅樂頭樣ゑ御出御賴被仰入候。當二日江戸出足之御飛脚、當公方樣將軍宣下相濟申、十一月十三日御悅、三御所樣ゑ御太刀馬代御獻上、若殿樣も御目見。

一十二月朔日　宇都宮四郎隣綱家督御禮。武茂三郎昌綱閑居、養子源太郎家督御禮、名三郎に改。於江戸御代替御判物可被指出、依之此方樣より被指上候鄕村帳御境目奉行ゑ被仰付、閏十二月翌正月迄に相濟。

一九月六日　江戸ゑ小田野齋被登置、右は御內證向御差支之上來年御代替御沙汰、左兵衞は御國廻り故御用千貫目、御入目去年被仰知候七萬六千兩爲取合十萬兩之御不足如何共可被遊樣無之、左候得は上々樣月々之御合力も段々被減候上に候得は、亦不減候得は不相成儀に付被登置。同十二月十七日、御用濟下着。

○延享三　丙寅

一正月元日　屋形樣御在國、若殿樣御在江。
一同三日　若殿樣御登城御太刀馬代御獻上、御時服御拜領。
一同廿三日　桃源院樣御一周忌御法事總泉寺に有、天德寺にも御法事有。天德寺にては御法名圓宗院樣と奉稱。
一同廿五日　於江戶若殿樣御神文、松平能登守樣御宅にて朝之內相濟。正月廿三日宇都宮帶刀典綱卒ス年七十四。
一同晦日　宇都宮四郞ゑ上使信太內藏之助被遣候。
一三月九日　多賀谷氏之養子出仕、名將監に改御一字被下峰章と稱ス、家來二人被召出。
一二月十七日　今日、御判物五通並御印一枚御添目錄、御小長持入金紋雨皮、通し步にて那可忠兵衞、松塚幸八郞被付置御步行四人、御足輕八人被登置。
一二月始　多賀谷左兵衞實子無之養子相濟、閑居御暇被下、名下總に改。
一三月十五日　屋形樣江戶ゑ御登、御供向右近。
一四月朔日　御參府。
一同三日　上使。
一同十五日　御禮濟。

一同廿三日　御判物御本書寫共に御奏者秋元攝津守様、本多紀伊守様ゑ、向右近熨斗目麻上下にて御留主居同道罷出、御拜見相濟御返し。
一五月四日　於御城公方様、公家衆御參向に蹴鞠上覽。仍て諸大名登城。
一同十六日　御國廻衆、御巡見衆久保田町御泊り。十二日大澤口より西馬音內御泊り、山口勘兵衞殿、神澤新五左衞門殿、細井金五郎殿御三人。
一同廿一日　津輕御領ゑ御通被成候。當四月廿四日大館町燒失、御巡見衆宿二軒燒失。
一四月廿四日　渡部善右衞門江戶詰之內、若殿様大坪流馬乘形御傳授被仰付。此以前、心直流之馬術大越十郞兵衞申上候。
一同廿六日　本多中務大輔様ゑ梶川三之允殿を以、若殿様月並御禮之儀御登城御願被仰立候。同晚御留主居御呼出、月並御禮之儀御登城可被成由被仰渡。
一六月朔日　若殿様月並御登城屋形様御同道相濟、西丸ゑも御登城屋形様御同道御禮相濟御下り、御老中御勤。
一同二日　久保田御城ゑ夕飯過雷落、人怪我無之候。
一同十二日　於江戶御嘉定御祝儀若殿様御登城。
一七月十九日　雲雀三十御拜領、上使松平主馬殿。

一八月三日　若殿樣明四日御誕生、御障故今三日御祝儀有。

一同六日　御同人樣御袖留被成候よし、御用番堀田相模守樣ぇ小笠原縫殿之助殿を以、御書付にて被仰立候。同晚御留主居御呼出御願之通被仰渡。

一同十三日　若殿樣御入御袖留被遊。右は御規式田崎治左衞門秀滿、介添御納戶役大嶋助右衞門被仰付御祝儀有之。

一同十五日　大御所樣御大名は、西丸御移以後始て御目見上意共御座候由。

一十月十一日　公方樣御代替御判物御拜領に付、屋形樣御熨斗目にて御登城御頂戴。

一同十五日　將軍宣下爲御祝儀御老中堀田相模守樣、新大納言樣家治公、松平左近將監樣、若御年寄水野壹岐守樣、堀田加賀守樣、御奏者松平豐後守樣、牧野因幡守樣、丹羽遠江守樣、水野對馬守樣、能勢肥後守樣、松平河內守樣、別所播磨守樣、水谷信濃守樣、坪內惣兵衞樣、佐々彌右衞門樣、右十四人。此節此方御家來十人被召出、御盃事御能有り。

一同十六日　御判物御掛り秋元攝津守樣より、御領地目錄被渡置に付御受取。

一同廿一日　將軍宣下二度目御振舞、有馬中務大輔樣、藤堂和泉守樣、松平彈正大弼樣、奥平大膳大夫樣四品以上御能有、其外御客有。

一同廿三日　御鷹之雁二ッ御拜領、上使金田主殿殿御出也。

一同廿五日　三度目御振舞、松平安藝守様、松平土佐守様、松平薩摩守様、其外萬石以上御旗本共五十人餘り有之。
一同廿七日　去々年御昇進御祝儀御振舞御能あり、御上客藤堂和泉守様。其外惣て大書院十六人、御勝手三十五人有。
一十一月十六日　兼て松平加賀守宰相様御姫様、若殿様ゑ御縁組表立、今日梶川三之允殿を以御賴加賀守様ゑ被仰入、向方様より小笠原縫殿之助殿を以御領掌之由御挨拶。依之御祝儀御使者加賀守様正四位下少將ゑ向飛驒被遣、右爲御禮中將様よりも前田外記と申者御使者。
一同廿一日　從屋形様、若殿様御縁組御願酒井雅樂頭様ゑ梶川三之允殿を以被仰立候。
一同廿九日　壽姫様御縁組松浦肥前守様御嫡子數馬様ゑ御取組、被御賴被仰入も梶川殿ゑ御賴、來月三日御用番ゑ可被仰立由。
一十二月三日　今日若殿様御前髮御取被遊候。御祝儀、以思召田崎治左衞門に被仰付、御規式介添大嶋助右衞門兩人被仰付御調被遊候。
一同十一日　昨晩御奉書に付今日屋形様御登城之所、御縁組御願之通被仰出、加賀守様御病氣右御名代被指出。
一同十八日　御奉書に付今日若殿様御登城之處、被任四品之段御老中被仰渡、御名之儀御用番ゑ以御留

主居被仰入候。
一同十九日　御願之通相濟、則左兵衞督樣と奉稱候。
一同廿八日　若殿樣御官位之御禮御登城、公方樣ぇ縮綿五卷、御太刀金馬代、大納言樣ぇ御太刀金馬代
御獻上、大御所樣ぇは御獻上物無之。當五月十七日於江戶、向右近名飛驒に改。

○延享四 丁卯

一正月元日　兩殿樣江戶被成御座候。
一同二日　兩殿樣御登城之所御盃御時服御拜領。
一同五日　京都ぇ御使者、舊臘被仰付候御財用奉行大塚源內今日出足。
一二月十日　江戶櫻田大火。
一同十二日　京都御使者大塚源內、宣旨等請取今日江戶ぇ下着、若殿樣御頂戴。同日直姬樣御結納求馬
樣より被進。
一同廿一日　屋形樣若殿樣御揃加賀少將樣ぇ初て被爲入、御取持小笠原縫殿之助殿、梶川三之允殿、細
井佐次右衞門殿。若殿樣ぇ加賀守樣より御盃事之上御刀被進候。
一同廿九日　直姬樣求馬樣ぇ御婚禮、御祝儀輕く相濟申候。御付人小野崎伊左衞門、小貫團兵衞中途御

供、御跡乘ﾘ向飛驒相勤申候。

一三月朔日　御三ッ目御上屋敷ぇ壹岐守様、求馬様、奥様、民部様、多宮様、御取持小笠原縫殿之助殿、梶川三之允殿。屋形様より求馬様ぇ御大小被遣候。

一同十六日　御上屋敷ぇ松平加賀守様初て被爲入候、御料理被爲進候。御取持梶川三之允殿、前田帶刀殿御祝儀濟。

一同十九日　直姬様御婚禮相濟候御禮、屋形様御不快、御名代壹岐守様御登城被仰上候。公方様ぇ縮緬五卷、御太刀金馬代、大納言様ぇ御太刀、銀五枚御獻上相濟。當月七日、於久保田茂木宮內御詮議之儀有り。

一同廿九日　於江戶被仰付松平隱岐守様京都上使、正月十二日被任侍從、當三月立場之御使者被仰付候付今日江戶出足。惣御供勢千五百人、內騎馬四十七騎。

一四月十五日　屋形様御歸國御暇、上使酒井雅樂頭様御出、卷物御拜領。大納言様より上使松平左近將監様御出卷物御拜領。三御所様より今年始て御拜領。

一同十六日　晝江戶御城二ノ丸にて出火。

一同廿五日　屋形様江戶御立。

一五月九日　久保田御着城、御供向飛驒。御歸國御禮使者西石見江戶ぇ出足。

一同廿七日　御詮議之上茂木筑後宮内蟄居、細井傳右衞門、信太彌右衞門を以上使にて被仰付。嫡子彌三郎家督被仰付。宮内實弟一學義分地百石御廻座勤久保田にて御奉公仕候、此度之儀に付御暇被下、同監物知行三ヶ一被召上閉門、同弟七親藏人改易。十二所え大番頭福原彦太夫、細井傳右衞門交替在番御用可承被仰付候。六月末北又四郎名但馬に改、南淡路義持婚禮宇都宮四郎隣綱女。

一七月十一日　信濃善光寺佛、寺町誓願寺に開帳。

一同十九日　昨今、天祥院様三十三回御忌御法事天徳寺にあり。

一同廿五日　南淡路久保田え召候て京都御名代被仰付。

一八月十七日　東山城義本末女須田政三郎所え婚禮。

一同廿五日　眞壁掃部之助御家老被仰付。知行二百石被下九百石被成置、御役料六百石、都合千五百石被仰付候。

一九月廿七日、廿八日、廿九日　江戸表時行風にて往還も無之程にて、廿八日、京都御即位御祝儀江戸御城惣出仕之處、大廣間御一人も無之御三家斗御登城、柳の間御兩人、帝鑑の間御一人在之由。

一十二月廿三日　茂木彌三郎義此度所支配被仰付、依て彦太夫、傳右衞門御免。御目見交替在番被仰付候。

一同晦日　於御城、唯今迄寶永年中より被下置候處御進退難被成役料之内、被減可被下去年暮より可被

召上於御廣間被仰渡、五十石被下者三十石、三十石被下候者二十石、二十石被下候者十石被下置候筈。十月七日東主馬嫡榮長疱瘡にて死ス、八歳、母石塚氏女。同廿六日、十二年以前被止置候大小姓番如本之五人被仰付。當年春夏秋至リ雨降不作、米斗に付一貫百文、冬より百姓多飢饉、非人多々出。

○延享五 戊辰　此年寛延ト改元

一正月元日　屋形樣御在國、年始御規式如御嘉例。

一同二日　於江戸若殿樣御登城、御拜領物如例年。

一三月朔日　茂木三郎家督御禮、名筑後に成。眞壁掃部之助養子小太郎出仕、御脇差被下御證文出ル。

一同十六日　屋形樣江戸ゑ御登、御供向飛驒、御用人一人、御膳番一人、御物頭二人、御刀番六人組付共、御納戸役二人、御醫者内外針師三人、御小姓、御目付、御中間頭一人。上使松平左近將監樣御出。

一同十五日　御登城御禮。

一同十六日　上野火之御番被仰付。御登前北但馬名障リ圖書に改。今年、江戸一ヶ年詰交替三年詰去冬より被相定、番頭、物頭初て來巳年迄在番被仰付。又今年も春中より雨繁。

一四月六日　御城下洪水戸嶋迄、此方近在田地種籾流失。去冬より非人夥敷有り、世上町家共に手詰甚有之。

一五月廿一日　江戸え朝鮮人來朝。四月十五日於十二所茂木筑後疱瘡にて卒ス、歳十八。跡目庶兄卯五郎歳二十六、知行三千五百石之内三ケ一被召上家督被仰付、知雄と號。

一五月　社人共奉願國家安全五穀成就、晴祈禱川尻惣社、寺内山王宮にて執行、奇特。

一六月廿四日より七月廿三日迄旱魃。當六月朔日朝鮮人江戸御城え罷出、諸大名御登城。

一七月十八日　改元、寛延と號ス。江戸於御城諸大名え被仰出。

一同　右年號替り、於秋田八月朔日より被相用由被仰渡候。

一同九日　大越甚右衞門貞國御城御用處にて死ス、歳八十。鳴物三日御停止。

一當三日　御鷹之雲雀御拜領、上使にて。

一八月六日より秋田郡仁鮒小掛材木山燒ル、二三日にて消雨。

一當七月十二日　諸士去年不作迷惑可仕被思召に付、百石に付一石五斗宛可被返下於御城老中被仰渡。

一十月四日　夜中江戸より御用人那可忠兵衞、先達て御用に付被差下先月六日上着申所に、又御用被仰付、外に同役井口長七郎交替罷下り申付、右兩人同前に罷下。

一同六日　今宮大學宅え爲上使大番頭梅津藤十郎、御用人生田目喜内兩人を以、大學御役御免幷檜山組下被召上候。同氏亦三郎御相手番役被召放。同日、於御評定所御財用奉行兩人御役被召放、後江戸同役一人被召放被差下候。

一同八日　於御用所小野崎伊右衞門道行御家老被仰付。御加增二百石被下五百八十石、御藏出高千石、外に御役料五百石被下。
一同十八日　在々鄕役銀十三年以前より四割八增銀收納申處、一割半御免被仰付。
一閏十月　江戶より申來、當四日壹岐守樣奧樣御平產、御男子御出生。奧樣御逝去、御年十九、御法名光源院樣。御男子樣御繁昌後御本家へ被爲入。
一同九日　御家中諸士當半知差上高之內、五ヶ一御免可被成置被仰渡。
一同廿日　於江戶鷹御拜領。
一十二月　江戶え琉球人來ル。
一同十二日　濱町御誕生之御赤子樣御上屋敷へ御鎭座。
一閏十月二十日　上使安藤長次郞殿を以鷹二御拜領。
一十二月十一日　禁裏御水痘、御酒湯被爲召爲御祝儀御大名惣出仕。
一同十二日　松平薩摩守殿琉球人同道御參府、是將軍家御代替に付中山王使也。

○寬延二己巳

一正月元日　御在江戶。

一正月　智清院様依御願、橋場總泉寺ゑ寺領御藏出百石六ッ成御寄附也。

一二月六日　小田野齋去年より病氣に付、御役儀御訴訟今日御免。御領內村々飢饉にて、百姓共鳥取候事五月迄御免。

一同十四日　天祥院様御實母智清院様御逝去、布施氏、御歲八十四。屋形様御祖母、定式之御服忌被爲受。

一同廿一日　夜秋田御飛脚着、鳴物三十日、普請、陪臣月代廿二日、御家中月代は來朔日御免被相觸候。

一四月十二日　御國元へ之御暇、上使堀田相模守様御老中御出、如例之御拜領物有之。同十五日、御暇之御禮被仰上候。

一屋形様今年六十御年賀に付今日御祝儀有之、從若殿様義眞公鳩御杖、御詠歌幷御祝儀被進候。

一同廿五日　江戶御發駕、五月九日秋田御着城。御歸國御禮御使者佐竹圖書。

一七月廿八日　禪宗光明寺より出火、北ノ方十一ヶ寺類燒。

一八月十日　屋形様、去月中より御病氣被成御座候處御差重り、御養生無御叶今日御逝去。御跡目之御願御使者御相手番石塚孫太夫義陳被差登候。

一同十八日　於江戶若殿様御看病之御願被仰立候に付、卽日御奉書到來本多伯耆守様御宅被爲出候處、御國元ゑ之御暇被仰出。

一屋形様御病氣御尋之御奉書、御留主居被相渡候。

一御醫者長尾全庵老御願に付御下向也。

一同十九日　若殿樣千壽驛迄御發駕、同所にて御逝去之段相達御歸府也。

一同廿一日　屋形樣御逝去に付御尋之上使金森兵部殿、御奏者を以御香奠白銀三十枚、義眞公御拜領也。

一同廿日　義眞公御上屋鋪御引移、南御門より被爲入候。

享保十七壬子年八月三日於向柳原御屋敷御誕生、御妾腹、御初名奉稱左吉樣。享保廿卯年四月十二日義峯公初て御對顏。元文辰年御疱瘡、同三午年五月三日御紐解御祝儀有之、同七日左吉樣へ御名德壽丸樣と被進、御紋付御帷子、御麻上下、鯛一折被進、御家老今宮大學義秀御使者勤之。德壽丸樣今年御十一歲御丈夫被成御座候に付、今日御用番本多中務大輔殿、細井佐治右衞門殿を以御屆被指出候。今午年實御七ッ被成候を四ッ御足、年御十一歲と被仰上候。享保十三年年御誕生之御積也。

一口宣御拜領に付、京都ぇ之御使者御用人小野崎庄左衞門被仰付候。

一十月六日　御切紙御連名にて到來、松平左近將監殿於御宅に御家督無御相違被仰付候。但未タ御忌中候得共御月額御取候て御出候樣御切紙へ申來ル。

一同十日　御忌明に付御出駕、御老中御廻勤也。

一同十五日　昨晚奉書到來、今日御登城御家督御禮被仰上候。御獻上、作御太刀、正馬鹿毛、綿五十把、黃金五枚、御刀盛重代十五枚大御所樣、大納言樣ぇも御獻上物有之。家來七人御目見、自分之獻上物有之候。

一同廿七日　御家督初て、以上使富永靱負殿御鷹之鴈二御拜領也。

一十二月十八日　奉書到來御登城之處、於御白書院御老中御列座、酒井左衞門尉殿を以被任侍從之段被

仰出候。

一同廿八日　今日御登城侍從之御禮被仰上候。御獻上御太刀金馬代、縮綿五卷、大納言樣えも御獻上物有之候。

右此年表者

義宣公、義隆公、義處公、御三代樣御傳記、幷梅津主馬政景日記、其外片岡宮內、吉成氏、羽生氏、吾祖父之正保記、根岸惣內秀光、後藤七右衞門祐道、眞崎宣昌、多賀谷隆家、附梅津忠宴、亦は御勘定所慶長十二年より目錄之內、月日亦は年號にても實事相知候事取之用之畢、後年古實證書見次第記之。永世之龜鑑備度物也。

延享五年

羽陰史略　巻之六

○寛延三庚午

一正月元日　御家督初て之御年始なり、七五三御規式あり。御膳過御手前之御茶御獨被召上、御家老御番頭頂戴之、其外御側廻被下之。

一同二日　御登城御烏帽子御直垂兩御丸ゑ御供例年之通、三御所様ゑ御太刀一腰、御馬代、黃金十兩被獻之。

一小野崎正左衞門舊臘京都ゑ之御使者被仰付置候、同廿九日口宣之奉書、御用番酒井左衞門尉殿より被相渡候に付今日出足。右御奉書豐後守殿ゑ之御書共に持參上京申候。

一同七日　御用所御出初に御右筆、前々は吟味役幷御物書等迄相濟候已後御熨斗頂戴仕候儀は、御用所役人相濟畢て御右筆出候由御用達申渡候に付て、古來より御日記には役名目順席被調置候。此趣を以大小姓番頭黑澤甚兵衞ゑ右御右筆申立候處、御家老山方内匠、今年より御用達次席ゑ出席頂戴可仕

旨被仰渡段甚兵衛申渡、向後右之通罷出候筈。

一同十日　上野三御靈屋え御參詣、白銀三枚ツヽ御進獻也。右は舊臘御官位に付てなり。

一二月十二日　小野崎正左衛門京都御用相濟、去月廿九日京出足今日着。

一口宣、宣旨、位記等持參仕候に付、表御門披之御玄冠より入。

但此間御不快にて今日口宣御頂戴無之付、正左衛門儀旅裝束之儘にて參着候様御用人共より申達候。

一所司代松平豐後守殿より被指越候口宣御奉書之御請、左衛門尉殿え被差上候。且又、左兵衛督風邪にて罷在候付、口宣頂戴不仕候。依之、快氣之上口宣頂戴仕候はヽ爲御禮伺公可仕候。此段各迄に可申達よし御取次え申談候。

一豐後守殿御返簡左衛門尉殿え被差上候段、以飛札被仰達候。且口宣御頂戴被遊候得は、萬端御指圖とも有之候御禮可被仰進處、御風邪に付未御頂戴無之、追て御頂戴之上御書被進候筈也。仍豐後守殿え罷出申上置候様に、御用人共より在京之奉行迄申達候。

一二月廿九日　御風邪御快然に付巳ノ後刻御座之間御出座御のしめ御半袴、是小野崎正左衛門持參仕候口宣御頂戴なり。壹岐守様、求馬様にも被爲入。

一口宣、宣旨御掛緒御免狀箱之儘正左衛門持出、上段に有之御臺え戴之正左衛門退席。于時口宣御頂戴

畢て御本席御着座、口宣臺之儘御前ゑ獻之、于時太田治太夫召之爲御讀被成候。畢て壹岐守様、求馬様御拜見、畢て正左衞門、右臺之儘上御敷居之内一疊目中央ゑ置之、何も拜見可仕之旨御意有之、御家老内匠拜見、畢て出席之面々ゑ拜見可仕之旨内匠申述、御番頭始太田治太夫、御財用奉行以下略ス。拜見已後御納戸ゑ入候、御熨斗獻之正左衞門に御手自被下之、御盃事有之即刻御出駕御ふくさ物 御半袴 今日口宣御頂戴相濟候に付御老中方ゑ爲御禮御回勤、若御年寄ゑは御使者勤も無之候。

一今日口宣御頂戴相濟候付、御所司代、兩傳奏衆ゑ御書被差登候。

一三月八日　宗對馬守殿御留主居より申來候趣。昨日私宅御寄合にて觀世能興行之儀に付被仰合相決候處左之通。

一棧敷折物之儀御勝手次第、此節より追々可被遣候事。

一御祝儀被下候義は御在府、御在國之差別無之、萬石一枚之割を以可被遣候事。但被遣候時節は追て御寄合之席にて被仰合、能興行初り候砌に二三日中に追々可被遣候事。

一棧敷料被遣候迄御入用無御座御方様は、初り候上にても、御用無之趣御斷被遣相濟可申事。此段思召にて可有御座事。

一棧敷御用に無御座候得共料物被遣候て、後内造作等事は不被成候旨御斷被成候事。

一御幕、御屏風等、昔御飾被成候御格を以思召次第御挨拶被成可然候事。但棧敷は御入用無御座御方

樣、尤此儀に被爲及間敷事。
　右之通被仰合候付、私方より御通達仕候樣に何もさま被仰合候付如此御座候。旦又、思召御座候
　御方樣には御下書可被仰聞候。
　　三月八日　　　　　　　　　　　　　　內野佐左衛門
一三月廿二日　於陰之間御內書御頂戴、此節布施傳右衛門御留守居出席。御內書差上西ノ丸より御奉書御披
見相濟御用人ゑ被相渡、右兩樣御右筆所にて御封仕御納戶役ゑ御用人相渡之、卽刻御出駕。御家督初
て御內書御頂戴に付爲御禮御老中方御回勤なり、此後は御使者にて御禮被差出候筈也。
一四月二日　御家督初て上々樣御饗應。
一同九日　今般於日光山大猷院樣百回御忌御法事有之に付、每度彼御山ゑ御寄進燈籠幷蜘手損候に付
御繕、右入用之儀は御宿坊實敎院より申來候。金三兩二步、銀一匁二分五厘元光院迄御賴被指越候に
付、今日御用人共より遣候。
一御老中方左之通御勤被成候。
　　御口上之趣
　今度於日光山大猷院樣百回御忌就御法會御法事御機嫌爲可奉伺之致伺公候。已上。
四月十四日　　　　　　　　　　　　　　佐竹左兵衛督

一四月廿日　四ッ時公方樣御參詣、御豫參御列席之御方ゑ上意在之御拜狀、還御以後御豫參之御方段々御靈屋御參詣有之。畢て屋形樣直々元光院ゑ被爲入御召替被遊、午刻御歸也。

一同廿一日　東叡山御堂ゑ御香奠銀三枚御奉納、御使者黑澤甚兵衞勤之長袴のしめ御留守居同道也。

一四月廿三日　未下刻、御用番酒井左衞門尉殿より御連名奉書到來、淺草御藏火之御番松平阿波守殿御代被蒙仰付、右御請御書被差出候。右に付御出駕。是御家督初て之御役場に付、爲御禮御老中御勤左之通。

私儀家督初て今日淺草御藏火之番被仰付之難有仕合奉存候。右御禮爲可申上致伺公候。已上。

四月廿三日　　御名

一卽刻酒井殿ゑ以御使者、今晚御藏近所萬一出火有之候ハヽ、暮時より拙者人數差出候段口達にて御屆なり。

一四月廿三日　仙洞崩御被遊候付、同廿七日より普請、鳴物、來月二日迄五日停止之事。

一五月九日　今度仙洞御所崩御付て、京都ゑ之御使者那可儀右衞門御用達役此間御內々被仰付候處昨夕大御目付御回狀を以、元文二巳年中御門院崩御之節之通、以使者御香奠可差上之旨被仰渡候付、當十二日出立可罷登旨今日被仰付候。御香奠銀百兩御進獻なり。

一屋形樣舊冬侍從御任官之儀にて、今日嘉祥御祝儀御任官初て之御登城之儀故、於殿中今朝御着座之儀

被仰渡候。此義松平伊豫守殿去辰暮侍從被仰付、去巳六月嘉定御祝儀侍從成初て御登城之節、於殿中御禮以前御着座之義御老中被仰渡候趣兼て御留主居共承合訴之候に付、右之趣を以御老中方御直勤、若御年寄御使者勤有之なり。

一六月十八日　玄心院殿御位牌總泉寺え被建置候處、今度右御位牌え殿の文字被加置、御女儀樣御位牌御同殿被建置候付左之通。

一銀子　三枚　　總泉寺え

右は御使者上野幸右衞門（御城使ナリ）を以被遣候。

一七月廿八日　表御門御普請中故南御門より上使御待請に付、今日御途中迄、上使櫻井監物殿爲御案內御使役被差置之。（但御留主居手間無之に付てなり。）

一午刻過櫻井殿御出、屋形樣御內玄冠御白洲中御門手前迄御出迎御一禮有之候。上使御起座、屋形樣御內玄冠中御門地覆際迄爲御送被爲出御一禮なり。以後早速爲御禮御登城、御奏者え被謁。

一八月十日　圓明院樣御一周忌に付、昨日より總泉寺にて御法事有之候に付、東叡山御參詣可被遊思召候得とも昨今之御法事、御手前事には候得とも重キ御事故、御思慮可被遊哉之旨被仰出候に付、元光院えも御問合御用人とも仕候處、重キ御法事等之節は、御參詣不被遊候ても不苦義に御座候。其段は御別當へも同院より可申越候故、御參詣不及之旨元光院より申來候に付今日御參詣無之。仍て、別て御屆

等も無之候。

一八月十二日　御拝領之雲雀御披有之也。

一同廿四日　子午年二歳以上之御調、惣人數合三十一萬三千六百三十一人、内三千五百人程下野二郡之内、残三十一萬餘は出羽國六郡、右人別男女なり。

一同廿六日　二條御城天守炎上なり。

一十月三日　今般被仰渡候通明四日御能（大猷院様百回御忌相濟候付）在之に付、御肴御獻上之儀御用番へ御屆も可有之哉去ル延享二丑年三月中八講御執行相濟爲御祝儀於御城御能有之節、依御觸御肴御獻上被成候、其節は前日御用番へ御目錄を以御屆被成事候。然は以前より被仰渡候上に御獻上物は前日御用番ぇ不及御屆儀に御座候處、八講相濟御祝儀之節右之通故、とかく御並様方可承合御留主居承合候處、何方様にても御屆無之に付此度御屆無之候。鯛一折（三枚）御獻上なり。

一十一月朔日　上使を以鴈御拝領、同十二日御披有之候。

一同十五日　秀丸様御事今日御内々にて御髪置之由、此間壹岐守様より爲御知被仰進。仍て干鯛、こんぶ一重、御樽代五百疋、秀丸様へ御刀番御使者にて被進之候。

一十一月廿日　午刻過、上御屋敷西御長屋山縣靫負（御目付なり）小屋より出火、小太鼓御屋敷中打廻候處、御人數駈集早速消留候。靫負當番之處退出遠慮申立、同廿四日御免被成候。

○寛延四 辛未

一正月元日　菅原洞旭、去年迄は平野洞伯次に被召出御盃被下候へ共舊冬法橋に相成候に付、今年より御吟味を以洞伯上に被召出なり。

一同二日　御登城如例年故略之。

一同十三日　爲御家督御祝儀御老中御招請被成度旨、今朝小笠原縫殿助殿御賴被差出候處、同晩堀田相模守殿より御留主居被爲呼、左之通御書付被相渡候。

佐竹左兵衞督

家督之爲祝儀振舞三月廿一日晚何も可罷越候。

右之通。早速爲御禮御出可被遊之處及夜陰御延引、翌十四日辰刻過相模守殿ぇ被爲出候。

一同十九日　御入部御願之義、小笠原殿を以、本多伯耆守殿ぇ左之通御書付を以被仰立候。

私儀當年國元ぇ之御暇被下置候樣に奉願候。前々御暇之順年に付申上候。已上。

正月十九日　佐竹左兵衞督

右御願書首尾能御受取置候付、爲御禮御留主居御使者に被遣候。

一二月廿一日　吉辰に付、松浦壹岐守殿より壽姫樣御結納御祝儀被仰請候也。

壽姫様え

一御小袖二重、　一御帶　二筋

一末廣　二包　一鹽鯛　一折

一鯣　一折　一御樽　二荷

右者白臺御目錄、引合一重にて認參候。

一三月廿一日　午刻過御老中酒井左衞門尉殿、松平左近將監殿、若御年寄松平宮內少輔殿御出被成候。此節屋形樣御門地覆際內迄御出迎被成、御先立直々大書院え御參座、御前御中座御禮被仰述。御歸已後右御老中御兩人え御出之爲御禮被爲出候。

但今日御囃子御興行なり。

一三月廿六日　二度目御饗應、尤御囃子在之候。

一同廿九日　御老中御招請相濟候に付爲御祝儀上々樣被爲入、御番囃子躰之思召にて御能有之候。

一四月十三日　御下國（御入部ナリ）爲上使堀田相模守殿御出被成、從御本丸紗綾二十卷、銀子五十枚、大御所樣大納言樣より秋元但馬守殿を以縮緬十卷ツヽ、御拜領被遊候。

一四月十五日　御登城、於御黑書院御暇之御禮被仰上候。此節御刀（貞次代金十五枚）酒井左衞門尉殿を以御拜領、御刀御帶重て御出席御禮被仰上上意有之、左衞門尉殿御取合御拜伏御退座。夫より西ノ丸え御登城、

御奏者え被謁。

一同十六日　御用番酒井左衛門尉殿え假御養子御書付御持參、御納被成候。御對面之上、御由緒書も被差出候。

一此方樣淺草火之御番御代松平大和守殿被仰付。仍此方よりも御用番え御屆被成候。

一元光院え御家督初て被爲入候付、銀十枚、昆布一折御使役を以被進候。

一四月廿九日　增上寺え御參詣可被遊處、少々就御風邪御沐浴難被遣、且來月三日御發駕に付餘日無之御參拜難被成段御斷、御宿坊え御使者を以被仰達候。但、元光院御聞合之處不苦之旨申來候に付如此御不參に相成候。

一五月二日　昨日御席ふれ之通、大納言樣御袖留御祝儀有之に付惣御出仕候得共、御國元え御暇御禮も濟候事故御登城無之候。

一同三日　未刻江戶御發駕。百御道具、御物頭三人被召連候、御鷹二居。

一同十八日　秋田御着城。御使者茂木筑後同日出足、六月三日江戶着。

一六月廿日　大御所樣有德院樣薨御。御二七日過月代剃可申御席觸。閏六月十日御出棺。

一御歸國御禮使者御中陰明被指出候筈。白鳥は御伺之上相止、蠟燭え干肴被指添候筈に被仰渡候。

一閏六月七日　大御所樣薨御に付、爲伺御機嫌御使者小介川正左衛門御物頭去月廿八日秋田出足、今日參着。

一同九日　御法事御用懸り、御老中より御留主居御呼出御書付被相渡候。

御香奠　白銀十枚　十五万石より廿四万九千石まで

一同十日　土用伺御機嫌御國使者石井正左衞門詰役御臺所役。

一同十二日　御用番堀田相模守殿ぇ被相伺、御差圖にて、今朝御檜重一組ッ丶、西御丸ぇも御獻上。

一同廿三日　壹岐守様、大御所様薨御に付去ル五日女院使御馳走被仰付候爲御禮、今日御飛札被差出候。

一七月十一日　公方様御中陰明に付鯛一折ッ丶、兩御丸ぇ御獻上あり。

一八月廿六日　有德院様御靈前ぇ、銅燈籠可被獻之段被仰渡候。

一九月八日　御領内大館罷有候貞雲と申尼、此度仙臺御領ぇ罷越候處相煩候に付、陸奥守殿より御醫者被仰付、御丁寧之御取扱にて致快氣候由。仍て右掛りの者共へ左之通被下之。

御醫者　黒澤宗運　町醫　藤村保安

銀三枚宛　鎌田杢吉　同針醫　木村道益

岡道照　ヤト　最上屋與治右衞門。

右者向方御留主居迄、此方御留主居より遣候。

一十一月十五日　御領内補陀寺觀性事、去秋中惣持寺爲輪住職罷越相勉候處先般遷化に付、其後隨侍之僧侶首尾克相勤、今度交替歸寺之節惣持寺より書翰被差上候。右御挨拶、同寺宿寺谷中光善寺之由に

付、御使者を以御頼被仰遣候。

一十二月七日　大岡出雲守殿格別骨折相勤候に付、一萬石御加増高被下上總國勝浦領知被下之。

一同十八日　壽姫樣松浦壹岐守樣ぇ御引越、御婚禮御整なり。御輿渡小野寺伊右衞門（道行）、介添布施傳右衞門、御貝桶、御先道具一同被遣之、御使者高瀨五郎右衞門（大小姓）勤之。向方御輿請取松浦典膳、介添菅沼十兵衞。

一同廿一日　今日三ッ目爲御祝儀松浦壹岐守樣御招請に付、御名代（御在國に付）壹岐守樣始其外御出なり。

一吉田小右衞門殿を以松平左近將監殿ぇ被指出候御書付左之通。

私伯母松浦壹岐守ぇ婚姻相整申候。當時在國之儀御座候間御序之節以名代御禮申上度奉存候。此段奉願候。以上。

十二月　　御名

御付札　［御禮被申上に不及候］

○寶暦二（壬申）

一正月二日　兩御丸ぇ御太刀馬代御獻上、御名代之御使者疋田久馬。

一同晦日　御席觸。近來、火事場え見物ヶ間敷もの別て多、馬上にても出候樣子に相聞得候。向後堅可爲無用候。右躰之者見請候ハヽ、其場え出候御目付、御使番相改、名承記申出候樣可申渡置候。

一四月二日　屋形樣草荷より午ノ後刻被遊御着府、則御老中御勤。

一四月三日　未刻過、酒井左衞門尉殿より粘付封之御書付以御使者參候。

去年御暇之節被差出候當分養子願書、致返進候。以上。

四月三日　　　　酒井左衞門尉

佐竹左兵衞督樣

右御受御返書糊にて被遣候、御使役勤之。

一同六日　御參勤上使西尾隱岐守殿御老中御出、御取扱御先例之通。

一四月十二日　御參勤之御禮被仰上候。

一六月二日　就御吉辰義眞公御結納御整なり。仍之御緣女松平加賀守殿御伯母實御妹楊姫樣え御祝儀之御進物、御使者山方内匠御家老を以被進候、副使龍田源太夫。

一同五日　申刻過、日暮里抱御屋敷表長屋不殘燒失に付、酒井殿え御留主居參上口達之趣。

新堀村抱屋敷長屋より出火にて燒失致候。猶書付を以申上候得共先一通御屆仕候。

右之趣申述候處、御承知被成候由御挨拶なり。

一御用番左衞門尉殿ゑ左之通被相伺候。
今申刻過出火、豐嶋郡新堀村抱屋敷表長屋不殘燒失仕、外類燒無御座候。依之差扣之義奉伺候。
以上。
六月五日　御名

一六月六日　御留守居ゑ御付札にて被相渡候。
不及差扣候
右之通御付札を以被仰渡候付、御使者を以御請被差出候付御使役勤之。御懇意御老中堀田殿、西尾殿ゑ御差扣不及之段御留守居を以被仰知候。

一同十八日　御檜重一組御本丸ゑ御獻上。兼て御ふれに付てなり。

一有徳院樣御一周忌御法事に付、御香奠白銀三十兩御進獻也。

一七月朔日　就御吉辰御婚禮御整に付楊姫樣御十六未上刻本鄕御屋敷御出輿、下谷七軒町御屋敷ゑ被爲入。
御迎　相馬彈正少弼樣
松浦壹岐守樣
御送　松平河内守殿

松平兵部少輔殿
御輿渡　御家老前田兵部
御貝桶渡　中川八郎右衛門
御輿請取　眞壁掃部助
御貝桶請取　山方内匠

一七月廿二日　以上使雲雀御拜領。八月五日御披有。
一同廿八日　昨晩御老中御連名之御奉書到來、今朝御登城御婚禮濟御禮被仰上候。御披露御奏者、御用番御老中御取合上意有之候。縮緬五卷御獻上、大納言樣へは銀五枚御獻上。
一月光院樣九月十九日巳下刻御逝去被遊候。
一十一月廿七日　御鷹野鴈御拜領。此節御風邪に付、御請には被爲出候得共、外は六郷伊賀守殿を以被仰上候。
一十二月十五日　琉球中山王使者登城御規式相濟候に付、恐悅之旨御老中御用番え田崎忠四郎御留主居御使者也。
一同十八日　琉球人登城舞樂有之、歸國御暇も被仰出萬端無御滯相濟恐悅之旨、前に同龍田源太夫。

○寶暦三 癸酉

一如例年之御規式有之。
一正月二日　御登城。
一四月十五日　御國許ぇ之御暇上使本多伯耆守殿御出、御取扱御吉例之通故略之。
一同十九日　西尾隱岐守殿ぇ御出、假御養子之御書付御持參御渡被成候。今年より御由緒書に不及之由御持參無之候。
一五月五日　江戸御發駕なり。
一六月六日　御歸國御使者小野岡市太夫、秋田去月廿一日出足今日上着。
一同廿七日　御用番ぇ、今度日光御宮御修覆出來去月廿七日正遷宮相濟候に付、右御歡御國使者土屋貞吉在番大番被差出候。
一八月十七日　屋形樣御病氣に付、爲御病養御出府被成度旨小野寺伊右衞門御家老被爲差登。上々樣ぇ御相談被成置候處無御相違に付、明日久世忠右衞門殿を以御用番ぇ御願書被差出候筈。右御口上書略。
一同廿一日　延生院樣御病養無御叶今朝御死去之由、從壹岐守樣爲御知申來。

一同廿四日　鈴木平藏（御用人）去ル十九日夜中秋田出足早打にて、屋形樣御欝痰之處先頃より御類瘡、十二日頃より御浮腫御煩御勝不被遊候に付、御醫者御願之ため被指登候。

一同廿五日　望月三英老御願之通被仰出候付、今夜中御出立被成候。

一同廿六日　求馬樣御看病御暇にて濱町御屋敷より御發駕被遊候。

一同廿七日　屋形樣御大病に付御跡目之御願、今朝御用番え松浦壹岐守樣、久世忠右衞門殿を以御願書幷御書被指出候。（御書は忠右衞門殿被差出候。）

一屋形樣御養生無御叶、去ル廿日御逝去之段早打にて申來候に付、求馬樣、三英老御旅中え高瀨傳右衞門被差遣候處則御歸、右御屆（御逝去之事）黑田河內守殿を以被仰達候。

一九月三日　昨日壹岐守樣え御老中御連名之御切紙本多伯耆守殿より到來、午之刻松浦壹岐守殿御同道にて求馬樣御出之處、堀田相模守殿、酒井左衞門尉殿、西尾隱岐守殿御列座、大御目附石河土佐守殿御末席御詰候由。伯耆守殿御上座にて被仰渡之。

佐竹左兵衞督家督相續之儀病中願置候。依之求馬事家督相續被仰付遺領無相違被下之旨被仰付候。

右畢て伯耆守殿御服忌御書付御直に被相渡候。

佐竹求馬

九月三日より五十日、十三ヶ月之忌服受可被申候。尤服忌之書付可被差出候。

一御歸之節御老中幷若御年寄中ともに爲御禮御勤被成候。御忌中故御取次御呼出御門外にて被仰置候
一求馬様御事、屋形様と可奉稱之旨御家中ゑ被仰渡候。
一九月四日　御忌中御尋之上使金森兵部少輔殿御奏者、服紗もの御上下御出也、屋形様御ふくさ物御半袴御出迎、御先立大書院ゑ御同道也。上意之趣左之通。
　左兵衞督死去に付愁傷可致思召候。依之被成下上使候。
上使御歸之節御送等御先例之通。
一御香奠白銀三十枚御拜領。
一御饗應之品一切無之。
一同五日　御前様御事御後室様と、秀丸様御事御曹司様と可奉稱之旨御家中ゑ被仰渡候。
一九月廿一日　御曹司様御痲疹被遊候に付、濱町御屋しきゑ屋形様被爲出。
一十月廿二日　御屋敷にて淨瑠理、小歌、琴、三味線、音曲之儀前々御停止之處、通霄院様御代、差て御構無之段御目付ゑも被仰渡候段、御家老演述にて諸頭へも申達候處、已前之通御停止之段御書付を以御用所より被仰渡候。
一同廿四日　御忌明に付御出駕、兩御丸、御老中不殘御回勤。通霄院様御病中御出府之御願、且御醫者之御願、御病氣御尋之御奉書、御看護御暇、且御家督無御相違被仰付、上使を以御香奠御拜領之御禮等御口上なり。

一御相續御禮被仰上候節、御獻上物幷御家來人數御伺書、御用番ゑ被差出候。

一御獻上物は如御先例故略之。

一御家來人數左之通。

佐竹主殿
佐竹大和
佐竹圖書
石塚孫太夫
戸村十太夫
小野寺伊右衞門
須田内記

右獻上物如先例被仰出候付略之。

一十一月朔日　卯後刻御出駕御のしめ御長袴當日御禮相濟、屋形樣於御白書院御相續之御禮被仰上候。

御太刀　一腰
綿　五十把
黃金　五枚　御本丸獻上

御馬程背　一疋
外御刀國眞　一腰

一同六日　左近將監殿御用人中村政右衞門ゑ申聞候は、御先代御家督、御無官にて五節句月次御登城之儀御願被成候御例承度よし內々申聞候に付、今朝左之通御書付持參差出候。

佐竹源次郎大膳大夫事元祿十六未年八月十二日故右京大夫家督無相違被仰付、寶永三戌年二月十五日五節句御禮御登城仕候樣大久保加賀守樣より御書付を以被仰渡候。同四年八月廿六日月次御禮登城之儀奉願候處、同晦日月次登城仕候樣に秋元但馬守樣より御書付を以被仰渡候。

十一月六日

佐竹求馬故右京大夫事、正德五未年無官にて末家より本家相續被仰付、同年九月廿九日家督之御禮申上候。五節句月次御禮登城之儀は御伺不仕登城仕來候。

十一月六日

一右之外左之通松平左近將監殿ゑ例書被差出候。

佐竹故大膳大夫源次郎事寶永三戌年三月三日初て五節句登城之節、大御目付松平石見守樣ゑ着座之儀被爲伺候處、無官に候得共表侍從松平能登守樣次、御譜代侍從小笠原右近將監樣上に着座仕候樣、御老中秋元但馬守樣被仰渡候由石見守樣御差圖にて着座仕候。以上。

十一月六日　佐竹求馬内
中村　政右衛門

一屋形様當時御無官に候得とも、表侍從松平大膳大夫殿御次へ御着座被成候。

一十一月十二日　御鷹之鴈二御拜領なり。

但同廿六日御披、御相續初て故小謡有之。

一同廿五日　壹岐守様より御二男民部様御嫡子に御願、御當家より御添願有り。

一同廿七日　御用番え左之通。

同姓壹岐守方罷有候節致出生候本腹之嫡子秀丸儀、當て六歳相成申候。私儀本家相續被仰付候付、右秀丸直々引取嫡子に仕度候。此段申上候。已上。

十一月　佐竹求馬

十二月二日御付札

勝手次第可被致候　御用番松平左近將監殿より被仰出候。

一十二月七日　壹岐守様、民部様今朝御登城之處に、先頃御願之通民部様御嫡子形被仰出候。仍屋形様より右御禮御使者勤、御老中、若御年寄中迄。

一同十日　出羽國秋田領度々洪水急冷氣相成り、稻青立雪下相成、高七萬三千五百六十石餘御損亡御届

有り。

一同十二日　民部様御目見之御願有之、御添願被差出候。

覺

一拝領居屋敷　下谷七軒町　一萬二千百八十八坪五合

一同中屋敷　向柳原　五千五百二十六坪五合

一同下屋敷　淺草　六千百三十七坪

一抱屋敷　深川海邊、伊奈半左衛門様御支配　年貢地　三千九百五十三坪

一同屋敷　豊嶋郡新堀、東叡山領、田村權右衛門支配　同　斷　一萬七千坪

一同屋敷　足立郡□田、小野左太夫様御支配　同　斷　五千二百三十二坪

右之外平野洞伯屋敷略之。

一同十五日　民部様初て御目見濟。

一同十八日　義局公（御年齢三十一）被任侍従、同廿八日御獻上物左之通。

御太刀黄金馬代　御本丸え

縮緬　五巻

御太刀黄金馬代　西丸え

一信太内藏助（大小姓御番頭）來正月元日京都ゑ御使者罷登候付、御目見被仰付候。

一十二月廿九日　西尾隱岐守殿より御左右有之付御留守居罷出候處、今般御官位に付所司代ゑ之口宣之奉書被相渡候。

佐竹右京大夫事

從四位下侍從被

仰付候口　宣等之儀

相調候樣傳奏衆迄

可被申入候恐々謹言

寶曆三酉

十二月十八日

西尾隱岐守　忠尙判

松平左近將監　武元判

本多伯耆守　正珍判

堀田相模守　正亮判

酒井讃岐守殿

○寶曆四　甲戌

一正月元日　御規式如例年七五三御膳共有之。
一信太內藏助今朝出足上京、御姓名書も被遣候。

從四位下侍從　元無位無官
寶曆三癸酉年十二月十八日　佐竹右京大夫
源義局

一同二日　御登城、御舊例之通。
一二月九日　信太內藏助着、口宣、位記、掛緒、免狀等持參。御取扱御舊例之通故略之。
一閏二月廿六日　御席觸、惣て御咎〆被仰付候者一類ともより差扣伺差出候覺。
御役被召放候者　父子兄弟、祖父、孫　閉門　右同斷
逼塞　右同斷　遠慮被仰付候者　悴
右之通相心得、此外之一類共よりは伺差出に不及候。尤養子なとに相成續遠く候歟、又は續無之候とも、實書面之通續有之者は伺書可差出候。
一重キ御仕置等被仰付候節は只今迄之通可相心得候。

一三月朔日　民部様、月次五節句御出仕御願之通被仰付、今日初て御登城。

一大岡出雲守殿御本丸若御年寄被仰付月番御免、只今迄之通奥勤兼、五千石御加増被下之。

一三月四日　午刻御男子様御誕生也、當分御曹司様御同居也。幸之助様御事。

一四月五日　稲生下野守殿御目付え御伺之趣左之通。

四月十一日御付札
書面之通は永壽院は當右京大夫ためには養祖父之實方曾祖母之續に付右京大夫と相互服忌無之。

永　壽　院

右者佐竹右京大夫分流故式部少輔妾、元祿年中本妻に相定申候。然は、故式部少輔嫡子故修理大夫儀、故右京大夫養子に被仰付候節領知家族共本家え引纏申候處、修理大夫不幸に付嫡子左兵衛督承祖にて故右京大夫家督相續仕候。左兵衛督不幸に付當右京大夫末家より相續被仰付候付、永壽院續并服忌之儀如何程に可有御座候哉。

御付札
書面之通は俊交院は修理大夫存生之內左兵衛督養母に相定候得は、當右京大夫爲には養父方祖母、定式之服忌にて候。

俊　交　院

右者同姓故左兵衛督母御座候處、故左兵衛督亡父修理大夫存生之內養母に相定申候。然は當右京大夫儀末家より故左兵衛督家相續被仰付候付、俊交院續并服忌之儀如何程に可有御座候哉。

右之通奉伺候。已上。

四月　　　、、、、、內
中村政右衛門

一五月八日　鳥越明神舞殿修覆、表門ふしんに付御奉納之儀願有之、御氏子と申にも無之候得共前々より御奉納之品も有之事故、此度銀二枚御城使を以長樂寺迄被遣候。右願書被返置候。

一同九日　慈明院樣義與公御妹おゆは樣御事三十三回御忌に付總泉寺に於て今晩より輕御法事御執行有之、御刀番御代參也。右御法事役人等不被遣候。永壽院樣へ右に付うむとん二十船被進候。十日は御直參有之候。

一五月廿一日　松平土佐守樣御息女、御曹司樣え御緣組之儀、今日御家門樣方え被仰達。御留守居口達書持參之趣。

松平土佐守樣御息女樣秀丸樣え御緣組之儀御上屋敷え御引移以前より御內約も在之候。依之土佐守樣え此度表立可被仰進思召候付、此段被仰進候。以上。

五　月

松平　加賀守樣　　松平　筑前守樣
同　修理大夫樣　　松平　丹波守樣
同　近江守樣　　松平　隱岐守樣
有馬中務大輔樣　　相馬彈正少弼樣
同　讃岐守樣　　津輕　土佐守樣
松浦　肥前守樣　　同　壹岐守樣

黒田　甲斐守様　　同　　河内守様

一上々様方へは御用人を以被仰進候。

一五月廿二日　道御奉行永井民部殿ぇ御留守居書付繪圖面を以伺之趣。

淺草鳥越明神前橋俄行桁落チ、馬車往來危相見得申候。依之往來人留仕置奉願候。尤修覆之儀は尙又吟味仕追て御伺可仕候。以上。

五月廿二日　　　　　　　　　　　　　　　、、、、、内
中村政右衞門

右書付用人菊地彌八郎を以差出候處、民部殿御逢被成御承知之旨被仰候。

一五月廿六日　御座之間御出御袴斗。

掃部助　　　　内記

右二ッ目御敷居之外着座。

町與力組頭
吉田十郎兵衞　　　　牢人
高橋多門

白井久五郎　　　　同　　十一郎

荒木猶水　　　　中西忠太

同　新六郎　　　　松田又八

同　　又之丞

右二ッ目御敷居之外二疊目頭ゑ罷出、披露殿付。但一人ッヽ出席。
三　谷　勘四郎　同　源太郎
丹波や五郎兵衛　布袋や　長兵衛
中村　三右衛門
右二ッ目御敷居之外下御屛風際にて御目見被仰付。何も一同罷出候。
一右之面々被下物有之、略之。
一六月四日　御席觸。
兄弟數多有之候者弟共を段々に兄之養子に相願候節、向後左之通相心得可申候。
一弟を兄之養子に致候節は弟之續を以養子に相願可申候。
一右養子に相成候もの又々其者之弟致養子候節は、實弟に候得共、養方にては伯父之續に付養子には不相成候。相續相願可申候。
一右相續に相成候者又々其者之弟を養子致候節も、實弟に候得共、養方にては伯父之續に候付養子には不相成候。相續相願可申候。
一右相續に相成候者又々其者之弟を養子に致候節は、最早養方之續之名目無之候間、實弟之續を以養子相願可申候。

右之通寄々可被達置候。

六　月

一六月十六日　御嘉祥御祝儀初て御登城に付、御伺之上登城被成置候。右に付大御目付不殘御用御賴、御目付幷御先手へも御手紙爲御知在之候。御相續初て之御登城故掃部助、內記、大番頭小野崎大藏出殿、御熨斗鮑御小姓獻之、則引申候。役人少々御目見卽刻御登城之處、於櫻之間堀田相模守殿、御着座之儀被仰渡候。

一今日於御城御頂戴之御菓子但今年數之由俊亥樣、盛德院樣、永壽院樣、御曹司樣え御小姓御使者を以被進候。愛宕下御前樣、鳥越奧樣へは、御家督初て御頂戴被遊候に付以御使者被進候。明年より不被進候筈也。

一陰之間御出座有之、今日御頂戴之御菓子於同所拜領之次第。

掃部助　　內記　　　　　　　　　　　　小野崎大藏

右御敷居之外列居御菓子頂戴、銘々え御小姓を以被下之。

右御菓子八寸臺え戴之。御敷居之外二疊目え御小姓置之、于時御番頭出席頂戴。畢て御菓子八寸三疊目え下ル。于時御財用御勘定奉行、御用人、御留守居、御膳番、御刀番、御納戶役、御用達役、御側廻之面々、御小姓迄詰合之面々被下之。何も平伏にて頂戴之。

一六月四日　幸之助様御二男様今日御箸初に付爲御祝儀初て御紋付御召物被進候。

一御紋付御帷子　一重

一同　御袷　一重　犀形様より

鮮肴　一折

一御小袖　一重

鰑　一折　御曹司様より

一御內證向甚御差支諸事御省略被成置候趣被仰出次第は、御書付を以御家中ゑ被仰渡之。但、年々被差登候御金役、御米藏役、御雜用役、御作事役當時より被相止候付、御勘定筋も秋田におゐて差出候樣被仰渡候付、御勘定役も此末不被指登事に相成、右役々金銀受拂役と一役に被相改候。御作事役は御普請方と被相名附候。

一同廿六日　土佐守殿ゑ以御使者（御留主居龍田源太夫勤之）御曹司様御縁組之儀先頃より被仰進候通、今日就吉辰表立被仰進候御口上之趣。

殘暑甚候得共彌御堅固珍重存候。然は御息女様同姓秀丸ゑ御縁組之儀宇田川玄休を以御內々申述候處、御取組可被下之段被仰下幾久致大慶候。右之趣爲可申述使者を以申達候。（中奉書横折認之、上包書之口上覺ト有之。）

右御口上書御留守居龍田源太夫持參之上、向方御留主居早崎小平に相渡之、土佐守殿へ披露。畢て御

前へ被召出御直答被仰含退席。　御料理二汁五菜被下於席に御家老、御用人挨拶之由源太夫披キ候上訴之。
一未刻土佐守殿より御挨拶御祝儀御使者早崎小平參候。仍、上御使者之間え御取次案內、于時眞壁掃部助花色帷子同小紋上下罷出及挨拶、宇田川玄休取合畢て掃部助退席、御用人生田目喜內、鈴木平藏各着服同斷出席、次第掃部助に同。
一卽刻大書院上段下御着座花色御帷子同小紋麻御上下早崎小平被召出、披露小野崎大藏、御直答被仰含畢て席え退。御家老大書院入口御緣通に伺公、幷御用人相詰、何も御使者え及挨拶。
一御使者本席え退座之節御熨斗三方出、畢て御料理被下二汁五菜相伴玄休、源太夫。宮仕子とも並坊主とも。
一右御使者披候以後、徒並使を以左之通被下之。

土佐守殿御使者　早崎小平え

一晒布　十端

右之通は源太夫へも向方より被下候。是兼て被仰合に付てなり。
一須田內記去年中より相詰、來ル廿九日罷下り。小田野又八郎此度京都え之御用被仰付能登候付、於陰之間今晩御夜食被下之。兼て御催も有候付幸に今晩御囃子被仰付、表役人、御側廻被爲召見物被仰付御夜食御酒被下之。掃部助、內記、又八郎え於御前御帷子一ツ、被下之。
一六月廿七日　御國元已前より金銀錢札遣等無之事に候得共、御家中幷在町甚困窮候付、今戌年より廿五ヶ年目戌年まで銀札遣被成置度旨御伺、御用番御老中堀田相模守殿え今朝御書付を以被差出候趣

左に記。

私儀連々不勝手に御座候上、近年打續國元損亡仕領內甚及困窮申候。然は、此節相救候餘力無御座候。仍之爲助成領內銀札遣爲仕度奉存候。左候得は家中幷町在ともに勝手にも相成、諸商賣之通用等も宜御座候。寶永、享保之頃隣國奥州仙臺幷同國白川にても金銀錢札相用意候例御座候よし承候。仍て可相成義に御座候ハヽ、當戌年より二十五ヶ年目戌年迄右札遣爲仕度、此段奉伺候。已上。（中奉書半切紙へ認之、上包美濃紙御名有之。）

七月晦日御付札

當戌年より來ル戌年まて廿五ヶ年銀札遣可被申付候

右御伺書幷例書とも、今朝御留守居龍田源太夫を以御用番え被差出候處、御受取置被成候。例書略之。

一御曹司樣え之御緣女樣、御名御歲、書付を以宇田川玄休より龍田源太夫迄參候。

賀（ヨシ）　八歲

右小奉書一重に認參候。

一同廿九日　生田目喜內（御用人）御役御免被成置、申立遠慮にて御國元え罷下候。

一七月二日　井伊掃部頭殿今度御家督無御相違被仰出候付御使者被遣候。同主殿頭殿（前ノ掃部頭殿御事）今度御隱

居御願之通被仰出候。

一右之通に候處、八月廿八日掃部頭殿病氣急養子御願候處、御親類阿部飛驒守殿、間部若狹守殿被爲呼、井伊掃部頭病氣に付他家より急養子致度段相願候へ共、隱居主殿頭未老年にも無之事故再勤をも被仰付候ハヽ、何樣にも保養加へ可相勤義に思召候。掃部頭事は家相續之儀致安心、病氣可致保養候。右上意之趣可申聞之段、御黑書院於溜之間老中列座にて被仰渡候。

一御領內能代表火災之御届、御用番酒井左衛門尉殿ぇ御書付被差出候。

一町屋百七十四軒　　一土藏一ヶ所

一穴藏二ヶ所　　一社三ヶ所

一社家一軒

右之通當六月十六日未刻より戌刻迄燒失。

一七月九日　壹岐守樣ぇ蜂須賀殿より被仰越候は、拙者儀今度大病に付、御四男大炊殿養子申請奉願度存候段被仰越候付御挨拶には、相心得申候得共、本家にて如何可有御座哉承り候上御挨拶可申旨被仰遣候由。此方樣へ御家老森川新右衛門、岩永宇左衛門を以被仰遣候處御相應之御挨拶被仰進候に付、志摩守殿へ御相應之御挨拶有之候。

一同十日　志摩守殿御病氣御大切に付今日御養子御願被差出候處、從壹岐守樣御届一ト通之由爲御知

有之候。

一同十二日　小田野又八郎御家老今度京都へ御用被仰付能登候付、御目見被仰付御意有之。掃部助御取合。

一大炊様え今度御養子にて近日向方え御出に付、御馬一疋鹿毛鞍置爲御餞別被進候。御使者御刀番勤之。壹岐守様へは爲御支度料銀三十枚被進候。

一志摩守殿十三日御卒去之段爲御知申來、大炊様御服忌五十日、十三ヶ月被爲受候。則鍛冶橋御屋敷へ御引移被成候付、爲御見舞御使者中村政右衞門勤之。

一七月十五日　盛德院様頭役伊藤六郎左衞門、去々年中御供相詰此度交代罷下候付御目見、御番頭披露御意有之御家老御取合。畢て御對面所後御座敷にて御料理被下候、上絹とろめん三端被下之。

一七月二十日　延生院様來月御一周忌候得共當月御取越、今晩より明朝へ、壹岐守様より御法事於總泉寺御執行有之に付今晩御參詣。仍之左之通御備也。

御かうてん白かね　一枚

右御香奠御使役勤之。

一切支丹類族違變無之御屆無之段は、寬延元辰年十二月四日御日記條下に委細在之。

一同廿四日　石川團藏出仕、一代近進被仰付候。

一同廿五日　昨日一色周防守殿より御左右有之に付今朝關五郎左衛門（御財用奉行）罷出候處、內々御留守居相招キ候て可申談候得共、先頃平元才藏其元へ可申談旨被申置候故相招候。先頃右京大夫殿より御領內銀札遣之儀御伺に付、御領國古來より銀札候哉、且此度銀札に相成候て他國ゑ之障り之儀少も無之哉右兩樣之御受書明日以御留主居被差遣候樣にと周防守殿被仰候付、今日左之通御書付被差出候。

右京大夫領內於出羽國秋田此度銀札遣爲仕度段奉伺候。右通用之儀は家中、町人、百姓とも勝手に相成、他國ゑ差障少も無御座候。此段御尋に付申上候。以上。

、、、、、內
龍田源太夫

七月廿五日

此度奉伺候銀札遣方之儀は國々にも有之段々承合候處、兎角他國より參候諸商人取廻罷歸候節は、札引替に難澁之方も有之樣に相聞得申候故、町人受合札と申に仕候て役所建置、領內富有之町人百姓に申付右役所之札本に仕、右札ゑも札本之名前印置、引替之節無難澁於其役所引替候樣に仕候。都て商賣體之輕キ者共は國法を恐候て、自由勝手之願等は容易に難申出ものに御座候。右札遣之儀は引替自由に無之候へは不通用に罷成候故、右之通受合札に仕、其役所ゑ右京大夫方より檢使を差出通用自由之法を立置候故、本書申上候通家中、領民、商賣人迄甚勝手に罷成り、隣國、他國ゑ之差障り少も無御座候。以上。

七月廿五日

一同廿六日　來年御入部之御用勤有之、仍て爲御祝儀於御家老局御熨斗鮑三方出。于時
御財用奉行　御用人　御膳番　御留主居　御刀番　御納戸役　御用達役
右之面々出席頂戴之。畢て於同所御家老、御番頭ゑ御吸物、御酒被下之、御財用奉行より御用達役迄、於御廣座敷御吸物、御酒被下之。畢て、右何も御家老局ゑ出席奉賀候、又々御酒盛有之、畢て退去。大御番頭小野崎大藏御入部御供被仰付候。

一同晦日　堀田相模守殿より御留主居被爲呼龍田源太夫被差出候處、御伺被差出候御書付へ御付札を以被仰渡候。

當戌年より來ル戌年まで廿五ケ年銀札遣可被申付候

右之節、例書は被留置不被返置候。

一右之通御付札を以被仰渡候付、相模守殿へ御請之御使者被差出候趣左之通。
先刻家來之者被爲呼今度領内銀札之儀奉伺候處、御付札を以伺之通被仰渡致拜見、得其意難有仕合奉存候。爲御請以使者申上候。

一八朔御祝之御規式左之通。
御粥之御膳　御盃三方

御酒錫德利

右品々御膳番三枝仲獻之。

一御席觸。

忰出奔仕候節父遠慮之儀只今迄不相伺者も有之候。御奉公相勤候忰致出奔候ハヽ、向後父差扣相伺可申候。

右之通寄々可被達候。

一八月二日　藤澤上人遊行より、先年回國之節御丁寧之御取扱、回國御仕廻去月藤澤え御歸候付、爲御禮昨日御使僧參候。先年之御禮ゆへ不及御挨拶候。

一同三日　御曹司樣御緣組御内々相濟候已後、松平土佐守樣今日初て御出、御掛合御料理被進候。御家老、御番頭、御用人御目見被仰付候。御曹司樣御出座御對面有之候、御局御同道致候。

一御國許銀札遣御願之通相濟候付、左之通被進候。

茶宇嶋御上下地十端

丹後嶋御單物地十端　御懇意御老中　堀田相模守樣

交肴　一籠

右者時節御見舞之御口上にて被進候、御使者赤石藤左衞門御用人勤之。

一銀子十枚　右御同人御側用人　長谷川忠兵衞
一同　五枚　表　御用人
右之通被下候付右同人引渡。
丹後嶋五端
鮮肴一折　御勘定頭　一色周防守樣
御樽代二千疋
右者札遣相濟候付爲御見舞被進、御使役勤之。
一金五十兩　奥御右筆　靑山次右衞門殿
右者札遣之儀最寄より御世話有之に付被進、御使菅原洞齋勤ル。
一金五百疋　右御同人　御家來一人
右に付被下候、洞齋引渡候。
一此度御省略之儀被仰出候處、段々諸向御省略之儀申上候付、御財用奉行、御用人、御膳番、御用達、其外上々樣附御刀番、御納戶役迄拜領もの有之候。
一八月七日　竹中主膳殿交代寄合御在所濃州關ケ原にて、秋田より伊勢參宮之女仙北郡六鄕村三右衞門妻病死之節、役人等被差出丁寧に御取扱も在之に付、爲御禮使者被差遣候。但、右女相煩候段宿より御留主居まて爲知有之に

付、此方より御中間關ヶ原へ被遣御尋被成候內死去仕候付、其所之役人、醫師等へ金子爲取候義、御中間仕拂候樣に被仰付候。

一昨日八月十一日なり壹岐守樣へ赤石藤左衞門御用人を以被仰進候は、光源院樣御存生に被成御座候得は直々被爲入候御儀に御座候。然は向後御年忌に被爲當候節、於總泉寺此方樣より御法事御執行可被遊思召候。御位牌も只今迄壹岐守樣より被立置候御牌、直々此方御靈屋え御移被遊度之旨被仰進候處、今日壹岐守樣より大崎平八御徒頭を以御相應之御挨拶被仰進候。右御位牌新に御造立に不及之段從總泉寺も申上之。

一八月十二日　壹岐守樣昨晚本所御藏火之番被仰付候付、御本家より御使者勤可有之段相究候。仍之今朝、御老中え御留守居代御物頭御使者被差遣候。

一八月十五日　谷出羽守樣去ル四日於御在所御死去之段爲御知申來候付、昨十四日より當廿日迄日數七日、御中屋敷鳴物停止被仰付。御上屋敷は不被停止候へ共、愼候樣に御用所より被仰觸候。谷樣は俊交院樣の御實父樣なり。

一同十八日　光源院樣御位牌、御席順御轉座に付今朝於總泉寺御回向有之、依之爲御附添小野崎源左衞門御用人被遣之。御忌日には無之候得共、右に付御代參御番頭也。

一同廿日　通霄院樣御一周忌御法事有之、仍て松平加賀守樣より御代參西尾早人御家老被遣候。

一同廿五日　大炊樣蜂須賀御家督無御相違被蒙仰候。
一九月十一日　元光院上野入院已後初て被爲入候付、如先例以御目錄銀十枚、昆布一折被進候。
一九月十五日　神田明神御祭禮に付御初尾金子貳百疋御奉納、前々より御長柄十五筋被差出候得共、當月中御服中故御道具被指出間敷御斷、不被差出候。
一同廿六日　鹿嶋御修覆に付關八州勸化に付、下野御領分銀一枚神主羽生求馬處ゑ御城使を以被遣候。
一十月二日　蜂須賀大炊樣御家來昨日參上仕候に付、御直書被下候。
　昨日は入來演說之趣欣然之事候。爲謝禮如此候。恐々謹言。
　　十月二日　　　義局御判
　　　山田織部殿
右者御念之御書大奉書、御步行使也。
一同六日　玄猪御規式有。
一來亥年御入部之御心掛に付、御内々御供觸於御廣座敷御財用奉行、御用達役を以被仰渡。
一同九日　三谷勘四郎、中西五郎兵衞、向々御公務被蒙仰候ても御財用御指支之事故、右爲御手當御無心金被仰付候處、兩人ともに御請申上候付、其旨及言上候得は深切に思召候。依之兩人ゑ左之通被下候。

一御藏出高五百石　三谷　勘四郎
一同　　三百石　中西五郎兵衞
右今年より役銀ともに可被下段被仰渡幷御目見被仰付、御料理被下候上御上下も拜領被仰付候。
此節鯛一折ッヽ獻上、勘四郎手代喜平次、五郎兵衞手代喜助御目通被仰付候、是又扇子獻上。
一同十三日　御敷舞臺にて諸士幷御步行、御茶屋之者劒術上覽。
一同廿七日　御相續已後初て上々樣被爲入、於大書院御料理被進候。二汁七菜。
俊交院樣　御前樣アタコ下　盛德院樣　奧樣トリコヱ
一同晦日　小林雲芳、御條目を以遠慮被仰付候。鳥越奧樣附頭役二葉勘左衞門役儀に付差扣被仰付候、
且勤方不束に付御役御免被成置候。
一小笠原縫殿助殿を以堀田相模守樣御家老へ被差出候御書付左之通。
私儀去年相續被仰付候以後早速各樣招請可仕候處、私宅所々破損多有之急に難取繕躰御儀御座候。依之、來年國許ぇ御暇被下置候ハヽ、留主中致取繕、參勤之節相伺可申候。右之段被御聞置可被下候。已上。
十一月三日　佐竹右京大夫
右御書付首尾能御受取被成候。

一十一月五日　於御座之間（御のしめ御半袴）御具足之餅御披なり。正德五年九月廿七日、圓明院様御家督初て御具足之餅御披有之候。然は御末家、御部屋局之節御具足之餅、本家えも被爲入御祝被遊候哉、御先代様之御具足之餅御當代様御祝有之哉否之義、於秋田寶暦三酉年十月八木作助、菊地新藏人兩人え御尋被成候處、八木申上候は、御鏡之餅に候故、御代替之節直々右之餅を以御誕生日に御祝被遊候段申上（舊記は火災にて無之、傳說を以申上候）菊地申上候は、御代替之節御先代様之御具足餅は、金乘院え被下ヶ置候て御祝に不及候段申上候。尙又菊地え先年被仰渡候御書付も所持仕、且御臺處にも菊地申上候に府合之書付有之、御先代之御具足餅御當代にて御披無之事明白に付、其趣を以去ル酉年十一月五日之御祝無之候。

但御當代御具足餅は、當正月御祝已後御臺處に有之を御祝也。此度御相續初て之御祝故、御儉約中に候へとも今年中染餅頂戴被仰付候。

一同十二日　御損亡高四萬五百九十一石餘、御屆書堀田相模守様え被差出候。

一同十四日　大御目付御回狀、貞享改曆以後是迄貞享曆相用候處、違有之に付測量被仰付、今度京都改曆宣下曆號定陳儀被遂行、新曆號寶曆甲戌曆より被相定候。仍之來亥曆より新曆頒行之事に候。

戌十一月

一同十八日　道奉行永井民部殿え、御中屋敷北之方練塀修覆出來御屆有り。

一十一月廿一日　御饗應、來々子年迄被指延度御願御世話被成候付、堀田様え御三所物金紋獅子（祐乘作交

肴一籠、御使者赤石東左衞門を以被進候。

一同廿五日　大御目付觸、酒造之儀諸國共に元祿十丑年之石數寒造之儀定數三分一に限り、此外新酒等一切に可被禁止之旨正德五未十月相觸候。其後酒造米之儀相觸候義無之に付、今以右之定數相極り事に候。以來は諸國共に、元祿十丑年之定數迄は新酒、寒造等勝手次第たるべし。

一十二月三日　小田野又八郎去月十七日京都出足今日御當地ゑ到着、罷下之節伊勢ゑ御代參被仰付候。仍て御名代勤候趣左之通書上候。

一十一月廿二日兩宮へ御名代相勤候段、同月上旬久保倉彈正處ゑ、京都町人山下惣左衞門より案內爲致候。

一十一月十七日京都出足、同廿一日勢州山田久保倉太夫在宅へ着、同所一宿。白銀百兩兩宮へ御奉納之段彈正へ申渡候。

一銀五枚彈正へ被下候。御奉納銀幷被下候銀ともに家來を以彈正へ相渡候。

一同日晚酉刻より右之神樂相始、其節熨斗目長袴にて神樂殿ゑ相詰神酒頂戴之。

一同廿二日辰下刻於神樂殿に淨〆相濟。

一內宮ゑ參向拜宮、畢て外宮參。右兩宮之拜所別紙之通。

一同日晝時過歸參。

一十二月十三日　盛德院樣御中屋敷御殿出來、來ル十七日御移徙被遊候筈。然は同日永壽院樣、御中屋敷より御上屋敷奥御殿ゑ御移被遊候故、御同日にては事之外御取込にも相成に付、盛德院樣今日より本鄕へ被爲入御逗留被遊、十七日直々御中屋敷御殿ゑ御移被遊候也。

一同十五日　御曹司樣奥御殿ゑ御移徙被遊候。是迄は北御屋敷之內御部屋より、奥御殿ゑ被爲入候。

一同十七日　御二方樣御移徙之儀は十三日之處に有之、略ス。

一同十八日　昨夜中より雪降候付、今朝初雪御機嫌伺御使者龍田源太夫勤之。

一同廿一日　諸士繼目出仕有之。

一轉切支丹類族違變御屆例年今月在之候得共、違變無之に付御屆無之候。

一十二月廿五日　御家中ゑ被仰渡候は、丸に左り萬字紋所御障有之付被停止候付、右紋所之もの速に可相改候。武器は御構無之候。右は松平阿波守樣御紋所に付てなり。

一今晚於御座之間歲暮之御料理有之候。

一同晦日　采雲院ゑ以前より御直參御代參在之譯は、廣德寺之住職時節不知御家中より出候出家之よし被勤候。其已後采雲院ゑ閑居被致候付、淨光院樣義宣公御位牌自分にて安置被申候よし。夫ゆへ德雲院樣御代以來御直參御代參も被遣候處、後住心得違候て時々御合力金等之義申出御面倒に付、寶永二丑年十一月九日野村八右衞門を以、右御位牌御苦勞に龍成候は丶、總泉寺ゑ被移候樣に采雲院ゑ申談、尤重て御合力筋不相

成段御斷申談候處承知被致候由に候。然ㇾ處今年も右躰之義有之、とかく御直參被遊且御代參等繁々被遣候故右之趣も有之付、此已後總泉寺に淨光院樣御位牌有之付、釆雲院ゑは正月廿五日御祥月に御番頭を以御代參、御燒香料金子二百疋、盆中燈籠幷金子二百疋被遣候迄にて常々御代參、尤御直參被相止可然之段御家老、御用人評議之上及言上候處、右之趣に被成置候旨被仰出候也。

一松平阿波守樣御順年に無之候得共御入國御願書被差出候處、來年御暇被下に可有之候、左候はゝ來々年御參府、其次御本順御暇年迄御在府之御心得可被成旨、御付札を以御差圖有之段爲御知申來、爲御歡奉札御用人より差出候。

○寶曆五 乙亥

一正月元日　七五三、御手前之御茶無之。

一同十一日　年始御盃公用にて不被下面々、今日被召出御盃被下候。

但年始病氣にて御召出不罷出面々、向後共に追て御盃不被下之段眞壁掃部助申渡之。

一同十四日　水戸淸音寺より爲寒中御見舞以書翰申上候處、右書狀相滯、此間吉田快隆老爲御年禮御越之節御持參、殊淸音寺より口上之覺書其旨趣は、開基淸音寺殿には全く佐竹家之御由緒故、同寺より向後諸事通問も在之書翰等も御取遣有之度由御用人迄委申來候へ共、久々中絕故、只今御取上候ては

所々相障候付御留守居より挨拶可然と相決、快隆まで中村政右衞門、龍田源太夫より申達候。（但手紙にて。）

一同十六日　御座之間御出座（御ふくさ物御半上下）萱橋給人并御百姓惣代罷登御目見、但給人は朱塗御盃、百姓は御座之間四ノ間へ罷出御目見斗。右畢て藥師寺村龍興寺、仁良川村滿福寺罷出獻上物等有之、御前へ御吸物獻之、二ケ寺へも出ル。御盃被下候節、龍興寺次に滿福寺出ル。

一右御盃、前々は寺院之次に給人被召出候得共、向後給人被召出、畢て寺院可被召出旨掃部助申渡。

一同十七日　尊壽院前大僧正より舊臘申來候は、轉法輪前右大臣殿御末子寅丸殿（當亥八歲）御附弟に被成候由右御歡昆布一箱、樽代五百疋被進候。

一同廿一日　御入部御願之御書付御用番酒井左衞門尉殿ゑ被差出候處、首尾能御受取置に付、御懇意御老中御先手衆なとへ御使者、御手紙等にて爲御知有之候。

一同廿六日　御入部之御供觸御内々被仰付候。但御膳番方にて御茶屋之者を以御觸有之候。

一同廿七日　酒井左衞門尉樣（當時御老中職）奥樣は盛德院樣御父方御伯母樣に被成御座候付、奥方ゑ兩崇之儀被仰達候處、今日彼方御取次小寺九十九、依田八右衞門より御相答之儀申來。

一鳥越奥樣今廿七日御袖留に付、御祝儀御小袖一重、干鯛等被進候。

一二月廿四日　今年俊交院樣五十御年賀之事故御祝儀可被進思召候へ共、あなたより堅御斷故、今日交肴一籠、まんちう二百、御樽代五百疋爲御歷被進候。

一三月三日　松平出雲守様奥様は盛德院様實御姉様に付、屋形様御伯母様之御續に付兩崇被仰合候。

一同八日　鳥越奥様御着帯に付、爲御祝儀御肴、さあや紅白二巻被進候。

一同廿四日　今度御歸國御禮使者宇都宮帯刀より江戸ゑ願有之、今年より御連狀御格書、御注文斗被相渡御着城之上御直惣御書御目錄は、不殘於江戸御家老部屋御用人相渡候筈極ル。

一四月十一日　上使本多伯耆守様御出、紗綾二十巻、銀子五十枚何も白臺御拜領。大書院御着座御演說之趣。

御意被成候は、國許へ之御暇被下置拜領物被仰付候。且御暇御禮近々可被仰付候段被仰出候。

屋形様御拜狀、御拜領物御頂戴、畢て御のし三方御自身被進候。如御先例御饗應有之、畢て御請 被仰上候趣。

國許ゑ之御暇被下置殊拜領物被仰付、且御暇御禮可被仰付之段被仰出、難有仕合奉存候。御請之義宜御賴仕候。

上使御起座御歸之節、爲御送御門地覆外まて御出なり。

一同十二日　大納言様より秋元但馬守様御出、御意之趣。

御意被成候は、昨日國許ゑ之御暇被仰出候付、卷物被下置段被仰出候。

一同十五日　御國元ゑ之御暇被仰上候付、山州久信御刀長二尺五寸一歩半代金十五枚折紙有之を御拜領。

一同十六日　淺草御藏火之御番、今日松平大和守様へ御引渡被成候。

一同廿一日　御座之間ゑ御出御目見有之、畢て水野平八郎御用聞町人手□十掛獻上、今度御屋敷御用被仰付、御知行高御時服拜領被仰付、難有之旨御番頭小野崎大藏披露之。御召料御袷一ツは御目錄を以被下、御財用奉行引渡。

一先頃御發駕被延置、今日又々來月二日御發駕可被遊之段、三枝仲奉にて御茶屋之者を以御供之面々ゑ被仰達候。右は盛德院樣御快方に付て也。

一同廿四日　御入部爲御祝儀御家老御番頭ゑ御料理被下候、并御供之面々不殘、御供無之面々は一役一人、右兩樣ともに近進並以上之面々於御廣座敷御酒、御吸物被下之。

一同廿五日　御拜領之卷物、銀子、上々樣方ゑ被進候。

一同廿九日　御入部に付秋田御一門、御家老ゑ、御暇御禮相濟候に付御直書被成下候面々、佐竹主計、佐竹主殿、佐竹大和、但佐竹新發意は幼少に付御書不被成下候。御家老は小田野又八郎、小瀨宮內ゑ、今日御使に秋田ゑ被差下候。但御書は御用人より御家老ゑ相渡候。

一五月二日　江戶御發駕御入部なり鐵炮五十挺、弓二十張、鑓三十筋、右御物頭越具迄三人被召連。其末は御道具も五十に被減候付、御物頭眞崎五郞左衞門越具迄假に被召連候。

一同廿三日　盛德院樣御病氣御全快に付御床揚御祝儀有り。

一六月朔日　御歸國御禮使者宇都宮帶刀去月十六日秋田出足今未刻過江戶着。御着城御當日御前ゑ被

召出御老中御連狀、幷西丸御老中御格書、御口上留等御直に被相渡候由。但、御獻上御目錄、御役人中ゑ之御書御目錄共に、延享四卯年より秋田に於て被相渡候へとも今年より被相改、以前之通御連狀、御格書、御口上留斗被相渡候。其餘は江戶御家老局にて御用人を以被相渡候筈、御下國前に相極候。

一六月二日　永壽院樣御病氣御勝不被遊候付、上々樣ゑ爲御知御用人共より申上候。

一永壽院樣寅刻御逝去。御年齡八十二。

一同三日　三人飛脚を以秋田へ達。

一御葬式御用太田丹下被仰付、岡淸七右御用被仰付、丹下ゑ加談相勤候樣に被仰渡候。

一同日　卯刻過御用番酒井左衞門尉樣ゑ、左之通御書付を以御屆被成候。

佐竹右京大夫曾祖母此間浮腫有之居候處、昨夜中より變症仕今寅刻死去仕候。右京大夫には養祖父之實方曾祖母之續に付、忌服無御座候。依之御屆申上候。已上。

六月三日　　、、、、、內
田崎忠四郎

覺

佐竹右京大夫、末家より本家相續仕候に付、寶曆四戌年四月中續合服忌之義御目附稻生下野守樣ゑ相伺候處、御付札を以被仰渡候趣。

永壽院

右者佐竹右京大夫末家佐竹故式部少輔妾、元祿年中本妻相定申候。然は故式部少輔嫡子故修理大夫義故右京大夫養子被仰付候節、領知家族共に本家ゑ引纒申候處、修理大夫不幸に付嫡子左兵衞督承祖にて、故右京大夫家督相續仕候。左兵衞督不幸に付當右京大夫末家より相續被仰付候に付、永壽院續幷忌服之義如何程に可有御座候哉。

御付紙之趣

書面之通は、永壽院は當右京大夫ためには養祖父之實方曾祖母之續に付、當右京大夫より相互服忌無之。右之通被仰渡候以上。

、、、、、内
田崎忠四郎

六月三日

一六月六日　昨晩一色周防守殿より御留主居迄御切紙到來、今日野村定右衞門儀、高崎惣左衞門同道にて曲淵豐後守殿宅ゑ罷出候處、去ル酉十一月八日被預置候三宅久太夫悴傳次郎出家之願相濟、預御免被成之旨被仰渡候付、定右衞門より差出候御請書左之通。

御請書之事

小普請支配田中出羽守樣御組元世話役三宅久太夫悴傳次郎儀、依父之科、去ル酉十一月八日中追放

被仰付、幼年に付十五歳迄私ぇ御預被遊候處、今般小石川白山原町淨土寺、右傳次郎中追放御免被成下弟子致出家爲仕度旨、本多長門守様ぇ御願申上候處、願之通被仰渡候付傳次郎御預御免被遊之旨被仰渡、難有仕合奉存候。仍御請書指上申處如件。

寶曆五年亥六月六日　　野村定右衞門

御奉行所

一六月七日　曲淵豐後守殿、一色周防守殿ぇ、昨日野村定右衞門ぇ被仰渡候儀に付御兩所ぇ左之通御請書差出候。

佐竹右京大夫家來野村定右衞門ぇ被預置候三宅久太夫悴傳次郎義、此度、小石川白山原町淨土寺弟子に致出家爲仕度之旨依願、右傳次郎御預御免被成置候旨昨日定右衞門に被仰渡候趣、國元ぇ可申遣候。爲其御屆申上候。已上。

六月七日　　、、、、内 福嶋　文吉

一同九日　永壽院様御出棺、總泉寺ぇ被爲入。

御誌石

媼諱類幕府士山崎氏之女延寶二年甲寅十月廿二日生江府幼石川某養爲子長爲從五位下式部少輔

佐竹義都側室生從四位下修理大夫義堅後擬正室寶暦五乙亥年六月三日以病終壽八十有二遂葬淺草橋場惣泉院號曰永壽院

蓋石

佐竹侯宜人山崎氏墓

一六月廿三日　銀子二十枚生肴一折、井上交泰院え、盛德院樣御病中御療治被成御賴御床揚迄相濟候付爲御藥禮御使者を以被進候。

一永壽院樣御病中御療治御賴被成候付、武田長春院え銀十五枚、井上交泰院へ銀五枚、望月三英老え同斷、村田長庵老へ金二千疋、前川玄德老へ同斷、御使者を以被進候。

一盛德院樣御床揚之御祝儀、御附々迄拜領もの有之候。

一六月晦日　三宅傳次郞義御國本にて御承知に付、今日御屆書御名前にて御用番酒井左衞門尉樣へ一ト通、去ル酉年右御用掛堀田相模守樣へ一ト通、去ル酉十一月御用番松平左近將監樣へ一ト通、都合三通被差出候。御留守居龍田源太夫勤之。

一七月朔日　宇都宮帶刀帷子半袴卯後刻登城、同道田崎忠四郞、御本丸え蠟燭三百挺、白鳥一御獻上。公方樣大納言樣御白書院え出御、御太刀銀馬代一枚帶刀獻上、西丸え蠟燭三百挺御獻上、御太刀銀馬代帶刀獻上。帶刀被召出御披露御奏者。

一兩丸御老中不殘、御太刀銀馬代（銀一枚ツヽ）帶刀獻上之。

一同二日　求馬様濱町御屋敷ぇ御引移被成候に付、御肴一折被進候。

一同三日　壹岐守様左之通御願書被差出候。

佐竹右京大夫家來私實弟佐竹主殿娘私方ぇ引取置、追て同姓求馬妻に仕婚姻相整申度奉願候。

已上。

七月三日　佐竹壹岐守

右之通に付御添御願書被差出候。

一同五日　土用御機嫌御伺御國使者大和田兵左衞門（在番之御臺處役）勤之。

一同十五日　昨日御勘定所より御回狀に付今日大手後御勘定所ぇ田崎忠四郎罷出候處、曲淵豐後守殿、一色周防守殿、大井伊勢守殿、大橋近江守殿御列座、左之通御書付を以周防守殿被仰渡候。

萬石以上領分圍籾之儀、酉年圍籾之分は當年詰替、戌年圍籾之分は來年詰替可被申候。

但當亥年之儀は圍籾致候に不及候。

右之通忠四郎罷歸訴之。

一同十八日　昨晩御留守居迄御切紙致到來、今日宇都宮帶刀登城、於檜之間西尾隱岐守殿御奉書被相渡候。

一同日　以御書付西尾隱岐守殿被仰渡候よし、右御書付寫參候。

佐竹壹岐守

佐竹右京大夫家來佐竹主殿娘其方ぇ引取置、追て嫡子求馬ぇ婚姻相整度由、願之通り可被致候。

右に付御禮之儀御伺候處、於國元承知之上、老中但馬守殿ぇ使者差上候樣に可仕之旨、以御付札被仰渡候。

一七月廿日　俊交院樣先達て御胸痛に付、去ル十四日より武田長春院御賴被成候處御大病に被爲成、翌廿一日御逝去被遊候。

一御用番御老中ぇ御忌服之儀、御留守居書付を以左之通御屆申上候。

佐竹右京大夫養父方之祖母此間胸痛にて罷在候處、致變症今申刻致死去候。仍之、右京大夫左之通服忌請申候。

忌　七月廿一日より八月廿一日迄　三十日

服　七月廿一日より十二月廿三日迄　百五十日

右之通に御座候間御屆仕候。以上。

七月廿一日　、、、、、內

田崎忠四郎

覺

佐竹右京大夫末家より本家相續仕候付、寶曆四戊年四月中、續合服忌之儀御目付稻生下野守殿ヘ相伺候處、右御書付ヘ御付札を以被仰渡候趣。

俊　交　院

右は同姓左兵衞督嫡母に御座候處、故左兵衞督亡父修理大夫存生之內養母に相定申候。然は、當右京大夫儀末家より故左兵衞督家相續被仰付候付、俊交院續幷服忌之儀如何程に可有御座候哉。

御付札之趣

書面之通は俊交院儀は、修理大夫存生之內左兵衞督養母に相定候得は、當右京大夫爲には養父方之祖母、定式之服忌にて候。

右之通被仰渡候。以上。

、、、、、內
田崎忠四郞

七月廿一日

右之趣、御懇意之御老中方へも爲御知被仰達候。忠四郞勤之。

一俊交院樣御逝去之段爲御知爲御機嫌窺、御曹司樣より岡淸七早打にて被差下候。

一太田丹下、平澤十右衞門御葬式御用被仰付候。

一同廿二日　昨日出足之趣にて、今日壹岐守様より、有馬中務大輔様へ右爲御知之御書被差出候。右之趣御用人御中間ゑ申含候。
一同廿四日　信太又左衞門御財用奉行儀、長山久平爲代今日京都ゑ出足罷登候に付、如毎々京所司代、大坂御城代、同所町御奉行、京町御奉行、禁裡附ゑ御書被進候。堂上方ゑ御口上一ト通り。但御忌中故御忌明之上相勤候様に、御書も其砌差出候様に申含。
一同廿六日　例年切支丹違變有之候得は御屆有之候得共、今年は是迄違變無之旨秋田より申來候付て、當月御屆之儀無之。
一同廿七日　俊交院様御出棺、總泉寺にて御葬送なり。

御誌石

夫人諱美代久留目侯玄蕃頭從四位下侍從有馬則維女實播磨守從五位下谷照憑女寶永三年丙戌六月六日生於丹州山家邑未笄移處江府久留目侯養爲子享保十乙巳九月六日嫁我世子修理大夫從四位下義堅君寶曆五年乙亥七月廿一日以病終壽五十遂葬淺艸橋場惣泉院號曰俊交院

蓋石

故秋田侯世子夫人有馬氏之墓

一八朔御祝儀御太刀馬代被獻候得共、御忌中に付御留守居御屆仕幷御伺書差出候て、御連狀は追て御忌

明之上差出候樣に西尾隱岐守殿御差圖也。又々御伺之上、後獻上八月廿三日に有之候。

一八月三日より五日迄俊交院樣二夜三日御法事有之、御名代須田内記勤之。

一同九日十日　圓明院樣御七回忌御法事今明日御執行有之。

一同十二日　川津忠助（元俊交院樣付頭役手代）今度有馬樣え御使者被仰付、御國許筑後久留米迄被遣候付、金六十兩被下候段被仰渡候。大坂より久留米まで渡海之事故、右入用之分歸□用被仰付候。內々中務大輔樣より御使者留に付出足暫延引申候、八月十七日罷下。

一同十四日　高橋多仲儀先月欠落致候付、甥小倉吉藏方より久離之願御用所へ申上候處御聞屆。猶、右に付左之通。

覺

佐竹右京大夫家來　高橋　多仲
同人　悴　同　源藏

右多仲儀、悴源藏召連去ル七月十三日致出奔、當時住所不相知候。以來見懸次第爲捕可申、若及異儀候はゝ、討捨にも可申付候。爲後日以使者申達候。

八月十四日

、、、、、使者　神戸介左衞門

一同十五日　市川出雲守殿御留守居年寄被蒙仰候以後田崎忠四郎印鑑不差出候付、今日御太刀馬代銀一枚致持參印鑑差出候。前々之通御書被遣候付忠四郎直々持參也。

一同十七日　鳥越奥樣御安產御姬樣御誕生、御母子樣とも御機嫌能被爲入候。

一同十九日廿日　通霄院樣三回御忌御法事在之候。

一同廿二日　御忌明に付堀田相模守殿え御屆ヶ有之候。俊交院樣御忌中也。

一求馬樣御緣女之儀先頃御願之通被御聞屆候付、西尾隱岐守殿へ御使者被差遣候、大番組頭鈴木彌生勤之。兩御丸御老中不殘田崎忠四郎勤之。

一同廿四日　秋田え御召仕女中被指下候付、此間通證文被相渡候。女上下十人、內小女二人、乘物十挺、小野崎源左衞門と申者之妻、同娘、幷下女下略。

一同廿七日　永壽院樣被成御座候御構え御曹司樣御引移、御部屋と申候。

○寶曆五　亥

一九月三日　御歸國御禮使者被召出候御禮御書、昨晩差出御窺相濟、今日如例鰹節一箱宛御獻上也。

　一御太刀馬代　　　　安藤彈正少弼殿

一干肴一折

右は御作事奉行被仰付候爲御歡被進之、御使役勤之。

一鯛一折　　　　御留主居年寄 戸田近江守殿

右は先頃女中被差下候節房川御證文被差出候に付、爲御禮被遣候。

一銀子十枚　　　　座當配當

右は俊交院樣御法事に付被下候。御留主居引渡之。

一生肴一折　お駒様え

右は御着府之爲御歡被進候、御使役勤之。

一表辻廻場之內昨夜倒者有之に付、御醫者小林安的被差出幷御城使罷出吟味之處、病人に紛無之に付辻番所え入置稻生下野守殿御目付御屆致候、田崎忠四郎勤之。御屆之趣。

佐竹右京大夫下谷屋敷辻番廻場之內、昨十五日夜五ッ頃、男無刀にて倒候付て辻番え引取置養育仕置候。如何可仕候哉御屆申上候。以上。

九月十六日　、、、、、內田崎忠四郎

別紙

別紙御屆申上候倒者え早速醫者差出爲見置候處病人紛無御座候。食事等爲給置申宿處相尋候處當時無宿之由申候。依之以別紙奉伺候。以上。

九月十六日　、、、、、內田崎忠四郎

一此外御城使御醫者など書付差出候儀略之。

一秋田大館之城當七月中甚雨にて土居崩候に付、以御書纂直御願被成候。繁多にて略之。

一九月十八日

一兩種千匹　横田備中守殿え

右は百人組之頭被仰付候付爲御喜被進之。
一生肴一折　原田順阿彌ぇ
右は願之通御同朋頭御免に付爲御悅被遣候、御城使勤之。
一同廿一日
一金子五百疋　西丸御坊主 佐藤宗信
右は今度湯治罷越候に付被下之。
一同廿五日
一鯛一折　橋本喜八郎殿
右は先日大館御城土居崩有之付、御願之儀何角御世話有之爲御禮被進候。御使役勤之。
一干鯛一箱　御本丸目付 鵜殿十郎左衞門殿
一御樽代三百疋
一同斷　西丸同 加藤喜左衞門殿
右向々御用御賴被成度之旨先頃被仰達候處、御承知之爲御禮被進候。御使役勤之。
一九月廿九日　望月九右衞門此度秋田ぇ引越被仰付候。妻同道にて罷下、幷下女一人房川通御證文出候事略之。

一十月三日

一兩種五百疋　西尾隱岐守殿え

右御同氏主水正殿御嫡左京殿、去月十五日初て御目見首尾好相濟候に付て爲御歡被進候。田崎忠四郞勤之。

一同十一日

一兩種千疋　御側衆 田沼主殿正殿え

右先頃御加增御拜領被成候に付爲御悅被進候、御使役勤之。

一熊皮二枚　御懇意御目付 稻生下野守殿え

一鮮肴一折

右、先頃池田信濃守殿於辻番所武藤與惣右衞門家來一儀間違有之處、御心添にて相濟候に付爲御禮被進候。

右に付用人え二百疋、御徒目付、御小人目付えも二百疋、百疋被下候。

一同十三日　松平右近將監殿え先頃鈴木平藏初て遂伺公候處、被成御逢候付右爲御禮、

一鯛一折　御懇意御老中 松平右近將監殿え

右御使者御使役勤之。

一銀三枚　　　　御同人中老　那波内匠

一同二枚　　　　御用人　闕口左太夫

右は平藏參上之儀何角致世話候に付被下之、平藏方より遣之。

一十月十六日　御席觸左之通。

大目付え

御城内外召連候供廻之儀、前々より相觸候通かさつに無之樣に申付候儀、且御曲輪之内は手代之者召連候儀無用可仕候。於外曲輪も手代之者跡に召連可申旨元文五年觸も有之候所、近キ頃猥相成、御曲輪内手代之者召連候面々も多有之趣相聞得候。先達相觸候通向後急度申付候樣、明十五日出仕之面々え席々にて可被相達候。

一同十七日　大目付御廻狀弁御書付。

女御入内に付獻上物、禁裏え御太刀、御馬代黃金三枚宛、女御え白銀二十枚宛。

松平加賀守　　松平陸奧守　　松平越前守

藤堂和泉守　　松平筑前守　　松平丹後守

細川越中守　　松平伊豫守　　松平安藝守

松平大膳大夫　　井伊掃部頭　　松平又三郎

松平勝五郎

禁裏え御太刀、御馬代黄金二枚宛、女御え白銀十枚宛。

松平讃岐守　松平土佐守　有馬中務大輔
酒井雅樂頭　上杉大炊頭　宗　對馬守
伊達遠江守　此方様　松平阿波守
松平隱岐守

禁裏え御太刀、御馬代黄金一枚宛、女御え白銀十枚宛。

松平左京大夫　松平中務大輔　松平式部大輔
松平大學頭　松平播磨守　松平越後守

來月下旬女御入内に付、爲御祝儀以使者右之通可有獻上候。使者衣服、勤方、日限等迄、於京都酒井讃岐守え承合候様可被申付候。

右之通可被相達候。

一同廿一日

一鯛一折　御懇意御老中　酒井左衞門尉殿

右御嫡子攝津守殿御奥方御安産、御嫡孫御出生に付爲御歡被進候。

一干鯛一箱

一御樽代五百疋

御奥方
攝津守殿

右先頃御安產御男子御出生に付、爲御悅以御目錄被進候。左衞門殿奥方、攝津守殿えも御歡一通被仰進候、御使役勤之。

但今日は七夜之御祝儀有之由に付て也。

一同廿五日　御領內御損亡調相濟候付御屆、御用番松平右近將監殿へ以書付被仰達候。

出羽國秋田領當五月より七月迄大雨降續度々洪水

有之當作不熟田方畑方虫付損亡之覺

高十八萬九千三百七十五石

右之通。

一須田内記當時在府御家老儀兼て痛所有之付、乘物御赦免之儀以御書松平右近將監殿御用番え被仰達。御留主居龍田源太夫。

私家來須田內記、用事申付其御地え爲差登置候、當亥六十歲罷成候。然は持病腰痛煩馬上斗にて難相勤躰に御座候間、乘物御赦免奉願候。上處。

十月十三日　佐竹右京大夫

松平右近將監樣
人々御中

右上包小奉書、上下折御双方御名書之。

一御當番御目付中より御留主居迄、須田內記役柄、祿柄幷當時乘輿仕候人數被爲聞度旨被仰聞候付、左之通以書付御答致候由訴之。

佐竹右京大夫家來乘物御免にて當時乘輿仕候者無御座候　且又須田內記役柄知行高之儀御尋被仰下候、高三千三百石、家老役相勤申候。任被仰下候御答申上候。以上。

十月廿五日

、、、、、內
龍田源太夫
田崎忠四郎

一同廿六日　松平右近將監殿より御留主居御左右有之罷出候處、御書付。

、、、、、內
須田內記

右乘物趣可爲願之通候。誓詞判元、御目付鈴木伊兵衞宅にて見候事。

右書付被相渡候付御目付御判元へも爲御知可致之所、夜中至候て明朝爲御知候筈。

一同廿七日　鈴木伊兵衞殿ゑ昨日被相渡候御書付之趣爲御知、且誓詞草稿入御覽候處、來月二日誓詞被仰付候間、五ッ時同道可罷出之旨被仰渡候。

一十一月二日　御目付衆之御添狀幷誓詞案文等之儀略之。但乘物御免之時は此所御吟味可申候。
一同三日　粕漬鮭御獻上也。
一同五日　御入內之御使者梅津百助今日出足京都え罷登候付、右勤之御注文鈴木平藏相渡之。其趣は略。
一同六日　來年御參勤之時節御窺御使札、今日被差出候、御使者松塚祐藏勤之。下書略。
一同八日　御入內に付於京都梅津百助勤之、御書以町飛脚被差登候御文躰。

一翰致啓上候。今度御入內首尾能可相濟旨目出度御儀奉存候。右御祝儀爲可申上以使札御太刀一腰、御馬代黃金二十兩獻上之仕候。宜奏達奉賴候。上處。

佐竹右京大夫

柳原前大納言殿
廣橋前大納言殿

脇付無之。

一毫致啓達候。此度御入內首尾好相濟可申旨目出度御儀奉存候。因茲爲御祝儀以使者御太刀一腰、御馬代黃金二十兩致獻上之候。其表可然樣御差圖賴入存候。上處。

佐竹右京大夫

酒井讃岐守様
人々御中

右之外略之。

一十一月十一日　御席觸到來之御書付。
御城內下馬より下乘迄被召連候人數、幷下乘內ぇ被召連候人數、輕き者幷又者に至迄不洩樣に、尤雨天之節長柄等爲持候節は人數相增候は其譯、或は窺之上人數多被召連候衆中は、何年何月誰殿ぇ相窺人數多被召連候段、右之趣從御名々致書付出來次第早々拙者宅ぇ可被差出候。尤嫡子有之分は右被召連候人數も書付可被指出候。此段御同席不殘通達可有之候。以上。
十一月　稻生下野守

一十一月十五日
一金子三百疋　谷村嘉順へ
右は三育老三回忌に相當今日より明日へ法事有之よし、爲香奠被下之。御用人より遣之。
一橋本玄歌宇治茶師今度出府付て御料理被下候。此度は獻上物無之に付被下物無之。
一同十六日　須田內記乘輿御願之通御免之旨、先月御用番松平右近將監殿より御書付被相渡候付、右御禮御飛札被差出候。田崎忠四郞勤之。

一筆致啓上候。然は私家來須田内記就病身乘物御赦免之儀願申上候所、願之通被仰付難有仕合奉存候。爲可申上呈飛札候。上處。

十一月六日

松平右近將監様

人々御中

右之通、十一月被仰渡候御用番え斗御書被差出候。此外御勤向無之。

一此間稻生下野守殿より被仰觸候儀に付、今日左之通書付を以御留主居致御屆置候。但御留主居手間無之御目付勤之。

此間被仰觸候下馬下乘内え召連候供廻之儀、此表にて難相聞儀御座候間國元え申遣、追て御屆可申上候。以上。

佐竹右京大夫内

十一月十六日

清水織部

一同廿一日　御鷹御獻上也。

一同廿二日　紀伊大納言殿御嫡孫岩千代殿、去朔日初て御目見相濟候付、爲御歡御使者左之通被進候。

紀伊大納言殿へ

一兩種箱肴　何も無御受納

一御樽代千疋

一同斷　同　宰相殿へ
一御太刀金馬代
一兩種千疋　同　岩千代殿へ
右之通被進之、此節御番頭上京に付御物頭勤之。
一岩千代殿初て御目見相濟候爲御歡、御使者被進候御方左之通。
尾張中納言殿　水戶　宰相殿
右直々御物頭勤之。
一紗綾三卷　御目付　鈴木伊兵衞殿
右は先頃須田內記事乘輿御免に付、判元御覽被成候付爲御禮被進候。御使役勤之。
一金子二百疋ツヽ　右同人御家來　二　人
右は世話致候に付被下候、御使役引渡之。
一黃鷹一居　水戶宰相殿
右は、兼て御內々御所望筋石川順仙老にて申來候付、今度御獻上殘一居被進候。龍田源太夫御使者勤之。
一同斷　若御年寄　板倉佐渡守殿へ

右は兼て御所望に付被進候、田崎忠四郎勤之。
一十一月廿四日　求馬様より就御吉辰御結納御祝儀御整、爲御悦御使者を被進候。
一干鯛一箱　　壹岐守様
右爲御祝儀以御使者被進候、御刀番勤之。
一干たい一おり　　お駒様へ
右は同斷に付御使役を以被進候。
一干鯛一折　　求馬様へ
右同斷。
一同廿六日　久保倉太夫以使者如例年獻上物仕候。
一同廿八日　紀伊宰相殿御嫡岩千代殿今日元服被仰付、御字御拜領之由書上申來。
一同廿九日　仙北郡山屋河崎村百姓長四郎伊勢參宮仕候處、酒井左衛門尉殿御領鼠ヶ關村枝郷早田村と申所にて相煩候所、養生被指加候得とも無程致病死候由。依之向方より右之趣相達候付、其節懸合役人幷其外え左之通被下候。御留主居より遣之。
一金子五百疋　　郡奉行　田中逸平
一同三百疋　　同手代　稻葉相三郎

一同二百疋ツヽ　大庄屋 佐藤喜惣治
　　　　　　　　醫者 長谷川玄常
　　　　　　　　　　 大龍寺
一同百疋ツヽ　早田村組頭 八十郎
　　　　　　　　　　 正兵衛
一同三百疋　同所宿 庄吉

右に付酒井左衞門尉殿ゑ御禮使者被差遣候、御留主居勤之。

一同晦日
一白銀一枚　久保倉太夫
一金子二百疋　使者

右之通は御曹司様より被下之。

一十二月朔日　相馬讃岐守様今日御婚禮御整に付御使者被進候。御使役勤之。
一求馬様今日御婚禮御整に付左之通。
一御太刀銀馬代一枚
　　　　　　　　求馬様へ
一兩種一荷

一兩種一荷　　　　お駒樣へ
右御使者御刀番勤之。此外へも御進物有之といへとも略之。
一同二日　橫手御城土居崩候付御願之御書被差出候事有之、略。
一同三日　大目付御廻狀。
去月廿六日女御入內相濟候付、爲御祝儀明三日服紗小袖麻上下着之四ッ時惣出仕有之候樣に、尤西丸えも罷出候事。
一出仕無之面々は、月番之老中但馬守宅え以使者御祝儀可申上候。
一右爲御祝儀在國在邑之面々は、老中但馬守え五萬石以上は使者、五萬石以下は飛札可差越候。
右之趣可被相觸候。
十二月二日
一同五日　大御目付御廻狀。
當年國々米不作之趣に付て直段高直に相成候、來春に至候ハヽ米直段彌相募下々可及難儀候間、先達て置籾被仰付候萬石以上之面々、酉戌兩年之置籾之內一ヶ年分之籾米、此節相拂候樣可被申付候。委細之儀は御勘定奉行可被承合候。
十二月

一今日寒入也。

一同七日　松平筑前守樣御嫡子修理大夫樣御婚禮御整被成候付、御付使者幷御進物被進候。

筑前守樣

一干鯛一箱ツヽ　おく樣

修理大夫樣

一干たい一はこ　修理大夫殿

一御たる代五百ひき　御おく方

一昆布一箱　本光院樣

右之通被進候。

一同九日　求馬樣去朔日御婚禮、今日御三ツ目御祝儀有之付

一鰡一折　壹岐守樣へ

右以目錄被進候、御刀番勤之。

一同十四日　御席觸御廻狀幷御書付。

大目付

嫡孫承祖相願候節嫡孫養子と相願候類も間々有之候。以來は都て嫡孫承祖と相願可申候。

右之趣向々え可被相達候。以上。

一同十八日　大館給人中田孫兵衞三男左内儀那可忠兵衞爲召登扶助置候處、不行跡之儀有之久離致度御届。

佐竹右京大夫家來
中田孫兵衞三男
中田左内
當亥二十三歳

右左內儀、家來那可忠左衞門甥に付國元より召呼扶助致置候處に、甚不行跡之儀有之付右之趣實父孫兵衞方え申遣候得は、右孫兵衞始親類共不殘久離致候段申遣候。依之、忠左衞門儀も同然久離仕度旨相願候付願之通申付候。御帳被留置被下度候、下略。

十二月十八日

、、、、、內
神戸文右衞門

一尾張宰相殿御嫡子熊五郎殿、去月廿三日御髮置御祝儀相濟候爲御歡御使者被進候。御物頭勤之。紀伊水戸え御使者出候、是には略之。

一紀伊宰相殿御嫡岩千代殿先頃御元服、幷常陸介殿に御改號之御歡御使者被遣候。

右に付尾張、水戸えも御使者出候。

一兩種千疋　大岡吉次郎殿

右は此度御目見被仰付候爲御歡被遣候。御使役。

一お長様松浦壹岐守殿御息女御箸初に付爲御歡御使者之事下略。

一同廿二日

栗生兵藏

自分儀勤役中、同役高橋多仲代御用代金致押領自分へ爲申知候處、夫迄に承置多仲致逐電候に付右子細遂披露置候段、甚不調法之至候。依て江戸表御城下三里四方并羽州秋田、野州藥師寺領徘徊差塞奉公被召放者也。

一同廿三日　去月十一日、稻生下野守殿より下馬下乘之内え被召連候儀被仰渡候付、以書付田崎忠四郎致御屆之趣。

佐竹右京大夫下馬より下乘迄召連候人數

一、一人　留主居役徒頭役之内　　一、二人　刀番

一、三人　侍　　一、一人　手廻使番徒並

一、二人　挾箱持　　一、一人　草履取但雨天之節は長柄一人

一、四人　駕籠之者。

下乘より御玄冠え召連候人數

一、一人　留主居役徒頭役之内　　一、二人　刀番

一、一人　手廻使番徒並　　一、一人　草履取但雨天之節は長柄持一人

一、一人、挾箱持但中之御門外迄

右之通御座候。

裝束之節右定人數之外下乘迄召連候人數

一、參內傘持　一人

右之外行列相離下乘迄入候人數

一、太刀持介添侍　一人　　一、差替持侍　一人

一、烏帽子介添　一人　　一、烏帽子持　一人

一、太刀箱持　一人

右之通御座候。

長袴着之節定人數之外下乘迄左之通召連候

一、差替持侍　一人

右之通御座候。已上。

田崎忠四郎

十二月

一同廿五日　鹽引鮭御獻上。

一神尾備前守殿衆より別紙之趣被成御吟味、御書付明朝迄に御差出被成候樣備前守殿被申候由申來候。

別紙

右京大夫嫡子
佐竹修理大夫

右者享保十七同十八年爲年始御祝儀御簾中樣ゑ差上物無之哉、有無之事。

此方樣より差出候書付。

佐竹故修理大夫享保十七子年五月九日故右京大夫養子被仰付、同十八丑年爲年始御祝儀御簾中樣へ差上物無御座候。已上。

十二月廿五日　、、、、、內
田崎忠四郎

一林大學頭殿より御留主居迄、武家補任補入付て別紙御書付二通被差越候に付、右被仰遣候通御書付被差越候。

張紙與

源義局（チカ）　享保八癸卯十一月五日生寶曆三癸亥年八月廿七日左兵衞督義眞養爲嗣于時年三十一實壹岐守義道第一男母兵部少輔長義之女同年九月三日相續同年十二月十八日從四位下侍從右京大夫。

右美濃紙ゑ認眞字也。

義峯　寛延二己巳年八月十日卒。

義眞　寶暦三癸酉年八月廿日卒。

右美濃紙ぇ認之眞字也。

一同廿六日　此度御中屋鋪表御土藏ぇ取付御物見御拵に付、繪圖面を以道御奉行ぇ被差出候。

繪圖面之通中屋敷表土藏ぇ此度物見出格子取付候に付、下水幅狹往還近、火之元等不用心も御座候間、出格子前通下水際より出幅一尺、長五間、高五尺假駒寄仕度奉窺候。以上。

、、、、、內
五月女善藏

十二月廿六日

一同廿七日　先頃横手御城土居崩御修補之儀御願被仰上候節、御繪圖御差圖にて相濟候爲御禮。

一鯛一折　　橋本喜八郎殿へ

右御使者御使役勤之。

一御入內之御使者梅津百助御用相濟、去十五日京都出立今日歸着に付、御注文之通相勤候旨訴之。左之通。

一十月五日御進獻有之

禁裏ぇ

一御太刀　一腰

一御馬代黄金二枚

長橋奏者所にて御附兩武家衆御對座、雅裳衆披露、畢て傳奏を以可遂披露之旨被仰候。

□姫ノ由
女御え

一白かね　百兩

御玄冠奥に殿上人三人御對座取次披露、畢て以傳奏可遂披露旨村上西市正を以被仰出候。

右之外御進物之分略之。

○寶暦六子年

一正月三日　舊臘被仰觸候通、御入内首尾能相濟候付御歡之御使者根本幸右衛門御右筆筆頭御國使者被仰付候儀御留主居田崎忠四郎同道、御用番本多伯耆守殿へ御連狀御格書持參相勤候。御案内。

一筆致啓上候。公方樣、大納言樣益御機嫌能被成御座奉恐悅候。然者去月廿六日御入内首尾能相濟候段承知仕、目出度御儀奉存候。此旨爲可申上呈使札候。上處。

十二月十三日

堀田　相模守樣

酒井左衛門尉様
本多　伯耆守様
松平右近將監様
西尾　隱岐守様
西丸御老中格書
秋元　但馬守様

一同五日

一御太刀金馬代　　稻葉越中守殿
一干肴一折

右者舊冬御側被仰付候付爲御歡被進候。

一同六日　賀姬様舊臘廿四日より御熱有之處御疱瘡被爲見候由、向方御留主居より内々申來候。

一同八日　賀姬様御疱瘡宜、御輕御樣體之趣に有之候。

一同十三日　今日新知、御加增等被下候。御家老須田内記病氣に付川井七左衛門御財用奉行牛丸市左衛門を以被仰渡候。

御加增
一高二十石　　江戸定居　平澤十右衛門

右者數年御側相勤候に付被下候。

一同十五石　御右筆々頭　根本幸右衞門

右者數年相勤候付被下之。

一同三十石　吟味役　下川勘左衞門

同斷。但是迄被下候御宛行增御役料共被召上候。

一高三十石

一銀二枚　皆川　林悅

右數年勤功付被下之、銀子は爲御役料被下之。是迄之被下物は不殘被召上候。

右之外御加扶持御給銀等被下候得共其面々略之。

一同十五日　御席觸到來、御書付左之通。

御同席御居宅類燒之節參勤之御用捨不被仰出御參府有之例、又候御用捨にて御參府無之例、右兩樣共享保年中以來有之分承度候。

一同十八日　去十五日伊丹兵庫頭殿御尋之事、今日松平出羽守殿衆迄差越候。

佐竹右京大夫居屋敷享保五子年三月廿七日就類燒、以御奉書參勤御免被成置、八月中參府仕候樣被仰出候。右御奉書羽州山形驛旅宿ゑ相達候付、其驛より歸國仕同年八月六日上府仕候。以上。

、、、、、、内
龍田源太夫

正月十八日

一正月十八日　未後刻、御用番本多伯耆守殿御用人より御留主居迄手紙到來。

御鷹之鶴宿繼奉書可相渡候間、只今御一人御出候樣伯耆守被申候。以上。

猶以持人御用意可被成候以上。

正月十八日　　本多伯耆守內

佐竹右京大夫樣

御留主居中

右御請書御留主居より差出候。

一宿繼御奉書被相渡、鶴一被相渡候。田崎忠四郎請取之。

一同廿二日　表御門御修覆に付、二月朔日より南御門御內玄冠にて御客幷御使者御引受候段、御家門樣方へ爲御知被成候。御留主居奉札にて申達候。

一同廿三日

一金子三十兩　　松平右近將監殿中老　那波　杢

右者娘婚禮相整候に付內々物入も可有之被下候。御用人より遣候。

一同廿九日　先頃御中屋敷御物見前假駒寄被附置度旨被仰立候處、道御奉行小長谷喜太郎殿御越御見

分之上御願相濟候付、右爲御禮左之通被進候。
一干鯛一箱　　小長谷喜太郎殿
一御樽代三百疋
右者御使役勤之。
一金子二百疋　　同人家來　園　伊太夫
右御願筋世話仕候付被下之。
右御進物御役方御障之由御斷御返し被成候。二月二日、時節爲御見舞被進候得は御受納被成候。
一二月二日　土屋越前守殿町奉行より御留主居え御左右有之付手代酒出孫左衞門罷出候所、越前守殿御逢被成、去冬武藤與惣右衞門家來勘兵衞酒狂にて人をあやめ放埓之致方、付て此度御仕置被仰付之由被仰渡候段、孫左衞門歸參訴之。
但御仕置之儀孫左衞門承合候處、江戶拂被仰付候よし也。
一同六日　南部龜五郎殿、盛德院樣御甥にて屋形樣御從弟之御續、付て御忌服昨夜にも御屆可被成候へ共、兼て龜五郎殿え御通問も無之其上御年も不相知候付旁々御問合等有之夜に入候付、今朝御用番堀田相模守殿へ龍田源太夫罷出致御屆候。
佐竹右京大夫養方從弟南部信濃守二男龜五郎、昨五日致死去候付忌服左之通受申候。

忌三日　二月五日より同七日まで
服七日　二月五日より同十一日まで
右之通御座候。以上。
二　月　六　日
龍田源太夫
右御受取置被成候。
一二月七日　明日御忌明に付御用番堀田相模守殿え左之通御届被成候。
佐竹右京大夫、養方之從弟南部信濃守二男龜五郎就死去、今日迄忌中にて罷有候。明日忌明申候付て此旨御届申上候。以上。
二　月　七　日
清水　織部
右中奉書半切紙上文字書之。
一同八日　昨夜松平陸奧守殿、松平大膳大夫殿衆より到來之書付。
當子年諸國人別改被差出候筈に付、諸事改方認方等は前々之通候間、人別改方帳面當八九月頃之內自分方え可被指出候。下略。
二　月　七　日
神尾備前守
松平陸奧守殿

松平大膳大夫殿

一同十二日　大目付御廻狀。

去年國々米不作之趣に付て直段高値相成候、當春にも至候はヽ米直段彌相募下々可及難儀、先達て置籾被仰付候萬石以上之面々、酉戌兩年之置籾之內一ヶ年分之籾米去年相拂候樣相達候。然所當春に至候ても直段彌高直に付、去年相拂候殘一ヶ年分も圍置候に不及候間、相拂之樣可被申付候。委細之儀は御勘定奉行可被承合候。

一同十五日　御鷹之鶴就御拜領、右御禮之御國使者梅津內藏之允（服紗物 麻上下）御留主居田崎忠四郎同道にて、御用番御老中堀田相模守殿へ致參上御連狀差出候。

干鯛　一箱　　佐竹右京大夫

右御本丸え斗御窺之處、明朝可被獻之旨相模守殿御用人を以被仰渡候。

一依田和泉守殿（町御奉行）以御書付御屆被仰達候。

佐竹右京大夫家來　清野　勇八（歲三十二）

同　木村　源藏（歲三十）

右勇八儀去亥十二月廿五日出奔、源藏儀同月廿二日致出奔當時住處不相知候。以來、見懸次第爲捕可申候。下略。

一二月十六日　昨日堀田相模守殿御差圖之通今朝梅津内藏丞（のしめ半袴）御城え罷出候。同道田崎忠四郎（ふくさ半袴。）

　干鯛　一箱

右於檜之間、御奏者本多長門守殿へ内藏之允直々御口上申上御目錄指上候處、御席言上可被成候由被仰聞候て御獻上相濟候。

右に付御奉書等被進候所略之。

一同十八日　子籠鮭御獻上也。

一同十九日　大御目付御廻狀到來。

大坂兩川口年々あさく成諸船出入津不自由有之付て、此段當地幷他國諸廻船、又は渡海船之石錢を以水尾堀申付候。石錢は、船出入とも諸荷物積候船よりは、荷物多分によらす其船之石高に應し可出之、右之趣於江戸表被仰渡候間可存其旨也。

亥十二月

覺

一諸船川内にて荷物積候はゝ勿論、たとへ沖積仕、又は沖にて荷物瀬取致候とも大坂へ來候船は、出入とも、荷物多分によらす其船之石高に應し、一石に付三錢宛之積石錢可指出候事。

一積荷物無之候はヽ、船にて出入候節は其段相斷石錢差出に不及事。
一大坂幷傳法廻船主より直々石錢可差出事。
右之外數ヶ條有之といへとも繁多故略之。
一同廿七日　松平隱岐守樣御祖母信詑院樣於薩州去月晦日就御卒去、定式御忌服被爲請に付今朝御用番ぇ御屆被成候由爲御知申來。仍早速御機嫌伺として田崎忠四郎參上。
一三月三日
一兩種五百疋　細井金右衛門殿
右者西丸御目付被仰付候爲御歡被進候、御使役勤之。
一干肴　一折　三次郎殿御事　石野八太夫殿
一御樽代五百疋
右今度御徒頭被仰付候爲御歡被進候、御使役勤之。
但御徒頭定式御進物無之候得共、御由緒有之付被進候。
一三月五日　萱橋御料所村々より、猪多田畑荒候に付て申立候付、鐵炮打申度願大嶋助兵衛より申立候付、今日御鷹方戸田五助殿ぇ左之通御書付指出候。
一　佐竹右京大夫領分、下野國河内郡之內都賀郡之內村々猪多出田畑荒申候付、鐵炮爲打申度候。御

鷹場之儀御座候故御障も無御座候哉奉伺候。以上。

三月

五月女善藏内、、、、、

別紙

佐竹右京大夫下野國領分村々

河內郡之內

藥師寺村　仁良川村　町田村　田中村　東根村　絹板村

磯部村　花田村　坪山むら

三月九日戸田五助殿より御付札　書面之九ヶ村御鷹捉飼場にては無御座候。

都賀郡之內

萱橋村　山田村　飯田村

同　書面之通三ヶ村御鷹捉飼場村無御座候。

右十二ヶ村

右之通御座候。以上。

三月

五月女善藏内、、、、、

右之外略之。

一同六日　三味線堀際駒寄朽損候付、御拵直之儀道御奉行小長谷喜太郎殿へ以御書付被仰達候。

佐竹右京大夫居屋鋪前三味線堀際駒寄朽損候、付て繪圖面之通拵直申候。依之御届仕候。以上。

三月六日　　　、、、、、内
五月女善藏

右之通差出候處御聞届被成候よし。但出來に付四月朔日御届有之。

一三月七日　所々辻番所屋根朽損候付、葺替之儀稻生下野守殿御目付え以御書付被仰届候。

佐竹右京大夫裏門東方辻番所番人乍居、同外繋、幷七軒丁辻番所番人乍居、右三ヶ所屋根葺替仕候。依之御届仕候。以上。

三月七日　　　、、、、、内
龍田源太夫

右書付差出候處御受取置候段被仰聞候。但葺替出來に付四月朔日御届有之。

一同九日　小長谷喜太郎殿三味線堀駒寄御見分之節、御普請奉行へも御斷被成候哉と御尋御座候に付、其節書付にて、御ふしん御奉行へは御届申上候儀無之趣申上候。

一同十日　伊木兵庫頭殿鐵炮改大目付え、萱橋御領にて鐵炮爲御打被成度旨被仰達候付、田崎忠四郎致御伺候趣。

佐竹右京大夫下野領分、都賀郡之内村々え猪多出田畑荒申候付鐵炮爲打申度候。御鷹方相障儀も御座候哉と相窺候所、御障も無之旨戸田五助樣御差圖御座候。依之、證文如何相認可申候哉奉

伺候。以上。

三月十日　　　　五月女善藏

右書付を以相伺候處、追て御證文下書可被相渡候由、尤御兩判にて出候由兵庫頭殿用人申聞。猶同人申候は、關八州御領知有之御方樣御代替幷御名改等之節は、鐵炮改帳御兩判にて被指出候事候處、色々吟味仕候得共右御帳無之候。いつほと被差出候哉と申候付忠四郎及挨拶候は、先代當代共、右帳差出候覺無之候。彌不差出候はゝいかゝ可致哉と承合候處、左候はゝ唯今被差出候て宜候由申候付て、押て御參府候はゝ早速御兩判之御帳差出候樣可仕旨忠四郎申談候由、同人訴之。

一三月十一日　石河土佐守殿先頃御留主居年寄被仰付候付、爲御歡左之通被進候。

一御太刀馬代五枚

一干肴　一折　　石河土佐守殿

右御目録を以被進候、御使役勤之。

一御太刀馬代

一銀　一枚　　右同人へ

右田崎忠四郎印鑑差出候付て自分之進物致持參候。例之通御書被指出候、忠四郎勤之、御文法定例之通略之。

一同十七日　吉田專助姉此度信州上田ゑ差遣候付、碓氷御關所通御證文、此旨河野豐後守殿ゑ被仰込候處、御判出來被差出候趣。
　亂心尼一人乘物にて江戸より信州上田迄、碓氷關所無相違可被相通候。下略。

一同十九日
　一銀子二枚　石川　順仙
右此度嫡子出生に付格別之御吟味を以被下之。

一同廿日　大御目付御廻狀。
　明後廿二日御簾中樣就御着帶、爲御祝儀溜詰御譜代大名、同嫡子、高家、鴈之間詰、同嫡子、菊之間緣類詰、同嫡子、布衣以上之御役人熨斗目半袴着用御本丸、西丸ゑ可有登城候。
　但出仕無之面々、月番但馬守宅へ以使者御祝儀可申上候。在國在邑面々は、老中但馬守ゑ飛札可被差越候事。
　三月廿日

一三月廿五日　西丸御徒目付吉川十右衞門、同役惣寄合仕候付左之通被下候。
　一金子五百疋　吉川十右衞門

一四月朔日

一兜羅綿二疋　御用御賴御目付
鵜殿十郞左衞門
一生肴　一折
右此度久能御宮御修覆御用被蒙仰御越に付、爲御餞別被進候。
一同三日
一熊皮二枚箱入　道御奉行
小長谷喜太郞殿
一生肴一折
右三味線堀駒寄御見分之節御心入有之に付、時節爲御見舞以使者被進候。
一金子二百疋　御同人用人
園　伊太夫
右之節何角世話仕候付被下候。
一とろめん二疋
稻生下野守殿
一鮮肴一折
右者、下馬より御玄冠迄御供人數之儀何角御心添有之付右御禮被進候得共、時節爲御見廻之御口上にて被遣候。
一金子二百疋宛　御同人用人
二　人
右之節世話仕候付被下候、御使役引渡。

一同五日　西尾隱岐守殿御老中、御懇意御用番田崎忠四郎參上以書付御伺仕候。
佐竹右京大夫爲參勤去月十九日國元致發足、當五日參府致候日積兼て申越候處、領内境山十幷新庄領深雪、其上雪消立洪水にて川々橋落所々致逗留、去廿五日新庄領金山驛え止宿仕、此上道中滯無御座候得は當八日着府之日積之通御座候得とも、雪途内は日積難相成趣故、若十日方に着府之日積に罷成申儀難斗御座候。左候得は參府及延引申候間、八日十日之御日柄に致參府候ても可然哉御内々御窺申上候。以上。

四　月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　内
田崎忠四郎

右以書付致御伺候處、御道中御差滯にて御旅行相延候事故、兩日之御日柄にても御着苦からす候間此段御旅中へ可申上候由御用人を以忠四郎え被仰出候よし。依之今日晝立之御飛脚御用人より御道中迄立置候。

一同六日　屋形樣御足に御痛處有之付御足袋御願被仰上候。西尾隱岐守殿へ被差出候處即晩御付札。
足袋用可被申候。

一今日被差出候御連狀御案詞。
一筆致啓上候。公方樣、大納言樣倍御機嫌能被成御座奉恐悅候。然は去廿二日、御簾中樣被進御着帶段致承知目出度御儀奉存候。右御歡爲可申上呈飛札候。上處。

三月廿七日

御連狀

西丸御老中 秋元但馬守樣

一四月六日　御簾中樣御着帶に付御安產御祈禱觀理院ゑ御賴被仰遣候。

一御初穗白銀十枚　　觀　理　院へ

右爲御初尾被遣候、龍田源太夫直々持參御口上申述候。

右之趣御用番御老中西尾隱岐守殿へ、西丸御老中秋元但馬守殿へも直々源太夫御屆仕候由訴之。

一四月九日　屋形樣今日御着府被遊候。

一今曉酒井石見守殿御長屋（土手下下馬後）出火に付、御用番西尾隱岐守殿幷秋元但馬守殿（西丸御老中）ゑ御留主居中村政右衞門參上御機嫌伺候處、無御別條之段被仰出候旨今日御途中迄申上候。

但御止宿程隔候得ば、御連狀被指出候得とも草荷御發駕御途中にて御承知之事故、御使者勤也。

一同十日　西尾隱岐守殿（御用番御老中）ゑ龍田源太夫罷出、明朝御客對成御登城前御見舞被成度旨被仰進候處、御客對に御出候はゝ御逢可被成旨御挨拶之よし、源太夫訴之。

一同十一日　西尾隱岐守殿爲御客對御出、夫より御出懸西丸御老中秋元但馬守殿へ、御登城前御出御對面也。

一同十六日　今日御參府之上使松平右近將監殿御出也。
一卽刻御奉書御到來、明十三日御登城御參勤之御禮被仰上候樣被仰達候也。
一明日御參勤御禮被仰上候付御獻上物御窺被差出候。
但御簾中樣當御參勤より御獻上物有之故伺等之儀、後には猶以吟味可有之候。伺書等之書形も、大納言樣、御簾中樣一紙にて可然候。
一縮紵　三卷
一干鯛　一箱　御側衆田沼主殿頭殿へ
一御樽代千疋
右御懇意被爲成候付被進候、御使役勤之。
一同十三日　於御黑書院御參勤之御禮被仰上候。上意、自分儀息災にて參勤一段と有之由。
一同十四日　御座之間え御出御袴斗。
須田政三郎
右親內記病氣に付看病御暇被下罷登、此度親同前罷下候付御目見、披露梅津百助。
但政三郎儀、御家老百助次に出席御目見也。
一諸士繼目出仕有之。

一岡部丈右衛門去冬御奉公に被召出候、新知七十石拜領被仰付候。

一同十六日
一袷 着用 一　喜多十太夫

右御目見被仰付、御饗應之節御賴被遊候段上意有之、披露鈴木平藏。十太夫退出之節於石爐間御袷一御目錄被下之、同人引渡之。

一長袴 着用 一具　松田　又八
一麻上下 同 一具　同　又之允

右は御目見被仰付右同斷之御意被成下候。

一淺草御藏火之御番以御奉書被仰付候、爲御禮左之通御使者勤。
兩御丸
御老中不殘　若御年寄不殘

右御使者御留主居勤之。

一同十七日　御出駕御烏帽子御直垂。是今日上野御宮え御參詣、夫より惣御靈屋御裝束之儘御參詣。是御參府以後初て也。

一同十八日
一兩種　千疋　御先手 吉田小右衛門殿へ

右者先頃上使御出之節御取持に御出に付被進候、御使役勤之。

一同十九日　御家督之御祝儀五月中御老中御招請被成度旨、今日、小笠原縫殿助殿を以西尾隱岐守殿へ被指出候處、卽日

　五月十三日と被仰聞候。

右に付御老中方ゑ御使者を以、彌其節御出候樣にと御家老御使者にて被仰達候。若御年寄へは御番頭御使者勤之。

一同廿一日　信太又左衛門（在京奉行）代秋山長右衛門、去ル五日秋田出足京都ゑ北國罷登候付、御出勤幷御口上

一通相勤候分從御當地直々京都ゑ被差登候。

一鯛　一折　（若御年寄御懇意）松平宮內少輔殿へ

右者此間御同姓幸太郎殿御袖留之爲御祝儀以御使者被進候、田崎忠四郎勤之。

一同廿五日　松平阿波守樣御參府以後初て被爲入於小書院御對顏、屋形樣（御服紗物御麻上下）御餅、菓子、御酒、御吸物、御盃事有之、今日御番所御取次斗麻上下、小書院御目通麻上下。

一同廿八日　松平加賀守樣御出、此方樣御參府以後初て被爲入、屋形樣上御使者之間邊迄御出向直々御先立、於小書院御のし出、御料理御斷に付御吸物出御盃事有之、爲御取持齋藤長八郎殿御越、御家老被召出候。御曹司樣御對顏（御ふくさ物御麻上下）。

一五月七日　大岡出雲守殿御懇意若御年寄御嫡兵庫頭殿御緣組被仰出候、爲御喜左之通。

一干鯛　一箱

大岡出雲守殿へ

一御樽代五百疋

右之通以御目錄被進候、御留主居勤之。

一今日御役替

京都所司代　松平右京大夫殿

大坂御城代　井上　河內守殿

一松平右京大夫殿京所司代井上河內守殿大坂御城代今日御役替被仰付候爲御歡、御使者田崎忠四郞勤之。

但京所司代は侍從、大坂御城代は四品に被仰付候由、右御歡も申加候よし忠四郞訴之。

一西尾隱岐守殿御老中御懇意京所司代御引渡之御用被仰付候由、夜分に相至候付今日御歡使者不被遣候。

一同十一日

一御太刀金馬代　京所司代松平右京大夫殿

一兩種五百疋

右者今度所司代被仰付且任侍從より爲御祝儀被進候、御使者御留主居。

但寬保二年以來侍從成御進物別段被進候得共、細川越中守殿御問合被成候所、侍從成御進物別段無

之由、此度より侍從成御進物相止候。

一御太刀金馬代　　井上河內守殿

一干鯛　一箱

右大坂御城代被仰付候且被叙四品候爲御祝儀被進候、御留主居勤之。

一干鯛　一折　　寺社御奉行　阿部伊豫守殿

右寺社御奉行被仰付候爲御歡被進候、御使者役勤之。

一同十三日　御老中今日御招請也。

御老中　西尾隱岐守殿　　西丸御老中　秋元但馬守殿　　若御年寄　小出信濃守殿

西丸若御年寄　酒井石見守殿　　御奏者　永井伊賀守殿　　同　酒井下野守殿

御留主居年寄　戶田近江守殿　　大目付　松下肥前守殿　　禁裏付　田付又四郎殿

浦賀奉行　奧津能登守殿

右之通御出被成候也。

一同十六日　御家老御祝儀二日目御饗應。

一同十七日　松平丹波守樣御妹おしん樣、兼て遠山大膳亮殿ぇ御緣組有之付、當月廿八日大膳亮殿へ御引取來月三日御婚禮御調被成候由、丹波守樣より爲御知申來候。

一同十九日　御領内能代湊火災御屆、御用番酒井左衞門尉殿御老中え以御書付御屆。

私領内出羽國山本郡能代湊、當四月廿六日夜亥刻町屋より出火、風烈丑刻迄燒失之覺

一町屋二百十二軒

一土藏一ヶ所

一土藏(マヽ)八ヶ所

右之通御座候故御屆仕候。人馬怪我無御座候。以上。

五月十九日　　　佐竹右京大夫

一今度御老中御招請相濟候付爲御祝儀、今日大番組頭より近進並迄於御廣座敷御吸物、御酒被下候。

一同廿一日　大御目付御廻狀。

京大佛殿諸伽藍大破に付、諸國勸化被仰出可巡行候所、失却相懸り爲造營不成付、江戸表へ勸化所建置御領私料武家方、幷寺社領在町ともに志之輩は物之多少によらす、下略。

一今日於殿中被仰付候次第。

大岡出雲守殿

御側御用人被仰付武州岩附之城地幷御加增五千石御拜領、被叙四品之段御直被仰付。

御側衆　　　松平民部大輔

右之通被仰付候。

濃州加納へ　永井伊賀守

奥州磐城平へ　安藤藏

一五月廿二日　大岡出雲守殿昨日御側御用人被仰付、御城地幷御加增五千石御拜領、被敍四品之段御承知、今日御歡御使者中村政右衞門勤之。

一大岡出雲守殿ぇ御側御用人被仰付候付御自勤被遊候。

但御並樣方も御勤、其上兼て御懇意之事故、

一同廿三日　西尾隱岐守殿御懇意御家老今度京所司代御引渡爲御用近々御當地御發足に付、爲御餞別左之通。

一三階　十五掛

一手綱　十五筋　西尾隱岐守殿へ

一鮮肴　一折

右之通以御目錄被進候、田崎忠四郞勤之。

一伊丹兵庫頭殿大目付鐵炮改兼帶去酉年此方御家督代以後下野御領鐵炮改御兩判御證文不被指出候付、品々差出可然旨御留主居迄申來、萱橋十一ヶむら鐵炮所持之者無御座候段御屆被成候。

但通霄院樣御家督之節も右御帳被差出不申候、是は御一代相缺候得共今更無據之由、彼方御用人申

事候。御代替之節は被差出事に候由右同人申候。

一同廿五日

一御太刀金馬代　御側御用人　大岡出雲守殿

一兩種　千疋

右者今度御側御用人被仰付武州岩附之城主被仰付、幷御加增五千石御拜領、且四品被叙候爲御祝儀被進候。御使者中村政右衞門。

一同廿七日　大御目付御廻狀。

屋鋪違變幷名改、次目家督等之儀屋鋪改え可相屆旨享保四年相觸候通、右之趣向後其度々屋鋪改え可被相屆候。

右之通先達て相觸候處屆無之面々多く有之由に候間、向後彌先達て相達候通、其度々屋敷改え相屆候樣向々え可被相達候。

五　月

一同廿八日　松平丹波守樣御妹おしんさま、今日靑山大膳亮殿え御引越來月三日御婚禮被成候由、御引越一通之御歡御使者被進候。

一交肴一籠　御側衆　高井兵部少輔殿

右爲御病氣御見舞御使者を以被進候、御使役勤之。

一六月朔日　御席觸。

大岡出雲守殿事御側御用人被仰付候付、在國在邑之輩より老中え連札被差越候節格狀可差越候、

御禮廻等之義も右可准候。

大岡出雲守

御禮事其外、老中、若年寄え一流送物有之候節、老中、若年寄へ贈物之中分に可相贈候。難相分品

は若年寄之通可相贈候。其餘は自分〲之取扱可爲次第候。

右之趣面々え可被相達候。以上。

五　月

一同四日

一熊皮　五枚　大御目付鐵炮改兼

伊丹兵庫頭殿

一生肴　一折

右下野領鐵炮御改此度被差出候付被進候。乍爾御役柄之事故時節御見舞之御口上にて被進候。御使

役勤之。

一金子三百疋　右御同人用人

稻生　半兵衞

一同斷　　　　　　　近澤幸右衞門

右者鐵炮御改帳之義何角世話仕候付被下候、御留主居より遣之。

一同五日　高井久米之助殿へ以御使者被進候。

一御香奠銀二枚　　　高井久米之助殿

右者御同姓兵部少輔殿一七日御法事可有之、依之被進候趣被仰進候。

但御寺え可被相備候得共御取込可有之、乍略儀御賴被成候趣被遣候。御使役勤之。

一同六日　大岡出雲守殿今度御側御用人被仰付候、御家中え爲御祝儀被下物可然之旨御用人、御留主居評議有之左之通。

一銀三枚宛　　　出雲守殿御家老　二　人

一同二枚宛　　　御用人　三　人

右出雲守殿御領地幷御加增御拜領被成候付爲御祝儀被下候、御用人より遣之。

一御席觸廻狀御書付左之通。

今朝伯耆守殿被仰聞候。參勤之御禮之外自身對客之節御禮被相賴候御方々、向後、書付を以御禮被相願候樣にとの御事御座候。此段急度被申達候樣に被仰聞候。以上。

六　月

右御書付は御先手小笠原縫殿助殿、本多伯耆守殿被仰渡候由に付、細川有馬之御留主居より申來候。

一同九日　松平右近將監殿御病氣御同扁之由、依之爲御見舞今日左之通被進候。

一檜御重　一組

一交肴　一籠青籠　松平右近將監殿へ

右以御目錄被進候、御使者鈴木平藏。

一交肴　一籠　林午齋老へ

右者先頃より御病氣に付爲御見舞以使者被進候、御使役勤之。

一同十一日　大御目付御廻狀幷御書付。

萬石以上之面々家督之節、只今迄日光御宮ゑ獻上納物無之面々も、向後御太刀馬代御別當迄使者を以獻上可仕候。東叡山御宮ゑ之獻上之儀は只今迄之通たるへく候。

六　月

右之趣萬石以上之面々可被相觸候。

一細川越中守殿御領內度々御損亡有之に付、金二萬兩拜借被仰付候旨、於御白書院緣類御老中御列座被仰渡候由。

一同十四日　諸士繼目出仕被仰付候。

一御太刀金馬代

一兩種　　　　　　　　　　小堀和泉守殿

右者此度若御年寄被仰付候爲御祝儀被進候、御使者中村政右衛門。

一同十六日　松平右京大夫殿京都所司代井上河内守殿大坂御城代京、大坂ゑ御引越後御勤之御書、今日町飛脚にて御用人ゟ在京奉行秋山長右衛門迄遣之。下略。

一同十九日

一鮮鯛　一折　　　　　　　松平右近將監殿へ

右は御病氣御全快昨日御登城被成候爲御歡被進候、御留主居勤之。

一同廿一日　紀伊大納言殿御息女、今日、丹羽若狹守殿ゟ御結納御祝儀被遣候由。爲御喜紀伊大納言殿、同宰相殿、同常陸助殿ゑ御使者被進候。

一西尾隱岐守殿京都ゑ御供に被召連御用人ゑ左之通。

一銀　三枚宛　　隱岐守殿御用人二　人

右者此度御供にて罷登候に付被下候、以御目錄御留主居ゟ遣之。

一同廿三日　今日土用入。

一津輕御境樹植直之義先頃津輕へも秋田役人共より通問有之上、八月中御境奉行梅津喜七郎、羽石小七郎見分、先年御境樹古根圍置候所ゑ直々植繼可相成に付、御山役始、右之旨兩人中含津輕山役ゑ及案內、八月廿二日立會見分、九月朔日双方無出入植繼相濟候段、九月十四日秋田出足之御飛脚に御家老中より、今年詰合御家老大越甚右衞門方迄申來候付爰に記。

但御境奉行向方役人ゑ立會之儀は無之候由。

右者一件津輕役人中ゑ應對候書狀、御付札、御日記有之、九月廿八日津輕殿ゑ御挨拶之御使者被差遣候。

一同廿四日　松平隱岐守樣去年中御病氣にて御滯府、去朔日御參勤相濟候付御病後初て御出也。御かけ合之御料理被進候。御歸以後早速御使者被進候、御曹司樣御對顏。

一同廿五日　紀伊大納言殿御息女丹羽若狹守殿へ御婚禮に付、爲御歡兩種千疋被進候得共、御斷にて御受納無之。

一土用之御獻上物。

一串海鼠　一箱宛　兩御丸ゑ御獻上

一七月朔日

一鮮肴　一折　松平隱岐守殿へ

右者今日御箆刀之御役被仰付、今日御祝儀之品被差上候爲御祝儀被進候。

一同四日

一金子三百疋　谷村　嘉順

右者今度妻死去仕候付爲野菜代被下候、御用人より遣候。

一同六日　日光御門主え、於京都上總宮御息女格宮殿御產後御養生無御叶去月廿日薨去付、當御門主之御方表向御從弟續候得共實は御妹樣に御座候由、尤御忌中御勤被成候と申儀には無之候得共、御愼之由元光院より申來、御使者被進候。

一同八日　御茶辨當之儀堀田相模守殿え被差出候趣。

私儀所々廻勤仕候砌幷下屋敷へ罷越候節、差支候義も御座候て難儀仕候付、茶辨當爲持申度奉存候。並方之内にも爲持候方御座候、尤登城之節は爲持不申候　此段不苦義に御座候哉奉伺候已上。

七月八日　佐竹右京大夫

御付札

可爲勝手次第候

七月十七日堀田相模守殿被相渡候。

右中奉書半切認、上包みの紙上下折御名書之。

例書

松平阿波守殿、寳暦五年四月茶辨當被爲持度段伺被申上候處、御付札を以可爲勝手次第之旨御用番より被仰渡候由承知仕候。以上。

七月八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　、、、、、內
田崎忠四郎

右中奉書半切認、上包みの紙、例書と認之。

右御書付御用番相模守殿ゑ差出候處、首尾好御請取置被成候。

一御窺筋は格別之事故御懇意御老中方ゑ爲御知被差出候、同人勤之。

一下谷七軒町御屋敷前通板橋繕ふしん、幷中御屋敷御門前道造御屆、道御奉行小長谷喜太郎殿へ御城使角田弟助を以被差出候。繪圖被差添候。

佐竹右京大夫向柳原中屋敷前街道道造仕度繪圖面を以申上候。出來之上地形堅り候迄日數三十日之間、御用之外車留之札立置申度候。此段御屆申上候。以上。

七月八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　、、、、、內
角田　弟助

佐竹右京大夫下谷七軒町居屋敷前街道、朽損申候故普請仕候付、假橋懸置往還仕候樣致候。併板橋之事故、御用之外は車通候義難相成御座候。右場處繪圖面を以申上候、下略。

七月八日　　　　　　　　　　　　　　　　　　、、、、、內
角田　弟助

右之通前々御留主居之名前にて出候付、於御右筆所認候得共御城使持參、猶又名前も違候付て御留主

居之方にて認差出候。

一同九日

一罌粟霰　一箱　　　日光御門主ゑ

右者於京都格宮様〈御門主之御從弟、實御妹〉御不幸に付爲御見舞以御使者被進候、石川文右衞門勤。

一同十日　町御奉行土屋越前守殿より御留主居ゑ御手紙幷御差紙到來。

申達候儀有之候間只今早々各之內一人拙者御役所ゑ可被罷出候。以上。

土屋越前守

佐竹右京大夫殿

留主居中

佐竹右京大夫醫師
伊東玄節二男
伊東勝次郎

右之者相尋候儀有之候間、同道人差添越前守御役所へ早々可被差出候。堀田相模守殿依御差圖申達候。

七月十日

右之通御催促有之付、御留主居同道有之勝次郎罷出候處、御尋之上同道人五月女善藏へ被預置候付

善藏預證文差出候由。其趣左之通。

一間野與十郎　歳十三　是は西丸御書院番松平下野守組大久保喜六郎家來

一伊東勝次郎　歳廿一　是は佐竹右京大夫醫師伊東玄節二男

此者共儀大久保喜六郎家來古屋忠太夫吟味一件に付預遣候。

右之通被仰渡私共え御預被成慥に奉預候。御用之節は早速召連可罷出候。爲後日仍如件。

子七月十日

西丸御書院番岡部伊賀守組大久保三太夫家來　田口貢

佐竹右京大夫家來　五月女善藏

右之通指出候由御留主居訴之。

右之通被預置候得共御用番へ御屆等無之。

一同十一日　田沼主殿頭殿御側衆御懇意兼て被仰達小野崎源左衛門御用人今日被爲逢候付、爲御禮御使者被遣候。御使役勤之。

一同十二日

一鯛　一折　御側御懇意田沼主殿頭殿

右今度小野崎源左衛門初て參上仕候處、御逢被成候爲御禮被進候。御使役勤之。

但前々は右爲御禮端物等被指添被進候得とも、御用人吟味之上相止。

右に付御家老ぇ五百疋、御用人ぇ三百疋宛被下候。

一金子二十兩　　青山治右衞門殿

右は奥御右筆治右衞門殿御實弟御養子御越候に付、爲御合力御用人より菅原洞齋を以被遣之。

一同十八日　昨日御茶辨當之儀爲御持被成候樣被仰渡候付、左之通御懇意之御老中方ぇ、右之趣爲御知被成候。

但昨晩夜陰に付今日御使者被遣候。

堀田相模守殿御禮使者　松平右近將監殿御禮爲御知　酒井左衞門尉殿御禮爲御知

右御使者中村政右衞門勤之。

但西尾隱岐守殿先頃御上京に付最前御伺之節も爲御知無之付、未御歸府無之付爲御知無之。

御側御用人御懇意
大岡出雲守殿　　御側衆
田沼主殿頭殿

右之御方ぇ爲御知御使者鈴木平藏御用人勤之。

一右之段御用御賴御目付、同御先手衆爲御知被成候。

一於京都西尾隱岐守殿御懇意御老中御進物等有之儀委有之候得共、略之。

一同廿一日

一羽二重　五百疋　長崎奉行　坪内駿河守殿
一生肴　一折
今度長崎ゑ御越に付御喜御暇乞旁被進候、御使役勤之。
一御席觸廻狀幷御書付。
今九時過於西丸御簾中樣御安產姬君樣御誕生、御機嫌能候。此段承知之上、先達て以御書付被仰渡候通可被相心得候。右之趣御同席中一刻も早々可有通達候、下略。
一右御廻狀相達候付則御出駕御帷子御半上下御觸之通八時以後に付御登城無之。
兩御丸御老中不殘　御側御用人大岡出雲守殿
右之通御自勤。
兩御丸若御年寄不殘
右之御方へは御歡之御使者田崎忠四郎。
御三家御物頭　御側衆御使役
右之御方ゑ御使者勤有之候。
一御並方兼て被仰合、姬君樣就御誕生御安全御成長之御祈禱、赤坂山王觀理院へ御使者を以御賴被成候。

御祈禱料
一白銀　十枚　　　觀理院僧正

右御留主居を以可被遣候處手間無之、手代岡部丈右衞門御使者勤之。

一同廿二日　水戸增井之正宗寺先頃入院被致候付、今度出府如先例御目見被致度旨谷村嘉順を以願被申候付、今日正宗寺參上也。右正宗寺御玄冠より直々對談之間へ致案內御用人出席致挨拶、夫より御對面所へ致誘引御前御出座御同席被爲逢、畢て陰之間ぇ被爲入。

一扇子箱　　　　正　宗　寺

右之通御持參也、御目通ぇは不出。

右御目見相濟候て以後正宗寺へ御餅、菓子、御吸物、御酒御饗應、御小姓勤之。畢て御家老對面御用人御式臺迄送之。

一今度姫君樣御誕生被成候爲御喜、京所司代、大坂御城代ぇ御勤之御書。

一筆致啓達候。公方樣、大納言樣倍御機嫌能被成御座奉恐悅候。然者、今月廿一日於西丸御簾中樣御安產姫君樣御誕生、目出度御儀奉存候。此旨爲可申述如此御座候。上處。

七　月

所司代
松平右京大夫樣

大坂御城代
井上　河內守樣　　上處發端有差別。

一同廿四日
一昆布　一箱　水戸 正宗寺
一金子　三百疋
右者一昨日御越之節扇子箱御持參に付、爲御挨拶御歩行使にて被遣之。
一毛氈　十五枚
一鰑菓子　三十　堀田相模守殿
一砂張御花入
一交肴　一籠
一熊皮　十枚
一三階　十懸　大岡出雲守殿
一鯉　一折
一熊皮　十枚
一鮑　一折　（マヽ）
右之通被進候、御使者鈴木平藏勤之。右之御家來共へも被下物有之也。
一同廿六日　去年中御國本御損亡有之付、御領民御救之趣以御書付御用番堀田相模守殿へ被指出候處、

長〻御書面故早速難見觸候間、熟覽□尋申事も有之候はゝ重て可申達候。能候はゝ直々受取置候由被仰候段、中村政右衞門訴之。御書付略之。

一同廿七日　御簾中樣今日爲御七夜御祝儀被獻之品々。

一干鯛　一箱　　公方樣へ　［進上　佐竹右京大夫］御觸札

一御樽　一荷

一同斷　　大納言樣　［　　］

一ちりめん十まき（しん上）

一干たい　一はこ　　御簾中樣え御獻上

一御たる　一荷

一御産衣　一かさね（しん上）

一干たい　一はこ　　姫君樣へ御獻上　［しん上　さ竹う京大夫］

一御たる　一荷

幅一寸　四寸二歩　［佐竹右京大夫］　シン　　御袖之内へ入候。

何方にても眞字に認被入置候由呉服後藤申事候付、其通認之入候て相納。

一御本丸之女中、大納言樣女中、御簾中樣女中へも被下候。

一御用番御老中堀田相模守殿へ、今日西丸御七夜之御祝儀無御滞相濟恐悦之御使者、御留主居勤之。

一干鯛　一折　　兩丸御老中不殘

一御樽代五百疋

一同斷　　大岡出雲守殿

一同斷　　兩丸若御年寄不殘

右之通被進候、御留主居手代勤之。

一鯣　一折　　兩丸御側衆

一三百(マヽ)疋

右之通御使役勤之。

一干鯛　一折　　所司代

一御樽代五百疋

一同斷　　大坂御城代

右者爲御祝儀被進候。京大坂にて被進候様に在京之奉行へ申達。

一同廿六日　大目付觸。

大目付へ

姫君樣御事
千代姫君樣と奉稱候事。
七　月
一同廿九日　今度御簾中樣御產御用被成御勤候付、兩御丸より御拜領物被成候御方左之通。
堀田相模守殿　酒井左衞門尉殿
秋元但馬守殿　大岡出雲守殿
右者爲御喜御使者被進候、御目付手代。
兩御丸御老中不殘　兩御丸若御年寄不殘
右者從兩丸御拜領物被成候爲御歡御使者被進候、同人勤之。
一同晦日　此間御腹痛煩に付明朔日御登城難被成思召御登城御斷、且八朔御太刀、以使者御獻上被成候趣被仰達候事。
私儀腹痛煩に付明朔日登城不仕候。依之致御屆候。以上。
七月晦日　佐竹右京大夫
爲八朔之御祝儀如例年明日公方樣、大納言樣え御太刀御馬代獻上仕候儀、私不快に付登城不致候間以使者獻上可仕候。此段御屆致候。以上。

佐竹右京大夫

七月晦日

右者來月御用番松平右京大夫殿へ指出候處、被請取置御承知被成候由。

一秋元但馬守殿ゑ被差出候御書、公方樣之文字除候迄也、仍略之。

一明日御登城無之段大目付不殘、御用御賴御目付御先手へも爲御知被成候。

○寶曆六子年

一八月朔日　今朝御登城可被遊候處、御腹痛に付御登城無之昨晩御用番松平右近將監殿え御屆有之、御獻上之御太刀馬代以御使者小野崎源左衞門、御用人被獻之、同道田崎忠四郎。

一今朝御登城無之段、於御城御目付稻生下野守殿え御坊主組木村養哲を以書付差出御屆相濟。

佐竹右京大夫腹痛煩にて今朝登城不仕候。以上。

八月朔日

上包無之。

一八月二日　小笠原縫殿助殿先頃より御病氣に付、今日御見舞之御使者幷御進物。

一交肴　一折　　小笠原縫殿助殿

右御目錄を以被進候、御使役勤之。

一同三日　大御目付御廻狀。

常陸國鹿嶋社頭大破に付修覆爲助成先達て關八州勸化被仰付候所、勸物不足に付猶又今度相願、武家方幷陸奥、出羽兩國勸化御免被成下候。武家方ゑは當年中右禰宜羽生求馬、社家共に可致勸化候、陸奥、出羽ゑ來丑正月より卯十二月迄之內、寺社奉行連印之勸狀持參御領、私領、寺社領、在町可致巡行候間、志之輩は物之多少不寄可致寄進旨、御領は御代官、私領領主、地頭より可被申渡候。

子七月

一鮮肴　一折　　御留主居年寄　市川出雲守殿

右者此間御城女中人數幷名前等之儀、中村政右衞門罷越候て御問合等致候處に、御指圖被成候爲御禮被進候。御使役勤之。

一金子二百疋ッヽ　　右御同人　御家頼　三人

右世話に付以御目錄被下之。

一同四日　御簾中樣御產御用御勤に付御拜領物被成候爲御歡、左之通被進候。

一兩種　千疋　　御老中御懇意　堀田相模守殿

一同斷　同　酒井左衞門尉殿

一同斷　無御受納　西丸御老中　秋元但馬守殿

一兩種　五百疋　御側御用人御懇意　大岡出雲守殿

右之通被進候、御留主居勤之。

一同五日　上使櫻井監物殿を以御鷹之雲雀御拜領。

一道御奉行小長谷喜太郎殿ゑ車留再届之儀。

佐竹右京大夫向柳原中屋敷前街道道造仕候付、來七日迄日數三十日之間車留申上置候處、未地形堅り不申候に付來ル八日より日數二十日之間、御用之外車留之札立置申度候。此段御届申上候。

以上。

八月五日　　神戸文右衞門

一同八日　道御奉行小長谷喜太郎殿ゑ左之通。

佐竹右京大夫下谷七軒町居屋敷前街道橋普請仕候付、假橋懸置御用之外車留候儀申上候處、右普請出來仕候付御届申上候。以上。

八月八日　　、、、、、內
神戸文右衞門

一同十二日　辰刻過御出駕、大岡出雲守殿御側御用人御役成已後初て、御登城前被爲出御對面也。

但今日御對面御叮寧之御挨拶も有之付、御歸候節御禮之御使者田崎忠四郞勤之。

一同十三日

一鯛　一折　御側御用人 大岡出雲守殿

右者昨日御役已後初て、御登城前御出御對顏被遊候付、今日以御使者被進候。御留守居勤之。

一同十五日　松平隱岐守殿今日御奉書にて御登城之處、溜詰被仰付候。御附使訴之。

一同十七日

一銀子　三枚　盛德院樣御附 伊藤六郞左衞門

右者加州え罷下候付被下候、御用人以御目錄引渡之。

一金子　二百疋　御出入御小人目付 鈴木半助

右者此度屋敷拜領に付被下之。

一銀子　二枚　御徒目付與頭 伴　勘七郞

右者長州え御用有之罷越候付被下候、御城使勤之。

一同廿二日　松平隱岐守樣溜詰被仰付候爲御歡左之通被進候。

一鯛　一折　松平隱岐守樣へ

右之通被進候。兼て御斷之事候得共、此度は格別之事故御前樣御賴被進候。

一加賀守樣今朝御登城之處、斐姫樣（加賀守重基公御姉）御緣組被仰出候。爲御歡御使者被進候。御留主居。

但酒井阿波守樣へ御緣組也。

一市瀨五三郎叔父市瀨友八、兼て不行跡に付久離之御屆、御町奉行依田和泉守殿え御屆。

覺

浪人
市瀨友八
年三十四

右者佐竹右京大夫家來市瀨五三郎祖母さつ悴にて御座候處、右友八義、當時親類共幷五三郎方に差置候處、兼て不行跡度々異見仕候得共不相用、近來別て身持不宜候付如何樣之義可仕も難斗御座候付、右祖母さつ初諸親類共一同に久離仕度相願候付、願之通申付候て御帳に被記置可被下候以上。

八月廿二日

、、、、、内
神戸文右衞門

一同廿四日　松平土佐守樣御中屋敷、昨夜出火にて御長屋燒失に付、今朝土佐守樣へ御見舞之御使者被進候。田崎忠四郎勤之。

一松平阿波守樣にも御中屋敷、右出火にて御長屋少々御類燒有之段土佐守樣にて忠四郎承之、差て御使者には無之御安否承候由。右に付御使者は又々不被進候。

一同廿五日　松平土佐守樣出火に付御差扣御伺被成候處、同日御遠慮被仰出候由爲御知申來。依之、御

見舞御使者被進候。
一御馬如例年御獻上なり。
一同廿六日　去五日御拜領雲雀今日御披也。
一松平宮內少輔殿若御年寄御妾腹に御女子御出生之由年番より申來候付、今日御歡田崎忠四郎勤之。
一同廿七日　御座之間御出。

盛德院樣御附上下
不破野右衞門

右者今度從加州罷登候付二ノ間御敷居之外一疊目に罷出御目見、披露小野崎源左衞門。
一七年目〳〵に被差出候御領內人數帳、今子年被指出候順年に付去二月七日御廻狀を以被仰渡候通、今日神尾備前守殿ぇ被指出候。

惣人數合三十萬三千三百八十三人
內十六萬九千二百六十七人　男
十三萬四千百十六人　女

右御留守居名前にて印形斗にて御勘定所ぇ差出候。尤萱橋とも也。御朱印地、寺社領無御座候。
一道御奉行小長谷喜太郎殿ぇ向柳原御屋しき前道造出來、車留札取候段左之通。
佐竹右京大夫向柳原中屋敷前道造仕候付、先頃御屆申上候車留札立置申候處、道造出來仕候故此

段御届仕候。以上。

八月廿七日　　　　　　　　　　　　　神戸文右衛門

一九月二日　秋著强候付、御內輪相勤候面々は帷子着用之義勝手次第可仕旨被仰出候。

但御客様御用に罷出候面々、御番所は、禮服着用可相勤之旨也。

一同五日　仙北改派之三ヶ寺幷眷屬共え當四月中より御扶持被下候付、爲御禮、西本願寺より以御使僧

左之通參候。

一忍冬酒　一陶

一鹿谷茶　一箱　　　　本願寺より

右之通參候付、今日御使者を以御禮被指出候。御使役勤之。

一同七日　初菱喰一御本丸え御獻上被成候。

一同九日

一蕨粉　一捲

一椎茸　一箱　　　　西本願寺

右者仙北三僧幷眷屬共當四月中より御扶持被下候爲御禮、先頃御進物參候爲御返禮被進候。御使役

勤之。

一同十二日　堀田相模守殿御老中御用懸より御左右有之付御留守居罷出候處、左之通御奉書被相渡候。仍て御請左之通。但西丸より御奉書は九月廿二日出ル、乍爾不相替事故略之。

御奉書致拜見候。千代姬樣爲御七夜之御祝儀以使者目錄之通致獻上之候處、首尾能被遂御披露之旨被仰下忝次第奉存候。上處。

九月十二日

堀田相模守樣

人々御中

一西尾隱岐守殿御懇意御老中京都之御用相濟途中無御滯昨晚御歸府被成候由に付、御到着爲御歡今日御使者被進候。御留守居勤之。

一同十八日

一紗綾　五卷

御懇意御老中
西尾隱岐守殿

一兩種　五百疋

右者京都之御用相濟途中無御滯去十一日御着府に付、爲御祝儀被進候。御留主居勤之。

但寶暦二申年五月松平右近將監殿御懇意御老中京所司代御引渡として御上京、七月御歸府之節精好平鮮肴被進候得共、此度御吟味之筋有之右之通隱岐守殿ぇ被進之候。已後ヶ樣之節は、右近將監殿御例可

被成由也。

一同十九日

一兩種　五百疋　太田三郎兵衞殿へ

今度御目付役被仰付候爲御歡以御使者被進候、御使役勤之。

一增上寺大僧正今度住職幷大僧正被仰付右御禮迄相濟候付、爲御悅今日御使者被進候。御使役勤之。

一同廿四日　今度增上寺入院大僧正被仰付候付、御歡御使者を以被進候。

一昆布　一箱

一御樽代千疋　增上寺大僧正へ

右御住職被仰付候爲御喜被進候、御使役勤之。

一同廿五日　御席觸にて、千代姫君樣御色直御祝儀御獻上物。

千代姫樣へ

吳服　一重　二十萬石以上

御紋付紅綾幸菱一、御模樣寶盡素縫御裏紅。

御下召一白羽二重

一種

公方様
大納言様え　一種一荷ツヽ　十萬石以上
御簾中様
同斷　一種ツヽ　十萬石以上嫡子、隱居
右之通十一月可在獻上候、日限之義は追て可相達候。且又疱瘡、痲疹、水痘之障有之候はヽ、追て可有獻上候、尤其節可被申聞候。差上物之儀は御七夜之節獻上之通可被致候。以上。
九　月
一同廿六日　昨晩、千代姫君樣御色直御祝儀御獻上物之義御席觸到來付、堀田相模守殿え御請之御使者夜陰に付今朝被差出候。御使役勤之。
一同廿七日　小出土佐守殿今度西丸御附幷御用御取次被仰付、御加增千石御拜領、仍て御歡御使者御使役勤之。
一佐野忠兵衞殿今度御側勤被仰付、爲御歡御使者同斷。
一同廿九日
一嶋ちりめん五端一箱
一鮮肴　一折　堀田相模守殿

右者爲時節御見舞被進候、御使者小野崎源左衞門勤之。
但先頃米穀不足飢民有之に付彼是御書付等被差出候處、御心入之事有之付被進候。
一十月朔日
一干鯛　一箱　西丸御側衆 小堀土佐守殿
一御樽代千疋
右今度御加增御拜領西丸附幷御取次被仰付候爲御歡、以御使者被進候。御使役勤之。
一御太刀金馬代　佐野忠兵衞殿
一鰑　一折
右今度御側衆被仰付候爲御歡被進候、御使役勤之。
一干肴　一折　諏訪部文九郎殿
一御樽代三百疋
右今度御嫡子八十郎殿御功米御拜領且名御改爲御喜被遣候、御使役勤之。
一交肴　一籠　奥御右筆 青山治右衞門殿
右爲御病氣御見舞被進候、御使菅原洞齋勤之。
一同四日　今日亥之日に付玄猪之御規式可有之處、御眼病故中之亥御祝可被遊之旨にて無其儀候。

但今晩御祝無之段御用所幷頭々より申傳。

一同五日

一兩種　五百疋　本多佐兵衞殿

右百人組之頭被仰付候付定式被進候、御使役勤之。

一同斷　天野三郎右衞門殿

右者此度西丸御目付被仰付候付同斷。

一一種　五百疋　米澤小太夫殿

右者定火消被仰付同斷。

一金二百疋　鹿嶋大禰宜　羽生求馬

右者常陸帶御守差出候付爲御初穗被遣之、御歩行勤之。

一同十日　淺草御屋敷前石垣御修覆之儀、道御奉行小長谷喜太郎殿ゑ御屆之趣。

佐竹右京大夫淺草下屋敷、北之方門前下水街道之方緣石垣破損に付、繪圖面之通ふしん爲致候。

此段御屆仕候。以上。

十月十日　　　　　　　　　　　　　、、、、、内　角田弟助

一同十一日

一備後表　二百枚
一練高宮布十二疋但縁代三十兩
一干鯛　一箱
御懇意御老中
堀田相模守殿
右者來月中千代姫様御宮參之節御立寄之段被仰出、目出度御儀奉存候、爲御喜以御使者被進候。小野崎源左衞門勤之。
一同十三日　年番之御留守居より、御曲輪之内出火之節伺御機嫌入候場所先年申合候通にて、夜中九ッ時過之出火には、翌朝火鎮候は上下にて御用番様ヱ伺可相勤申合有之、其後御丸之内御方様には翌朝ヱ難延場に可有之候付、御近方之御方様は夜中伺と申方に可有之旨、中外曲輪にても御近方之御方様は御同様之旨、遠方之御方様は小火なとにて相知かね候は、翌朝上下にて御勤候ても可然旨御寄合席にて御相談有之處、書付に出不申に付不行屆區々之様相聞候故猶此度申談、彌右之通御曲輪内外御近方之御方様は、夜更候ても伺御機嫌入申程之場所ヱ出火候は、御用番へ爲伺御機嫌卽刻相勤可申候。打越候遠方之御方様には、時刻により翌朝御伺可被成と申儀は、先年被仰談候通に御座候。此段申合如此に御座候。以上。
十月七日　岡村多仲
中川郡兵衞

一同十五日
一兩種　千疋　御側御用人御懇意　大岡出雲守殿
右者今度岩附之城御受取被成候爲御祝儀今日被進候、御使役勤之。
一同十六日　中之亥に付玄猪之御規式有之。
一同十七日　先達て院内銀山にて殺害盜賊致立除候者酒井石見守殿御領羽州松山當時若御年寄え罷越、彼御領において𛀁惡事有之被召捕段々詮議有之處、當御領之者之由白狀致候付、彼の方より院内迄以飛脚爲知申來候付、此方より御足輕等被差越御請取被成候故、御挨拶石見守殿役人え左之通於御當地被下候。
一金子三百疋　石見守殿御家來　屋代傳右衞門
一同斷　同　北郷十馬
一同　百疋　足輕飛脚　鈴木作右衞門
右之通被下之、御留主居より遣之。
一十一月朔日　松平丹波守殿今未之中刻、御養生無御叶御卒去被成候段爲御知申來。
一同三日
一御太刀馬代五枚
一鰑　一折　稻垣能登守殿

今度御ふしん奉行被仰付候爲御喜被進候。
一兩種　五百疋　淺野内膳殿
今度御目付被仰付候爲御喜被進候。右いつれも御使役勤之。
一六郷兵庫頭殿昨二日御婚禮相濟候付爲御歡御使者被進候、御奥方阿部伊豫守殿御妹。
一内藤能登守殿今度御家督無御相違被仰出御禮まで相濟候付、爲御歡御使者被進候。御使役勤之。
一同六日
一御太刀銀馬代五枚
一鯣　一折　松平隼人殿
今度京都御町奉行被仰付候付被遣之。
一御太刀金馬代　御側衆 朽木周防守殿
一鯣　一折
今度西丸御側勤被仰付爲御喜被遣候、御使役勤之。
一十一月七日　松平隱岐守樣、今度千代姬樣御箆刀御役首尾能御勤濟之爲御祝儀、今日屋形樣被爲入候付被進候。
一鯛　一折　松平隱岐守樣

右之通御使役勤之。

一同斷　長崎御奉行　菅沼下野守殿

右者今度長崎表より御歸府に付爲御歡御使者以御目錄被進候、御使役勤之。

一銀　二枚　御徒目付　三宅權七郎

駿州久能へ御用被仰付罷越候付被下候。

一同八日　今日以上使生駒登殿御使番御鷹之鳫御拜領被成候。

一同九日　松平土佐守殿より以御使者、御嫡子御出生已後御虛弱之處、御保養御丈夫被爲成候付近々御用番え御屆被成候由、且右御屆相濟候はゝ御緣約之義、松平大膳大夫殿御息女御間柄之事故御內緣も被成度趣、御留守居迄申來候。

一同十三日　大御目付御廻狀。

來廿二日千代姬君樣御色直御祝儀有之候付、向々え可被達候。以上。

十一月

千代姬君樣山王え御宮參十一月廿三日。

右之通被仰出候付向々え可被相達候。

一同十五日　今日就御吉辰於御曹司樣御部屋御褌初、幸之助樣於御同席御髮置之御祝儀有之付、左之通

被進候。

一鯉　一折　、　御曹司樣ゑ

右之通被進候、御使者平野文右衞門御納戸役勤之。

一御小袖一重

一御帶　一筋　幸之助樣

一兩種三百疋

右爲御祝儀被進候、御使者大山伊織御側小姓勤之。

一同十六日　久保倉太夫以名代使者御秡等差上候。

一同十八日　糟漬鮭二桶ッヽ兩御丸ゑ御獻上之。

一同十九日

一柄杓　橋本　玄可

右者今度御當地ゑ用事有之出府仕候付御目見被仰付候、披露御用人。

但御石爐之間より御のし屏風際へ罷出拜伏。

一白銀三枚　久保倉太夫

一同　一枚　右使者村澤　正藏

一同廿二日　今日千代姫君様御色直之御祝儀、先頃御觸之通御獻上也。

但兼て御觸有之事故前日御窺無之。

大高タンシ一重
一干鯛　一箱　　御本丸ゑ御獻上

〔進上　、、、、〕

一御樽　一荷

一同斷　　大納言様御獻上

大高一重
一干たい一はこ　　御簾中様ゑ

一御たる一荷

一御小袖一かさね

御襟札二枚

〔しん上御小袖二之内　さ竹う京大夫〕

一干たい一はこ　　千代姫君様ゑ御獻上

〔しん上　さ竹う京大夫〕

寸法三節之通

一同廿三日　今晩寅刻八代洲川岸より出火及大火、御機嫌伺御使者御用番御老中、西丸御老中ゑも被差出候。

一千代姫君様今日赤坂山王ゑ御宮參可被遊候段兼て御觸有之處、今朝大火に付相止候段御席觸到來。

今日出火に付、千代姫君様御宮參御延引之旨本多伯耆守殿被仰渡候。依之申達候御同席中早々御達可在之候。答之儀は銘々より不及挨拶、各より松平肥前守方ゑ可申聞候。以上。

十一月廿三日　　大目付

松平安藝守殿

右留主居

一當秋西丸ゑ被獻候御馬御召に相成候段、村松四兵衞殿支配御馬責より爲御知申上候付被下之。

一金子　二百疋　岩波仲右衞門

一同斷　小川嘉門

右之通留守居より以手紙遣之。

一同廿四日　於御座之間今日出仕繼目有之。

一同廿六日　去八日御拜領之鳫御披也。

一同廿七日

一小鴨　二番　奥御右筆御懇意 青山治右衞門殿

一蕨粉　一箱

右御病氣爲御見舞被進候。

一同廿八日

一兩種　千疋　御側御用人御懇意 大岡出雲守殿

右者御役成爲御祝儀昨日御老中御招請に付、以御使者田崎忠四郎勤之。

一同廿九日　御座之間御出。

荒木猶水

右二ッ目御敷居之外末御のし斗屏風際ぇ罷出御目見被仰付候、御酒、御吸物被下候。

一於秋田下馬傳相絶候付稽古被仰付度思召候得共、差立候て御賴被成候ては御物入にも相拘り、向方にても秘傳之事故差て之稽古不相成に付、書禮稽古と申入傳受仕候樣、大山與右衛門當八月中御右筆組頭橋本喜八郎殿ぇ申入候處、御相應之御挨拶に付傳受も相濟候段、此度初て御承知被成候趣を以右之御禮、御口上左之通被進候。

一鰑　一折

一御樽代銀十枚

橋本喜八郎殿

右者表立御使者を以可被進候得共差立候ては向方ぇ相障候趣有之に付、右之御使者大山與右衛門御右筆頭勤之。

一同晦日　杉本三右衛門、同三郎右衛門今日御奉公被召放候、御條目を以被仰渡。

一閏十一月朔日　松浦肥前守殿今日御參勤之御禮被仰上候に付、下乘ぇ御附人被差遣候。

一大御目付御廻狀到來。

千代姬君樣山王ぇ御宮參閏十一月六日。

右之通被仰出候付、諸事先達て相達候通可被心得候。尤向々えも可被相達候。

一同二日　小堀和泉守殿若御年寄御役成爲御祝儀御老中方御招請被成候由、仍之爲御喜御使者被進候。田崎忠四郎勤之。

一同三日　例年先月中御獻上之御鷹、今年は鷹不足相渡繫留甚不足に付、於秋田吟味も不相成留置候黃鷹五連斗も被差登候。仍之左之通御窺。

私國許より黃鷹五連例年獻上仕候處、今年甚出不足仕漸五連繫留申候。最早雪中相成、此上繫留可申樣無御座候付、吟味不仕爲差登申候。依之鷹例之通相揃不申候得共獻上可仕候哉、奉伺候。

以上。

閏十一月三日　　佐竹右京大夫

御付札　伺之通獻上有へく候　閏十一月九日被仰渡候。

右之通御用番酒井左衞門尉殿え御留守居を以被相伺候處、御承知被成、追て御沙汰可被成候、御書付被留置候。中村政右衞門勤之。

一同五日　御席觸御廻狀。

千代姬君樣御色直幷御宮參相濟候爲御祝儀、來七日溜詰御譜代大名、嫡子、高家詰衆、御奏者番、同嫡子、菊之間緣類詰、同嫡子、布衣以上御役人、のし目半上下着用西ノ丸え出仕、夫より御本丸

ゑ可有出仕候。
一出仕無之面々幷隱居、幼少、病氣之面々は、月番之老中但馬守方ゑ御使者御祝儀可申上候。
一在國在邑之面々、隱居、部屋住共に老中但馬守ゑ飛札可差越候。
右之趣可被相觸候。
一同七日　千代姫君樣去月廿二日御色直御祝儀、幷昨日御宮參迄相濟恐悅之御使者、御用番酒井左衞門尉殿ゑ被差出候。御留守居田崎忠四郎勤之。西丸御老中秋元但馬守殿ゑも被指出候、同人勤之。
一干鯛昆布　一箱　御懇意御老中
堀田相模守殿
一御樽代千疋
右者千代姫君樣御宮參之節相模守殿ゑ御立寄、御機嫌能歸御被遊候爲御歡以御使者被進候。田崎忠四郎勤之。
御三家ゑも
右者御歡御使者差遣候、御物頭勤之。
一同九日　千代姫君樣御宮參御用無御滯御勤にて御拜領物被成候付、左之通之御方へ御使者。
堀田相模守殿　酒井左衞門尉殿　本多伯耆守殿　西丸秋元但馬守殿
右之通御留主居勤之。

一同十日　今朝初雪降候付兩御丸ゑ御機嫌御窺被差出候。

一同十一日　幸之助樣御事御丈夫に被爲成候付、今日御先手小笠原縫殿助殿を以、御用番堀田相模守殿ゑ御書付を以御屆被成候。

御當地罷有候
佐竹幸之助
當子四歲

右私妾腹之二男御座候。出生之砌より虛弱罷有候故御屆見合候處、此節丈夫に罷成候付御屆申上候。此段被御聞置可被下候。以上。

閏十一月十一日　佐竹右京大夫

右御書付相模守殿ゑ被差出候處、首尾能御受取置之由、縫殿助殿ゑ今朝被附置候御留主居田崎忠四郎ゑ被仰聞候付、右之趣歸參訴之。右御請取置之爲御禮相模守殿ゑ御使者被進候、右同人勤之。右御屆之趣御懇意御老中ゑも爲御知被成候、御使者右同人勤之。

一今日御鷹五連如例年御獻上也。

一松浦肥前守樣御參府以後初て御出也。

但御家老御用人石川文右衞門御番頭代麻上下、御番所平服、御小姓服紗物袴斗。

一同十二日　松平大膳大夫殿ゑ御兼約にて御鷹一居被進候。御留主居御使者勤之。

一金子五百疋　橋本玄可

右今度用事有之此表へ罷下獻上物仕候付被下候。

一同十三日　千代姫君樣御宮參之節御立寄、且御拜領物被成候爲御歡被進候。

一兩種　千疋　堀田相模守殿

右之通被進候、田崎忠四郞勤之。

一一種　千疋　御先手御用御賴 小笠原縫殿助殿

今度幸之助樣御二男御屆之儀御賴、御用番ぇ御屆相濟候爲御禮被進候、御使役勤之。

一午後刻御出駕、御曹司樣御同道盛德院樣へ被爲入。是屋形樣御參府以後初て御料理、且幸之助樣御事御用番ぇ御屆相濟、今日初て御供立有之御中屋敷ぇ御同前被爲入候。

盛德院樣ぇ御進物有之略之。

一銀子　二枚　御徒目付 上田三之助

右者此度居宅類燒に付被下候、御留守居より遣之。

一金子　二百疋　御小人目付 鈴木甚三郞

一同斷　御玄關番 彥坂　平八

右者今度居宅普請引移候付被下候。

一同十五日　寒入。

一黄鷹　一居　　　　若御年寄　小出信濃守殿え

右者兼て御所望に付被進候、御使者御留守居。

一同十八日　今朝土屋越前守殿町奉行御留主居え御手紙到來卽御請書差出、其上田崎忠四郎罷出候處左之通御差紙被相渡候。

佐竹右京大夫醫師
伊東玄節次男
伊東勝次郎

右之者え申渡義有之間同道人添只今評定所え可被指出候。

右之通御差紙被相渡候付勝次郎同道人五月女善藏可罷出候處に、善藏病氣に付角田弟助同道差添、田崎忠四郎御評定所え罷出候處、夜九ッ時被仰渡候趣。

御勘定頭　　町御奉行　　御目付

右之通御列座差添、忠四郎同道人角田弟助被召出土屋越前守殿被仰渡候は、伊東玄節次男勝次郎儀當七月大久保喜六郎致同船、喜六郎入水之節始末不埒に付相模守殿呵被仰渡候。此旨可相達候。

一勝次郎えは御徒目付、町與力立會申渡之。

右之通口達被仰渡候段忠四郎訴之。

一同廿六日　杉本三左衛門父子御暇被下置候付御町奉行所へ御屆有之候。

覺

佐竹右京大夫家來
杉本　三左衞門
當年六十三
三左衞門世忰
同　三郎右衞門
當年二十九

右之兩人兼て行跡不宜、其上屋敷法式相背候付當十一月晦日暇差出申候、下略。

一十二月朔日

一卷物　五　家督之御禮　松平丹波守

一金　三枚　右家來　野々山内匠

一銀馬代　西鄕新兵衞

一松平丹波守樣御結納今日相濟候爲御歡御使者被進候。

一今日岩城伊豫守殿御屋敷御類燒に付御焚出被進、御使役勤之。

焚出五十人前　岩城伊豫守殿へ

右之通被遣候。

一同七日　鹽引鮭今日御獻上也。

一同八日　松浦篤信樣今日御葬送之由御搆へ御附使者被遣候、御使役勤之。
篤信樣御院號
松英院殿前肥州刺央從五位下逸巖俊翁大居士。
一同九日　千代姬君樣御色直之節御獻上物御奉書兩御丸御老中左之通。
御奉書致拜見候。千代姬君樣爲御色直御祝儀以使者目錄之通致獻上候處、首尾能被遂御披露候
旨被仰下忝次第奉存候。上處。
十二月九日
堀田相模守樣
右秋元但馬守殿へも右同斷、品々御獻上物奉書兩御丸より出ル。
一同十一日
一兩種　千疋　　堀田相模守殿
右千代姬君樣御宮參御用懸御勤無御滯相濟候爲御歡被進候、御留守居勤之。
一同十五日　節分。
一同十八日　殿中今日御官位。
少將　松平陸奥守

侍從　松平龜五郎　肥後守
同　松平阿波守

一同十九日
一干鯛　一折　御先手御用御賴　久世忠右衞門殿
一樽代銀五枚
右者此度御息女御婚禮相濟候爲御歡、今日御使者を以被進候、御使役。
一同廿一日　御領內御損亡御屆有之。
高七萬三千三百三十八石餘
御書付之趣略之。
一同廿二日
一絹とろめん　町御奉行御用御賴　土屋越前守殿
一鮮肴　一折
右先頃伊東玄節二男勝次郎御詮議之節何角御世話有之付被進候、但時節御見舞御口上御使役。
一金子　三百疋　御同人　用人
一同斷　同　與力

右之外被下候御徒目付、御小人目付、御門番、御留守居等略之。

一同廿六日　松平阿波守樣今日御婚禮、御緣女樣兼て御引取なり。

一同廿七日

一干鯛　一箱　松平阿波守殿

右者昨日御婚禮無御滯相濟付爲御歡、今日以御留守居被進候。田﨑忠四郞勤之。

一同廿八日

一干鯛　一箱　松平阿波守樣奥　樣え

今度御婚禮相濟候爲御歡以御目錄被進候、御使者御使役。

一松平阿波守樣侍從成御禮被仰上候爲御歡御使者被進候、御使役勤之。

○寶曆七丑年

一正月元日　御規式　御家老大越甚右衞門

但七五三無之。

一同二日　御登城御太刀黄金馬代御獻上。時服二御拜領。

一御歸殿於御座之間御裝束之儘御祝之御規式有之、畢て

一扇子　一臺　本阿彌十郎右衞門

右獻上物大小姓持出二ッ目御敷居之外上より竪疊二疊頭え置之、于時右疊下え罷出御目見。

一同三日　御盃臺御獻上、御本丸え。

一同六日　御座之間御出御のしめ御上下是爲御年禮御勤被爲出前御目見。

御家老大越甚右衞門

右二ッ目御敷居之外上一疊目下え罷出御目見、披露小野崎源左衞門。

御用人

御番所頭

右二ッ目御敷居之外上より竪疊二疊目下え罷出御目見、披露同人。

一同九日

一御太刀銀馬代五枚

一鯣　一折

大久保右京亮殿

右舊臘御留守居年寄被仰付候爲御歡被進候。

一同十五日　稻生下野守殿御目付より以御小人目付、此方樣御茶辨當御登城幷外御勤之節も爲御持被成候哉御承知被成度旨申來候付、御玄冠え御留守居田崎忠四郞罷出、委曲承知仕候、下野守殿え從是御

屆可仕候段申談候得は、承知仕候、左候はヽ右之御請書被指出候樣にと申候付則忠四郎御請書被相渡候。仍て下野守殿え持參差出候。

佐竹右京大夫登城幷外勤、又は遠方下屋敷等え罷越候節茶辨當爲持候哉之旨御尋、奉承知候。去子年中窺之上都て外勤之節爲持申候。登城一ト通には爲持不申候得とも、罷下り外勤有之節は是又爲持候て酒井雅樂頭樣御屋敷脇、亦は松平肥後守樣御門前等へ引纒差置申候。此段御屆申上候。以上。

正月十七日　　　　　　　　　　　　　　　　ヽヽヽヽ內
田崎忠四郎

右中奉書半切認之、上包みの紙上下折ヽヽヽ內ヽヽヽヽと認下野守殿え差出候處、御受取置被成候。

一同十六日
一金子　三百疋　　　松田又之允
一同斷　　　　　　　同　又次郎

右去二日御謠初之節被爲召候付被下之、御留守居より遣之。

一同十七日　上野御宮え御烏帽子御直垂にて御參詣、元光院にて御召替御のしめ御長袴。
元三大師　　神田明神　　鳥越明神

右三ヶ所へ御參詣、金子二百疋ツヽ御奉納也。

一同十九日
一鮮肴　一折　御目付御用御賴　鵜殿十郎左衞門殿
右今度長崎へ御用被仰付御越に付爲御喜被進候、御使役勤之。
一津輕土佐守樣江戸御上下之節爲御馳走人馬御當領中被差出候得共、近年中御斷被成候付御留守居を以今度彼方御留守居迄申達候。
一傳馬步夫　近年中御斷。
一あなたより御使者、此方樣御家來へ被下物等之義御斷被成候。
一同廿一日　加賀守樣御一門幷御家老、加州より以書狀、在番之家老大越甚右衞門迄年頭之御祝儀申上候付、御直書被成下候。今日以御步行使加賀守樣御式臺迄被差遣候。
一同廿八日　加賀守樣今日爲御年禮御城下り直々被爲入候段御案內申來、巳後刻御出也。
一二月二日
一銀　五枚　配當銀
右者桃源院樣十三回御忌御法事有之付爲配當被下之、御用局より住山勾當へ遣之。
一同三日　秋田御一門幷御家老之面々え年頭之御直書被成下候。
一同五日　子籠鮏御獻上也。

一同九日　御膳奉村山權平舊臘廿八日致出奔候付、町御奉行ヘ御屆之趣。

覺

佐竹右京大夫家來
村山權平
當丑三十六歲

右權平去子十二月廿八日致出奔當時住所不相知候。已來見懸り次第爲捕可申、若及異儀候はゝ討捨にも可申付候。爲後日以使者申達候。以上。

二月九日

、、、、、內
神戸文右衞門

定府御膳奉
森山藤治

同
宇八

自分共儀行跡不宜候付御奉公被召放候條、公儀御奉公、御家門中御奉公共に被相停。

同
戸上友之允

自分儀行跡不宜右同斷。

一同十二日　盛德院樣ヘ年始之御料理被進候。

一丹後嶋　二疋　盛德院樣ヘ

一同十八日　院內銀山御運上銀箱銘前々於御右筆所相認來候處、今日上納之節、間違無銘書にて差出候

へ共無御相違銀子相納候付、此已後銘書無之候ても可相納御模樣に候間、以後共銘書に不及候段御用人御留守居評議之上、銘書無之筈之由御用人申傳之。

一同十九日　東本願寺ぇ仙北三ヶ寺は輕ク御扶助被成候由、幷改派差留之義、古來より改派轉派は從來自由之由に候得共、此末御末寺に轉派有之共御綺被成間敷段以御使者被仰進候。岡部丈右衞門勤之。

一同廿三日　道御奉行小長谷喜太郎殿ぇ今日以御城使左之通御屆候趣。

佐竹右京大夫向柳原中屋敷前、繪圖面之通致道造候。此段御屆申上候。以上。

家來
福島孫四郎

二月廿三日

但繪圖面略之。

一金　五十兩　盛德院樣

加賀守樣にて去年中より嚴御儉約被成候付、盛德院樣ぇ之御合力筋も減少被成候付御內證御不自由に付、定式之外今日御內々より御膳番を以被進候。

一同廿六日　今日あたこ下ヶ御前樣、鳥越奥樣爲御年禮被爲入。

一金子五十兩　御目付御懇意　稻生下野守殿

右御妹御婚禮に付內々御無心筋有之被進候、御使五月女善藏御城使を以被遣候。

一三月二日　松浦壹岐守樣御息女長姫樣今日初て御宮參相濟候付
一鮮肴　一折、　鳥越奥　樣
右長姫樣御宮參爲御喜以御使者被進候、御使役勤之。
一同三日　御登城。御下已後御規式、畢て
有馬備後守殿組與力
堀　半左衛門
右二ッ目御敷居之外二疊目ゑ出席御目見披露、御對面所後御座敷にて御吸物御酒被下候。
一同四日　御城使五月女善藏一昨日逐電致候付、町御奉行依田和泉守殿ゑ御屆被成候趣。
覺
佐竹右京大夫徒並
五月女善藏
歳三十一
右當丑三月二日出奔。
右之者江戸屋敷定居に御座候、於途中見掛次第爲捕可申候。若及異儀候はヽ討捨にも可申付候、
下略。
一同五日　久世忠右衛門殿先頃より御病氣之處に、御全快御出勤被成候爲御喜左之通被進候。
一交肴　一折　御先手御用御頼
久世忠右衛門殿
右之通御使役勤之。

但御出勤御喜御肴被進候に不及候へ共、御病中御肴不被進候付此御肴被進候。

一同七日　尾張中納言殿御息女、松平安藝守殿御嫡子善次郎殿ゑ御緣組被仰出候。爲御喜左之通御使者被差出候。

尾張中納言殿　同　宰相殿　同　熊五郎殿

右之通御物頭勤之。

一紅縮緬三十卷　御老中御懇意　堀田相模守殿

一干鯛　一折

右來ル廿五日御息女松平主殿頭殿ゑ御婚禮に付爲御餞別被進候、御使者小野崎源左衞門勤之。

一同九日　松平阿波守殿御兼役にて今日九ッ半時より御出、二汁五菜御料理。御膳過、荒木猶水被爲召席書被仰付候。

一金子三百疋　浪人　荒木猶水

右御目錄於御用局御用人引渡之。

一同十一日

一御太刀一腰

一紗綾　一箱　東　本願寺

一御樽代五百疋
一紗綾　三卷
一干鯛　一箱　　新御門跡ゑ
一御樽代五百疋
右今度御出府、且新御門跡にては初て御出府に付先頃右之通參候爲御返禮被進候、御使役勤之。
猶水悴 荒木宮治
小野寺檢校
右二ッ目御敷居之外二疊目ゑ出席御目見被仰付候、披露御用人。
一同十五日　來月御國許ゑ之御暇被仰出候得は、同月廿五日御當地御發駕被遊候旨被仰出候。御膳番奉觸之。
一同十八日　戸田五助殿御息女今度御婚禮に付、金子百兩御拜借被成度旨中村政右衞門迄御越被仰聞候に付、無御據左之通被進候。
一金子百粒　　戸田五助殿
右之通被進候。忝候由政右衞門ゑ被仰置候。
一同十九日

一鯛　一折　御先手御用御賴
　　　　小笠原縫殿助殿
一御樽代五百疋
今度御嫡孫承祖民部殿初て御目見相濟候、爲御喜御使者を以被進候。御使役勤之。
一御太刀金馬代
一鰑　一折
　　　　水野肥前守殿
右今度御奏者被仰付爲御喜被進候、御使役勤之。
一御太刀　一腰　御側御用人御懇意
　　　　大岡出雲守殿
一御馬　一疋鹿毛鞍置
右今度御城地御拜領已後初て御在所へ御暇被仰出、來廿二日御當地御發足に付爲御歡被進候。御使者御用人小野崎源左衞門。
　但御城地武州岩附、十日之御暇之由。
　皆具左之通。
　　　覺
一御鞍　金梨地　一御鐙　金梨地
一御三階　紫　一御泥障　熊皮

一御手助　眞紅　　　一御手綱　紫縮緬
一御力革、金地　　　一御馬氈　黑板
一御馬褐　花色絹　　一御結揚　花色絹

已上。

右中奉書一枚竪紙認之。

一銀五枚　出雲守殿御家老　鹽谷八左衞門
一同斷　御同人御用人　大貫藤馬
一同斷　同　眞下彌七郎

右出雲守殿御城地ゑ之御暇に付、右之面々御供にて參候付被下之。

一同廿日　松浦壹岐守様御息女長姫様御事、此間色々御養生被相竭候得共無御叶御逝去之段、爲御知申來。

一右に付松浦壹岐守様、同御奥様へ御悔御使者御刀番勤之。

一同廿一日　西本願寺より仙北三ヶ寺之儀荒々相濟候に付御進物參候。依て今日爲御返禮左之通り被進候。

一絹兜羅綿五疋箱入　西本願寺

一干肴　一箱

右以御目錄御使者勤之。

一罌粟霰　一箱　　東本願寺

右先頃本願寺御在府之節御進物（御菓子）參候爲御返禮今日被進候。

一鯛　一折　　寺社奉行　本多長門守殿

右去々年中御用御賴被成度之旨石川順仙を以て被仰込候處、御障之義有之御挨拶御延引之處、御用趣可被仰聞候旨此間順仙を以被仰越候付爲御挨拶被進候。御使役。

一干鯛　一箱　　若御年寄御懇意　松平宮內少輔殿

一御樽代五百疋

右御嫡子釆女正殿御前髮御執被成候付爲御歡被進候、御留守居勤之。

一長姫樣御逝去に付、御屋敷不殘昨廿日より明廿二日迄鳴物御停止之段、小屋〱以御中間御用所より被仰觸候。

一淺草三社權現今日御祭禮に付御道具左之通被差越候、川井小六郎。

一鐵炮　五丁

一弓　五丁　　淺草　智泉院

一長柄　十筋

右御祭禮に付智泉院迄遣之。

一同廿二日　大岡出雲守殿（御側御用人御懇意）今日御當地御發駕御領地武州岩附え御越被成候付、爲御喜御使者被遣候。御留守居無之御物頭。

一御夜食五十人前　鳥越 奥　様

右爲御慰御膳番より以奉書被進候。

一同廿三日　桂林院様（長姫様御事）御出棺下谷永昌寺え被爲入、御附使者御使役。

一同廿六日　堀田相模守殿御息女昨日松平主殿頭殿え御婚禮相濟候付、爲御祝儀

一兩種　千疋　（御懇意御老中）堀田相模守殿

右之通御使者中村政右衛門勤之。

一大久保右京亮殿去冬御留守居年寄被仰付候付、御留守居田崎忠四郎、御關所通御證文之下證文差出候段今日御添翰被指越候。忠四郎勤之、文體略之。

但御留守居自分之進物御太刀馬代銀一枚持參也。

一今日御足袋之御願被差出候、同廿八日御付札。

足袋用可被申候　本多伯耆守殿より被仰渡候。

一同廿八日　御座之間御出座。

印牧玄順

右二ッ目御敷居之外下の屛風際ゑ出席御目見、御用人披露。

久保倉太夫名代
村澤正藏

右同處におゐて御目見也。

一御中屋敷前道ふしん出來に付、今日道奉行小長谷喜太郎殿ゑ御届。

佐竹右京大夫向柳原中屋敷前道普請出來致候付御届仕候。

右之趣御城使勤之。

一同廿九日

一鯛　一折　御懇意御老中 西尾隱岐守殿

去廿七日御嫡孫左京殿御緣組被仰出候爲御歡被進候、御留守居勤之。

一四月二日　加賀守樣御姉操姫樣ゑ、昨日酒井雅樂頭殿御嫡子阿波守殿より御結納之御祝儀被遣之、今日御歡御使者被進候。御物頭勤之。

一秋田ゑ女中被差下候。

女中上下十人乘物拾挺、從江戸羽州秋田迄房川渡中田關所無相違可被通候。佐竹右京大夫殿家

來三枝仲と申者妻、同妹娘并下女之由、下略。

一兩種　千疋、　御側御用人　大岡出雲守殿

右今度御在所より御歸府に付爲御歡以御使者被進候、中村政右衛門勤之。

上野國一宮拔鉾大神大宮司　一宮主水

右拔鉾大神社修覆爲助成延享三寅年上野一國勸化御免、三ヶ年之内一度ッヽ火除之札、下略。

一今度女中被差下候付

一鯛　一折　大久保右京亮殿

右御關所御判元にて被指出候付被進候、御家來え二百疋ッヽ。

一同五日　松平丹波守樣、就吉辰今日阿部飛驒守殿御息女え御結納御祝儀被進候。御歡之御使者、御使役勤之。

一同十一日　增上寺御宿坊寶松院々代先頃田崎忠四郎え申聞候は、要水古桶一申受度候。若古桶無之候はヽ、此方に桶爲擠可申候付御家之御紋所付置申度旨申聞候付、忠四郎御家老大越甚右衛門え申達候處、只今迄寶松院えは要水桶被遣候儀無之、此度初て被遣候は末々可相障間其所能々申談、向後修覆并に御手前にて御擠可被成候。香之圖御用之儀御勝手次第と忠四郎方より及挨拶候處、院代より證文參候。

覺

愚院要水桶御紋之儀奉願候處御許容之上、御役人中樣御了簡を以御有來之古桶可被下間、勿論向後修覆等手前にて申付一向御屋敷ぇ申上間敷候旨奉畏候。尙右之趣異背無之樣記錄仕差置可申候。以上。

寶松院々代
敎　隨

四月十一日

一同十二日　千代姫君樣此間御不豫、御養生無御叶逝去之段相達候付、御席觸有之候得とも早速御登城可被遊思召候處、遲ク御書付相達候付、且夜分相掛り候故御風邪御斷にて、御用番堀田相模守殿ぇ御機嫌伺御使者田崎忠四郎勤之。

千代姫君樣御逝去被遊候付爲窺御機嫌今日御本丸ぇ惣出仕、遲ク承り七時已後候はヽ月番之老中ぇ可相越候。病氣、幼少、隱居之面々は月番之老中ぇ以使者御機嫌相伺可申候。

一西丸ぇは明十三日惣出仕、病氣、幼少、隱居之面々は但馬守へ以使者御機嫌相窺可申候。

一在國在所之面々、隱居共、爲伺御機嫌老中但馬守ぇ一度可差越候。

一鳴物は今日より三日停止、普請は不苦候。

一同十三日　今日西丸ぇ惣出仕に付御登城可被成之處、御不快に付御斷御屆書被差出、略之。

一千代姫君様御逝去に付御三家方ゑ御使者勤有之、御物頭勤之。
一同十四日　華光院様（千代姫君様御事）御出棺凌雲院ゑ被爲入。
一同十五日　御國許ゑ之御暇上使松平右近將監殿御出、御取持吉田小右衛門殿。
　一ちりめん　二十卷
一銀子　五十枚
　　御本丸より御拜領
一同日　西丸より上使酒井左衛門尉殿御出。
　一ちりめん　十卷　御拜領
一同十六日　御代替（御當家）已後下野御領鐵炮改御證文被差出候、大御目付伊丹兵庫頭殿御懸也、下略。
　但御兩判御帳也。保戸村紙。
一萱橋にて猪、狼多出田畑荒候付、鐵炮御願御兩判之御證文被差出候。此條下有之に付略之。
一同十七日　上野御參詣（御烏帽子御直垂）御宮ゑ正月二日之通。御歸已後御中屋敷ゑ被爲入候。御出懸、縫目、出
仕、名改被仰付候。
一同十九日　御暇之御禮被仰上候。
一同廿日　淺草御藏火之御番御代松平大膳大夫殿被仰付候て御引渡也。
一同廿二日　御用御賴之御先手衆、御發駕前御出會被成度思召候て小笠原縫殿助殿ゑ以御手紙被仰達

候處、御係外御見廻難被成に付左之通被進候。御出會相止。

小笠原縫殿助殿

一丹後嶋二疋ッヽ　吉田小右衞門殿

久世忠右衞門殿

右爲御見舞被進候、御留守居勤之。

一丹後嶋三疋　長崎奉行 坪內駿河守殿
ッヽ
一鹽引鮭二尺　菅沼下野守殿

今度長崎廻銅之儀に付御願筋相濟候付、時節爲御見舞御使者を以被進候。御使役。

三谷勘四郎
中西五郎兵衞
中村長兵衞

一同廿三日　御座之間ゑ御出。

右御目通被仰付候。

一鯛一折　田沼主殿頭殿

右昨日小野崎造酒初て被爲逢候爲御挨拶今日被進候、御使役勤之。

但御家來へ五百疋、三百疋ッ、被下之。

一同廿四日

一銀子　五枚　伊丹兵庫頭殿用人　稲生半兵衛

右萱橋御用御賴に付被下之、御留守居より遣之。

一同　三枚　本多長門守殿用人　林　嘉介

右此末御用御賴被成候付被下之、右同斷。

一同廿五日

一兜羅綿　二疋　高橋多門

右御發駕已前於御座之間御目見被仰付御意有之。

一今日江戸御上屋敷御發駕。

一同廿七日　常陸國鹿嶋社頭大破に付陸奥、出羽兩國勸化御免に付、今日左之通被遣之。

一銀子　三枚　御神納

一同　十五枚　御領内より寄附

右之通御目錄被差添神主羽生求馬旅宿え被遣候、御城使神戸文右衛門勤之。

一津輕右京亮殿土佐守殿御事今度御名改御願之通被仰出候由爲御知申來。

一大御目付御廻狀。

武士屋敷に輕奉公人部屋子と申侍輩にて無之者を指置、其內には外屋敷取迯缺落致候者、又は奉行所より尋候者も有之、右體之者部屋〳〵に能有博奕も致候旨相聞得候。付て、向後武士屋敷部屋〳〵遂吟味、不召抱者一切差置申間敷候。

右之趣先年相觸候處又々猥に相成候由相聞得候。向後彌右體之儀無之樣急度可被申付候。

一同晦日　內藤金一郎樣御祖母台壽院樣就御病氣、豆州熱海え御入湯被成度御願之通被仰出候由。御見舞御歡御使者被進候。

一五月三日

一白銀　二枚　松平大膳大夫殿御留守居　嶋尾五郎右衞門

右者兼て御所望に付舊冬御鷹一居被進候處、先頃右爲御返禮御進物參候節御使者參候付被下候。

但御鷹被進候節此方御留守居え被下物有之に付、及右通候。

一同四日　松浦壹岐守樣御卒去に付て、おく樣え爲伺御機嫌御側醫木村快庵 田代三壽代々晝夜相詰。

一同五日　遊行上人より以使僧、爲廻國此間出府被成候由御見舞申來。

一同六日　松平丹波守樣今日御婚禮御整に付、爲御喜御使者被進候。

但阿部飛驒守殿御息女御入輿なり。

一同七日　本光院様松浦壹岐守様御院號明後九日御出棺、同十日より十二日迄本所中郷天祥寺にて御法事御執行被成候由。

一御夜食　鳥越御後室様

御擄中爲御見舞被進候、御用人奉札にて指上候。

一同十二日

一御香奠銀　一枚　本光院殿御靈前え

御名代石川文右衞門。

一同十四日

一金子二百疋ツヽ　御小人目付加藤郡平代榊原清三郎

同相川與十郎代持田勝右衞門

去年中御出入被仰付候付早速右金被下候筈之處、吟味落にて此度被下候。

一同十六日　遊行上人御入來、今般御參府に付御見舞被仰置候。

一同十八日　鳥越御後室様御精進、中おり被遊候付左之通。

一交さかな　一籠　鳥越御後室様

一同廿五日　松平右近將監殿御用番より御留守居被爲呼、彼方御用人を以御書付被相渡候。

若黃鷹當年は七居可被獻候。委細之義者板倉佐渡守より可相達候。

佐竹右京大夫

五月

右御書付被相渡御用人小城十太夫申聞候は、直々板倉佐渡守殿ぇ致參上御差圖可請候旨任差圖、佐渡守殿ぇ致參上御用人ぇ對面右近將監殿より御差圖之通申聞候處、佐渡守殿ぇ可申上由、有暫同人を以左之御書付被相渡候。

若黃鷹當年者七居被獻候付、吟味可有之候得とも宜鷹斗にては揃不申義も可有之候條、大抵之鷹候はゝ不苦候付、可成たけ員數不足無之樣可被差上候。尤當分之疵、又は尾羽損候ても不苦候間可被差上候。

佐竹右京大夫

一來年よりは只今迄之通可被相心得候事。

五月

右之通御書付被相渡候付、國許ぇ可申達候旨及御請候旨、政右衛門歸參訴之。佐渡守殿より御書付を以被仰渡旨、右近將監殿ぇ罷出爲御知申上候由也。

一同廿六日　大御目付觸。

紀伊宰相殿御簾中富宮逝去に付て、鳴物今日より三日停止、ふしん不苦候。

右之通可被相觸候。

一同廿八日　松平修理大夫様より爲御知、本光院様御病養無御叶昨夜御卒去之段、以御留守居奉札爲御知申來。

一六月二日三日　永壽院様三回御忌御法事有之。

一同八日　有徳院様御法事十七日十八日十九日有之に付

一國持四品已上幷御譜代四品以上豫參、御唐門之外にて御目見之事。

一國持四品已上幷御譜代四品以上之面々衣冠下襲無之當月廿日東叡山ゑ可有豫參候。

但部屋住面々は父不出分斗可被豫參候事。下略。

御法事中爲窺御機嫌侍從已上御檜重一組ツヽ、四品、十萬石已上御干菓子一箱ツヽ、其外は御精進物類一種ツヽ、尤在府之分斗一度ツヽ可被差上候。在國在邑之分は可爲無用候。御暇にても於在江戶は可被指上候。

一御香奠白銀三枚　十萬石以上

一同　一枚　十萬石以上嫡子

一同九日　法蓮院様松平賴母様奥様壹岐守様御息女十三回御忌に付今日より明日ゑ松平賴母様より御法事有之、壹岐守様

求馬様へ。

一冷麥　廿五船　壹岐守様

一同斷　求馬様

右之通被進候。

一小野崎造酒昨日遠慮被仰付、今日能下候。

一同十日

一御香奠一枚　芝 天德寺

右法蓮院様御靈前へ、石川文右衞門勤之。

一同十一日　當三月中甚雨に付横手御城土居崩候付御修補之御願被仰上候。如例以御書付被指出候。

私領內出羽國秋田郡五十目村當四月晦日夜亥刻より出火

一百姓家　百二十軒

一土藏　六ヶ處

右之通御座候間御屆仕候。人馬怪我無御座候。已上。

五月　御名

右之通御用番酒井左衞門尉殿ぇ以御留守居被差上候。

一護國院様松平加賀守吉德公十三回御忌被爲當候付、明朝御茶湯於廣德寺御執行に付、

一冷麥　二十五船　盛德院様へ

右之通以御目錄被進候、御小姓勤之。

一同十二日　御靈前ぇ左之通。

一御香奠白銀二十兩　廣　德　寺

右御代香石川文右衞門勤之、御香奠納、御使役勤之。

但子年六月十二日松平阿波守殿御養父與望院殿御法事之節は御香奠納御歩行勤之。
亥年九月廿七日御日記條下に、御並方様へは御使役勤之筈に被仰出候由。

一同十三日

一鮑　一折　橋本喜八郎殿

右横手御城土居崩有之御修覆之義御願被仰上候付、繪圖面草稿御差圖御賴被成候付被進候。御使役。

一同十七日　明鏡院様廿五回御忌に付、今日より明日ぇ於總泉寺從壹岐守様御法事御執行に付、御名代

石川文右衞門。

一御香奠銀一枚　御　靈　前へ

御かうてん納御歩行勤之。

一御野菜　一臺ツヽ　壹岐守様
　　　　　　　　　　求馬様　え

一同十八日　明鏡院様御法事昨今從壹岐守様御執行被成候。向方御法事相濟、畢て從屋形様御繼法事於同寺御執行。

一同廿二日　有德院様七回御忌に付東叡山御靈前え御香奠被獻備之、石川文右衞門勤之。

一御繼法事料銀十枚　總泉寺

但勤方書付具有之、略之。

一御歸國御禮使者今宮又三郎を以、今日御勤之御書被差出候。

一同廿三日

一御太刀一腰　本御勘定頭　曲淵豐後守殿

一御馬代銀五枚

右松下肥前守殿跡大御目付被仰付候付定式被進候、御使役。

一御太刀一腰　本長崎御奉行　菅沼下野守殿

一御馬代銀五枚

右御勘定奉行被仰付候付同斷。

一愛宕下御前樣頭役那可忠左衛門不屆之儀在之、昨夕彼御屋敷ぇ安田宇一右衛門御物頭高根織部御副役被差越候て御引取被成候處、今曉七ッ半時過御やしきぇ致同道候。直々御中長屋之內御圍置被入置候。無役番外之大番組御步行。

一同廿四日　土用窺御機嫌御國使者大和田兵右衛門御臺處役右御使者酒井雅樂頭殿ぇ被差出候處、土用明ヶ御使者被指出候哉、例書出候樣御取次申聞候付左之通。

佐竹右京大夫在國付、暑中伺御機嫌使者寶曆五亥年六月十二日國許出足、道中指支在之七月四日上着、翌五日御用番西尾隱岐守樣ぇ御連狀差出獻上物相伺、翌六日獻上仕候。以上。

、、、、、內
田崎忠四郎

六月廿四日

佐竹右京大夫在國付て暑中窺御機嫌使者去ル五日國元出立、道中川支有之昨廿三日上着仕候。

以上。

、、、、、內
、、、、、

六月廿四日

右之外演說之趣も有之。此義入候は其節御日記可見。

一同廿五日　土用明候て窺御機嫌之御連狀御獻上物も被差上候。

一同廿七日　今般洪水に付栗橋御番人左之面々家破損に付、依願左之通被下候。

一銀三枚ツヽ　栗橋御番人
長山勘平
加藤杢兵衞

右之通御留守居より遣之。

一七月朔日　本光院様三十五日御法事御執行に付、瑞林寺え御代參石川文右衞門。
一御香奠白銀十兩　本光院様御靈前え

御香奠御使役勤之。

一御歸國御使者今日御目見被仰付候付登城なり。

一久世忠右衞門殿を以、鳥越御後室様御引取被成度趣松浦肥前守様え被仰達被下度御賴被成候段、中村政右衞門を以被仰越候得は、御承知被成候趣御答申來候。

一同三日　松平丹波守様御在所え之御暇初て被仰蒙今日御發駕、付て爲御喜御附使者被遣候。

一御席觸大目付え。
紀伊大納言殿逝去に付伺御機嫌明四日惣出仕之事。
但御家門之外西丸えは不及登城候事。
一病氣、幼少、隱居之面々月番之老中宅え使者可被差越事。
一在國在邑之面々は飛札可被差越事。但在國在邑之嫡子、隱居も同斷。

一普請は今日より三日、鳴物七日停止候事。

右之通可被相觸候。以上。

一同四日　享保十五戌年十一月廿七日尾張中納言殿御逝去之節、翌廿八日御觸有之、御在府之御方惣御出仕有之付、屋形樣御在國御留守居大嶋助太夫兩御丸御老中ぇ致參上御機嫌相伺候趣相見得候付、此度も今日御留守居御用番御老中幷秋元但馬守殿ぇ致參上、御樣躰相伺御障無之趣奉承知御國許へ可申上處、御觸之趣には在國在邑之面々飛札御勤候趣有之候。此文法御機嫌御伺之事候間、今日御留守居御兩所ぇ致參上御機嫌相伺及間敷之旨及評議候所、尙又御並合之內藤堂和泉守殿、松平丹後守殿、松平土佐守殿御勤向御留守居より懸合候處、此度は御留守居致參上候義相止追て飛札差出候由、松平陸奥守殿衆谷田作兵衞寄合之席にて何も致決談候趣相達候付、今日御留守居參上御機嫌相伺候儀相止。

一同九日　去月廿八日より御實名御改被成候段相達候付、今日御用番西尾隱岐守殿ぇ以御書付被仰届、御留守居手合無之に付安田宇一右衞門御物頭勤之。

私實名義明と相改申候。此段致御届候。以上。

六月廿八日　　　　佐竹右京大夫

右中奉書半切ぇ認之、上包みの紙上下折御名有之。

右差出候處御承知被成候旨被仰出候由。

一今般銀札遣被相止候付、今日御用番へ御書付を以被仰達候。田崎忠四郎勤之。

私儀勝手向連々不如意之上、近年打續國許損亡有之領內甚及困窮候付、土民爲助力廿五年之間領中銀札遣仕度段、寶曆四戌年伺之上銀札通用仕候處、遠國之義御座候故末々ニ相至差支申儀有之、往々融通之程無心得候付是より銀札遣相止申候。此段御届仕候。以上。

六月廿八日　　御名

如例上包有之、御名認。

一同十一日

一鯣昆布一折ツヽ　　神保兵庫殿

一御樽代五百疋

右百人組之頭被仰付候定式御進物。

一干肴　一折　　西鄕齋宮殿

一御樽代五百疋

右定火消被仰付候定式。

一同斷　　戸田帶刀殿

右道御奉行被仰付候定式。

一鰑昆布　一折
正木大膳殿
一御樽代五百疋
右長崎御奉行被仰付候付定式。
栗橋御番人
富田茂左衞門
一銀子一枚ツヽ
落合　源兵衞
同　所
下番二人
一金子二百疋
去年御本陣
知久又右衞門
一銀子二枚
右今般洪水付て願之趣申遣候得共、御取上無之被返置候。
一道御奉行古役蜂谷七兵衞殿ぇ今日左之通御書付を以御届被成候。
佐竹右京大夫居屋敷廻下水、幷柳原中屋敷廻下水定浚之儀、前度松岡彌太郎樣御勤役中願申上候處、寬保元酉年七月十四日定浚願之通被仰渡候付、右之段御届申上候。被御聞置可被下候。
七月十一日
ヽヽヽヽヽ内
田崎忠四郎
右之通御留守居より御城使角田弟助を以七兵衞殿ぇ遣候處、御承知被成候。
一同十二日　去月廿日於東叡山有德院樣七回御忌御法事首尾能御執行相濟候、御勤御飛札被指出候。
但御法事中公方樣、大納言樣御參詣無御座候故還御御機嫌伺之御勤は無之、御法事濟一ト通之御文

法にて御飛札被差出候。西ノ丸御勤向御法事濟一通は、前々より御飛札等被差出候例無之候得共、今度御觸に兩御丸とも御法事濟惣御出仕有之事故、御在國御在邑之御方西丸へも右御飛札勤有之可然趣、御組合御留守居寄合之上相談致決定、御並方御一同兩御丸ゑ以御飛札御勤有之筈に付及此儀。

一同十九日　御席觸御廻狀。

諸大名幷嫡子死去之義大目付ゑ不申聞面々も有之候。向後右躰之違變有之節は、向寄之大目付ゑ早速屆有之樣可相達候旨、西尾隱岐守殿被仰聞候。

一同二十日　那可忠左衞門不屆之義有之付、今日錠付駕籠にて被差下候。岸平次、竹內久米之助被附置候。

右之御書付伊丹兵庫頭殿御渡被成申來。

一俊交院樣御三回御忌御法事、今明日於總泉寺御執行。

一同廿二日　林民部少輔殿御願之通御隱居被仰付、御家督無御相違大學頭殿ゑ被仰付候旨爲御祝儀、

一鮮肴　一折　　林　大學頭殿

右以御目錄被進候、御使役勤之。

一同廿三日　去二日紀伊大納言殿御逝去に付右御勤之御連狀。

一筆致啓上候。去二日紀伊大納言殿御逝去之旨致承知奉絶言語候。依之公方樣御機嫌之御樣躰爲可奉伺之捧飛札候。上處。

七月十二日　佐竹右京大夫

義明判

御連狀

御側御用人
大岡出雲守樣　御老中迄捧飛札候案如此御座候上處。

一松浦佐治馬樣今朝御登城被成候處、兼て肥前守樣御願之通御嫡子被仰付候段爲御知申來。

一松平隱岐守樣初て雲雀以上使御拜領被成候段爲御知申來。

一同廿四日　求馬樣御實名義敏（ハル）公と申唱候處今度被相改義敏（本ノマヽ（原註））公と奉唱候由、彼方より御書付を以御用人申來候。

一同廿五日　俊交院樣御三回忌御法事相濟候付、爲配當銀左之通被下候。

一銀子　五枚　佐山勾當

右之通御用人より差遣候。

一同廿七日　智鏡院殿（岩城伊豫守殿御奧方）御一周忌御法事昨今於總泉寺御執行、石川文右衞門。

一御香奠白銀十兩　御靈前

一松平加賀守樣御國許ゑ初て御暇被仰出候。

一同廿九日　切支丹達變之御届來月初旬被指出度之旨、今日神尾備前守殿、織田肥後守殿ゑ申込被御聞届候由。

一八月二日　今日町御奉行土屋越前守殿ゑ左之通御届之趣。

佐竹右京大夫家來
下野國萱橋住居
池田忠治實弟
富川郡司
當丑廿五

右郡司鳥居伊賀守殿家來富川才兵衞所ゑ養子差遣置候處、去月八日致出奔候。仍之、兄忠治始諸親類不殘久離之願。

佐竹右京大夫家來
石川文右衞門悴
石川多右衞門
當丑三十六

右多右衞門儀去月七日致出奔候、兼て之通御届。

一同三日　松平右近將監殿御懇意御老中龍田源太夫致參上被爲逢候。

一御太刀銀馬代　松平右近將監殿

右源太夫持參之。

一銀子　三枚　御同人中老那波內匠

一同　二枚　　御用人 關口兵太夫

右源太夫參上之義世話仕候付被下候。

一同四日

一干鯛　一折　　長崎奉行 正木志摩守殿

一御樽代五百疋

右叙爵被仰付候付爲御歡、兼て被仰付候趣を以被進候。御使役勤之。

但此御進物近年御吟味を以被相止候得とも、此度吟味之筋有之如已前被進候。

一例年二季之御届切支丹違變之御書付先月中可被差出候處、御吟味有之今日被指出候。

私家來、轉切支丹野尻德兵衛其孫野尻忠三郎儀犯國法候科に付、當五月廿七日四十七歳にて死罪申付候。且那寺秋田城下淨土宗善長寺にて御座候。爲御斷如此候。以上。

寶曆七丁丑年七月　　丶丶丶丶 御無判

丶丶丶丶殿

丶丶丶丶丶殿

右に付巨細之御吟味筋有之、略之。

一同五日　那可忠左衛門儀に付何角壹岐守様、求馬様御心遣被成置候付、爲御禮被進候。

一とろめん三疋　　壹岐守樣へ
一交肴　一籠
一とろめん二疋　　求馬樣ぇ
一交肴　一籠
右御刀番を以被進候。
一同六日　加賀守樣御國許ぇ初て御暇に付今日御當地御發駕、仍て左之通。
一干鯛　一箱　　かゝ守樣へ
右御進物御斷候へとも格段之義故被進之。
一那可忠左衞門手廻秋田ぇ被差下候付、中田御關所出判之儀市川出雲守殿御家來鈴木左忠太（向後判元世話賴候段去四日條下見ル）世話にて御判出候由相見得候へ共、手形案文不見得。
一同八日　那可忠左衞門手廻被指下候付、
女上下四人内小女二人乘物四挺、從江戸羽州秋田迄房川渡中田關所無相違可被通候。佐竹右京大夫家來那可將五郎と申者之母同姉同妹幷下女之由。右京大夫内田崎忠四郎斷付如此候。以上。
寶曆七年丑八月四日　　右京　印判
土佐

出雲
近江
房川渡
中田　人改中

一同九日　今般那可將五郎手廻秋田へ被差下候付、御關所御出判之義御世話被下候付て、

一するめ　一折　御留守居年寄
市川出雲守殿

一御樽代五百疋

右者御使役勤之前々生肴一折被進候へ共、此度格別譯有之付右之通被遣候。委曲去四日之條下有之。

一金子三百疋ッヽ　御同人御用人
鈴木左忠太
大野權兵衞

一同二百疋　見　習

右何角世話仕候付被下候、御留主居より遣之。

一鯣昆布　一折　御目付
新見又四郎殿

一御樽代五百疋

右御役成爲御祝儀被進候、御使役勤之。

一同十日　本多伯耆守殿御老中御嫡子紀伊守殿、先頃御死去に付、爲御悔御使者被進候。田崎忠四郎勤

之。

一同十三日　南部信濃守殿御在着御禮之御使者六月十三日御城ぇ罷出候處、御謁之義に付御答申上候筋御目付樣へ對し不束之義申上不埒に付、右御使者介添御留守居之者急度相愼罷有候樣、酒井左衛門尉殿より小笠原縫殿助殿を以牧野豐前守殿ぇ被仰渡候。依之信濃守殿御差扣之義御在邑に付豐前守殿より被相伺候處、六月廿四日、御目通差扣候格に可相心得旨左衛門尉殿より豐前守殿ぇ被仰渡候由爲御知有之候處、七月十四日、信濃守殿御一類之內御一人御越被成候樣、西尾隱岐守殿より御左右有之南部彥九郎殿御越被成候處、御目通差扣之格御免之旨被仰出候由。然は右一件不落着之處、一昨十一日、御當地詰合之者を以御在着御禮御獻上物差上候樣御差圖相濟、御獻上物御使者を以御舊例之通御老中謁相濟候由、信濃守殿御承知無之以前之事候得共、御留守居迄向方御留主居より以手紙相知候付、相纒爰に記ス。

右御使者前度於御城御奏者番謁有之例在之付、御老中樣御用有之に付御奏者番謁と被仰出候得共、强て御老中謁に仕度儘、追て御用透之節成とも舊例之通被仰付被下候樣申上候付、右之一件相起候由。

一同十五日

一御臺物　一百　御老中御懇意　堀田相模守殿

右良夜之爲御慰以御使者被進候、龍田源太夫御用人勤之。
一交肴　一籠、　御側御用人御懇意　大岡出雲守殿
右同斷御物頭勤之。
一鯛　一折　御側衆御懇意　田沼主殿頭殿
右龍田源太夫義御當地被差置御用之儀相勤候、依之御序有之節參上仕候はゝ、被爲逢被下度之旨先頃被仰込候處、御相應之御挨拶有之付爲御禮被進候。源太夫勤之。
一白羽二重五疋　長崎御奉行　正木志摩守殿
一鮮肴　一折
右近々長崎表へ御越被成候付爲御餞別被進候、御使役勤之。
一銀　三枚ツヽ　御家來四人
右之通被下候、御財用奉行より遣之。
一金子二百疋　御本丸御玄冠番世話役　鎌方彌四郎
一同　五百疋　西丸御坊主　佐藤永務
右今度仲間大寄合仕候付被下候。
此度塔之澤へ入湯罷越候付被下候。

一同　二百疋　御小人目付　笠原左一郎

右御出入被仰付候付被下候。

一同十八日

一檜御重一組　松平右近將監殿

一交肴　一籠

右者十五日可被進候へ共御障日に付今日被進候、御留守居勤之。

一御太刀銀馬代　御側衆御懇意　田沼主殿頭殿

右龍出源太夫參上被爲逢候に付自分進物拜領致持參也。

一金子五百疋　御同人　御家老一人

同　御用人

右之通源太夫御目通被仰付候付致世話候付被下之、源太夫より遣之。

一同廿九日　眞正院殿十三回御忌御法事、昨廿八日より今朝ゑ於總泉寺御執行被成候段岩城伊豫守殿より爲御知在之付、同寺ゑ御代香石川文右衞門。

一例年之通今日御馬御獻上相濟。

一九月三日

一御太刀金馬代
一兩種千疋　　　　紀伊宰相殿
右先頃御家督被蒙仰候付爲御歡以御使者御目錄之通被進候、御物頭勤之。常陸介殿ゑも御歡被仰進候。
右に付尾張中納言殿、水戸宰相殿ゑも御使者被進候。
一同四日
一椎茸　一捲　　若御年寄　戸田淡路守殿
右先頃御二男豐次郎殿御死去付て、爲御悔御見舞以御使者被進候。御留守居勤之。
一心空院殿五十回御忌御法事昨今有之に付、松平筑前守殿より御執行に付、彼寺ゑ今朝御附使者被遣候。御使役勤之。
一九月十一日
一鯛　一折　　御老中御懇意　堀田相模守殿
右御嫡子鐵藏殿ゑ松平讃岐守殿御息女御緣組御願之通被仰出候付、爲御悅被進候。御留守居勤之。
一松平右近將監殿御息女、松平下總守殿御嫡主膳殿ゑ御緣組御願之通被仰出候付、爲御祝儀被進候。
一鯛　一折　　御老中御懇意　松平右近將監殿

一同十八日
　一干肴　一折
　一御樽代五百疋　松平多膳殿
定火消被仰付候付爲御歡定式被進候。
　一鯣昆布一折ッヽ
　一御樽代五百疋　永井左門殿
右百人組之頭被仰付候付定式。
一同廿二日　去月廿二日、日光御門主より元光院御使僧にて左之御書付被指越候付、龍田源太夫請取御家老小瀬宇兵衞ぇ相渡御國許ぇ申上候處、源太夫を以元光院迄御挨拶被差遣候。
　杉元三左衞門
　原田左內
　右之者共歸參之願申出候由、執當中より御詫書參候付御斷之趣被仰達候。
一同廿六日
　一御太刀馬代銀五枚
　一干肴　一折　岡部久太郎殿

一同斷　　　　　　　　　　　奥津能登守殿

右大坂町御奉行被仰付候付爲御祝儀、御使役勤之。

一鯣昆布　一折

一御樽代五百疋

瀨名傳右衞門殿

右御目付被仰付候付定式。

一するめ　一折

一御樽代五百疋

久永修理殿

右浦賀御奉行被仰付候付爲御祝儀被進候、御使役。

一同晦日　當七月甚雨に付大館御城土居崩、御修覆之義御連狀を以御願被成候。十月十一日御奉書。

一松平右近將監殿、來月於東叡山常憲院樣五十回御忌御法事就有之惣奉行被仰付候。爲御歡御使者被進候、御留守居勤之。

一十月朔日　小堀和泉守殿若御年寄御實母御大病に付御看病御暇御拜領、御登城無之由。

一證明院樣當將軍家重公御簾中比宮樣廿五回忌御法事、今朝より三日朝迄於東叡山御執行之由。

一同六日　立花左近將監樣より兩崇御贈答被成度旨先頃被仰進候付、御相應之御挨拶被仰進候處、御滿悅之段御留守居より以奉札右挨拶申來。

一同十四日　先般元光院より以使僧別紙書付之通申來候付、今日御用人より口達書を以御挨拶。

奉願候口上之覺

此度野僧儀座役之儀御座候て大僧都任官御門主樣被仰付候得は、京都禁裏樣ゑ御門主樣以御名代大僧都任官御勅許御願申上候付、多分之失却難及自力難儀仕候。依之、御屋敷樣へ奉願上候。

白銀五十枚拜領被仰付被下候樣奉願上候。下略。

右御挨拶御用人より御申分之口達書也、略。

一大御目附觸。

於東叡山御法事、十一月六日初日、七日十日、八日結願日。右之外略之。

一年番廻狀左之通。

以廻狀致啓上候。……珍上奉存候。然者京都大佛殿勸化寄附之義時節柄之事故隨分事輕申談候處、先達て從公儀御觸之節、妙法院宮樣御願之趣も御書付相見得申候。是迄宮樣方之御願と申義稀成事に御座候故、責て先年之江州多賀不動院勸化寄附程にも可有御座哉と申談、多中方にても白銀五枚、郡兵衞方にては同三十五枚寄附之筈極申事御座候。猶、御銘々樣思召寄御考合被成候て、御寄附之御員數追て被仰知可被下候。尤當年來春迄之內山王勸化所ゑ相納候筈申合候。右之段於御寄合席口達仕候迄にては御聞洩も可有御座候間、書付差廻候樣各樣任仰如此御座候。

以上。

十月十四日

中川郡兵衛

岡村多中

御並様御留守居中様　但御銘々御名所御付あり。

一同十八日　初冬御機嫌伺御用番松平右近將監とのへ御連狀被差出候。

一同廿一日　御席觸左之通。

大目付へ

松平加賀守

松平讃岐守

井伊掃部頭

松平隱岐守

松平肥後守

松平右京大夫

井上河內守

一當十一月、常憲院様五十回御忌御法事爲伺御機嫌、御水菓子一臺可在獻上候。御精進明之御肴は不及獻上候。

一右之外在府萬石以上之分不及獻上物、御法事相濟御精進明之御肴も不及差上候。

右之通可被相達候。以上。

十　月

一同廿二日　大御目付御廻狀。

大目付ゑ

來十一月十一日六孫王八百年忌に付、從公儀も御寄附之品有之候付、淸和源氏之面々萬石以上以下とも志次第助力可有之候。

一同廿三日

一銀子　二枚　御徒目付出入　吉川十右衞門

一金　二百疋　御小人目付　鈴木半助

右今度關東筋川々御ふしん御用參候付被下之、御留守居より遣之。

一御席觸大御目付御廻狀。

先達て相達候此度六孫王、淸和源氏之面々志次第助力之節六孫王惣社代可相廻候間、右助力料當月中可被相渡候。此段御同席中不殘樣早々可有通達候。答之儀は先々銘々より不及挨拶、下略。

一御席觸にて御書付左之通。

覺

一一萬石以上之面々は御香奠獻上之使者のし目、長袴にて、朝六ッ時文珠樓通被差越之本坊ぇ可被獻事。

一一萬石以下三千石以上之面々使者はのし目、半袴にて、四時より九ッ時迄之內文珠樓より東之方可被相納事、下略。

御香奠獻上之覺

一白銀三枚　　十萬石より二十萬石まて。

一同　一枚　　十萬石以上之嫡子。

上下略之。

一同廿五日　當秋御領內御損亡有之付御用番松平右近將監殿ぇ御屆之趣。

高五萬二千六百七石餘。

一同廿七日　粕漬鮭御獻上。

一同廿九日　來月十一日六孫王八百年御忌付て、御寄附之義先達被仰觸候付、今日以御使者京六孫王社惣代實法院役僧宿寺深川佐賀町淸光寺ぇ被遣之、御使役勤之。役僧禪覺寺へ相渡候由。

進上

白銀百兩

以上

秋田侍從
義明

右御折紙大高垣紙ゑ認之。

一十一月朔日　松平筑前守樣御參府、御附使者被遣之。

一同七日　昨夜深川御屋敷前へ捨子有之付、御屋敷守野元市十郞以書付御留守居まて相届候付、今日御用御賴之御目付稻生下野守殿ゑ左之通書付差出候。

一　佐竹右京大夫深川小名木川抱屋敷組合辻番門際ゑ、昨六日夜九ッ半時、當歲と相見得候女子捨置有之候段辻番人相届候付、則屋敷之內ゑ引取乳持附置養育仕置候。仍之御屆申上候。以上。

十一月七日　、、、、、內
田崎忠四郞

右吟味之上忠四郞名所相除、御城使石川團六名所を以差出候。

右御城使石川團六差出候處、御受取置候旨下野守殿被仰聞候由訴之。

一同十日　御席觸廻狀到來。

大目付へ

一他人養子仕候義、陪臣浪人之子御直參之親類有之候共、願は當人之親類にて無之候ては難相叶候段享保十八丑年相達候。右願は當人之親類と有之は又從弟迄之事に候旨、元文元辰年相達

候。右之通之續候共、向後は實母方之續にては陪臣浪人は養子願難成候。
右之趣面々寄々可被達置候。以上。
一同十五日　松平丹波守樣御妹お兄樣今日石川主殿頭殿御嫡子下野守殿ゑ御婚禮御調、爲御祝儀左之通。
一干鯛　一箱　松平丹波守樣ゑ
右之通被進候、御使役勤之。
一同十九日
一黃鷹　一居　若御年寄 小出信濃守殿
右兼て御所望に付箱鷹に付被進候、御使者御留守居。
一野村藤五郎御城使不届有之御追放被仰付候。
一同廿日
一䳄鷹　一居　御懇意御老中 西尾隱岐守殿
一黃鷹　一居　堀田相模守殿
兼て御所望に付御兩所ゑ被進候、御留守居勤之。
一同廿三日

一御太刀銀馬代五枚

一干肴　一折　伊丹兵庫頭殿

先頃御留守居年寄被仰付候付被進候。

一同斷　筒井內藏殿

先頃大御目付被仰付候付被進候、御使役勤之。

一同廿四日　松平阿波守樣奧樣御安產御男子御出生也。

一同廿六日　深川御屋敷前道造幷川前波除杭御修覆に付、町御奉行え被仰達候趣。

佐竹右京大夫深川小名木川抱屋敷前後道造仕度候。屋敷前川中え二間程浚候て幷波除杭修覆等仕候間、繪圖面を以申上候。以上。

十一月廿六日　、、、、、內
福嶋孫四郎

右之通御屆相濟候。

一同廿七日　今日より寒入。

一當八月中甚雨にて久保田御居城土居崩有之付て、御連狀を以御修補之儀御願幷御繪圖御書付等被差出候。御用番は酒井左衞門尉殿え田崎忠四郎勤之、御文體如例故略之。

一御食籠一荷　　　　　　　　　松平阿波守様
一御重　一組、　　　　　　　　奥　様
外御次夜食百人前
御酒二斗
右御産室中御見舞且爲御慰被進候、御使役勤之。
一十二月朔日　松平阿波守様御奥様、御七夜爲御祝儀御使者を以左之通被進候。
一干肴　一折　　　　　　　　　松平阿波守様
一同斷　　　　　　　　　　　　奥　様
一御産衣一重　　　　　　　　　同　御出生様
一兩種　千匹
右之通被進候、御使者田崎忠四郎勤之。李頭様へ御添御口上。
一松平阿波守様にて御出生之御男子様、千松丸様と被稱候由。
一同二日　先般久世忠右衞門殿を以、御後室様御引取被成度之旨松浦肥前守様へ被仰達候處、右之御挨拶小笠原縫殿助殿迄申來候由にて、御同人より左之通御口上書之趣。
先嫡子壹岐守妻里方え引取申度旨、先達て久世忠右衞門殿、拙者其元宅被參家來之者え委細被申

聞候趣致承知候。將又未年若之事に候得は、右之通相成候は丶、双方共に宜ク在之儀に候旨忠右衞門殿被申候趣、是又致同意候付、此上は乍殘念里方任趣意候付、此趣を以佐竹右京大夫方ゑ宜御返達賴入存候。以上。

九月廿五日　松浦肥前守

小笠原縫殿助樣

一同三日　元光院此度大僧都任官に被仰付候付、爲御歡左之通被進候。

一白銀十五枚　元光院

右御使役を以被遣之。

一同四日

一鰑　一折　橋本喜八郎殿

右秋田御居城土居崩御修覆之御差圖有之付被進、前々には鯛一折に候得共評議之上御樽代に相成候。

一金子二百疋　御同人用人　和關常右衞門

何角世話仕候付被下之。

一同七日　先般關東筋川々破損所數ヶ所有之付、御ふしん御手傳も有之哉、當地御逊被遊度趣內々堀田相模守殿ゑ龍田源太夫罷越、長谷川忠兵衞に申談候處御聞置被成候。依之右爲御禮、

一八丈嶋十端箱入　堀田相模守樣
一干肴　一折
一金子二千疋　御同人御用人　長谷川忠兵衛
右之通被進候。
一同十三日　松平陸奥守殿御領上戸澤往還之内にて、秋田領、、、と申者致倒死候付て、其節立會候役人え左之通。
一金子三百疋　檢使役人　堀江淸右衛門　一同斷　大庄屋名代　又六
一同斷　上戸澤村肝煎　長次右衛門　一同斷　同所檢斷　惣七
一同斷ッ、　同所與頭　林之允　一同二百疋　同所　淸光寺
喜右衛門　一同　片倉小十郎家來　松本半內
右之面々、向方御留守居迄此方御留守居より遣之。
一同十七日　寒中御國使者三村平太勤之。
一同十八日　鹽引鮭御獻上也。
一丹後嶋三疋　御勘定頭御用御頼　一色周防守殿
一生肴　一折

右者、秋中關東筋川々御ふしん御手傳可被蒙仰御さた有之節、何角御心添有之に付被進候。田崎忠四郎勤之。

一金子五百疋　御同人家來　高坂仙右衞門

右之節致世話候付被下候、御留守居より遣之。

一小出信濃守殿若御年寄御嫡子眞三郎殿叙爵被仰付伊勢守殿と御改之由、年番より申來。

一同廿一日　吉田長佐書上。

右當夏中出水領分損亡に付、指當難儀可仕旨拜借金被仰付旨、於御白書院緣類老中列座隱岐守申渡候

一萬兩　眞田伊豆守　七千兩　牧野駿河守　三千兩　松平山城守

五千兩　久世出雲守　三千兩　增山對馬守　二千兩　米津越中守

右同斷之旨於芙蓉之間同人申渡之、列座同然。

一鯛　一折　長崎奉行　坪内駿河守殿

右今度長崎より御歸府に付爲御歡被進候。

一同廿二日　當四月中下野御領え四季打鐵炮御願相濟是迄爲打置候處、此度御取上に付左之御書付大御目付筒井大和守殿鐵炮御改御兼役え被差出候趣。

領分之內猪、鹿多出百姓及難儀願出候付、當四月御斷申達四季打鐵炮爲打申候處、同十一月廿五

日迄打留鐵炮取上申候。此段御斷申達候。以上。

十二月、　佐竹右京大夫

筒井大和守殿

覺

領分之內當四月より十一月迄猪、鹿、猨打留不申候。以上。

十二月　、、、、、內田崎忠四郎

右御書付二通、中奉書半切え認之、上包美濃紙。

外、此已後猪、猨等打留候節之御屆如此候由。

覺

一猪　何疋

一鹿　何疋

領分之內二月より同十一月まて之內打留申候。以上。

月日　、、、、、內
、、、、

一稲生下野守殿用人、先頃深川捨子有之節何角世話仕候付、

一金子二百疋ッヽ被下候。

一同　百疋　御小人目付一人

右之通被下候。

一同廿五日

一干鯛　一箱　松平阿波守様

右者今日千松丸様初て御宮參被成候爲御歡被進候、御使役勤之。

一同斷　蜂須賀千松丸様

右同斷にて被進候。

一兩種　五百疋　小菅猪右衞門殿

右今度西丸御目付被仰付候付被進候、御使役勤之。

一同廿八日

一干鯛　一箱　松平修理大夫殿へ

右者先頃初て御國許ぇ之御暇被仰出去ル十三日御發足に付、爲御歡御使者を以被進候。御使役勤之。

一御破魔弓二飾

一干鯛　一箱　蜂須賀千松丸様

右爲明陽之御祝儀御使者を以被進候、御使役勤之。

○寶曆三酉年

一二月　此度御歸國に付御通鷹御用に付、御鷹匠伊藤小十郎、今泉喜藤治、庄司及右衛門、田口久内立歸罷登候。
一同月　御内々被仰出候付、御領内赤子惠之厚思食之次第、御代官ぇ被仰含候。
一同月　永壽院様今年八十に被爲成候に付、御年賀御祝同五日御内々にて在之、其節屋形様、御前様御饗在之。
一三月二日　坂本九郎左衛門病死に付、切支丹改役より小田部縫殿右衛門御目付被仰付候。
一同月五日　縫殿右衛門代切支丹改役飯塚多右衛門被仰付候。
一四月　補陀寺後住之願同寺近末寺院幷天德寺より願に付、御伺之上脇本村大龍寺被仰付候。

一去月十八日　大納言樣御前髮被爲取候に付惣御出仕之御觸在之、屋形樣にも、同朝五ッ時御登城之段申來候。

一同月　御下國御暇被蒙仰五月三日御發駕、同十八日御着城之段被仰出。先日、御領地御泊付申來候得共、尙又此度相備候付御領內御泊付とも申來〻。

一同月　津輕岩松樣御殿中御勤幷御目見相濟候。此後諸事御勤共屋形樣御賴に思召候御間柄之事故、兩祟被遊度之旨、俊亥院樣まて御隱居靜心院樣より申來候。御承知被成候間、此段大和方ゑも可申知之段申候。

一同月十五日　從公方樣大納言樣爲上使本多伯耆守樣御出御歸國御暇被蒙仰、如例御卷物、銀子御拜領相濟候よし申來〻。

一同月　津輕岩松樣より御馬一疋被爲進候。

但栗毛五歲、尺四寸在之。

一同月　松平加賀守樣御逝去に付御國使者高垣七右衛門被仰付候。

但、御遺骸御出棺加州金澤ゑ御下に付御香奠銀十枚、御悔之御口上は江戶にて相濟候に付御口上不被仰進、御年寄中より斗被仰付候。右は、圓明院樣御不幸之節加賀守樣より御國使者申來候例に從ひ、

一七右衛門ゑ、御使者留在之候ても御菩提寺ゑ罷越、御代香可相勤申渡。
一御香奠渡御歩行一人、幷宰料御足輕兩人申渡ス。
一七右衛門ゑ御貸馬被仰付より上下二十人にて參候に付、路銀積候所及九十兩候に付、金百兩被下候。
一同月　天徳寺閑居安養軒、去ル朔日病死之段御道中ゑ爲御知被仰上候。
一同月　三月十七日御老中御連名御奉書西尾隱岐守樣より到來、翌十八日御登城、御歸國御暇之御禮相濟候由申來ル。
一五月　向庄九郎與下赤坂角助、當時與頭相勤候に付戸村十太夫取次役同樣に、御晝休所にて御目見被仰付被下度候由、願之通相濟。
一同月　大嶋喜之丞御納戸役本役被仰付候由申來ル。
一同月　武藤主馬實躰に相勤、且親與惣右衛門勤勞被思召、此度御納戸役見習被仰付御歸國御供被仰付候。秋田にて被仰付候者、罷登之節斗一騎償御役料被下候。定居平澤十右衛門、小林武左衛門見習相勤候節は、其砌より一騎償被下候。御伺申上候所、格別之思食にて御償高不被下置候て、高百石之御役料被下置候。
一同月　御在國江戸詰合御用人、御物頭、與付御刀番、御納戸役、御用又は御暇にて外出之節、御年寄中

え爲御知不申上候付御伺之處、以來可爲相知之旨御付札にて被仰出候。面々え被仰渡候。

一同月廿一日　屋形樣御道中益御機嫌能御旅行、昨廿日戶嶋御止宿、今廿一日御着城可被遊。右は戶嶋御本陣え御飛脚被相立候、直々江戶え被差登候。

一六月　小田野又八郎御家老職被仰付候。

一同月三日　大小姓御番頭荒川筑後勤方緩怠に付、御條目を以御役儀被召放遠慮被仰付候。

一同月　去月廿七日、日光御宮御普請出來正遷宮相濟候に付、爲御祝儀惣御出仕等之儀御席觸在之候。右に付於江戶御國使者被仰付土屋吉兵衞相勤ル、金子四兩被下候。

一同月六日　小野岡市太夫旅中無滯上着之處、上之御障日に付廻勤延引、依て去ル十一日御連狀御格書持參相勤候。當人登城于今相知ル。

一同月　土用中御機嫌御伺之御國使者、御中屋鋪詰御臺所役野內佐五右衞門被仰付、如前例金八兩被下候。

一同月　四月十三日大嶋佐仲を以、以來公用之者に被下金前度御伺可申上候。併、差懸り御伺成兼候分は申渡之上爲御知可申上候。右爲御知申上候義相溜候て、一ヶ月兩度斗にも可申上候。幷に當時諸事御稱美筋被下金等都て爲御知可申上、拜借金等も右同斷被仰出候。土屋吉兵衞、野內佐五右衞門等え之義爲御知可被仰上候よし申來ル。

一同月十四日　橋場總泉寺病死致候。

一同月　星野杏庵御行列御供數度相勤、御婚禮御當座にて格別物入可有之、且鳥越奥樣御疱瘡中度々御診被仰付候付、金子七兩被下置候。

一七月　於上野有德院樣御法事在之、御香奠銀三枚、御使者信太內藏助御留主居田崎忠四郎同道にて相勤候。

一同月　來戌年兩御屋鋪春秋交代帳二冊、外御留主詰帳一冊、都合三冊江戶より差下候。

一同月朔日　小野岡市太夫可致登城旨、去月廿九日、御用番松平右近將監樣より御留主居前毎之通切紙到來、田崎忠四郎同道にて登城致御歸國御禮之御使者、如前例之御太刀目錄永井伊賀守樣御披露。御前え被召出、市太夫自分之御禮をも土岐伊豫守樣御奏者にて相濟候由申來。

一同月　日光御宮御普請出來、御國使者土屋吉兵衞、去月廿七日御留主居同道にて御用番松平右近將監樣、西御丸御老中秋元但馬守樣御連書御格書共に差出、御承知之上同廿九日御奉書被渡置候。

一同月五日　土用中御機嫌御伺御使者野內左五右衞門兩御丸え相勤、同六日七日兩日御奉書被相渡候。

一同月　總泉寺後住伊豆國田中之藏春院被仰付候。

一同月　壹岐守樣御隱居御願御添書御願被仰立候義に相見得、下書差下候由申來ル。

　但享保三戌年指月院樣御隱居之節、同五子年源照院樣右同斷之節御禮被仰上候。

一八月廿日　屋形樣御容躰御變症被成御座、御養生不被成御叶同日御逝去被遊候付、則渡邊源四郞早追にて爲御知申上候。其節御法名被差登候。
但御逝去に付、於御座間御相手番中ゑ右之爲御知主殿、御年寄中列座にて申渡、御書付之趣も申渡、右畢て於陰間御書付之趣御側之面々ゑも申渡ス。右畢て於御廣間無役引渡、兩番頭、寺社奉行、無役廻座、其外諸頭役幷町々より兩人宛呼出御逝去之段爲申知、右御書付之趣御年寄中列座にて被申渡候。右御書付源四郞登被相渡候て、於江戸御家中幷萱橋、京都ゑも被仰越候樣に御年寄中より被仰達候。
一御遺躰御取納之義三枝仲、長瀨平右衞門勤之。
一御小歛同廿二日、御大歛同廿三日、御入棺同廿四日御剎道相濟、其節御名代佐竹主殿勤之。
一同廿二日御墓所見分山方內匠、掛り役人同道にて罷越ス。
一御誌文太田治太夫ゑ申渡ス、早々被差下候樣に申達ス。
一御葬禮之節御位牌佐竹主計、御香爐佐竹主殿申渡ス。
一御願書御年寄中御請納之節は、早速上御屋鋪ゑ御引移之義申達ス。
一同月廿一日　延生院樣去ル十八日より御痧にて廿一日御死去に付、三日間小屋〳〵相愼候樣に江戸ゑ申達ス。

但壹岐守樣、求馬樣御忌中に付、差て鳴物停止之御觸無之。右は山城病死之節之例に從ひ。

一同月廿四日　鈴木平藏御醫者願に罷登上着致候。御樣子御伺小林武左衞門金子三十兩被下同日江戶表出足、同廿九日四ッ時着。御二方樣、御前樣より之御口上、卽御廟所ぇ申上候樣に申渡ス。

一同月廿八日　御出棺、天氣能シ。

一同月廿九日　御判物御寫幷通霄院樣御印、其外御什器品々被爲差登候に付、御膳番大繩彌五右衞門へ申渡ス。御膳番物書熊谷名右衞門、渡邊藤三郞持參、來月二日出足罷登候筈。

一同月三日　辰之刻西尾隱岐守樣より之御奉書到來致候、因て布施要人ぇ被仰渡。右之御奉書、幷御引まくり一通封之、掃部之助、內匠印形にて同人ぇ相渡、早追にて出足致させ候。

一九月　秋田にて又八郞殿御請取之印判二ッ御持參之上、去月廿七日御跡目御願之節御封共に被御用立相濟、御納戶役平澤十右衞門病氣に付、御用人赤石藤左衞門與付御刀番眞崎又左衞門ぇ相渡御寶藏へ被納置候由申來候。

一同月　屋形樣大病に付御跡目御願御書付、去月廿七日朝御用番西尾隱岐守樣ぇ松浦壹岐守樣御持參被成候。御述狀、御樣躰書、御相談之御家門樣御人數書、久世忠右衞門殿、松浦樣御同前に隱岐守樣ぇ御持參候處、無御相違御請取被成候由申來候。

一同月六日　江戶御屋鋪御門調幷小歌三味線共に、圓明院樣御代迄之通り此末被停止置候義、去年通霄

院樣御內々之思召にて、差て御免被成置候譯にも無之故、此度眞壁十兵衞登りに申達ス。

一同月三日　御家督被蒙仰候に付、御廟處幷御家中ゑ之爲御知赤石藤左衞門被差下候。

一同日　昨二日御老中御連名之御奉書壹岐守樣ゑ到來、翌三日松浦壹岐守樣御同道にて、御老中本多伯耆守樣御宅ゑ午刻求馬樣被遊御出候所、御老中御列座にて御家督無御相違被蒙仰之由申來候。

一同月十八日　御遺領無御相違被蒙仰之由此度爲御知赤石藤左衞門被差下候に付、天德寺御廟處幷御家中ゑも同ク被仰知候。

一同月四日　御悔爲上使御奏者金森兵部少輔樣御出、御香奠白銀三十枚御拜領、其節御取持吉田五右衞門殿御出諸事無御滯相濟。上使御出之刻屋形樣御出向、御歸之節は御門外迄御送、其以後御老中御廻勤被遊之由申來候。

一同月五日　御前樣御事御後室樣と御稱可被成旨從屋形樣被仰進候處、御前樣御相答に付江戶、秋田共に被仰知候。

一同月　秀丸樣如何稱可申哉御伺申上候、吟味之上可申上被仰出太田治太夫と及評議、奉稱御曹司樣と可然申上、右之趣可奉稱被仰出候。

一同月五日　屋形樣從鳥越御屋敷上御屋敷ゑ被遊御引移候儀、公邊は、三日御家督被仰付候節より御引移之積にて其趣御屆も被成置候得とも、御內々は五日御引移被遊候よし申來ル。

一同月十一日　御畫像出來に付態以御飛脚被下候。

一同月廿四日廿五日、御法事御執行に付、岩城伊豫守樣より御名代御使者大瀨政右衞門廿四日致來着候、御馳走岡淸七被仰付候。御法事中御寺え伊豫守樣申付候旨政右衞門申聞候、依之廿五日御法事暫御寺客寮え爲相詰御燒香共相務候。御香奠銀一枚副使を以被遣候。

一十月　御曹司樣御痲疹被遊候て、御酒湯まて相濟候よし申來〻。

一同月　天德寺願之通閑居就被仰付候、先例之通三嶽之永源寺え以飛脚書狀差遣候。右書狀、寺社奉行を以御用所迄差出江戶表へ御飛脚便に遣候て、江戶より作飛脚を以差遣候。返札參候節は、御序に御飛脚江戶表より相下同寺え相渡〻。

一同月十三日　江戶表御長屋小歌三味線、通霄院樣御代差て御免とは無之候得とも、不苦之趣御沙汰在之何も其心得にて罷有候。御當代に至り圓明院樣御代之通可被成置思食被仰出候。併全躰圓明院樣御代之通に有之候ては通霄院樣思食相立不申、定居家持之娘は向々立身之爲にも相成候故、御構不被成候。其外は圓明院樣御代之通被成置其段被仰渡候。

但、亥刻歸御門調御先代御直々御覽被成候得とも、是又圓明院樣御代之通り可被成置御內々被仰出候。乍去爲御知不申上不相叶儀は可申上候由被仰出候。

一十一月朔日　御家督御禮御首尾好被仰上候に付、右歡同十三日御廣間御帳被差出、何も麻上下にて登

城御帳に付致退出候。

一同月十二日　爲上使市橋大膳殿を以御鷹之鳫二羽御拜領被遊候由申來ル。

　但其節壹岐守樣御出被成候て、御取持吉田小右衛門殿御越被成候。

一同月廿八日　大繩彌五左衛門、鈴木平藏を以御内々被仰出候。御家老とも江戸表詰中、御用之外外出之儀餘り無之相愼候樣に被及御聞候、脇々御家老とも、左樣に無之樣に被聞召候。以前は如何に可有之共、當時繁用にて欝散無之不快等にては返て御用御手支に至候間、暑中之凉又は堺町抔ぇ折々罷越候ても苦シかる間敷思召候由被仰出、其後御直々も御意在之、難有奉存候段御禮被仰上候。

一十二月　諸士被下金幷牢舍之者御仕置、圓明院樣御代迄は御年寄中ぇ被任置候所、通霄院樣御代右兩樣之儀被仰出、其内には思食之外難澁に相成候儀在之御年寄中御伺被仰上候所、兩思食相立候樣に御伺之通被仰出候。依て右御書付、御年寄中より御同役樣ぇ被差下候。

一同月　御曹司樣御緣組之儀、從壹岐守樣、御城坊主宇多川元格を以御内々土佐守樣ぇ被仰進候。從此方樣も御留主居を以向方御留主居ぇ御内々被仰通候所、此度土佐守樣より御挨拶、吉日を以元格壹岐守樣迄御相答在之筈之由、向方留主居内々田崎忠四郎御留守ぇ申聞候。

一同月六日　御老中御連名之御奉書壹岐守樣ぇ到來候に付、民部樣御同道にて翌七日御登城被成候所、御願之通御嫡子民部樣被仰付候。

一同月二日　御曹司様御嫡子形之儀、御留主居田崎忠四郎を以御用番松平右近將監様へ御屆被仰立候所、御勝手次第に可被成之旨御付札にて被仰出候。

○寶暦四戌年

一正月二日　正洞院後住白馬寺選林被仰付被下度よし、天德寺願之通被仰出候。

一同月三日　舊臘廿一日立御飛脚着候所、屋形様御任官に付御名右京大夫様と御改之由申來候。

但、舊臘十八日御用番西尾隱岐守様御願之通被仰立候所、同十九日以御付札御願之通被仰出。依て御靈前ゑ正洞院、闐信寺、諸社御代參幷御家中ゑも被仰知候。

一同月十二日　例年之通院内銀山御運上錄目錄幷端銀共歩夫一人持にて爲差登候。

一同月廿二日　小野寺市太夫御家老職被仰付候。

但、佐竹主殿ゑ爲御知被成置申渡候節は、主殿ゑも先例之通被致登城候様に被仰出候。市太夫ゑ就被仰付候誰ッ被差下可被仰渡候得とも、當時御人少故不被及其儀旨當人ゑも被仰出候段御申渡被成候所、色々辭退在之候へとも、主殿始段々申聞御請申上候由。

一閏二月　去ル申年迄御用達役兩人宛江戸詰候所、御省略に付一人勤に被仰付候付御願申立候。御在江年斗も兩人被仰付被下度候由。然は、御後室様中御屋鋪ゑ御引移之御模様に相成候、左候得は無晝

夜差懸候御用も在之事故、無差別兩人被差登不申候はゝ相成間鋪之由江戸御年寄中よりも申來ル。尙兩人登に被仰出候。

一三月　此度御誕生之御二男様御名幸之助様と奉稱候よし。通霄院様御幼少之節左吉様と奉稱候御弘無之候。依て此度も御弘無之候。

一四月　大御番大山造酒實父内藏、先年願之通隱居御暇被下候。同人、當月より八月迄之内、伊勢、高屋え參詣仕度由造酒願申立候。隱居之事故無御伺被仰付候、追て爲御知被仰達候。

一同月　健次郎様え御先代之通此末兩祟之義被仰達候所、御相答に在之候。

一五月　御先代より、上方御借銀御用御家老上京無之事に候得とも、御伺之上此度小田野又八郎被仰付候。

　　但此節御在江に付江戸え向ひ能登、御本方奉行川又善左衞門同道致候。

一六月　鱗勝院近年病身にて願之通閑居御暇被下置、後住足田村能持院儼翁被仰付候。

一七月　江戸秋田共に遺跡養子願、此末一ヶ月限御伺在之様に被成置可然之旨、御省略方より御伺申上候所、右之趣に被仰付候。

一同月　此度御曹司様御縁約之儀、先月廿六日御留主居龍田源太夫を以松平土佐守様え被仰進候所、右御挨拶、同日向方御留主居早崎小兵衞を以御相答在之候。ゝ

但、御内縁之事故御壽は屋形様、御曹司様え斗り御年寄中よりも被仰上、外、上々様へは仰上られす候。

一同月　當春中盛德院様御薙髪被成置候に付天德寺え御納可被成置之所、御便無之延引に相至、此度湊金左衛門御入詰にて罷下候付被預置被差下候。

一同月　多賀谷下總え新知二百石被下置候。

一八月　天德寺にて御法事御執行。御入目此末御省略可被成置候哉、幷同寺へ御法事之節御城下十ヶ寺相詰候儀も、五ヶ寺宛相詰御繰合に可致哉御問合之所、正洞院、闐信寺、鱗勝院、四ヶ寺(マヽ)、御法事毎度相除候事不相成候由。左様之節は殘六ヶ寺一ヶ寺宛詰候事に相成候故、御伺之儀延引被成候。併此度銀五十枚にて御仕切同院より聞濟候。鑑照院様五十回御忌之節より御相手番衆支度不申付候、以來役々とも支度省キ可申之由御懸合、江戸え在之御伺之上相濟。

一八月十九日　爲上使三好勝之助殿を以御鷹之雲雀御拜領。其節壹岐守様、求馬様御出、御取持吉田小右衛門殿御越被成候。

一同月　御入部御用懸於江戸眞壁掃部助御家老、關五郎左衛門御本方奉行、赤石藤左衛門御用人、三枝仲御膳番、那可儀右衛門御副役、於秋田岡田淸三郎御本方奉行、白土藤太御用人、大槻五郎兵衛御副役被仰付候。

一同月　龜町より船大工町え通用之新橋願、赤石藤左衛門を以所々内々承合相盡候上、去年二月中御願

被仰上候所、同四月中御老中御連名之御奉書にて御願之通相濟。仍て、右普請早々取懸り可然之由申來候。

一同月　御歸國御暇御禮之御使者は宇都宮四郎被仰付候。

但一ヶ年差上高并金百兩被下候。

一同月十一日　壹岐守樣え御老中御連名之御奉書到來、本庄御藏火之御番御當人樣被蒙仰付。

一同月　銀札遣之儀當戌年より來ル戌年まて二十五ヶ年札遣通用可致旨、御付札にて去月晦日堀田相模守樣より御留主居御呼出にて被仰渡候。

但去月廿一日一色周防守樣より關五郎左衞門被爲呼、古來より銀遣候哉、且札遣通用致候ても難澁無之候哉御尋に付、障無之旨及御挨拶候所、覺書を以申聞候樣に周防守樣被仰相調差上候。札遣仕法之儀御尋に付、引替所建置請合札に致、有德之町人、百姓之內札本に申渡、名前とも右札に相記候段申上候所、是又書付差出候樣に被仰、差上候。

一九月　山方內匠病氣に付再應御役儀御訴訟申上、願之通御免被仰渡候。

一同月　去月廿九日雲雀御拔に付、相馬彈正少弼樣、岩城伊豫守樣、壹岐守樣御出、爲御取持小笠原縫殿之助殿、久世忠右衞門殿、吉田小右衞門殿御越被成候由申來ル。

一十月六日　御吉日に付御入部御內々御供觸在之候。

一同月　山方内匠御役御免に付殺生御判差上候得とも、是迄御役首尾好相勤候に付、當人一代は御免之段御伺之上被仰渡候。

一十一月五日　切支丹改役申立候。切支丹類族今年出生病死無之に付、當十二月御屆無御座候段書付を以申聞候付、右書付爲心得江戶ゑ被差登候。

但宇都宮帶刀例に從ひ。

一同月三日　御饗應來々子年被成置度旨御書付にて、當三日小笠原縫殿之助殿を以御用番堀田相模守樣ゑ被差出候所、無御相違相濟。

一十二月　去月廿六日入籠死罪之者、御吟味被遂御仕置に付、要書を以爲御知被仰上候。通靈院樣御代と相違、右之趣前度御伺相濟。

一同月　御町奉行より、當御町幷湊町別て差迫候付、明年中日數百五十日歌舞妓等御免被成下度願申立候付、江戶ゑ御伺被成候。

但御在江年也。

一同月　去月九日鳫御披に付、相馬彈正少弼樣、壹岐守樣、求馬樣御出、爲御取持小笠原縫殿助殿御出被成候由申來ル。

一同月朔日　大納言樣御婚禮之段被仰觸在之候。依之同二日御大名樣方惣御出仕在之、屋形樣にも御

登城、同五日御能御拜見被遊候由申來候。

一同月　先年諸國ゑ人參種植立之儀は被仰渡候得とも、雪國にて御延引之所、尾州植立之人參宜、御一國右之人參にて御用相辨候趣河野昌庵老御前ゑ御直々被申上候付、手寄を以作り方問合、此度御醫者中より申遣候間植立候樣に申來ル。

一同月　十五日より銀札遣被行候。

一同月十八日　此度銀札御取行に付、明春に至り、高百石に付銀札百目宛被下置候趣、主計始諸士被仰渡候。

○寶曆五亥年

一正月九日　於江戶川又善左衞門銀札奉行兼帶、白土奥右衞門御財用奉行被仰付候。右御用兼帶須田內記殿御家老擔被仰付候。

一同月　松平阿波守樣御紋所、丸に左まんじに御座候、依之御停止之段被仰渡候。武器は無御構。

一同月　如恒例年始御規式無御滯相濟、同日御登城御禮首尾好被仰上御時服御拜領。且屋形樣、上々樣御機嫌能御超歲之よし申來候。

一同月　去月廿一日御入部御願之儀、御用番酒井左衞門尉樣ゑ小笠原縫殿助殿を以被差出候所、早速御

受納被成候。

一同月　御歸國御暇御禮之御使者宇都宮四郎能登に付、御勤之御書、御連狀、御格書は於此表御前之御直渡、其外之御書御目錄は、共表於御殿何方之御坐鋪にて成り共請取申度之旨內々願在之、此儀主殿始孫太夫も被申候由。御年寄中より江戶御同役ぇ被仰達候。

一二月　近年御上下之節大石田驛殊外人馬滯候に付、今年御入部より尾花澤御通行之由被仰渡候。尙京都、江戶登之面々も右に心得可申被仰渡候。

一同月　去月廿八日御吉日に付、鳥越奧樣御袖留之由申來ル。

一同月　御歸國御暇被仰出次第、四月中旬より下旬迄之內御發駕被遊、十六日振にて御着城之由被仰出候。

一同月　小野岡市太夫病死に付、可被成下上使哉之儀前例致吟味御伺被成候所、引渡御相手番之內より可被遣被仰出候に付伊達外記被仰付、嫡子源四郎へ被成下上使候所、御禮澁江八五郎を以申上候。

一同月廿四日　御條目を以於須田內記殿御宅、御用人鈴木平藏與付御刀番眞崎又左衞門を以、小野寺伊右衞門殿御役被召放御咎之儀被仰渡候。伊右衞門殿病氣に付被賴信太勘九郎へ被仰渡候、嫡子土郎は罷出候。同日土郎殿遠慮申立之通被仰付候。

但小田野又八郞殿御下之節御持參之上、廿一日晚御筆之寫を以內記ぇ又八郎申談、翌廿二日朝佐竹

主殿ゑ又八郎罷越、口上にて思食之次第爲申知候。伊右衞門ゑ被仰渡候以後、御用所役人御側兩役御副迄、御內々思食之趣爲意得有增被仰知候。

一同月廿四日　小瀨宮內御家老被蒙仰、又八郎罷下に持參致候。

一同月　須田內記ゑ御入部御用懸之儀被仰付候。

一同月廿四日　白土奧右衞門代御用達役八代彌太郎被仰付候。

一三月　銀札取次役山方喜右衞門、小野崎又右衞門、大繩幸左衞門、右三人被仰付候。

一同月　佐竹主計願之通隱居被仰付、家督幷與下所預共に、嫡子圖書ゑ無御相違被仰付候。

一同月　六供之內、威德院後住寶鏡院願之通英諄被仰付候。

一同月廿九日　大槻五郞兵衞代御用達役、秋山長右衞門被仰付候。

一四月　御入部以後於秋田、都て御側勤之義先頃兩役相伺候所、御先代之通可相心得候旨被仰出候。共旨被仰渡候。

一同月　田所勘左衞門、御財用奉行可被仰付候旨先頃被仰出候。同人長病にて隱居願申立候所被返置候。去ル十六日出勤に付同十八日被仰付候。

一同月十一日　從公方樣爲上使本多伯耆守樣御出、同十二日從大納言樣爲上使秋元但馬守樣御出、初て御歸國御暇被蒙仰、如例之御卷物、銀子被遊御拜領。

一同月十四日　御老中樣より御連名之御奉書堀田相模守樣より到來、翌十五日御登城御歸國之御暇御禮被仰上、如御先例御刀一腰被遊御拜領候。

一同月十六日　淺草火之御番御代松平大和守樣被仰付候由、御同人樣より被仰越、御傳之御書付等早速御引渡被成候。

一同月　御曹司樣附御小姓奥山權左衞門、此度幸之助樣附大番組頭格仰付けられ、御役料高百石被下置候。

一同月廿七日　此度御入部御暇被仰出、御登城御禮被仰上候御歡、御廣間におゐて何も御帳に付く。

一五月十六日　屋形樣御道中御機嫌能今日御着城被遊候。

　但宇都宮帶刀今日江戸え出足。

一六月　御印御下に付、御年寄中御符にて御用人え御懸合之上御納戸役え被相渡、御用荷物之內え入候て被差下候由申來ル。

　但御拵之節は如例組付御刀番御納戸役御檢使相勤ル。

一同月二日　屋形樣被遊御社參。先月廿六日より佐竹圖書始、家督、出仕、名改今七日迄三ヶ度濟、同八日より獨禮在之候。

一同月　永壽院樣御病氣、御同扁之內御草臥在之望月三英老に御轉藥被成候よし申來候。

一同月　暑中御使者御臺所役大和田兵右衞門被仰付候。

一同月九日　永壽院樣御躰御大切之段申來ﾘ、御刀番田代新右衞門爲伺御機嫌今日早追にて江戸ゑ出足被仰付候所、御卒去之段申來ﾘ、仍て上々樣御安否御尋に、同人道中急罷登候樣被仰付候。

一同月三日　永壽院樣御遺躰御内棺ゑ被爲入、御葬式は聖相院樣へ御基ｷ、御時節柄故輕ｷ方被成候よし申來ﾙ。

一同月十一日　那可儀右衞門御本方奉行被仰付候。赤石藤左衞門御用人にて銀札方幷御省略方御用共兼帶相勤候付、兩奉行格に被仰付候。

一同月　大越十郎兵衞、梅津外記御家老被仰付候。

一同月九日　永壽院樣御出棺御安置御葬とも相濟、屋形樣御代香梅津百助、御曹司樣御代香大嶋左仲勤之。

一同月　石川文右衞門儀、數年前永壽院樣御重恩を奉得候事故、此度落髮之儀願申立候。慈雲院樣御逝去之節故眞壁十兵衞落髮致候、文右衞門儀は御内緣も在之者故被仰付候。

一同月十八日　岡田清三郎病氣に付再應御役御訴訟申上、願之通御免被仰付候。

一同月十一日　從壹岐守樣岩永宇左衞門を以、佐竹主殿娘、當七月八月之内着之筈在之候。壹岐守樣御養女に被成求馬樣ゑ御合被成度之趣公儀ゑ御願被仰上候節、屋形樣御添御願無之候ては不相成候よ

し在之候間、御願被差出候樣にと申參候付、御伺之上差出され候。

一同月十五日十六日　永壽院樣御法事於總泉寺御執行被成置、其節御曹司樣より大嶋左仲、御代香梅津百助勤之。七日毎并五十ヶ日、御百ヶ日は御同向に被仰付候。

一同月　切支丹類族今年出生病死共無之付、當七月御屆無御座候段切支丹改役申聞候趣、御年寄中より江戶御同役え被仰達候。

一同月晦日　眞壁十兵衞御先代願申立候趣在之、通寄院樣思食に付此度御廻座御免被仰出候。依て、今日同人え被仰渡候。

一同月十五日十六日　永壽院樣御法事之節參候帳被差下候所、御在國之節は、被差下候に及不申之由に付、右御帳不及御伺被差登候。

一七月十一日　秋山長右衞門御財用方御勘定奉行被仰付、櫻田喜一郎御用達役被仰付候。

一同月九日　此度御入部爲御祝儀從津輕土佐守樣御使者喜多村監物被差越、例之通御進物等在之、同人登城御料理被下候。依て土佐守樣より其節御年寄中え御意、并時服拜領被致候。

一同月廿一日　俊交院樣御不快に付御樣躰御尋に誰ッ可被差登事に候所、鈴木平藏今日秋交代能登候付道中差急右御用被仰付候。

一同日　土用中御伺御機嫌之御使者大和田兵右衞門、同六日、兩御丸え前度之通御獻上物無滯相濟候由

申來ル。此節御留主居龍田源太夫同道也。

一同月朔日　宇都宮帶刀事可致登城旨、去月晦日御用番酒井左衞門尉樣より御留主居共え前度之通御切紙到來に付、田崎忠四郎同道致登城、御歸國御禮之御使者如前例御太刀目錄鳥井伊賀守樣御披露。御前え被召出帶刀自分之御禮をも、阿部伊豫守樣御奏者にて相務候由申來ル。

一同月　京、大坂御藏元御館入之者共以前とも違品々出情在之に付、御本方奉行交代之節斗は右面々え御料理被下候儀相決候。

一同月　御在國之節は八朔之御使者被差出候事故、來朔日御使者梅津百助被仰付候儀に被仰渡候。

一同月十七日　御用番西尾隱岐守樣より御留主居え、宇都宮帶刀同道同十八日登城致候樣に申來候付、田崎忠四郎同道にて登城致御奉書被渡置、幷御卷物如例拜領被仰付候。

一同月十日　圓明院樣七回御忌、同廿日通霄院樣三回御忌に付、銀三十枚宛にて御仕切被成候。其節御名代須田內記、御曹司樣御名代御番頭梅津百助被仰付候。

一同月　當月十八日、佐竹主殿息女引取求馬樣御婚禮之御願、西尾隱岐守樣より吉田小右衞門殿を以被仰付候。

一同月　俊交院樣御不快御勝不被成候付、壹岐守樣え被仰上候上に服部見端御賴、其後村田長庵老御賴候よし申來ル。

一同月　明年御參府御供小田野又八郎御家老被仰付候。

一同月　俊交院樣當月廿一日御逝去之段、岡清七を以江戸より被仰達候。

一同月　俊交院樣御逝去に付、御曹司樣、上々樣御機嫌御伺之御使者立歸登り簗治部左衛門被仰付、當廿七日出足。

一八月　俊交院樣御逝去に付、有馬中務大輔樣御國許ゑ之御使者川津忠助被仰付候。當日障之節は安田五郎兵衛、鈴木彌生可被仰付之旨被仰出候。

一同月　俊交院樣御出棺にて、御安置御葬式共無御滯相濟候。此度は御正統之事故、御出棺之節御跡乘幷御同日屋形樣御代香共內記殿可被相勤存候得共、御曹司樣被成御坐、且御屋敷御無人に付左樣相成間敷、御用人幷御用所役人何も申聞、御用人筋之儀は公邊ゑ掛候事故御不審請候儀に一決被致、御葬式御供不被致候よし申來る。

但御法事之節御代香內記、御曹司樣御代香梅津百助勤之。有馬樣之御釣合在之事故、永壽院樣御法事料より銀十枚被相增候。

一同月　去月十六日多賀谷將監病死之所、嫡子龜太郎六歲に付知行高之內三ヶ一被召上家督被仰付、幷與下支配共以上使先式之通被仰付。龜太郎幼年に付、隱居下總に看抱被仰付候。

一同月　未年圓明院樣三回御法事之節、小野寺伊右衛門詰中不心得にて、參候帳相下候事在之候。右帳

下に不及候に付江戸ゑ被返置候。夫とも先例在之は可被仰遣之旨被申達候。

一九月朔日　於陰間眞壁掃部助ゑ御叮寧之御意在之、御加増二百石高被下候。

但御先代、御當代御入部之節、御供相務候御祝儀旁々に付て也。

一同月十六日　壹岐守様御養女お駒様（求馬様御緣女 佐竹主殿娘）千壽驛より鳥越御屋鋪ゑ御上着也。

一同日　御席觸左之通。

御城内外召連候供廻かさつ無之様申付候儀、且御曲輪之内手代ッ召連候義無用可仕、於御曲輪手代之者跡に召連候様に元文五年觸も在之處、近キ頃猥に相成、御曲輪内手代之者召連候面々も多在之様相聞候。向後訖度申付候様に、明十五日出仕之面々席々にて可被相達候。

一同月　於江戸御年忌御法事之節參候帳、以來不被差下候事相決。

一十月七日　白土奥右衛門御用有之銀札取次役大縄幸左衛門同道江戸ゑ立歸に罷登。赤石藤左衛門同五日御本方奉行被仰付、銀札方兼帯被仰付候。

一同月　大館御城土手崩御届被仰付相濟。

但御添書と御繪圖差上ヶ候。

一同月十七日　大目付御廻狀幷御書付。

女御入内に付獻上物

禁裏ゑ
御太刀
御馬代黃金三枚宛
女御ゑ
白銀二十枚宛
右は松平加賀守樣より松平勝五郞樣迄十三人御名前也。
一松平讃岐守樣より松平隱岐守樣迄此方樣共に十人、黃金二枚宛白銀十枚宛にて右同斷。
一松平左京大夫樣より松平越後守樣迄六人、黃金一枚宛白銀十枚宛右同斷。
來月下旬女御入內に付爲御祝儀以使者可有獻上候。使者衣服、勤方、於京都酒井讃岐守ゑ承合候樣可申付候。
一十月廿五日　御家老須田內記乘物御免之御願、御用番ゑ御留主居を以被指出。
私家來須田內記用事申付其地爲指登置候。當亥六十歲に罷成候。然は持病腰痛煩馬上斗にて難相勤候躰御座候付、乘物御赦免奉願候。上處。
十月十三日　　　　御名
松平右近將監樣

人々御中

上包小奉書上下折、御双方御名記之。其後御尋有之祿高三千三百石、家老役相勤候旨申上、翌十六日
家來須田内記

右乘物趣可爲願之通候。誓紙判元御目付鈴木伊兵衛見候事。

一十一月朔日　御加增被下面々。

一高十石　病氣に付御役御免之上　富田治兵衛　一同十石　前度三十石被下候外　菅生理右衛門

一同三十石　川又善左衛門　一同二十石　赤石藤左衛門

一同四十石　箕作茂左衛門　一同四十石　平野文右衛門

一同三十石　奥山藤太

一同月十六日　主殿事山城と名改メ、同人嫡源六郎如例元服出仕被仰付候。

一同月五日　御入内御使者被仰付京都ぇ罷登、罷下候節伊勢參宮願之通被仰付候よし申來ル。

一同月　大小姓御番頭被止置候、依て御右筆は御用所支配、役支配は御用人被仰付候。江戸定居大小姓高瀨傳右衛門先年之通御用所支配被仰付候。

一同月五日　御入内之御使者梅津百助江戸より京都ぇ罷登。

一同月十一日　御席觸書付。

御城内下馬より下乘迄被召連候人數、幷下乘より內ゑ召連候人數輕キもの、又者に至迄、尤雨天之節長柄もたせ候節人數相增候はヽ、其譯、或は何人數多召連候衆中何年誰へ相伺召連候旨、書付指出候樣に、下略。

十一月　　　　　　　　　　　　　　稻生下野守

一同月十六日　須田內記乘物御免に付、御禮御飛札被差登候趣にて差出ス。

一同月廿二日　佐竹新發意元服被仰付、且三郞と名改。

一同月　天德寺廓聖病身に付再應願申立閑居被仰付、後住正洞院選林願之通被仰付候。

一十二月朔日　求馬樣御婚禮御整相濟。

一同月七日　御用所如以前御會所被復置、御用初より被相移御會所と唱。右に付兩奉行役名、町奉行、勘定奉行、本方奉行三奉行と唱、御用達は御副役と被仰付。

一同月廿五日　神尾備前守殿衆より、右京大夫嫡子佐竹修理大夫享保十七同十八年爲歲始御祝儀、御簾中樣へ差上もの無之哉、有無之事御尋に付左之通。

佐竹故修理大夫享保十七子年五月九日故右京大夫養子被仰付、同十八丑年年始御祝儀、御簾中樣へ指上物無御座候。以上。

　　　　　　　　　　　　　　　　　、、、、、內
　　　　　　　　　　　　　　　　　田崎忠四郞

一林大學殿より武家補任補入付て、左之通御書付被遣候、被仰遣候通書付被指越候。
源義局チカ享保八癸丑年十一月五日生　寶曆三癸亥年八月廿七日左兵衛督義眞養爲嗣、于時年三十一。實壹岐守義道第一男、母兵部少輔義長之女。同年九月三日相續、同年十二月十八日從四位下、侍從、右京大夫。
義峯　寬延二己巳年八月十日卒。
義眞　寶曆三癸酉年八月廿日卒。
右二枚眞字認之、美濃紙。

○寶曆六子年

一正月六日　御初野、目長崎村ぇ被爲出候。
一同月七日　御會所御用初に付被爲入、惣躰御座鋪御覽之上御熨斗御祝御吸物御酒等被召上、御年寄中御盃御返盃被仰付候上御目錄被下置、其節御年寄中より獻上物在之、役人幷物書まて御目錄被下置候
一同月　御入内相濟候付御使者御觸在之、根本幸右衛門被仰付候、被下金有之候由申來ル。
一同月　大御目付衆より嫡孫承祖願之義被仰渡御書付被差下候。
一同月　寒中御使者吟味役野内佐五右衛門被仰付、田崎忠四郎同道にて相濟候由申來ル。

一同月　此度之御入内一條様より被爲入候よし申來ル。

一同月十三日　於江戸勤功御稱美、新知御加增被下候。

高二十石　平澤重左衞門　同十五石　根本幸右衞門

同三十石　下川勘左衞門　同三十石　皆川　林悅

其外御加ふち、御加給等被下候者略之。

一同十五日　御席觸御尋に付左之通書付被差出候。

佐竹右京大夫居屋敷享保五子年三月廿七日類燒に付、御奉書を以參勤御免被成置、八月參府仕候様被仰出候。右御奉書羽州山形驛迄相達候付其驛より歸國仕、同年八月六日上府仕候。

正月十八日　龍田源太夫

一同月　御饗應急御用御膳番假擔大嶋左仲、御樂屋奉行太田丹下被仰付候。

一同月　年始之御使者梅津百助被仰付、田崎忠四郎同道にて相濟候よし申來ル。

一同月　御饗應御用表御小姓立歸登被仰付候。

一同月　此度鶴御拜領に付、御使者御用梅津內藏丞被仰付同廿七日出足。右御勤之御書は、前之通追て以御飛脚被差登候筈申達ス。

一同月十八日　鶴御拜領之節求馬様御出、鶴御屋敷え參候を御待請之由申來ル。

一同月　鶴御拜領に付、右御禮御國使者を以干肴獻上之儀御留主居を以本多伯耆守樣ゑ御伺被成候所、前度之通御使者を以可被仰上候由御差圖有之候。
一同月　御宿觸幷御泊付とも申來候付御飛脚被差立候。
一二月五日　又八郎代御參勤御供大越甚右衞門被仰付候。
一同日　田所勘左衞門京都ゑ御用有之立歸能登候。
一同月十二日　鶴御披有之、此節山城、御年寄中、御相手番、兩御番頭まて於御座間御料理有之候。
一同月　當子年諸國人別相改候筈に付、諸事改方認方等は前々之通候間、人別改帳面當八月九月之頃迄に可差出之由神尾備前守殿より被仰渡、右書付寫切支丹改役ゑ被相渡候。
一同月十五日　石塚孫太夫御家老職被蒙仰候、右は御繁用に付て也。
一三月十五日　和田正五郎一番大番頭、矢野孫太郎、石井嘉左衞門御物頭被仰付候。
一同月　去月廿一日壹岐守樣、公家衆御馳走御扣木下宮内少輔樣御病氣に付、御代被蒙仰之段申來ル。
一同月十七日　矢野孫太郎代リ御刀番、御鷹方支配ともに益戶助四郎被仰付候。
一同月廿二日　大納言樣御簾中樣御着帶在之段被仰觸有之候。
一四月九日　西方改派三僧ゑ御合力米被下置之旨寺社奉行ゑ被仰渡候。
一同月九日　午刻、屋形樣御旅中無御滯御上着被遊候。

一同月十六日　御用番西尾隱岐守樣より御老中御連名之御奉書到來、淺草御藏火之御番被蒙仰候。
一同月十八日　御先手衆久世忠右衞門殿、小笠原縫殿助殿、吉田小右衞門殿御出御饗應被仰入之儀御相談御客對、縫殿助殿御書付御持參御用番ゑ被差出候筈。若、十八日御成等之節は十九日被差出候筈。十六日には壹岐守樣、求馬樣御出、其節坊主衆五六人、御先手衆御座敷見分有之候。
一五月　御參府之上上使相濟御參勤御禮被仰上候付、四家御年寄中ゑ御直書被成下候。
一同月十三日　御老中西尾隱岐守樣、秋元但馬守樣九ッ時過御出、若御年寄小出信濃守樣、酒井石見守樣、其外御奏者御役人方御越御料理被差出、御酒之內御囃子有之、御盃事無御滯相濟候上、盛德院樣より被進候御菓子被差出、其後隱岐守樣、但馬守樣より小瀨宇兵衞家老御盃被下御肴被下、返盃被致候。二度目御日限同十六日御日取相極候付、追て被仰越候筈。御皿菓子被差出候は則御老中樣方、若御年寄御四人御休息之間ゑ被爲入候は、御薄茶被召上暫之內御庭御覽、無間御歸宅也。
一同月　去十日京都御所司代酒井讃岐守樣御役御免被仰付候、依て御差扣被仰上候所、不及其儀段被仰渡候。右御代大坂御城代より松平右京大夫樣、寺社御奉行は御奏者より阿部伊豫守樣被仰付候。殊に京都御所司代御引渡御用西尾隱岐守樣御上京被仰付候よし。
一同月廿一日　大岡出雲守樣御側御用人被仰付、五千石御加增にて都合二萬石之御高に相成、被任四品岩付城主被仰付候。

一同月　能代出火に付御届書、御用番酒井左衞門尉様ゑ中村政右衞門を以御届被成候よし申來ル。
一六月　小貫杢之助御代官所河邊郡牛嶋村喜右衞門孝心に付、一人御ふち一代被下置候。
一同月　大久保東市是迄之格合にて御用人被仰付候。但御勘定奉行より。
一同月　失番大小姓大調相濟候得は、其段御在江之節は爲御知被仰上候様被仰達候。
一同月十三日　去年中御伺之上梅津外記三國社ゑ御代參相勤申候。
一同月十一日　大岡出雲守様御迹、若御年寄小堀和泉守様被仰付候。
一同月　多賀谷下總貯米差出、同姓龜太郎支配所之者ゑ下直に拂候段達上聞、先達て一ト通御稱美之上、今年より來年中鷹遣候儀御免被仰付候間、戸村内藏丞催促申渡ス。
一同月廿四日　御物頭梅津主鈴、近年病身に付再應御役御訴訟申上候へとも、近年新役勝に付御免不被成置緩々養生可致、且勤勞を思食銀十五枚被下置候。
一同月　去月十一日須田内記病死に付御屆申上候所、無御相違嫡子政三郎に遺跡被仰付候。
　但上使如先例向庄九郎被仰付候。内記數年勤勞致候に付、沒後候得とも銀百枚被下置候。
一七月廿五日　大御番頭梅津百助江戸在番中勤方役柄不相應に付、御役儀被召放遠慮被仰付候段、御條目を以於御會所那可儀右衞門、高垣兵右衞門、平元丞助、牛丸市左衞門を以被仰渡候。
一八月二日　御領内人別帳去ル午年差出、今年七ヶ年目に付被仰出之通り切支丹改役指出候に付、今日

江戸ゑ被差登候。

一同月　西御丸御簾中樣御安產、姫君樣御誕生之段申來ル。

　但御名千代姫樣と奉稱ル。

一同月廿一日　御物頭矢野孫太郎病氣に付再應御訴訟之上御役免。

一同五日　上使櫻井監物殿を以御鷹之雲雀三十御拜領之よし被仰渡候、其節御取持吉田小右衞門殿御出也。

一同月八日　野內左五右衞門御本方奉行被仰付候。

一同月　菅生理右衞門代御副役丹惣十郎去月廿七日被仰付。局住に付、高七十石御役料被下置候。

一同月廿一日　澁江敬之助夏中より病氣にて病死、同廿二日、同名八五郎ゑ跡式被仰付被下置之由御屆申上候。

一九月　盛德院樣付頭役伊藤六郎左衞門、此度御先手御物頭被仰付、右代不破野右衞門被仰付。六郎左衞門三四日勤形申傳へ賀□ゑ被下候由申來ル。

一同月廿日　帶刀病死致候上使之儀先例御用人ゑ被仰含候所、延寶七未年、延享三寅年不幸之節無役廻座之內被遣候よし。

　但此節御役御訴訟口上書は不指登と有之。

一十月　黒澤四郎兵衞病氣にて罷下候付、右代高根織部來春登之所進ミ登被仰付候。

一十一月十六日　眞壁掃部之助ぇ上使大番頭、眞崎兵庫ぇ御用人鈴木平藏。小田野又八郎、孫太夫宅ぇ及催促候所、病氣に付親類小野崎藤太郎罷出候所、以御條目御咎之次第御用人大久保東市組付御刀番岡清七申渡候。赤石藤左衞門御科之儀、以御條目於御會所石川縫殿之丞、丹惣十郎申渡候。

但此節小野崎造酒、三枝仲被差下候、掃部之助へも御條目を以被仰渡候。

一同月十八日　大縄幸左衞門御本方奉行被仰付候。

一同月八日　爲上使生駒登殿を以御鷹之鴈被遊御拜領候。

一同月十九日　土屋貞吉御添役被仰付候。

一同月　時宗龍泉寺、庄内鶴ヶ岡長泉寺ぇ移轉被仰付候。右は依願也。

一閏十一月二日　明年御歸國之御使者佐竹山城被仰付候。

一同月　去月廿二日千代姫樣御色直に付同日惣御獻上物無御滯相濟、同廿三日、御宮參御歸より堀田相模守樣ぇ被爲入候筈之所、同日明ヶ時より出火にて相止候由申來ル。

但阿波守樣、土佐守樣御上屋敷御燒失之段申來ル。

一同月十一日　切支丹改役より類族御屆書草稿一冊差出候に付被差登候。

一同日　幸之助樣御事格別御丈夫に被爲成候付、小笠原縫殿之助殿を以堀田相模守樣ぇ御屆書被差出

候所、御請納被遊候。

一十二月三日　梅津内藏之丞寺社奉行兼帶被仰付候付、大筒方支配は御免被成候て、小野崎大藏被仰付候。二番大御番頭は疋田久太夫同日被仰付候。

○寶曆七丑年

一正月二日　屋形樣御登城無御滯相濟。

一同月　愛宕下御前樣ぇ金彌八郎を以先頃之御請被仰上候、且仁平宅左衞門例に從ひ、那可忠左衞門ぇ拜領金二百兩被下候由申來ル。

一同月元日　御曹司樣御盃、頭役幷大番組頭、其外當番之者まて頂戴被仰付候。

一二月十二日　御本方奉行小野崎五兵衞被仰付候。

一同月　銀札御朱印御檢使、御目付御刀番之内被差出候樣に御伺之上被仰渡候。

一同月　四月廿五日御發駕可被成置旨被仰出候付、御道中御泊付御飛脚被差立候。

一三月八日　御本方奉行太田内藏之丞、大番組頭天神林源藏被仰付候。

一同月　銀札御朱印御檢使、御刀番御目付先頃被仰付候、此度佐竹三郎在府屋ぇ被移置候。右兩役御用に付出席不相成候節は朝に出席開封致銀札奉行ぇ相渡、銀札奉行直々御檢使相勤、晩刻仕廻之節又々

出席封印致候樣に被仰付候所、御目付右に付御伺申上候次第有之、御刀番承知不致候。依て御側兩役之內歟、御納戶役滑川八右衞門可被仰付候哉御伺被成候。

一同月十六日　土屋貞吉代御添役滑川武右衞門被仰付候。

一四月十五日　從公方樣大納言樣爲上使松平右近將監樣、酒井左衞門尉樣御出御歸國之御暇被蒙仰、如例之御卷物、銀子御拜領。同十八日御老中御連名之御奉書堀田相模守樣より到來、翌十九日御登城御暇御禮相濟。

一同月　佐竹山城御歸國御禮御使者被仰付候。

但以前御着城翌日出足之儀も有之に付御問合之所譯無之、左樣御伺も不相成候由申來ル。

一同月十二日　去年中御誕生之千代姬樣御逝去に付、同十四日まて鳴物御停止被仰付候。於秋田、廿六日より三日鳴物停止被仰付候。

一五月　山城御使者被仰付被差置候所、脫肛煩にて御訴訟申上候付、嫡子源六郎被仰付候。

一同月十九日　戶嶋驛より午上刻被遊御着城候。

一同月十八日　山城差控被仰付候付源六郎も遠慮に付、右代今宮又三郎同日被仰付、十九日出足致候。

金子七百兩被下置候內四百兩爰元、同三百兩於江戶被相渡候。

一同月廿一日　戶村十太夫、小野岡源四郎御年寄中加談被仰付、日々御會所え出席致され候。

但石塚孫太夫、岡本又太郎遠慮被仰付候に付て也。

一同月廿六日　吉田藤右衞門、八代彌太郎銀札奉行、長山久平御本方奉行歸役、大塚新左衞門御添役被仰付候。

一同月廿七日　那可儀右衞門思召に不相叶御本方奉行御役御免、遠慮被仰付候。

一六月五日　平元茂助、太田内藏之丞陰ノ間え被爲召、是まて役方出精に被思召候。尙此末出精可相務被仰出候。

一同月　山方助八郎戸嶋驛迄及言上候趣、此間以上使兩日御尋被成候所、一々申披無之に付御役儀被召放、親類え去ル三日より被預置候。孫太夫、又太郎差扣同日より御免被仰渡候。

一同月五日　吉田藤右衞門思召有之に付御本方奉行御役御免、遠慮被仰付候。

一同月　暑中御機嫌御伺之御使者御臺所役大和田兵右衞門被仰付、金子八兩被下候由申來ル。

一同月八日　白土藤太御用人被仰付、座列奉行本席之通被仰付候。

一同日　大塚九郎兵衞先頃寺社奉行被仰付候所、今日駕籠御免被仰渡候。石川縫殿之丞、長山久平代御町奉行、沼井四郎兵衞御兵具奉行被仰付候。

一同月十五日　松野茂右衞門御家老立歸登被仰付候、出足。

一同月八日　松浦肥前守様へ御悔之御飛脚御中間二人被仰付、江戸より出足之由申來ル。

一同月　小野崎造酒、遠慮致可罷下之由被仰付候故卽御屋敷引拂可申候へとも、龍田源太夫ぇ申傳之御用在之に付、相濟次第出足之筈候段申來〻。

一同月八日　造酒遠慮罷下に付右代御用人龍田源太夫被仰付候。

一同月　長瀨平右衞門先頃御膳番被仰付候。當人事、只今迄御曹司様御刀番相勤候上は、御役替に候間御同人様へ爲御知可申上候由江戶ぇ被相達候。

一同月十九日廿日　於八橋壽量院有德院様御法事御執行、廿日に屋形様被遊御參詣候。

一同月十七日十八日　明鏡院様御法事於闐信寺御執行被遊候。

一同月　櫻田喜一郞御勘定奉行被仰付候。廿七日高垣兵右衞門思召不相叶御役被召放、遠慮被仰付候。

一同月　大小姓頭御免に付無役廻座、局住共詰番被仰付候處、此度大小姓頭被仰付候故詰番御免。

一同月　箕作茂左衞門召にて罷下候所此度御膳番被仰付、右代沼井織部御納戶役被仰付候。

一同月　平澤十右衞門義、御着城以來御側兩役兼帶辛勞相勤候に付御膳番格被仰付、小野崎吉內同然に辛勞相勤候に付御召料幷銀十枚被下置候。

一同月廿八日　澁江內膳、小野崎藤太郞御相手番被仰付候。

但內膳事家督當座候へとも家柄に付、藤太郞事、家に右御役無之候得とも格別之思食にて。

一同月　大小姓頭被仰付候所、三百石都合御償御役料被下置候。

一同月　大塚九郎兵衛先頃寺社奉行被仰付候。少祿之面々右御役難相勤に付、七百石都合御償高被下候筈相極。

一同月廿八日　三番御番頭澁江內膳代小貫彥三郎、十番梅津藤十郎代戶村內藏丞被仰付候。

一同月十八日　於上野有德院樣御法事に付、同廿二日御使者を以御香奠、御使者石川文右衛門相勤。

一同月十八日　明鏡院樣廿五回忌於總泉寺壹岐守樣御勤に付、御逮夜、御當日共に屋形樣御代香石川文右衛門、十七日御曹司樣御代香安田宇一右衛門勤之。引續此方樣より御法事御勤之節屋形樣御代香文右衛門、御曹司樣御代香中田彥太夫勤之。

一同月廿二日　晚、那可忠左衛門、愛宕下より、安田卯一右衛門高根織部被差越御引取り、御長屋之內堅固御拵、侍より晝夜見繼番兩人宛幷御步行も加勢に被仰付、御足輕晝五人夜中十人宛不寢番被仰付候。同人手廻も早々御引取之筈之由申來ル。

一同月　江戶表御本方奉行平澤縫殿一人勤之所、銅山方御用繁く甚タ迷惑に付、先頃那可儀右衛門登之儀申來候得とも御役御免、其後度々申來候得とも當分御差遣に付、辛勞なから如以前一人勤之由被仰達候。

一七月十二日　大塚九郎兵衛御家老被仰付候。

一同日　於御城役人中え御料理被下候。

一同月　此度之一件無御滯相濟候爲御祝儀、町々共無殘御肴酒獻上致候。依て十二日於御城無役引渡、廻座迄に御料理被下候。大小姓與頭まて御酒御吸物被下御囃子等在之、御賑々敷有之候。

一同日　此度之御祝儀御料理有之、其上圖書、山城、大和ぇ御加増五百石、孫太夫、源四郎、又太郎ぇ同三百石宛、平元茂助同百石、長山久兵衞、芳賀金五郎、櫻田喜一郎、八代彌太郎ぇ御帷子、太田內藏丞御帷子御上下、石川縫殿之丞ぇ御上下拜領被仰付候。

一同月十三日　此度銀札御仕法被相止候に付、戊年以來御法度相背籠舍之面々夥敷有之候、人殺之外籠舍御免被仰付候。右は此度之大赦也。

一同日　戶村十太夫段々願に付、御役御免被成置候。御着城之砌より別て御用向出精に付、高三百石拜領横手ぇ被歸候。

一同月九日十日　於壽量院常憲院様五十回御忌御法事有之候。

一同月十八日　疋田久太夫寺社奉行、梅津喜七郎能代奉行被仰付候。

一同月十二日　明年御參勤御供孫太夫被仰付候。御副役丹惣十郎御供登被仰付候。

一同月十二日　御用番西尾隱岐守様より御留主居ぇ、今宮又三郎同道同十三日登城候様に申來り、中村政右衞門同道にて登城致御奉書被渡置候、如前例卷物御拜領。從西御丸は、秋元但馬守様於御宅御奉書被相渡候。

一同月　八朔之御使者石川文右衞門勤之、如先例金五兩被下置候。

一同月十一日　愛宕下御前樣附頭役金彌八郎被仰付、本祿ゑ二百五十石之都合御役料被下置、御用人格に被仰付候。

一同月九日　屋形樣御名乘御下字、先月廿八日御改之儀、御用番西尾隱岐守樣ゑ當日田崎忠四郎を以御屆被仰上候て、右寫被差下候。

一同月朔日　去月晦日、御用番酒井左衞門尉樣より御留主居迄切紙到來、中村政右衞門同道にて今宮又三郎登城御歸國御禮御使者、御奏者鳥井伊賀守樣御披露。又三郎御前ゑ被召出如前例太刀目錄獻上、自分之御禮靑山因幡守樣御披露にて無滯相濟。同日西ノ丸ゑも登城御獻上物、自分之獻上物も相濟、御奏者朽木土佐守樣ゑ謁ス。

一同月　去月廿四日土用御機嫌御伺之御使者大和田兵右衞門、兩御丸ゑ龍田源太夫同道にて勤之。

一同月二日　夜中紀伊大納言樣御逝去に付、同三日より九日迄日數七日鳴物停止申來ル。於秋田は鳴物停止以前より無御座候。

一同月廿日廿一日　俊交院樣三回御忌御法事於總泉寺御執行、屋形樣御名代石川文右衞門、御曹司樣御名代築治部左衞門勤之。

但去年御法事之節廿日晚御名代小野崎源左衞門相勤、廿一日には御直參被成置候。

一八月五日　那可忠左衞門此度江戸より被差下候付、岸平次、竹内久米之助道中附添被仰付、幷御歩行丹生喜八郎、御足輕七人、御中間八人手に付、去月廿日江戸出足今日着致候由申達ス。

一同月十三日　今宮又三郎御使者御用相濟、去月廿六日出足下着致候也。

一同月廿三日　松浦肥前守樣御次男左治馬樣、御嫡子形御願相濟御目見相濟候よし爲御知申來候に付、於途中御時宜之儀御家中え於江戸被仰渡候。

一同月十三日　二番大番頭信太内藏之助御曹司樣附御用人、益戸助四郎御同人樣附御刀番、藤本左門、幸之助樣附大番與頭格、赤石四郎兵衞御物頭、矢野忠内御境目奉行、武藤豐太夫御目付、黑木權右衞門右同斷、大和田淸兵衞御鷹方支配、御刀番平野淸五郎、御刀番石川治右衞門、大小姓菊地仁右衞門被仰付候よし申來ル。

一同月　下野御領萱橋むら藥王寺致病死候付、直弟子仙音住寺之儀且徒も願に付被仰付候。

一同月廿四日より廿六日迄、此度御祝儀之御酒、御吸物、諸士幷徒並迄於御廣間被下置候よし申來ル。

一九月八日　梅津喜七郎代り御旗組梅津半五郎、大番七番組頭山方茂左衞門被仰付候由相達。

一同月　御副役高根織部兼て役方不宜之勤、且此度之一件に取綺候段相聞得、江戸より御役被召放被差下候。

一同月六日　梅津藤馬御相手番役足痛にて再應御訴訟之上御免。

一同月　來寅春御參府御時節御伺之御國使者當十月中被差出候に付、松田源太被仰付候。

一同月　眞崎又左衞門御刀番病氣に付再應御訴訟之上御免、且數年辛勞相勤候に付爲御稱美銀五枚被下置候。

一十月十六日　玄猪之節より如以前近進並迄御自身可被下被仰出候。近年は役頭之面々まて御自身被下置候。

一同月十七日　梅津桃之助寺社奉行、太田市兵衞御副役、御鷹方支配小川平次右衞門、組付御刀番今村多七郎、鳥越御後室樣付手代役小野岡彌織被仰付候。

一同月廿二日　黑澤四郞兵衞御勘定奉行、平澤源五右衞門御目付被仰付候。

一十一月朔日　夏中御變事之節深切之存寄申上候面々、幷五兵衞在京中出精に付此度御加增高被下置候。左之通。

一高七十石　小野崎五兵衞　一同七十石　太田內藏丞

一同三十石　益戶助四郞　一同三十石　長瀨平右衞門

一同二十石　大山伊織　一同二十石　沼井織部

一同二十石　井上才藏

一同月五日　御誕生日に付御具足之糬御披。是迄切糬に候所、今年より古來之通頂戴被仰付候。

一同月　立花左近將監樣此末兩崇之儀被仰出、惣御屋敷ゑも被仰渡候。

一同月　去月十六日於江戶、大番組頭迄御曹司樣御前ゑ罷出、玄猪御祝儀相濟候よし申達ス。

一同月　大館城土手崩御伺書、九月晦日堀田相模守樣ゑ田崎忠四郎差出候所、去月十二日御奉書中村政右衞門請取無御相違相濟候。

一同月三日　土屋貞吉、岡田市郎兵衞大番組頭、石井五郎右衞門大小姓組頭、小田部新一郎御小姓筆頭被仰付候由申來ル。

一同月八日　石塚孫太夫ゑ、只今まて檜山組下支配被仰付指揮致候得とも、如先例松野茂右衞門ゑ被仰付被下度仍願、茂右衞門ゑ被仰付候。

一同月　大番十番組頭河村幸右衞門、大小姓一番組頭山口四郎太被仰付候。幷、御兵具奉行沼井四郎兵衞近年髮結拔束髮相成兼、鬠髮願之通被仰付候。

一同月　寒入之御使者三村平太被仰付金子も被下置候。

一同月十六日　白土藤太明年罷登被仰付候所、嫡子門平久々病氣にて苦勞之儀、幷外男子無之段も被思召、小野崎多右衞門實次男彥吉門平嫡子に可仕之よし被仰渡候。

一同月　銀札當秋中御引上ヶに付、札請取役幷引替錢渡役被仰付候所、右役人共品々進物申請候に付役人閉門、物書以御條目遠慮被仰付候。

一十二月廿四日　福地嘉兵衞御膳番被仰付候。

一同日　幸之助樣付奧山藤太先頃御納戸役被仰付候に付、小貫團兵衞、奧山權左衞門兩人勤にては、第

一出火之節等御不堅固之儀兩役申聞候に付御伺之所、來春登赤石四郎兵衞進登被仰付、正月中出足爲

致候樣にと被仰付候。

一同年　來年始御使者石川文右衞門被仰付候由御申渡、金子も被下候。

○寶曆八寅年

一正月元日　於兩表、屋形樣御在國、御曹司樣上々樣益御機嫌能被遊御超歲、年始御規式無御滯相濟候。

一御香會、以前之通御年寄中始一役一人宛登城無御滯相濟。

一同月　去々月廿九日酒井左衞門尉樣ゑ御城土手崩御伺書田崎忠四郎を以被差出候所、舊臘十六日御

奉書忠四郎請取無御相違相濟。

　但此節被差登候御繪圖、ヶ條書等前々之通候所、當時之御模樣左樣には不相成候に付御右筆橋本喜

八郎殿品々御差圖有之、所々相直候て御伺書被差出候分共江戸より被差下候。

一同月　下野御領猪、鹿、狼多田畑喰荒候に付、四季打鐵炮御免之御願被仰上候。

一同月六日　御初野、未ダ餘寒も有之候故二ノ丸ゑ被爲出、御機嫌能御歸城被遊候よし申來ル。

一同月七日　御會所御用初に付被爲入、御年寄中ゑ御返盃被仰付候。諸役ゑは熨斗鮑頂戴被仰付候。
　但御賞罰之儀に付御條目を以被仰渡候。
一同月二日　年始之御使者石川文右衞門、御留主居田崎忠四郎同道にて相勤ム。
一同月廿一日　當年始より、御規式以前之通被復置爲御祝儀、八木作助舊地被仰付候。
一同日　後藤七右衞門數年致辛勞相勤候付、於陰ノ間御叮寧之上意之上御上下拜領被仰付候。
一同月廿六日　御町醫中山宗仙兼て學問ゑ志有之に付、此度一代近進被召立御宛行五人御扶持、御給金五兩被下候段被仰渡候。
一二月十二日　屋形樣御病躰少々御順快之由、三人飛脚にて被仰達候。
　但昨十一日大嶋喜之丞早打にて、上々樣ゑ御病躰爲御知出足致候。

○寶曆九卯年

一正月　安田宇一右衞門去月御留主居本役被仰付候。
一同月八日　眞崎兵庫、須田美濃御相手番、梅津藤太大番頭兼帶、杉村傳十郎大番組頭、片岡七十郎大小姓組頭被仰付候。
一同月九日　多賀谷下總舊冬御用銀調達差上候に付、爲御稱美御鷹御免被仰付候。表立御免之節は、於

御會所御年寄中被仰渡候。如以前、戸村一學催促申渡候樣に被致候段被仰達候。
一同月　御國目付衆御下向に付、宿々等其外道橋繕等之爲〆信太又左衞門、山方才三郎、石川忠吉、吟味役清水藤次兵衞被仰付廻在致候。
一同月　年頭之御祝詞御名代御使者を以就被仰上候石川文右衞門登城、例年之通御太刀馬代御獻上、兩御丸共無滯相濟〻。
一同月二日　例年之通御謠初に付壹岐守樣、求馬樣御出、於陰ノ間御祝儀有之御賑々敷有之候。
一同月　屋形樣御愼に付頭役之外は御盃頂戴不被仰付候に付、爲御名代元日壹岐守樣御出、於御座ノ間諸士幷步行並迄不殘御盃被下候。
一同月　舊臘廿九日夜深川出火、同所御屋敷、稻荷之社類燒致候。御長屋、御藏共無別條。
一同月　御用聞町人大野小八郎義深切御用達上候に付、御紋付御上下拜領被仰付候。
一同月　御物頭羽石小七郎、去九月中より下血煩にて再應御役御訴訟之上御免。
一同月　今宮又三郎、此度仙北下筋巡見御用罷越候。依て御飛脚之節御本書之外御名除。
一同月　步掘御鷹匠淺利勘右衞門新知三十石致開發候付、御鷹方依願大御番ぇ被入置候。
但侍鐵炮、御步行、御鷹匠、御茶屋、新田三十石開發御役儀御訴訟申に候はゝ、御扶持御給被召上、役儀御免可被成候旨元祿四未年頭々ぇ被仰渡候。

一同月　大槻五郎兵衛御本方奉行、大嶋喜之丞御物頭、赤須市郎兵衛御目付、吉川和助御副役被仰付候。

一二月　大塚新左衛門舊臘御本方奉行被仰付候所、御繁用にて神文不相濟、罷登候上於江戸去月十三日神文相濟ム。

一同月　梅津敬之助御物頭被仰付候。

一同月　戸村十太夫與下石井彌右衛門親彌宅儀兼て立願に付、伊勢、熊野ゑ社參御暇申立候。隱居等之者不及御伺申渡候得とも、遠方ゑ罷越候義故御伺致され候。

一同月　佐竹河内内々申聞候は、鷹御免被成置候得とも餌刺判不被下置、殺生御判にて於角館餌刺用事相辨候得とも於此表左樣不相成、仍て御膳番ゑ御年寄中御申含御鷹方ゑ御申渡被遊言上候。

一同月　御國目付衆御下向に付御財用品々御難澁、依て石川縫殿之丞進登り被仰付候。

一同五日　眞崎兵庫代小筒方支配戸村一學、幷後藤七右衛門御用人被仰付候。

一同月　門脇玄忠儀數年御側勤、且慈雲院樣御代より御側をも相勤候勤功被思召、銀三枚被下置候。

一同月　今年江戸詰方石塚市正被仰付被差置候得とも、秋田表品々御繁用に付登御免被成置候て、當春登小瀨宇兵衛被仰付候。宇兵衛儀内々被申聞候次第有之御請は被申上候得とも、于今役人へも爲御知不被成候よし江戸ゑ相達ス。

一同月　眞崎兵庫、須田美濃先月中御相手番被仰付、乘輿御免之儀日間差繰可申渡之由被仰出候に付、

五日御申渡被成候。
一同月　京都大佛迦藍大破に付、諸國勸化之儀增上寺より誓願寺ゑ申來。依て銀子江戸にて被相渡候。
一三月十一日　平澤藏人御目付役御免に付遠慮申立候所、遠慮は御免被成品々可罷下之旨被仰渡、同十四日出足致候。
一同月十七日十八日　恭溫院樣御一周忌之御法事御執行被遊候所、天德寺內々被申上候次第も有之、圓明院樣御一周忌之節百五十枚被遣候に順し、此度は銀百三十枚被遣候。并、近年無御座候得とも頓寫等被行候外、御法事は近例に准可申之由。
一同十一日　御境目奉行信太小右衞門、御物頭須田平四郎、御目付須藤平右衞門、大小姓組頭粕谷東右衞門被仰付候。
一同日　數年勤功在之者ゑ御加增、御加扶持、御加給并銀子等被下置候。
一同月　此度御國目付衆御下向に付今宮又三郎、下、仙北宿屋巡見被致候所、近年作宜故か家作相應、并道橋共宜しき方に有之由。
一同月　恭溫院樣御法事之節御名代佐竹河內被勤之候。
一同月　幸之助樣御疱瘡に付御祈禱寶鏡院ゑ被仰付、御守札差上候。
一同月　御目付衆當秋中御下國之御模樣に付、只今より御伺等御用在之に付信太又左衞門、武藤豐太夫

被仰付候。以前は御用人も被仰付候得とも田崎忠四郎被仰付候事故、兩樣とも取擔ひ被仰付候。

一四月　御目付衆御用懸石塚市正、今宮又三郎被仰付候。

一同月　布施嘉右衞門義御用人格被仰付候。

一同月　前度御追放蟄居之面々、所御免蟄居御免被仰付候。

一同月　小野崎五右衞門、大和田兵右衞門、大番與頭役被仰付候。

一同月　御目付樣御下向に付、御城内外、在々共諸普請に付莫大之御入用に付、御名字之面々、并近進並迄御會所にて御用銀之儀被仰渡候。

一同月四日より屋形樣御疱瘡之所、段々御全快にて同十五日御酒湯被爲遊候由申達。

但右に付御廣座鋪え御帳出、近進並まて御歡申上候。同日御側廻并大番與頭まて御酒、御吸物被下置候。

一同月廿四日　松塚角右衞門御目付役被仰付候。

一同月廿一日　御國目付安西彥五郎殿、建部荒次郎殿被仰付候。

一同月廿三日　爲上使烏井伊賀守樣を以、屋形樣御疱瘡爲御尋御態之被蒙上意候に付、其節御名代求馬樣御勤被成候。爲御取持吉田小右衞門殿御出相濟候上、卽御老中樣、御側御用人迄爲御名代求馬樣御廻勤被遊候。

一同月十五日　屋形樣御疱瘡被遊候付御屆可被仰上候哉、右近將監樣ゑ田崎忠四郎能出御內意承候所、御屆可被仰上事に被仰候付、御用番松平右京大夫樣ゑ忠四郎を以被仰上候。且、印牧玄順御藥に候得とも御町醫にて不相成候に付、橘隆庵老御藥被召上候樣に被仰立候。

一同月　御國目付衆御下之節、道中付添田崎忠四郎被仰付候。安西彥五郎殿、建部荒次郎殿御用人ゑも懸合候樣に被仰渡候。

一五月　東淸寺此度入院之儀相濟、御會所ゑ御禮申上候。

一同二日　安西彥五郎殿御宅ゑ荒次郎殿御列席にて、田崎忠四郎ゑ御書付三通被仰渡候。內二通宛所無之分は江戶にて御答出來致候、宛所在之分は秋田にて遂吟味、御繪圖幷答書出來次第可被差登申來ル。

一同月　屋形樣御疱瘡御酒湯相濟候段、去月廿五日御用番松平右京大夫樣幷秋元但馬守樣へ、御留主居安田宇一右衞門を以御屆被仰上候。

一同月　男鹿眞山光飯寺病氣に付閑居御暇願之通相濟、後住寶性寺願之通被仰付候。

一同月　屋形樣御疱瘡被遊御全快去ル十二日御床拂被遊候付、御側廻之面々ゑ、於御廣座敷御料理被下置候。同十三日、表方頭役之面々於陰ノ間御夜食被下置候。同十五日大番組頭より諸士無殘、步行並迄御酒御吸物被下置候。

一同月　淸水織部病氣に付願に付御目付役御免。
一同月五日　大繩東之進大番六番與頭被仰付、中川兵左衞門も右同役被仰付候筈にて御手紙之所、病氣にて延引。
一同月　幸之助樣え年始御祝詞御歡等是まて不被申上候。依て頭役被附置候まて御膳番名前にて年甫幷御歡等申上可然相決、御苗字衆、御年寄中斗に候所、戶村十太夫、大山十郞、天德寺、寶鏡院御歡被下に付右面々え、被仰渡無之內は延引可致之由被仰渡候。
一同月十四日　大越長右衞門義、駒木根勘解由代被仰付候。
一同月　印牧玄順え一代三十人御扶持被下置候。右は御二方樣御疱瘡御療治差上候付て也。
一同月十五日　屋形樣御床揚被遊候付、爲御祝儀御苗字之衆より頭役二人宛兩組頭まて、御酒御吸物被下置候。
一同月　今宮又三郞大學と御名改。
一六月廿五日　於御會所繼目出仕被仰付候。
一同月　古內藏人近年病身、且持病之脫肛煩に付度々再發、且今年七十歲相成步行不自由に付乘輿之儀願之通。
一同月　鄕村高辻帳江戶表御納戶え納置、御用之節被出候筈にて此度被差登候。

一同月　赤須市郎兵衞病氣に付、仍願御目付役御免。
一七月四日　御國目付衆御兩人御招請にて、於江戸御殿御料理有之。
　但壹岐守樣御名代にて御出迎、御料理後大御番頭、御本方奉行、御用人、御留主居、御膳番、御用懸田代新右衞門まで御盃被下候。
一同月廿六日　御國目付衆御下着、境村御止宿ゑ御使者石川治右衞門を以て御口上、兼て被仰付候趣にて御酒御肴被進、御兩人ともに御逢候て御叮寧之御禮。
　但御苗字之衆、御年寄中牛嶋村へ御出迎へ、月番幷役寄々役人御旅館近所ゑ罷出、御苗字衆より御添役まてへ下乘御叮寧に被仰述候。
一同十日　於天德寺恭溫院樣御石塔御安置に付御供養有之、其節御代香大學勤之。
一閏七月七日八日　大雨にて洪水にて中嶋家流、溺死夥敷、城土手崩有之候。
一同十一日　兩御目付衆御城御見分相濟御歸館之節、御町御順見被成候。
一八月十日　戸村十太夫兼て足痛煩之所病死、次男源藏今年十五歲に相成候を家督之願ひ、先例之通御目代被差遣候。大番頭和田正五郎、御目付松塚角右衞門被仰付候。
一同月十四日　後藤七右衞門代御勘定奉行寺崎彌太夫、大番組頭鷲尾源兵衞、鹽谷正左衞門被仰付候。
一九月十三日　富田主水愛宕下御前樣付頭役、主水代御副役石井正左衞門被仰付候。主水義御用人格

に被仰付候。

一同月　戸村源藏、十太夫病死に付爲上使土屋彌五左衛門を以被成下御意候。

但源藏へ家督無御相違被仰付之段戸村一學ゑ申渡ス、右に付此度、所支配組下共先規之通被仰付候。爲上使御物頭大越長右衛門、御目付松塚角右衛門を以御條目にて被仰渡候。源藏、并庄九郎組下ゑも被仰渡候。

一十月　長瀨平右衛門御用人、築治部左衛門本席にて御膳番被仰付候。

一同月　寺崎彌太夫代御物頭岡内藏丞、赤須市郎兵衛代御目附伊藤四郎左衛門、大御番二番組頭石橋四郎兵衛、同四番組頭信太半藏被仰付候。

一同月　屋形樣御誕生日に付神鏡餅御披、例年之通御祝儀相濟。

一同月　御後室樣御願に付、被遊御薙髮御法號御付被成置度之段、松平右近將監樣ゑ去月廿五日被仰上候所、同廿九日御留主居御呼出にて被御聞届候。

一同六日　兩御目付衆御呈書被差出候に付、御歩行田畑茂兵衛ゑ御中間二人差添同日出足罷登、同十七日參着。仍同日、御用番酒井左衛門尉樣に御留主居中村政右衛門を以、右御呈書差上候。

一十一月十一日　龜田より小川源兵衛參候て、本庄と龜田境論之儀有之此度御訴に相及候。依て伊豫守樣より具サ御賴之次第、并御當家之儀は御繪圖本に御座候故行々御尋等も御座候はヽ、無間違樣に

致度之段委曲申談候付、右御用懸牛丸市右衞門、太田市兵衞申渡ス。御目付衆えは、伊豫守樣より內用在之御使者源兵衞參候由御屆申上置候。

一同月　兩御目付衆え被差出候御國繪圖御伺之儀、赤須九左衞門、中村政右衞門を以松平右近將監樣、西尾隱岐守樣、堀田相模守樣御用人を以段々御問合被相盡候所御取請宜、去ル九日政右衞門を以御用番隱岐守樣え御伺書被差出、同十二日同人御呼出にて御用人屋代善左衞門申聞候は、此間被仰聞候御書付隱岐守樣え申聞候所、御書付之趣致承知候。右之趣御伺不及相直候、繪圖被相渡候得は相濟候義に候間、御書付之趣は承候までにて御書付は被返置候由同人申聞候付、御伺書政右衞門請取罷歸候。實地之御畫圖斗兩御目付衆へ可差上候よしにて相濟。

一同十二日　幸之助樣付土屋貞吉義滑川八右衞門代御納戶役被仰付、貞吉代大嶋助右衞門被仰付、大番組頭格にて百石都合御役料被下置候。

一同月　御兵具奉行小室孫兵衞病氣に付、御免願之通閑居御暇被下置。且數年勤勞思食、金子十兩被下置候。

一同月　兩御目付衆より御呈書被差出候付、御步行齋藤只之丞え御中間兩人指添同十二日參着に付、翌十三日御用番西尾隱岐守樣え差上候。

一同月　田畑損亡御屆相濟候よし被仰達候所、右御屆草稿被差下候樣に申來り御下し被成候。

一十二月　此度御目付衆ゑ御國繪圖新御畫圖被差出候故、元祿年中御國目付へ被差出候御畫圖御無用之物候得とも、御勘定所御繪圖御引替于今無之候故御引合等之爲被差登候。
一同二日　兩御目付衆無御別條御出駕被遊候。
一同三日　牛丸市左衞門、小田部縫殿右衞門、太田市兵衞御本方奉行、太田藏人御町奉行被仰付候。
一同五日　小川源兵衞龜田ゑ出立致ス。
一同廿四日　吉川七郎右衞門御兵具奉行、駒木根小十郎御物頭被仰付候。

○寶曆十辰年

一正月　富田主水神文下書此表に無之、江戸表より御膳番方ゑ下候所當人登り間に合兼、江戸着之上神文可致之由被仰渡候。
一三月朔日　兩御目付衆御招請、於小書院御膳後後段被差出七ッ過御歸宅、於大書院段々御叮寧之御取扱之儀御一禮、御年寄中ゑ有り。
但此節求馬樣爲御名代御出迎、御年寄中、御用人、御留主居、御用懸、御刀番ゑ御盃被下候。御取持久世忠右衞門殿、吉田小右衞門殿、津輕良策老、橘隆庵老御越。
一同十六日　梅津主鈴御目付役被仰付候。

一同月　赤須九左衛門勢州ゑ御代參被仰付、來月中出足之由申達。

一同十二日　淺草御長屋之內求馬樣御借被成御普請出來、同日御引移被成候。

一四月　寺社奉行福原彥太夫、御本方奉行木內金左衛門、小田部縫殿右衛門五十歲に付、駕籠御免之伺書被遣候。

一同六日　國社ゑ御代參小場源左衛門相勤候。

一同朔日　爲御名代求馬樣御登城之處、公方樣未御老年には不被遊御座候得とも御病身に付、右大將樣ゑ御政務御讓被遊度思召將軍宣下之儀京都ゑ御願被仰遣、近々右大將樣御本丸ゑ御移徙、公方樣西丸ゑ御移替可被遊旨、只今迄に不相替右大將樣ゑ御奉公可仕旨、御大名樣方惣御出仕にて御老中堀田相模守樣被仰渡候。依て求馬樣爲御名代、御用懸相模守樣ゑ御出被成候。

一五月朔日　屋形樣御座之間ゑ御出坐、近進並以上御目見被仰付候。於此表右御歡御帳被差出、御廣目御謙退も有之に付其旨諸頭役迄書付にて被仰知候。

一同十一日　折內五郎右衛門大番與頭被仰付候。

一同月　公方樣御代替に付鄉村高辻帳等被差出候儀に候間、延享年中之分取合、唯今より吟味可申渡申達候。

一同十五日　當朔日より朔望之御目見被仰付候付、去ル寅年以來定居在番之面々、繼目出仕被仰付候分

ゑ御盃被下置候。此末、定居幷其表詰合之者繼目出仕名改之願申立候節は、如以前於御前被仰付候筈申來ル。

一六月　秋登御本方奉行福地嘉兵衞、御物頭酒出孫左衞門被仰渡候。

一同月　公方樣御代替に付御判物御頂戴可有之、先年那可忠左衞門取扱候次第書上候分江戶表に無之、依て御境目奉行より差上候付寫取被相登候。

一七月十一日　小瀨宇兵衞夏中より病氣にて病死。廻座御家老ゑ之上使は以前より廻座御相手番より被仰付候事故、御伺之上、人物は秋田にて御吟味之上被仰付候筈。

一同月　大番頭早川兵馬病氣に付、再應依訴訟御役御免。

一同十七日　澤部角助大番六番組頭被仰付候。

一同廿九日　小瀨宇兵衞病死に付、嫡子又七郞ゑ上使澁江內膳被仰付候。

一同十八日　酒井左衞門尉樣より御留主居御呼出にて、中村政右衞門罷出候所御書付被相渡候。御判物御用懸御右筆被仰付、寫取爲差登候樣に申來候付、先年被仰付候節は翌年被差登候。今年之儀は御觸早ク在之に付九月十月之內可被差登、萱橋御分之內村限高達之所在之候故、御無沙汰に難相成趣とも被仰越候。

一八月　御代替に付明年御巡見使御下向に付、右御用懸前度御本方より兩人被仰付候得とも、當時不人

數に付御町奉行より一人、御本方奉行より一人被仰付候。
一同月　此度將軍宣下に付、御參向之勅使御馳走壹岐守様被仰蒙候。
一同九日　御用人長瀬平右衛門勤方無調法之儀有之、御役被召放遠慮被仰付候。同日出足罷下候。
但御本方奉行石川縫殿之丞、丹惣十郎、山方才三郎在番候得とも、才三郎縁者兩人外御用在之に付、御副役滑川武右衛門一人にて御目付平澤源五右衛門被差副、於御用所被仰渡候。
一九月　當十月四日光源院様十三回御忌御法事於天德寺御執行に付、銀七十枚にて御仕切被遊候。
但御同人様御七回忌之節は於闐信寺御法事銀廿五枚、去ル丑年天德寺申立候付御牌同寺え被建置、此度同寺にて御法事被行候。恭溫院様三回御忌之節銀八十枚天德寺え被遣候。
一同月　去月廿三日川井兵四郎御物頭役被仰付候。
一同月　去月廿七日於御會所繼目出仕名改隱居被仰付候面々、別冊にて被遣候間爲御知被仰上候。
一同月　屋形様御能御興行被遊度之御願に付、於御座間頭役之面々并近進並以上之面々、勝手拜見被仰付候。
一同月　當七月中、御老中堀田相模守様より御並様御留主居之内御呼出にて、御囲米之儀御書付にて被仰渡候。
一同七日　御判物被差登候付附添後藤七右衛門、小川平次右衛門被仰付候、同日出足。

一同十九日　明年御巡見使御下向に付、仙北下筋宿々見分御用牛丸市左衞門、太田內藏丞、并吟味役淸水藤次兵衞被仰付同日出足。
一同十五日　壽量院後住願相濟、御禮申上同日出足罷下候所、道中不案內誰ッ御付添御用人まて願申立、交替罷下候御中間二人被貸下候。
一同二日　將軍宣下相濟、同五日公家衆御馳走御能在之、以前之通折御獻上無御滯相濟。
一同月　岡本又太郞、大塚九郞兵衞、明春一ヶ年詰被仰付候に付奉札を以申達。
一十月六日　於御會所神鏡糯御披有之。
一同月　去月廿六日福地嘉兵衞御用人被仰付候。
一同三日四日　光源院樣御法事之節御名代佐竹源六郞勤之。
一同月　去月十六日將軍宣下相濟候付爲御祝儀梅津內藏之丞被差出、御太刀馬代御獻上相濟。
但御幼年之御方は三日目御使者被差出候趣先頃御觸在之候。然は三日目無官之御禮故、御使者御取扱并裝束等も相違候。此度三日目被差出候ては御家柄之御障にも相成候事故、松平右近將監樣兼て御用御賴にて、御用人ぇ赤須九左衞門具ッ演說及候て、二日相濟候。
一同月　御物頭洒出孫左衞門、御刀番藤本左門、幸之助樣付赤石四郞兵衞、此度罷下候節持病有之、仍願駕籠御免。

一同月　去月廿三日赤田元仙從御先代御側醫相勤勤勞を思食、此度御納戸役格合被仰付候。

一十月　太田市兵衞江戸京立歸登被仰付候譯は、銅山殊之外難澁に付、正木志摩守殿歸府之節御願被仰立候儀に付て也。

一同月　山方才三郎御本方奉行中內傷煩にて十日病死。

一同月　壹岐守樣御家老小野崎舍人一人勤候所、此度岡野新藏御家老格被仰付、御用筋舍人同然相勤候樣に被成置度在番御家老石塚市正ゑ被仰聞、屋形樣にても被御聞屆御家老加談被仰付候。

一同月六日　神鏡餅御披に付屋形樣御座之間ゑ被遊御出座、殿中詰合之頭役并諸士、近進並まて拜領ス。

一十一月　丹惣十郎代來春登牛丸市左衞門被仰付候。

一同二日　小瀨又七郎四番大御番頭被仰付候。

一同三日　菅又新藏人江戸御雜用役之所、無調法在之遠慮被仰付被差下候所、久々相煩居候義被及御聞先頃被差下、下着以來重病にて同日病死。御科中之事故御檢使可被遣事に候得とも、當人病氣之儀は御存知被成置候事故、不被及其儀御承知被遊候。

一同月十六日　玄猪に付近進並以上ゑ御手自餅子頂戴被仰付候。

一同十四日　小室勘右衞門御物頭役被仰付候。

一同日　寶鏡院後住東淸寺、願之通被仰付候。
一十二月　東淸寺後住遍照寺被仰付候。
一同月　來年始より徒並以下之面々ゑも御盃頂戴被仰付候筈相極。
　但唯今迄は爲御名代壹岐守樣御務被遊候。
一同七日　小貫又左衞門御目付役被仰付候。
一同月　壽量院塔中一ヶ寺へ十二石五斗宛被下候段被仰渡候所、罷下候者無之に付、一ヶ寺ゑ二十五石宛被下候。寺普請出來唯常院、境知院備候、殘二ヶ寺于今寺普請も出來不仕候。依て同寺役僧之内より取立可申、其爲メ同寺ゑ二十五石被下候由被仰付候所取請無之、高五十石被下候はヽ、兩寺之被下候物無之とも、四ヶ院共塔中相立候に成候段元光院へ申達方可有之趣に付、右之通被仰付候。其後唯常院、境知院右御宛行一ト通にて難相續段々願に付、一人ゑ金五兩宛御合力年々被下候段被仰渡候。
一同月　本淸院樣附頭役牛丸平右衞門、大番與頭本席にて被仰付候。江戶御扶持九人御扶持被下候。
一同十一日　寶鏡院入院に付、寺社奉行梅津內藏之丞相詰、御物頭平塚惣助、井口長兵衞御馳走被仰付候。
一同三日　京都御所司代井上河內守樣御老中被仰付、右御代阿部伊豫守樣、右御代寺社奉行は御奏者太田攝津守樣御兼帶勤被仰付候。

一同廿一日　井上河内守様御家老被仰付に付、佐竹河内主計と名改。

○寶暦十一巳年（缺――編者）

○寶暦十二午年

一正月元日　屋形様、上々様益御機嫌克被遊御超歳、御規式無御滯相濟候。

一同二日　八幡宮始御直參之諸社ゑ、寺社奉行梅津內藏之丞御代參相勤。

一同月　當二月中御元服御用幷御勤相濟候得は、旁御用も在之、御裝束爲召役杉山彌生被差登候。

一同七日　御會所御用初に付如先例御熨斗鮑相濟、御酒御吸物被下置候。

一同十一日　御記錄處御用初に付大塚九郎兵衞出勤致候。

一同月　御元服御用に付、八幡之名號前度寶鏡院持參候得とも不及其儀、御副役小野崎靫負持參進登申渡候。

　但、右御用懸後藤七右衞門、熊谷德左衞門、平塚十右衞門被仰付、太田內藏丞へ申合相勤候様に被仰付候。

一同八日　御元服之儀被仰出候段、坐邊幷頭役之面々ゑも被仰知候。

一同月　小野岡吉內此度御留主居本役被仰付候。

一同廿一日　八幡之御名號東門院御會所ゑ差上候。
一同十三日　御元服御用懸寺崎彌太夫、小野岡忠助被仰付候。
一同月十四日　湊孫十郎大番組頭被仰付候。
一同月　年頭之御祝儀被仰上候御使者宇留野源太郎被仰付、如例年御太刀馬代獻上相濟申來ル。
一同二日　御謠初に付壹岐守樣、求馬樣被爲入、於御座間御祝儀相濟。
一二月廿七日　御元服と被仰出候。其節御名字之衆、御年寄中、御所預之面々、御相手番まて獻上物致候。
但御名字之衆、御年寄中之儀は御在番御同役樣御取扱被成候。外は在番御膳番御賴被成候。
一同月　宇都宮帶刀儀思召を以山城嫡子被仰付、宇都宮家續之者被仰付候上帶刀山城方ゑ引取、當日より將監と名改申度願被仰立、願之通被仰出候。
一同十六日　大番頭梅津藤十郎被仰付候。
一同月　御元服相濟候上、爲御祝儀御年寄中御局にて山城始御年寄中御酒御吸物、引渡、廻座、諸頭役無殘、幷當番兩與頭より御側御小姓、御膳奉まて、御用懸面々御酒御吸物於御座間頂戴ス。
一同月　勢州ゑ之御代參熊谷德左衞門へ被仰付候。
一同月十五日　石塚市正上方ゑ立歸登被仰付出足、其節御用所物書田中喜惣次同道被仰付候。

一同廿七日　御元服御祝儀無御滯御奮式之通相濟候由申達。
一三月十三日　御元服相濟候御喜御帳面御廣間ぇ被差出、近進並以上麻上下にて登城致候。
一同五日　御留主居役川井小六郎、御側醫赤田雲端被仰付候。
一同月　去月廿一日、壹岐守樣御家老小野崎舍人、岡野新藏勤方不宜に付被召放、右代大嶋平太夫、弓削平左衞門被仰付候。
一同十三日　屋形樣御元服御規式相濟候御歡、近進並以上御帳に付ク。
但、右同斷に付御名字之面々幷御年寄中ぇ御時服一ッ宛、所預、御相手番御上下一具宛、御用懸役人寺崎彌太夫、小野崎忠助、御側廻、御納戸役まて御目錄被下置候。
一同月　御元服相濟候に付佐竹主計、八木備前、菊地新藏人、同小源太罷下ル。
一同月　太田內藏之丞本席にて御本方奉行、平澤十右衞門儀御膳番、幸之助樣方付被仰付候。
一同廿一日　盛德院樣御病養之所御病死。
一四月朔日　茶町能登屋喜兵衞火元にて家數百軒餘致燒失候。
一同月　盛德院樣御卒去に付當廿一日まて鳴物停止之段被仰渡候。諸普請は當十一日まて被停止候。
一同月　盛德院樣御葬式御用掛後藤七右衞門、石川縫殿之丞、滑川武右衞門、御土葬御用懸太田丹下、小野崎齋宮被仰付候。

一同廿一日　於秋田も盛德院樣御葬式有之候、其節屋形樣御名代松野茂右衞門勤之。
一同日　盛德院樣御葬式相濟候に付、天德寺、永源院ゑ引取退院之願申立候所、直々相勤候樣に被仰出候。
一同月　去月廿九日申上刻盛德院樣御出棺之節、岡本又太郎、宇留野源太郎中御屋鋪より御供致候。求馬樣御跡乘被成候。於總泉寺御葬式之節屋形樣御名代岡本又太郎、幸之助樣御名代源太郎勤之。
一同廿七日　疋田久太夫御家老職被仰付候。
一同月　佐竹主計罷下候節御相手番御城番御免之儀被仰出候。
一同月　當二月御元服之節前度より一乘院御名乘差上候、直々被相用候爲御祝儀、此度御目錄を以銀三枚被下置候段於御城御膳番申渡。
一同廿七日　黑木權右衞門御本方奉行、信太儀右衞門御副役、梅津大藏御物頭被仰付候。
一閏四月　中村政右衞門、數年御留主居相勤候に付御加增高三十石被下置候。
一五月六日　御本方奉行茂木祐右衞門へ新知五十石被下置候。
一同日　大山六左衞門、組付御刀番被仰付候。
一同十五日　鹽谷美作より大病に付遺跡申立、嫡子彌太郎、二十四歲に罷成候御積を以被仰付被下度候由申立候。同日病死。

一同月　御目見御用懸大塚新左衞門、滑川武左衞門被仰付候。

一六月　淳信院樣御一週忌御法事、於壽量院十日より二夜三日勤行有り。

一同月　宇都宮帶刀家跡、思召を以此度戸村十太夫實弟玄蕃被仰付、帶刀末期之節上り知二百石被返下候。

一七月廿九日　湯澤ぇ御目代御用梅津藤十郎、御目付梅津主鈴被仰付候。

但小野崎大藏被仰付候所、妻大病に付看病御暇申上御免に付て也。

一同月　御判物御用にて附添後藤七右衞門、簗治部左衞門幷御歩行四人、御足輕八人罷下ル。

一同月廿五日　岡本又太郎立歸罷登ル。

一同月　佐竹三郎家督無御相違此度早川兵馬ぇ被仰付、親類洒出金太夫、小野岡源右衞門催促口達書にて被仰渡候。當人被仰付候上は御目代藤十郎、主鈴、湯澤引揚候樣に申渡ス。

一八月五日　粕谷藤右衞門御目付被仰付。

一同月　去月廿一日主上崩御被遊候由、御目付衆より廻狀相達ス。

但仙洞樣崩御之儀有之候得とも先例迚も無之に付、鳴物は江戸に從ひ、當四日より八日まで被停止候。諸普請共に右同斷申渡候由。

一同十一日　佐竹山城ぇ宇都宮帶刀被引移候に付、同日より將監と名改、山城同道にて御會所ぇ御禮被

仰上候。

一同九日　梅津藤十郎、梅津主鈴湯澤より歸宅致ス。

一同月　佐竹三郎病死に付御香奠上使梅津小太郎勤之、去月十九日歸宅致ス。

一同五日　先帝崩御に付御香奠銀十枚如先例、御使者大番組頭石橋兵右衞門、於江戸被仰付候。大目付より廻狀にて來ル。

一同月　七月切支丹御屆書御直名御無判にて、當七月廿八日大御目付稻垣出羽守殿、御作事山名伊豆守殿へ被差出候。

一十月六日　神鏡餠如先例御披有之候。

一同月　御領內惣人數調七ヶ年目御屆、去月廿日大御目付宗門改兼御役稻垣出羽守殿え、御留主居川井小六郎を以御屆申上候。

一同三日　黑澤四郎兵衞御町奉行被仰付候。

一同十二日　松野茂右衞門代江戸詰方大塚九郎兵衞被仰付候。

一十一月　來二月中屋形樣被遊御目見候付、於秋田御用懸武藤豐太夫、小野崎忠助被仰付候。

一同月　來二月中被遊御目見候に付、右御用佐竹大和可被仰付候得共當人事數度罷登、嫡子右膳長年に付思食を以右膳被仰付、右同斷に付戸村十太夫被仰付。

一同月　去月廿四日若君樣御誕生に付御觸有之諸大名惣御出仕。屋形樣御幼年に付御留主居御使者にて、御老中、御側御用人、若年寄中不殘御留主居ゑ廻勤致候。

一同月九日　屋形樣御目見御用に付御同朋頭山本壽阿彌、同十一日御用御賴御先手松前主馬殿、古那孫太夫殿、有馬一學殿御招被遊御對顏候。

一同月　佐竹兵馬去月廿五日家督御禮御會所ゑ出勤之儀願被申立、其節御物頭を以、於先祖御一字拜領被相名乘來候所、五代先淡路代より、出仕之節御一字御證文被下置候。養父三郎代迄舊式之儀申立候得共、先規之通難相復段被仰渡候。依て如先例被仰渡被下度被申立候得とも、先規之通難被相復候間近代出仕家督之式被申上候樣に申渡候所、養父三郎出仕之節は、御一字被下置候旨被申立候。同晦日御會所へ御出席之所南家相續願之通、幷實弟喜太郎早川家相續願之通被仰付候、御禮申上候。畢て御判之御證文御引替、追て可被下第一字假御證文被下置乘輿御免申渡候所、是又御禮被申上候。同人ゑ御目見に付來春立歸登之義被仰渡候。

一十二月五日　壹岐守樣、求馬樣ゑ、佐竹主計、佐竹山城より被申上候御用在之段被申聞候付、後藤七右衞門立歸急登被仰付出足。

一同月　明年御勤初候付、大小姓詰七人に無御座候ては不罷成候由御刀番申立候付、功者にて深谷友右衞門、茅根彌三郎被仰付候。右に付御膳奉、御茶屋之ものも、御先代樣之通人數增被下度候由願申立

候。
一同十一日　眞崎彦六出仕致候所御下字拜領之儀申立、吟味之上追て御證文可被相渡之趣にて、假御證文被相渡候。
一同十二日　梅津藤十郎御家老被蒙仰候。
一同月　去ル亥子兩年久保田諸士、在々給人知行高御判紙、御書替七十四通被差登候。
一同十九日　小野崎忠助御勘定奉行被仰付候。
一同十五日　屋形樣來二月中御目見御月取御願被仰上候よし、於御廣座敷今宮大學演說被致候。
一同月　若君樣附御老中松平周防守樣、若御年寄鳥井伊賀守樣、大坂御城代阿部飛驒守樣被仰付候。
一同月　來未年朝鮮人來聘に付、右御用懸中村政右衛門被仰付候。

○寶暦十三未年（缺――編者）

○寶暦十四申年

一正月元日　於御城御規式在之、御年寄衆如恒例御登城被成候。

一同七日　御用初に付御會所ゑ何も出席、如恒例御祝儀相濟。

一同元日　於江戸屋形様御出座、諸士幷歩行並之面々迄御盃被下置、二日御謡初御祝儀相濟候由申來ル。

一二月　小宅九右衞門御副役被仰付候。

一同月　去月廿九日、數十年勤功在之者御稱被下候面々左之通。

一高十五石　御檢地役 伊藤儀右衞門　一一代大御番　御馬乘 富澤市之丞

一二人御加扶持　御膳奉 田口平治　一近進並　御塗師 倉光源兵衞

一一代近進並　御馬醫　青山彌柄

一同七日　伊達外記出仕相濟、如先例御一字拜領、御證文此度相下候付被渡置。

一同九日　富澤市之丞一番ゑ御番入相勤候。當時御馬乘何も年若に付、乍辛労乘方被相頼候段被仰渡候。

一同月　御稱之面々左之通、數十年出精相勤候に付。

一二人御加扶持　御研師　齋藤清四郎

一二人御加扶持　御中や　立花彦右衞門
寺田友右衞門

一同月　正洞院舊冬遷化に付荒川村長泉寺喚、古正洞院繼蹟之義天德寺より申立候。

一同月　口宣請取之御使者藤本左門去月三日下着、其節、屋形様御座間口ゑ出御御頂戴被遊候。壹岐守様、御年寄中幷頭役之面々、其席ゑ列座之分面々ゑ拜見被仰付候。

一同月　大館城手崩、御畫圖を以舊臘廿七日御用番松平右近將監様へ御届被仰上候所、去月十八日御奉書を以御願之通相濟。

一同月　去月十四日、朝鮮人御出ｼ馬舞坂迄被遣候。當六日舞坂ゑ朝鮮人着にて、同十四日江戸ゑ着之筈也。

一同廿一日　岩屋彌兵衞ゑ新知五十石被下置候、幷中川兵左衞門代六番大番與頭、岡見藤治右衞門被仰

付候。

一三月七日　黑澤四郎兵衞代御町奉行寺崎彌太夫被仰付候。

一同月　舊臘被差登候類族御屆、去十二月廿五日宗門改稻垣出羽守殿、眞木志摩守殿ぇ中村政右衞門を以御屆申上候。

一同月　去月十六日朝鮮人來着、同廿七日登城。當五日於宗對馬守樣御饗應、其節御屋敷前通行屋形樣御物見にて御覽被遊候。同七日御暇被仰出、同十一日江戶表出足歸朝致候筈之よし申來ル。

一四月四日　石井嘉左衞門御勘定奉行被仰付候。

一同月　久城寺閑居願之通、後住水戶御菩提寺三昧堂檀林相勤候顯了願に付被仰付候。

一同廿四日　下仙北ぇ御用在之、仙北ぇ石井正左衞門、吉川和助、下筋ぇ櫻田喜一郞、信太儀右衞門罷越ス

一同廿五日　石井嘉左衞門代御物頭龍田小平治、七番與頭齋藤正左衞門被仰付候。

一同月　加賀守樣御紋所御障之義被仰渡候處、盛德院樣三回御忌相濟候に付、模樣無之梅鉢之紋御構無之由被仰渡。

一同晦日　眞崎兵庫國社ぇ之御代參勤之。

一六月十九日　山下藤九郞御目付役被仰付。

一同十三日　御大名樣方惣御出仕にて屋形樣にも御登城之處、當廿九日より改元にて明和と唱可申、御

用番松平右京大夫様被仰渡候。
一同十九日　佐藤恒内御納戸役被仰付。
一七月　太田內藏之丞此度立歸下被仰付、仍て御元服之節之御理髮持參被仰付、着之上御納戸役ぇ相渡吉辰之節八幡ぇ御奉納、其節內藏丞持參にて納候樣に被仰付候段申來ル。
一同月　八幡、稻荷御祭禮御供御物頭、以前兩人勤之所、中頃一人勤に相成候。丑年より、恭溫院樣思召にて又々兩人御供仕來候處、甚迷惑之次第申立候付一人勤に可被仰付候哉御伺被成候。
一同月　御財用甚御差支に付在々給人幷輕者迄、役人廻在御用銀申渡候。但給人ぇは、銀四貫目に付御本田高十石ッヽ、諸寺院幷輕キ御奉公之者、銀三貫目に付御開高十石之割にて、今年より被下置候。六鄉村栗林八郞兵衞、梅澤村肝煎淸右衞門此儀承り御大切を存、仍願、八郞兵衞銀三十貫目、淸右衞門五貫二百二十目差上候付、右之御割にて御開高被下置候。
一同十七日　佐竹主計、佐竹山城相談御用在之此間佐竹大膳罷登候處、今日被罷歸候。
一八月朔日　御吉辰ニ付御年寄中、兩番頭、御會所役人、御側兩役、御刀番、御納戸役一人ッヽ、麻上下にて登城、八幡神ぇ御理髮內藏丞御奉納致候。
一同月　明年御入部御願被仰出、去月廿一日御用番松平右近將監樣ぇ、古郡孫太夫殿を以御願被指出候處、無御相違被仰渡候。仍て惣御屋敷ぇ被仰知候。仍て於秋田如先例御所預幷御相手番迄被仰知候。

一同月　去月廿二日御吉日に付、明年御入部御供石塚市正殿被仰付、福地嘉兵衛、益戸助四郎、滑川武左衛門被仰付候。

一十月　屋形様御誕生日に付神鏡糀御披、如例年於御會所相濟。

一同月　此度石塚市正勤方之儀に付、於此表被仰出候旨在之遠慮致可罷下段被仰渡、右に付嫡子源一郎遠慮被仰付候。岡本又太郎遠慮申立候處、遠慮に不及之由被仰渡候。

一同五日　秋山長右衛門御本方奉行歸役、且親喜右衛門勤功被思召舊知之内五十石被返付候。八代彌太郎御本方奉行被仰付候。

一同月　去月廿九日石塚市正、今宮大學遠慮にて可罷下之由被仰渡、同日出足。

一同月　去月廿七日川井源右衛門御本方奉行被仰付候、於江戸。

一同月　去月廿六日御用人福地嘉兵衛勤形之儀に付、思召之旨在之候に付愼能在候樣に被仰渡、御本方奉行石川縫殿之丞於秋田被仰渡候趣在之候間、致遠慮可罷下被仰渡候由申來ル。

一同十三日　疋田久太夫不調法之義在之、御役被召放遠慮被仰付候旨、此度以簗治部左衛門佐竹山城え被仰出、御年寄中え同人被申聞候付小場源左衛門宅にて申渡ス。

一同七日　御用人赤須九左衛門、御膳番萩庭十左衛門御役御免申立候處、遠慮被仰付候。同二日阿曾村彌宅勤形之儀に付於秋田被仰渡候趣在之候付、致遠慮可罷下之由被仰渡候。

一同月　岡本又太郎此度江戸登被仰付、此表取纏來月十五六日之頃出立之筈也。
一十一月三日　御入部御用掛小場源左衞門、櫻田喜一郎、石川文左衞門、吉川和助被仰付候。
一同十一日　佐竹兵馬、佐竹大和御用在之先頃より出府之處、歸府致候。
一同月　去月廿五日爲上使淺野隼人殿を以御鷹之鴈二羽御拜領被遊候。
一同廿三日　石塚市正役儀被召放生涯蟄居、今宮大學右同斷被仰付候。
但御條目を以上使大番頭和田掃部之助、御用人後藤七左衞門申渡市正宅え差越、大學宅えは大番頭
小瀨縫殿之助、與付御刀番小野崎齋宮勤之。
一同十二日　太田內藏之丞、川井源右衞門御用有之、於江戸京都立歸登被仰付候。
一同五日　御入部御用初に付源右衞門并茂木定右衞門其外御用懸之面々登城、御熨斗頂戴御酒被下候。
一十二月　石川文左衞門御用懸之處此度銅山御用にて立歸能下候付、御入部懸八代彌太郎被仰付候。
一同月　去月十七日於御廣間、思召之旨以御條目被仰渡候。右に付上使仙北え梅津永五郎、下筋え生田目惣內被仰付候。
一同廿三日　去冬御任官御歡并當三月御法事旁に付、先年御科之面々御免可被仰付候哉、又太郎能登御伺申上候通被仰出、左之面々御免被仰渡候。

一御奉公被召出候　大嶋幾太郎

信田弟助

一祖父勤功に付家跡被下置候　赤石三治

一彥右衞門家跡　西野駒之助

一親類遠慮之者へ往來　吉田喜右衞門

一親類往來自分之佛詣　那可儀右衞門

吉田藤右衞門

一御城下徘徊　小野崎造酒

一御城下七里四方寒御領內徘徊御免　山方宇柳

一同月　御本方奉行丹惣十郎、大塚源內於京都、秋田にて被仰渡御用在之候付罷下候樣に遠慮可致被仰渡候。

一閏十二月　寶鏡院後住に遍照寺被仰付候。入院之儀は當時御物入に相成候付來春中まて延引可致由被仰付候。

一同八日　御物頭岡淸七代生田目惣內被仰付候。

一同月　去月廿二日德川刑部卿樣御逝去に付、同日より普請は三日、鳴物七日停止被仰渡候。此表去年中貞次郎樣御逝去之節三日鳴物停止候付、此度は當七日より十三日まて日數七日停止被仰付候。

一同月　來年始より御供廻、御駕籠、御道具、御先代樣より圓明院樣御代迄之通可被成置之旨被仰渡候。去ル寅年より每夜御側小姓不寢之番相務候處此度御免被仰出、當時詰合谷戶助四郎御膳番一人勤に被仰付候。

一同月　熊谷德左衞門御用人被仰付候。

一同月　岡本又太郞御入部御用懸被仰付候。仍て去月十九日、右御用懸之面々え御酒御吸物被下置候由申來ル。

一同月　御本方奉行太田內藏丞御入部御用懸リ被仰付候處、當時在鄕に付太田市兵衞被仰付候。幷藤本左門御用人にて右御用被仰付、且明年御供被仰付候。

一同七日　和泉守樣御卒去に付屋形樣當廿一日迄御忌中に付、鳴物被停止候。諸士月代、幷諸普請は無御構候。天德寺え之御代參、兵部少輔樣御例に從ひ寺社奉行小野崎大藏勤之。

一同月　來酉年三役去月十五日出立に付、御召料、御具足被預置被差登候。去ル六日上着之上南御門爲御披御中之口え相詰、夫より御馬場え相廻御納戶役立會請取、御納戶え相納候。

一同三日　御刀番大山伊織儀今村五郞右衞門代組付被仰付候。

一同月　明年御歸國之御禮御使者大山十郞被仰付候。

一同月　右衞門尉樣御嫡子此度御名御改大藏卿樣と被爲成候付、大藏と申名被相改候。

○明和二酉年

一四月十四日　御老中御連名之御奉書到來、翌十五日御登城御歸國御禮相濟、御刀一腰御拜領。來月朔日御發駕被遊候等申來ル。

一同十三日　權現樣五十ヶ年御神忌に付、同日より同十七日迄於壽量院御法會御執行、御名代佐竹主計勤之。其節御年寄中、寺社奉行等相詰ル。

一同月　御入部御供岡本又太郎兼て被仰付候所、病氣に付大塚九郎兵衞被仰付候。

一同廿五日　津輕出羽守樣去ル廿一日御在所御出足、同日城下御通行、梅津藤太鱗勝院前え出ル。段々御叮寧之御取扱御禮御使者、工藤傳兵衞と申仁參ル。其節御馬一疋御目錄を以被進候よし申來ル。

一五月十五日　初て御國元え之御暇被仰蒙、首尾能萬端相濟候爲御歡、近進並以上廝上下にて登城御帳に付。

一同月　日光御法會に付、御物頭根本正右衞門副使御用被仰付相勤ル。

一同廿七日より、有章院樣御法事於壽量院二夜三日御執行在り、御名代佐竹將監勤之。

但五十回御忌也。

一同月　御入部以前小場源左衞門、梅津藤太、小野寺桂之助御家老被仰付候付、御着城御當日岡本又太

郎を以御禮申上候。幷佐竹河内名改、眞崎兵庫、須田美濃御相手番被仰付候。御披露又太郎勤之。

○明和三戌年

一正月元日　屋形樣益御機嫌能御迎陽被遊、御規式無御滯相濟候。

一同七日　御會所御用初にて如例年御賑々敷、屋形樣御成被遊候。

一同五日　目長崎村ぇ御初野に被爲出候。

一同月　舊臘廿三日丹惣十郎、大塚源内ぇ御條目を以御科被仰付候。

一同月　御用人太田内藏之丞、御本方奉行平井喜六郎、幷吟味役綿引與惣右衞門、京都ぇ立歸登被仰付候。

一同月　舊臘十八日寒中御機嫌御伺之御使者兩御丸ぇ、御留守居同道にて田所伊三郎勤之。

一同月　舊臘十九日本淸院樣附布施嘉右衞門ぇ、御加增高二十石拜領被仰付候。

一同月　此度小場源左衞門罷登候に付、御改革御用懸御本方奉行太田市兵衞、幷川井源右衞門、平澤十右衞門、土屋吉兵衞、中村政右衞門、吉川和助被仰付候。

一同月　御鷹之鶴御拜領被遊候付御酒御吸物被下置候。

但圓明院樣御代四ヶ度御拜領之所三ヶ度御酒御吸物被下置、一ヶ度御省略に付不被下置候。

通霄院様御代御拜領無之、恭溫院様御代寶暦六御拜領之節、御省略に付御酒御吸物不被下置候。

一同月　年始之御使者於江戸小瀬縫殿助被仰付、同日朝御留主居太田丹下同道にて登城相濟候。

一同廿四日　能代奉行牛丸市左衞門病死。

一同月　若君様ぇ此度御名被進候付、右御歡之御使者御右筆筆頭田中左內被仰付、太田丹下同道にて御月番松平右京大夫様ぇ右御歡之御書被指出、若君様御附御老中秋元但馬守様ぇ右同様相勤候處、翌六日右京大夫様、但馬守様より御呼出に付同七日丹下同道にて左內罷出候處、御老中御連名之御奉書幷御格書被相渡候。

一同廿八日　梅津小太郎御相手番被仰付候。

一同日　御饗應御用に岡本又太郎立歸登ル。

一同月　鶴御拜領之御使者和田掃部助、同十八日太田丹下同道にて登城、兩御丸ぇ之御禮首尾能相勤。同十九日從御本丸之御奉書御用番松平右京大夫様より被渡置、同日西丸より之御奉書秋元但馬守様より被相渡候。

一二月七日　御參府幷御饗應御役場御入用御指出に付、仙北ぇ上使平野主馬御刀番滑川武右衞門御副役、下筋ぇ大山六左衞門御刀番小宅九左衞門御副役勤之。

一同十四日　御番頭小瀬縫殿助儀和田掃部助ぇ交替江戸出足。

一三月十六日　屋形樣午刻御發駕江戶ゑ御旅行被遊候。
一同日　戶嶋御止宿ゑ御機嫌御伺幷御喜之御飛脚被差立候。
一同十四日　御兵具奉行沼井四郞兵衞、病氣に付再應願にて御役御免之上、數年之勤功被思召御加増二十石被下置候。
一同八日　於御廣間御具足御召初被遊候。
一同十三日　京都詰方御本方奉行秋山長右衞門、御用在之立歸下着致ス。
一同十六日　鈴木與一左衞門御本方奉行被仰付候て、揃出來次條江戶登被仰付候。
一同月　水戶宰相樣御逝去に付鳴物御停止に付、江戶三御屋敷ゑ被仰渡候。秋田表被仰渡候儀以前より無御座候。
一同廿日　於横手同所給人武藝上覽被仰出、何も罷出ル。
一同廿六日　去ル廿四日御山越、今晚は山形御止宿可被遊、右御飛脚は福嶋御止宿ゑ御機嫌御伺被指立候。
一同月　若君樣御袴着御歡之御使者、御臺處役町田小左衞門勤之。
一四月五日　佐竹大和內用にて出府之處、今日歸府致候由申來。
一同十六日　爲上使松平右京大夫樣御出、如恒例萬端無御滯相濟。

一同月　太田內藏丞去月廿八日京都より歸府致候。

一同廿一日　御老中御連名之御奉書阿部伊豫守樣より御到來、翌廿二日御登城、御參府御禮被仰上候。

一五月十一日　武藤七太夫能代奉行、江田助之進御兵具奉行、井上淸右衞門御境目奉行被仰付候。

一同月　去月廿七日太田市兵衞、近年甚御差支之節長詰勤方思召、御加增高二十五石拜領被仰付候。

一五月　太田市兵衞儀鈴木與一左衞門え交替可能下之處、御饗應御用に付當秋迄被留置候。仍て、右御用懸被仰付候。

一六月　此度御會所御引上ヶ、先年之通於御城御用御取纏可被成置之旨被仰出候付、右御用懸御町奉行寺崎彌太夫、御勘定奉行小野崎忠助、御本方奉行大槻五郎兵衞、御添役滑川武右衞門御用掛被仰付候。

一同二日　土屋彌五左衞門寺社奉行、淸水織部蓮壽院樣附頭役手代役、幷右御同人樣付梅澤玄順被仰付幷御本方奉行石川文左衞門、松塚角右衞門加談之儀被仰付候。

一同月　茶屋方御用掛り石川文左衞門、松塚角右衞門被仰付候。

一同月　富田主水此表え、從蓮壽院樣御用被仰付立歸下着致候。

一同月　岡藏人健忘病にて御物頭役御免。

一七月　去月十五日、太田伊太夫京都立歸登於江戶被仰付候。

一同月　土屋彌五左衞門代大小姓御番頭、去月廿九日田代隼人被仰付候。
一同月　日暮里御屋敷にて鐵炮御稽古被遊度に付、御星場御願之儀御內々御問合之處同所御障在之、御並樣御例在之に付中御屋敷ぇ星場御願之義、五月廿八日松平右京大夫樣ぇ御伺被仰上候處、去月朔日御付札にて相濟。
一同月　梅津藤太代小野寺桂之助可被差登之旨被仰出候。
一同十七日　澤部角助御目付役被仰付候。
一同月　御饗應御招請に付、御副役一人勤にて不相成候付信太儀右衞門段々願申立、此度片岡七十郞被差登候。
一同月　御本方奉行平井喜六郞、京都より去月七日江戶表ぇ下着致候。
但明年登前に付、此度明後年迄詰方進登被仰付候。
一八月三日　爲上使駒井角右衞門殿を以、御鷹之雲雀三十御拜領被仰付候。
一同十一日　三奉行御添役御會所勤形被相改候段、兼て被仰出候。御吉辰に付右御用初在之、役人共ぇは別紙書付にて被仰渡候。
一同月　御用人藤本左門儀後藤七右衞門代り來秋迄之詰方被仰付候、早々罷登ル。
一同月　切支丹類族御屆書、去月廿三日大目付稻垣出羽守殿、御作事奉行正木志摩守殿切支丹御改御兼

役にて、右御兩人ゑ御留守居佐藤又兵衞を以御屆被申上候。

一同廿二日　御條目を以被仰出候付執達書差添被仰渡候、町々よりも兩人ッヽ出ル。

一同月　小野寺桂之助代、來春江戶在番大塚九郎兵衞可被差登之旨奉札を以申來ル。

一同月　本淸院樣附頭役手代武藤與惣右衞門代、當三月中川津忠助此度大番與頭格にて被仰付候。

一九月六日　屋形樣御誕生日十月六日に付例年神鏡之餠御披在之候處、今年は御饗應在之、當月六日御披被成置候。江戶秋田共に。

一同廿一日　矢野忠內二番大番與頭、中村忠藏五番大小姓與頭被仰付候。

一同廿一日　御老中御招請無御滯相濟候由如例之向々ゑ被仰知候。右に付御相手番、無役引渡、寺社奉行、兩番頭、無役廻座迄爲御歡、以使札屋形樣ゑ斗申上候。

一同月　明年御歸國御禮之御使者戶村十太夫被仰付候に付、使札を以御禮被申上候。

一同月　御饗應之節御老中松平右近將監樣、松平周防守樣九ッ半過被爲入、若御年寄酒井石見守殿、酒井飛驒守殿、其外御奏者御役人方御出、七ッ半頃御歸殿也。

一十月　黑木權右衞門役方出精深切に相勤、御難澁之節銅山今年御廻銅都合に相至り、段々被仰出候趣在之當人ゑ被仰渡候。

一同月　去月廿五日御老中阿部伊豫守樣、秋元但馬守樣八ッ頃より被爲入、若御年寄中小出信濃守殿、

酒井飛驒守殿、其外御奏者御役人方御出、七ッ半頃御歸殿。

一同五日　御老中松平右京大夫樣、阿部伊豫守樣九ッ半過被爲入、若御年寄水野壹岐守殿、鳥居伊賀守殿、其外御奏者御役人方御出、同七日御老中松平周防守樣、秋元但馬守樣九ッ半頃より被爲入、若御年寄酒井石見守殿、其外御奏者御役人御出、右兩日共七ッ頃御歸り。

一同月　來春御留守居詰大小姓御番頭黑澤伊兵衞、御目付山下藤九郎被仰付候。

一同十二日　平澤十右衞門數年勤方思召、御加增高二十石被下置候。

一十一月八日　江尻軍兵衞切支丹改役、飯塚多右衞門代り小野四郎左衞門儀、十番之大番與頭役被仰付候。

一同朔日　爲上使駒井覺右衞門殿を以御鷹之鳫御拜領被遊候。

一同四日　御膳奉與頭箕輪新左衞門數年勤勞、且此度之御大禮當春中より出精相勤候に付、一代近進被召立候。

一同七日　御婚禮御心掛ヶに付右御用懸岡本又太郎、同八日太田市兵衞、川井源右衞門、益戸助四郎、中村政右衞門、土屋吉兵衞、片岡七十郎被仰付候。

一十二月八日　御前樣附頭役長瀨平右衞門御用人格にて、并井口長兵衞代御物頭梅津五郎三郎被仰付候。

一同月　吉川和助兼て少祿にて取合九十近キ御宛行有之處、同人勤功にて三十石御加恩拜領被仰付、本知取合四十石程に相成、勤功御役料等被召上少御宛行に相成、甚迷惑仕候段御會所一片共申聞候。御加恩被下置永々は難有事候へ共、當時相償致兼候趣に付、勤役中金子三兩ッヽ被下置候由被仰渡候。

一向庄九郎男子無之に付、戸村十太夫實弟能登聟養子願被申立候。

一同廿三日より廿四日迄、竹堂樣三百回御忌御法事於天德寺御執行被遊候。御名代佐竹將監勤之。

○明和四亥年

一正月元日　屋形樣、上々樣御機嫌能御超歲候。

一同八日　江尻軍兵衞代大番與頭牛丸弟七被仰付候。

一同七日　御會所御用初に付何も出席如例年相濟ム。

一同月　去月廿四日於總泉寺竹堂樣一朝之御回向被成置候。

一同月　去月十二日、當春御下國之御供小野寺桂之助被仰付候、并御副役信太儀右衞門御供被仰付候。

一同月　舊臘廿二日喜四郎樣御病死、仍て屋形樣當三日まて御忌中。

一同十六日　土屋彌五左衞門御家老職被仰付候。

一同五日　於江戶、年甫之御規式畢て屋形樣御老中え被遊御廻勤、御歸殿之上御座ノ間え被遊御出座、諸

士幷歩行並之面々迄ゑ御盃被下置。同日晚御謠初御祝儀相濟。

一同月　久保田町印判師在之に付、以來御年寄中幷役人御用判も出來爲致可申候哉、左樣之節は御用意相辨候段御問合在之候。

一二月　當十一日御婚禮御整被遊候筈に付、其節は屋形樣ゑ御名字之衆御年寄中より御肴代、御前樣ゑ箱肴、御樽代獻上可致、此義御用人致世話候筈之由。御婚禮相濟候はゝ屋形樣、上々樣ゑ使札を以可申上、引渡、廻座、右同斷、幷頭役之面々も御歡可申上、土佐守樣ゑ之御歡御名字之面々、御年寄中まて以使札被仰上候筈。

　但在々御所預之面々は此表ゑ使札、引渡、廻座は以飛札御歡申上、同廿五日御廣間ゑ御帳被出、町々より何も登城致ス。

右取纏御用懸於秋田石川文左衞門、滑川武右衞門被仰付候。

一同十一日　土佐守樣ゑ御結納御進物、同日朝七ッ頃御本使岡本又太郎、副使中村政右衞門被仰付御使者被相勤五ッ半頃被相披。從御同人樣爲御挨拶御家老深尾左近、副使宍戸勘右衞門、同日四ッ頃罷越被遊御逢御直答。畢て於御對面所御吸物御酒被下相披、御客、於御座間御饗應被成七ッ時過御披。御婚禮御取持松前主馬殿、土佐守樣にては有馬一學殿。同日未下刻御入輿表御門より被爲入、奥御玄關迄和田掃部助致御案內、御輿ゑ深尾左近附添又太郎請取之、御貝桶ヘ孕石小右衞門附添桂之助請取之、

御守御大小布施要人、田代新右衛門請取之。御輿被爲入、御供御家老兩人於小書院御目見被仰付早速披ク。奥御規式暮過より始り、四ッ時迄御色直まて相濟、九ッ時又太郞、桂之助始御側兩役等御目見被仰付、於御座間鍛冶橋より御附人を始御目見被仰付。終日快晴也。

但御婚禮相濟候御當日より可奉稱御前様此間蓮壽院様、本淸院様ゑ被及御伺候處、無御相違候故屋形様ゑ申上候。

一同月　定府之面々數年相勤候者御賞美被成候。

一同晦日　御婚禮相濟候に付御城八幡、稻荷ゑ之御名代土屋彌五左衛門勤之、天德寺、正洞院、闐信寺ゑ之御代參寺社奉行福原彥太夫勤之。

一同月　佐竹主計內用在之出府致候。

一三月九日　小野寺主水寺社奉行、佐藤左門八番之大番頭、梅津永五郞御物頭、小室彌五右衛門御目付役被仰付候。

一同月　今年嚴有院様、有德院様、惇眞院様御年忌被當候付、御三方様一ヶ度に御法事之儀壽量院様ゑ被仰含候處、いまた御請は不申上候。

一同月　正洞院、本寺水戶耕山寺ゑ繼目登御暇願之通、當月中旬より五月下旬迄被下置候。

一同十二日　御宿觸御飛脚被差立候。

一同月　御役場被蒙仰候付、江戸詰合御物頭之外に兩人被差登候筈相濟。

一同月　津輕出羽守樣より、御參府之節以前より御馬被進來候處、去年中之大變に付嚴敷御省略に付御斷之義申來ル。

一同月　去月十九日御三ッ目に付、土佐守樣え屋形樣、御前樣被爲入、其節御年寄中御供御料理御目錄被下置候。

一同月　大塚九郎兵衞御留守居被仰付被差置候處、病氣にて御免に付土屋彌五左衞門被仰付候。

一同十六日　津輕樣御在所御出足同十七日大舘御晝休に付、前々之通佐竹大和御途中え可罷出候處、父子病氣に付不被罷出、且去年中之大變に付御音信等七ヶ年被相止候由被仰譯候。

一四月　御三方樣御法事一ヶ度之儀、壽量院樣より御請被申上候。

一同月　戸村十太夫御歸國御禮之御使者被仰付候付、於横手御止宿御連狀等被相渡候段申渡ス。

一同十七日　御老中御連名之御奉書從阿部伊豫守樣到來、同十八日御登城、御歸國御暇御禮御首尾克被仰上、如御先例御刀一腰被遊御拜領候。

一同月　當十五日以上使御歸國御暇被蒙仰、御卷物、銀子御拜領相濟。天德寺え之御代參寺社奉行勤之。

但此節上使松平周防守樣、松平右近將監樣御出之由。

一同月　能代奉行平元茂助、御本方奉行八代彌太郎五十以上に付駕籠御免被仰付候。

一五月十六日　御政務所以前之通御城中ぇ被移置候付、去年中より御普請御取掛之義出來、御引移被成置候。

一同十四日　御山越院内ぇ無御滯被遊御着陣候。

一同月　御關札御泊々宿々ぇ被差越候付、江戸より御飛脚被差立候。

一同十四日　御用所ぇ當十六日御引移候付、御年寄中幷三奉行より御物書迄御酒御肴被下置候、御祝儀相濟。

一同廿六日　御用所ぇ屋形樣初て被爲入候付、將監幷御年寄中、御副役迄御手自御熨斗鮑被下置候。吟味役より物書迄麻上下にて登城致ス。

一同十三日　御先手松前主馬殿を以壹岐守樣御順養子之義御願被仰上候付、此方樣よりも御添書、御先手古郡孫太夫殿を以被差出候。同十七日御老中御連名之御奉書御到來、翌十八日御登城被成候處、榮之助樣御順養子御願之通被仰出之段、御用番松平右京大夫樣被仰渡候。

一同十一日十二日　惇信院樣御法事に付、同十四日戸村十太夫、御留守居太田丹下同道にて御用番御老中松平

（此處落丁……………編者）

一七月十九日廿日　有德院樣御法事十七回忌東叡山にて御執行有り、御香奠納黑澤四郎兵衞勤之。

一同十日　小野岡市太夫大病に付御役御訴訟再應願申立候處、寛々養生可仕之由被仰出、病氣御尋同人所ぇ被爲入候付、御年寄中始一役一人ッヽ罷越。
一同七日　福地三太郎御本方奉行、大番與頭古宇田半左衞門被仰付候。
一同月　御老中秋元但馬守樣御病氣に付御退役、右御代板倉佐渡守樣、御側御用人田沼主殿頭樣、御側衆大久保因幡守樣當朔日被蒙仰候。
一同朔日　去月晦日御用番松平右近將監樣より御切紙到來に付、同日御留守居太田丹下同道登城、御歸國御禮之御使者、御獻上物如先例之、御奏者土井大炊守樣御披露。十太夫、御前ぇ被召出太刀目錄獻上、自分之御禮相濟。同日西丸ぇ登城御獻上物并自分之獻上物前々之通、御奏者大岡兵庫頭樣ぇ拜謁萬端相濟。
一同廿四日　宇都宮帶刀、酒出金太夫御相手番、梅津內藏丞寺社奉行一役、澁江左膳、戸村一學大御番頭小野崎七右衞門御目付被仰付候。
一同廿五日　小野岡市太夫病死、嫡子龜治より御屆申上ル。同廿七日まて日數三日鳴物停止。
一同月　幸之助樣御刀番小貫團兵衞御納戸役被仰付、着席之儀御伺申立候處、大番與頭本席にて相勤候樣被仰付候。
一八月五日　小野崎內匠大小姓御番頭、并黑木彌太郎御副役被仰付候。

一同月　伊達備前、明年御參勤御供登被仰付候。

一同月　去月十一日、土用中之御使者御臺處役北村彌三郎被仰付、兩御丸相勤。

一同月　去月十九日登城可致旨、同十八日御用番松平周防守様より御切紙到來、太田丹下同道にて戶村十太夫登城之處、御奉書被渡置先例之通卷物拜領被仰付、且同日板倉佐渡守様御宅ぇ罷出御奉書被渡置候。

一同廿八日　御前様頭役手代澤部角助被仰付候。

一同十五日　明年御參勤御供登御用人寺崎彌太夫、御膳番大山伊織、小宅九右衛門被仰付候。

一同廿二日　小田嶋元良御側醫被仰付候。

一九月　佐竹淡路、佐竹大和ぇ此度出府可致之旨被仰出候付、淡路廿四日出府致候。

一同月　去月廿九日、當五月中爲御登之御馬御本丸ぇ御留守居佐藤又兵衛、西御丸ぇ太田丹下を以御獻上相濟。

一同五日　定府布施新右衛門、秋田勝手自分物入にて引越ス。

一同廿八日　大和出府致候。

一同十九日　佐竹主計與下出入之儀に付御詮儀被成置候付、當夏中より被申立候通差扣罷有候樣に被仰出、與下給人無殘遠慮被仰付、主計差入中は當分與下、處支配之儀鹽谷彌太郎ぇ被仰付候。

一同廿八日　陰之間ぇ平元茂助被召出御家老職被仰付、御座御免被成置候。小野岡掃部御勘定奉行、大山與右衞門御本方奉行、鈴木助吉、安田宇吉御物頭、眞崎沖負御目付、滑川武右衞門御前樣附頭役手代役、根本小平太御添役被仰付候。

一同廿六日　御本方奉行石川文左衞門、御勘定奉行小野崎忠助、勤方思召に不相叶役儀御免被成置候。遠慮申立候所遠慮被仰付候。

一十月　御用人太田伊太夫京都立歸登り被仰付候。

一十一月七日　御膳番益戸助四郞、勤方思召に不相叶に付御役御免、申立之通遠慮。

一同八日　梅津半五郞代御旗組田中六兵衞、右之代御物頭淸水八兵衞被仰付候。

一同十一日　御納戸役横田百助被仰付候。

一十二月朔日　岡本又太郞、小野寺桂之助役柄不相應之義在之に付、以御條目役儀被召放御科被仰付候段、又太郞宅ぇ上使松野彌五郞、川井源右衞門勤之、桂之助義茂助宅ぇ及催促候處、病氣に付親類茂木小四郞出ル。上使寺崎彌太夫、須藤平右衞門勤之。

一同月　益戸助四郞代御膳番藤井監物被仰付候。

一同月　去ル十月廿一日、阿部伊豫守樣より御留守居御呼出に付中村政右衞門罷出候處、如例之重陽之御內書被相渡、且卷物二ツ致拜領候。將又、同日板倉佐渡守樣よりも御奉書被相渡候付、藤本左門、政

右衞門打揃ヒ卽日御內書御奉書共に差出候故、奉拜見左門ゑ被相渡、御右筆御封御申渡如例御納戶ゑ相納ム。

一同月　明年御參勤御伺之御使者石井久□郞勤之、御留守居同道にて御本丸御用番松平右京大夫樣、西御丸は板倉佐渡守樣ゑ被差出候所、御催促に付同廿二日右京大夫樣ゑ罷出候處御連名之御奉書を以、來四月中御參勤被成置候樣に被仰出候。

一同六日　須田美濃御家老職被仰付候。

一同日　平元茂助ゑ永々御座御免之段被仰渡、仍て嫡子典膳も御座御免被成候。

一同十六日　石塚市正無調法在之に付御科被仰付候段被仰出、當十一日爲上使梅津喜太夫、細井長三郞ゑ御目付藤井東兵衞被差越、嫡子源一郞ゑも以御條目被仰渡、且出生之男子十五歲迄親類向庄九郞ゑ被預置候。

一同九日　澁江內膳無調法在之に付、於御會所御科以御條目被仰渡候。

一同月五日　松平土佐守樣御逝去に付、同日より十一日まて日數七日、三御屋敷鳴物停止。右は桃源院樣御母義樣御例に從。

但右に付御前樣ゑ御機嫌御伺之御使者澁出忠藏勤之。

○明和五子年

一正月七日　御用所御用初に付御年寄中御部屋ゑ御出座被成置、何も出席御祝儀相濟。
一同月　年始之御使者黒澤伊兵衞被仰付、御留守居太田丹下同道にて相濟。
一同月　來月廿九日大昌院樣御百ヶ日に付松平筑後守樣ゑ之御國使者、御物頭江戶在番根本正右衞門、拵出來次第罷登候樣に被仰付候。
一同月　津輕樣御領中御通行之節御馳走人馬、來ル辰年迄御儉約中御斷申來候付、此方樣被進候御馬之義も御斷被仰進候。
一三月　御用人寺崎彌太夫龜田ゑ之御使者に罷越于今罷歸不申ニ付、川井源右衞門御供立歸登被仰付候
一同廿三日　大塚九郎兵衞病氣に付、度々願之上御家老職御免被仰付候。
一同月　去月十八日佐竹大和死去、此度家督無相違嫡子大膳ゑ被仰渡、與下幷所支配共に先規之通被仰付候。
一同月　御本方奉行秋山長右衞門、石井正左衞門、去月十四日江戶出足上京致候。
一同月　御本方奉行鈴木與一左衞門御用在之、道中差急去月十九日江戶より立歸罷下ル。
一同十一日　御前樣附頭役土屋吉兵衞被仰付候。

一同月　御參府御登御副役小宅九右衞門病氣に付、黑木忠兵衞立歸登被仰付候。九右衞門、快氣次第能登候筈。

一同十二日　鹽谷彌太郎御家老被仰付候。

一同月　江戸詰合御本方奉行岩屋彌兵衞、來春まて在番被留置候。

一同月　平元茂助御家老寺崎彌太夫御用人平澤藏人御物頭吉川和助御副役龜田え御使者。同十六日茂助、彌太夫御用在之刈和野御止宿え能越、御伺之次第申上に大曲御止宿まて能越、直々兩人とも同所より歸宅致ス。

一同六日　御用番松平右京大夫樣より御切紙御留守居え到來に付、翌七日中村政右衞門登城候處、歲末之御內書被渡置、如先例御卷物拜領被仰付候。且同日從御西丸、板倉佐渡守樣御奉書被渡置候。

一同月　左京亮樣御違却之次第に付、藏人、和助え加談致候て相務候樣に被仰付、梅津五郎三郎龜田え御使者被遣候。

一四月六日　巳下刻江戸え御上着被遊候。

一同十三日　從兩御丸爲上使阿部伊豫守樣被爲入如恒例相濟、同十四日御老中御連名之御奉書到來、同十五日御登城、御參府御禮無御滯被仰上候。

一同十四日　御膳番小貫釆女、御刀番平澤平角、御納戶役箕作源之丞被仰付候。

一同十六日十七日　於壽量院權現樣御神事、其節小場源左衞門相詰、御名代寺社奉行勤之。
一同十八日　御用番松平周防守樣より御老中御連名之御奉書到來、東叡山火之御番被蒙仰候。
一同廿六日　御本方奉行松塚角右衞門病氣に付、願之通御免被仰付候。
一五月四日　津輕樣御通行に付小場源左衞門御途中ぇ出ル。
一同廿四日　宇都宮帶刀遺跡知行高之內二百石被召上、格別之思召を以、故帶刀家跡將監を以被立下候節之通祿高にて、此度末子養子捨五郎ぇ家督被仰付候。
一同廿五日　平澤藏人、吉川和助、龜田より御伺之御用在之罷越候由申來ル。
一五月　遍照寺梅眞院京都智積院ぇ住山罷登申度に付、出國御暇御伺之上相濟。
一同月　御膳番小貫釆女被差下、此度平元茂助幷御本方奉行太田市兵衞、搆出來次第罷登候樣被仰付候。
一同十六日　牛丸市右衞門御副役被仰付候。
一同廿一日　本淸院樣附頭役布施要人、右代り御刀番糸賀九左衞門被仰付候。
一同廿五日　蓮壽院樣附頭役手代役海老原與平治、同人代り御目付石川團藏被仰付候。
一六月十一日　幸之助樣被遊御額直御袖留被仰出、左近樣と御名御改被遊候。
一七月九日　梅津五郎三郎、平澤藏人、吉川和助、龜田より御用相濟歸宅。

一同十日　簗治部左衞門御膳番病死。
一同六日　平元喜代之助御物頭、石橋造酒大番與頭被仰付候。
一同十七日　中村忠藏代大小姓五番之與頭大山勘兵衞被仰付候。
一同廿五日　中田文藏代御物頭羽石東藏被仰付候。
一同廿二日　爲上使建部莞治郎殿を以御鷹之雲雀被遊御拜領候。
一七月　佐竹主計病氣に付隱居之願被申立候所寛々養生可致被仰渡、御禮梅津小太郎を以申上候。
一同二日　大番四番之與頭小介川庄左衞門被仰付候。
一同月　御目付川上治左衞門、思召之旨在之候付致遠慮可罷在候段被仰出、御役御免被仰付候。
一同月　去月晦日夜天德寺遷化致候旨、寺社奉行御屆申上候。
一同廿七日　御町奉行櫻田喜一郎病死。
一同月　男鹿黑崎村より初鮭差上候に付、江戸ゑ步夫□人持にて被差登候。
一同日　平元茂助幷御本方奉行太田市兵衞、同日出足罷登候。
一同月　小田部新一郎御目付役被仰付候。
一九月　須田美濃、來春御留守居方詰被蒙仰候。
一同十六日十七日　八橋於壽量院御神事在之、其節鹽谷彌太郎相詰。

一十月二日　石井嘉左衞門御本方奉行、小野岡掃部御町奉行、梅津小兵衞御勘定奉行被仰付候。

一同月　御兵具奉行吉川七郎右衞門病死に付江田助之進一人之處、痛所在之御用難相辨、御兵具奉行假役梅津主鈴被仰付候。

一同月　角館天寧寺遷化に付、板見內村靈仙寺後住被願申立候。

一十一月　明年御下國御禮御使者茂木若狹被仰付候。

一同月　天德寺後住鱗勝院被仰付候。

一同月　先月廿三日上使牧野內匠殿を以、御鷹之鴈被遊御拜領候。

一同六日　井上淸右衞門御勘定奉行、牛丸市右衞門御本方奉行、菅谷紀太郞御物頭、泉嘉七郞御副役被仰付候。

一同十一日　富岡忠右衞門御目付役被仰付候。

一同廿五日　天德寺入院相濟候。

一十二月二日　梅津五郞三郞御境目奉行兼帶、御物頭梅津小太郞代岡見藤治右衞門被仰付候。

一同月　長濱屋源左衞門、高岡空三吉右衞門事、右兩人御用在之江戶ぇ被爲召、去月十九日御目見被仰付候。

一同月　去月八日、明年御下國之御供伊達備前御家老、御用人寺崎彌太夫、御膳番大山伊織、御添役小宅

九右衞門被仰付候。

一同九日　角館差引役梅津定右衞門、澁川庄右衞門大番與頭格にて被仰付候。

一同五日　平元茂助御用相濟江戸表出足。

一同月　御用人川井源右衞門去月廿八日江戸出足。

○明和六丑年

一正月元日　屋形樣、上々樣益御機嫌能年始御規式、畢て御座間ゑ被遊御出座諸士幷御步行並之面々ゑ御盃被下置。

一同二日　御登城被遊御時服御拜領、御謠初御規式有り。

一同七日　御用所御用初に付何も出席御用相濟。

一同八日　新田目波負大番八番之與頭、高橋万藏大小姓四番之與頭被仰付候。

一同十一日　御記錄所御用初に付鹽谷彌太郎出席致ス。

一同九日　大小姓御番頭宇留野源兵衞、早川喜太郎、田代隼人、小野崎内匠勤方思召不相叶に付、御役被召放遠慮被仰付候。

一同十三日　長濱屋源左衞門幷妾三ゑ御料理、御召料、御掛物等被下置候。源左衞門ゑ御藏元被復置候

付高二百石御加增被仰付候所、色々辭退在之、在番伊達備前家老御請不申上候次第暫預り被置候。
一同月　武藤七太夫能代奉行石井嘉左衞門御本方奉行五十歲に付駕籠御免。
一二月十一日　森川金吾御物頭被仰付候。
一同月　江戶御雜用役此度被相改候付定居間館惣七、野元市十郎定役被仰付、一人に御役料高五十石ツヽ今年より被下置候。唯今迄御雜用役之內水戶部新助儀、右兩人ゑ同前に被仰付候。
但市十郎只今迄近進並之所、此度勤役中近進に被仰付候。
一近年御用人御膳番を御側兩役と申唱候儀に付御書付を以被仰出、役々ゑ被仰渡候。
一同月　大山伊織、去春中より御臺處向御用等精細吟味相盡候付、奉行格被仰付候。但御膳番也。
一同十一日　左近樣御前髮被遊御執候。
一三月　京都在番御本方奉行秋山長右衞門代石井正左衞門被仰付候。
一同廿九日　阿仁銅山ゑ平元茂助御用にて罷越ス。
一同廿日　佐竹將監妻死去。
一同十五日　津輕樣御城下御通行に付、鱗勝院前ゑ鹽谷彌太郎罷出ル。
但江戶在番御年寄中より以書札將監方ゑ御尋申來ル。
一同十九日　田中三左衞門御物頭、金澤典膳、闞市右衞門御添役被仰付候。

一同廿五日　三番大小姓御番頭白川七郎兵衛被仰付候。
一同日　黑澤伊兵衛大小姓御番頭去年中罷下り、以來一人勤別て辛労に付御紋付御上下被下置候。
一同月　御本方奉行太田市兵衛、上方登御用人藤本左門上方立歸御免、秋田へ立歸下り被仰付候。
一同廿九日　川井源右衛門茂木祐右衛門御本方奉行、梅津小兵衛御用人、藤井監物御勘定奉行被仰付候
一四月廿三日　御物頭平塚惣兵衛、梅津五郎三郎不調法在之、御會所におゐて被仰渡候。
一同十三日　屋形様御同前に左近様御下被遊度候段御願に付、御用番松平周防守様ぇ御留守居を以御伺被仰上候處、同十五日御付札にて御伺之通被仰出候。
一同月　去月廿七日須田美濃罷登ル。
一五月二日　御境目奉行平塚惣兵衛、梅津五郎三郎代り、鈴木助吉、信太小右衛門被仰付候。
一同月　去月廿五日從兩御丸爲上使松平右京大夫様、板倉佐渡守様御出、御歸國御暇被蒙仰如御先例御卷物、銀子被遊御拜領候。同廿七日御老中御連名之御奉書從松平周防守様到來、翌廿八日御登城御歸國御禮相濟。
一同月　佐藤又兵衛御留守居本役被仰付候。
一同月　平塚惣兵衛、梅津五郎三郎閉門被仰付候付、平塚才治在番之處罷下被仰付候。
一五月廿一日　屋形様、左近様益御機嫌能御下着被遊候。茂木若狹ぇ御連狀等被相渡同日出足被致候。

一六月廿五日　益戸助四郎儀茂木祐右衞門同役郷村奉行大嶋喜之丞御兵具奉行被仰付候。
一同十六日　御前樣附頭役手代役町田小左衞門代北村彌三郎被仰付候。
一七月十一日　小場源左衞門願之通御役御免。
一同廿一日　先年御科被仰付其後被召出、此度舊知之内被返置候、左之通。
　一高十五石　佐竹河内與下　蓮沼吉五郎　一高七十石　佐竹右膳與下　忍久兵衞
　一高二十石　佐竹右膳與下　青柳甚平　一高十五石　茂木若狹與下　中山忠助
一同朔日　茂木若狹登城可致旨、去月廿九日御用番松平右京大夫樣より御切紙到來、御留主居佐藤又兵衞同道にて御歸國之御禮御使者、獻上物先例之ことく、御奏者牧野越中守樣御披露。若狹御前え被召出如先例之御太刀目錄獻上、自分之御禮御奏者遠藤備前守樣御披露相濟。同日西丸え登城、御獻上物幷自分之太刀目錄前々之通相濟。
一同月　土用中御使者梅津賴母勤之。
一八月朔日　能代え御渡野御發駕被遊候。
一同月　去月廿八日向庄九郎御家老職被蒙仰候。
一同日　梅津内藏之丞御相手番被仰付候。
一同月　明年御參勤御供登鹽谷彌太郎被蒙仰候。

一同月　元祿年中之御國繪圖有無之儀於江戶表被遂御吟味、當五日、大手後御勘定所ゑ御留守居佐藤又兵衞を以被指出候處、御勘定役小笠原新左衞門殿、藤井惣五郎殿御請取無御相違相濟。

一同月　御目付富岡忠右衞門病氣に付、御役願之通御免。

一同廿一日　平元茂助幷平井喜六郎京都立歸登被仰付候。

一九月　御幼年中御用向辛勞致被相勤候付、佐竹山城ゑ御加增三百石拜領被仰付候。

一同月　去月廿七日寺社奉行小瀨縫殿助四番大御番頭幷大筒方共に、澁江内膳御本方奉行、茶屋擔關伊左衞門、御副役小栗惣助被仰付候。

一同朔日　眞壁掃部助御相手番被仰付候。

一同月　去月十八日西丸付御老中被蒙仰、御名豐後守樣と御改、阿部飛驒守樣也。唯今迄之西丸付板倉佐渡守樣、御本丸付御引上被成候。

一十月七日　御本方奉行石井正左衞門京都ゑ出足。

一同十六日　山下藤九郎御膳番被仰付候。

一同月　寺崎彌太夫同前に、吉川和助儀御用有之江戶ゑ立歸罷登候儀被仰付候。

一同月　去月廿九日松平阿波守樣ゑ御老中御連名之御奉書到來、翌晦日御親類樣之内御呼出に付小笠原彈正少弼樣、秋元攝津守樣御登城之處、御老中御列座にて松平右近將監樣御書付を以阿波守樣御隱

居被仰付、御嫡千松丸様ゑ御家督無御相違被仰付。右に付千松丸様、御差扣之儀御伺之上被仰付候。仍て太田伊太夫罷越松平右近將監様用人ゑ、此方様御差扣之儀問合候處御內慮相遂、御在國之儀候へ共同晦日夜中松前主馬殿御賴御一類様より御伺被仰上候處、御差扣には不及候由被仰付候。

一十二月廿四日　小野崎藤太郎、澁江內膳勤方不宜に付、御條目を以藤太郎ゑは遠慮、內膳蟄居被仰付候。

一同月　明年御參勤御伺之御使者久野與五郎被仰付相勤候所、去月十七日、阿部豊後守様より御催促にて西御丸より御奉書被相渡、同日板倉佐渡守様より御呼出にて御老中御連名之御奉書を以、來四月中御參勤被成置候様被仰出候。

一同月　先月廿六日平元茂助京都御用相濟、勢州ゑ御暇にて罷越ス。

一同月　江戶表御目付之由にて院內より罷越、南部ゑ相通候由にて横手より小道ゑ入候由に付、右書付在番御年寄中御心得名前等被差登候。

○明和七寅年

一正月元日　屋形様奉始上々様御機嫌能御超歲、御規式等まて萬端相濟。

一同七日　御用所御用始に付御二方様共に被爲入、御賑敷相濟。

一同月　元祿年中御國書圖ゑ差添被差出候鄉村帳有無之儀、御答書去月十五日、追手後御勘定所へ佐藤又兵衞を以被差出相濟候由。然は去年中江戶より申來候は、元祿御繪圖ゑ被差添候鄉帳御控有無御尋之上被仰越候故、及御吟味被仰達候。鄉帳と鄉村帳とは甚タ相違候由、仍て御尋之義具ニ御吟味、御屆書御引替御座候樣に被仰越候。

但鄉村帳とは鄉村高辻帳之事可有御座、是は御判物御拜受之每度被差出候事に御座候。

一同十一日　七番大番頭小野崎內匠被仰付候。

一同月　龜田一件御用に付、於江戶舊臘十五日太田伊太夫、寺崎彌太夫ゑ太田丹下被差添陸奧守樣ゑ御使者被差越、向方樣よりも中老太田備前と申仁罷越候。

一同月　年始之御使者梅津喜太夫勤之。

一同五日　寺崎彌太夫、吉川和助御用相濟江戶致出足。

一同十三日　岡半太、大番與頭小野岡傳彌代被仰付候。

一同十四日　御側醫三宅道的、數年勤功被思召御納戶役格被仰付候。

一同月　寒中御使者安藤卯內被仰付候。

一同月　御本方奉行福地三太郎、來卯春迄被留置候。

一同廿二日　寺崎彌太夫、吉川和助下着。

一同十七日　横手給人落合與一右衛門病體大病に至候付、爲御屆黑木忠兵衛早追にて罷登、去ル十九日卯刻與一右衛門病死に付、大番與頭關郷右衛門早追にて同日出足。

一同月　當春御參府已後江戶表御用在之、平元茂助幷平井喜六郎、大山伊織立歸登被仰付候。

一同廿二日　羽生淸兵衛大番二番與頭被仰付候。

一同廿四日　關郷右衛門小坂邊より不快之處福嶋驛にて病死、仍て持參之御用書付等、付添御中間持參候て同晦日上着ス。

一二月　來月廿三日御發駕被遊候付、御宿觸御飛脚被差立候。

一同月　小野寺主水御家老職被仰付。

一同月　落合與一右衛門病死之次第御屆之儀、御內々太田伊太夫を以御問合之處、御實意形にて可然に付、去月廿九日、佐藤又兵衛を以御町奉行牧野大隅守樣、幷御老中樣方之內えも被仰上候處、與一右衛門死體勝手葬可申、與一右衛門妻、喜惣太妻江戶表え爲差登可申之由被仰出候。與一右衛門え付添橫手より罷越候御足輕御構無之、勝手に家法之通取扱可申候由、共に被仰出候。仍て山方淸右衛門遠慮御足輕呵置候。

一同廿八日　細井長三郎寺社奉行、根岸惣內一番大番與頭被仰付候。

一三月二日　龜田御使者土屋彌五左衛門え大御番頭和田掃部助、大小姓御番頭眞壁十兵衛、御勘定奉行

井上淸右衞門、御物頭平澤藏人、御副役吉川和助、御用所物書平井五郎右衞門被仰付出足致ス。

一同月　三番大御番頭大塚九郎兵衞幷御目付伊勢鐵太被仰付候。

一同月　近進並御大工頭小菅生又兵衞、兼て役方出精數十年相務候儀被聞召、一代近進に被成置御大工被拔置、大番へ被入置候。大黑三郎兵衞兼て出精に付、御大工頭被仰付近進並被仰付。

一同廿二日　鬭伊左衞門五十以上、幷兼て病足に付駕籠御免被仰付候。

一同廿六日　小野崎內匠大番頭七番大番與頭小介川庄左衞門不念之儀在之、御條目にて御科被仰付候。

一四月九日　御上着被遊候。

一同二日　落合喜惣太段々被相尋候處、龜田御境於相川村向庄九郎與下横手給人赤坂喜門、御足輕兩人召連召捕候段戸村十太夫より訴候。喜惣太舌喰さき病氣に付、同日夜、神保荷月横手ゑ被遣候。仍て早御飛脚にて江戸ゑ被仰達候。同人被差登候付添御物頭眞壁五郎左衞門、高屋五左衞門、賄方請拂方大番山本喜右衞門、横手給人喜門、御醫師大越玄意、神保荷月被仰付候。

一同月　龜田一件相濟候付、去月廿二日陰間にて御意被成下、御紋付御綿入拜領被仰付候。井上淸右衞門、平澤藏人、吉川和助、其外右に付懸リ之面々御目見被仰付候。

一同月　去月廿四日平元茂助下着。

一同十日　喜惣太横手出足江戸ゑ被差登候。

一同九日　土屋吉兵衞、根本小平太下着。
一同月　去月晦日太田伊太夫外出、所々相務掛合等にて刻限移、明ケ六ツ承り南御門より罷歸候付遠慮申立遠慮被仰付候。
一同十三日　爲上使松平右近將監樣御出、同十四日御老中御連名之御奉書松平周防守樣より御到來、同十五日御登城、御參府御禮相濟。
一同廿一日　御用番松平周防守樣より御老中御連名之御奉書御到來、淺草御藏火之御番被蒙仰候。
一同廿四日　須田美濃江戶出足。
一同廿二日　喜惣太道中病氣快氣にて上着、同日晝頃大隅守樣御番所ぇ引付無相違御引請被成候。
一同十九日　太田伊太夫遠慮にて罷下。
一五月　龜田大正寺一件に付掛合之爲、御本方奉行川井源右衞門、鈴木與一左衞門同所ぇ罷越候。
一同月　御役場御用に御物頭山方三郎左衞門一ケ年詰、拵出來次第罷登。
一同月　去月廿九日壽量院燒失にて矢大臣門斗殘ル。御神影、御位牌、御判紙は漸被差出、法衣を始皆々燒失。院主、矢橋吉川惣右衞門下やしきぇ一ト先立退候。
一同二日　小介川庄左衞門代牛丸兵左衞門被仰付候。
一同十二日　太田伊太夫以御條目閉門被仰付候。

一同七日　牧野大隅守殿より御呼出にて、落合與一右衞門妻、喜惣太妻、幷同人妹御構無之由被仰渡候。

一同月　寶鏡院末寺喜藏院閑居に付、拙僧弟子麟瑞後住之義被願申立候。

一同十九日　御本方奉行平井喜六郎、急段御用在之京都立歸登被仰付候。

一同廿二日　黑木忠兵衞御用相濟江戶表出足。

一六月　此度喜惣太一件御用懸之面々、御稱被成置候。多人之事故赤坂喜門一人此表え被差登、餘は於横手大山與右衞門、黑木忠兵衞を以被仰渡候。

一同廿六日　益戶助四郎御勘定奉行、國安三右衞門御本方奉行鄕村方擔被仰付候。

一同月　平元茂助江戶表乘輿之願御免、幷石川文右衞門、富田喜右衞門右同斷。

一同九日　御町奉行井口長兵衞、御勘定奉行赤須九左衞門、御本方奉行井上淸右衞門被仰付候。

一同月　落合與一右衞門家跡斷絕之義に付、親類横手給人落合七右衞門、豐田平兵衞、右兩人及催促、與一右衞門知行高御判紙被召上、同人手廻は親類共え勝手次第に引取、與一右衞門居宅は御吟味之上親類共え被下候段、共に被仰渡候。

一閏六月　喜惣太一件に付取扱之次第御滿悅被思召候に付、戶村十太夫え、御紋付單御羽織拜領被仰付候。

一同月　印牧牧翁、三十人御扶持子とも代迄被下置候所、此度思召を以永々右御扶持被下置候。
一同月　御本方奉行太田市兵衞去七月中より病氣にて、再應願に付御役御免。
一同十九日　梅津小兵衞御物頭被仰付候。
一七月五日　爲上使岡野外記殿を以御鷹之雲雀御拜領被仰付候。
一同日　川上治左衞門御副役被仰付候。
一九月　朝年御下國御禮之御使者多賀谷長門被仰付候。
一同晦日　京都詰合秋山長右衞門、并吟味役秋保淸左衞門今日下着致候。
一同月　明年御留守詰向庄九郎被蒙仰候。
一同廿八日　御本方奉行鈴木與一左衞門大坂ゑ立歸登リ出足致候。
一十月　御副役金澤典膳、來卯年一ヶ年詰被仰付候。
一同月　去月廿三日一乘院遷化被致候。
一十一月　鈴木與一左衞門此度大坂より罷下に直々江戸ゑ趣、着之上於御陰之間被成下御意、御紋附御羽織被下置候。
一同月　去月三日於江戸玄猪之餅如先例被下置、同六日神鏡餅御披毎度之通被下置候。
一十二月四日五日　鑑照院樣百回御忌御法事於天德寺御執行被成置候。其節御名代佐竹將監被相勤候。

一同月　一乘院後住蓮乘院被仰付寺社奉行ゑ被仰渡候。

○明和八卯年

一正月元日　屋形樣、上々樣益御機嫌能被遊御超歲、如例年年始之御規式無御滯相濟。屋形樣御座間ゑ被遊御出座、諸士幷步行並まて面々御盃頂戴相濟。於此表は御年寄中御登城、例年之通年始之御規式御納被遊候。

一同二日　屋形樣御登城被遊如例年御時服御拜領、同日晚御謠初賑々敷相濟。

一同十一日　御記錄所御用初に付庄九郎殿御出席被成候由申來。

一同七日　御用所御用初に付何も出席御賑々敷ク相濟。

一同月　舊臘御町ゑ、近年相續御町燒失致候付小間割御積を以御町一統銀子被下置、且先祖、幷去ル亥年御用銀差上候面々ゑ御積を以被返下候。

一同月　御目付鵜沼伊一郎病氣に付願之通御役御免。

一同月　御物頭山口四郎太右同斷。

一同月　闐信寺後住永源院被仰付候付、同院後住此度闐信寺より、天德寺添書を以願申出候に付被差登候。

一二月八日　向庄九郎養母夜中病死に付、御悔之奉札被差出候。
一同月　佐竹河内母儀病死に付右同斷。
一同月　御代官田口五左衞門扱所無水村孝心之者在之に付、覺書にて御伺被遊候。
一同月　鈴木與一左衞門より、京都御用相濟六日江戸ゑ着之處病氣に付、いまた出足日限不相知候。
一同月　大山六左衞門御用人被仰付候。
一三月二日　佐竹將監出足被差登候。
一同月　黒澤内匠御物頭被仰付候。
一同十六日　御老中松平右近將監様より御留守居御呼出にて佐藤又兵衞罷出候所、御即位之儀表向被仰出、御獻上之品以御書付被仰渡候付、右寫二通被差下候。御即位に付兼て御名代松平隱岐守様被蒙仰候處、當九日御出足之由申來候。
一同月　佐竹將監名山城に被相改候。
一同十六日十七日　於壽量院例年之通御神事在之、須田美濃相詰ル。
一同月　御用金千二百目被差登候付、歩夫八人持にて被差登候。
一同十六日　從御本丸爲上使板倉佐渡守様、同十八日從西御丸阿部豐後守様御出御歸國御暇被蒙仰、如御先例御卷物銀子御拜領。同日御老中御連名之御奉書松平右京大夫様より到來、翌十九日御登城御

歸國御暇之御禮被仰上候。
一五月四日　平元茂助儀銅山より罷歸。
一同四日　大槻五郎兵衛病死。御本方奉行。
一同十四日　御着城被遊候。
一同日　多賀谷但馬御歸國御禮御使者罷登候。
一同月　御目付小野岡傳彌代廣瀨忠一郎罷登ル。
一同月　御町燒失之節一乘院燒失に付、汚穢之土地難相成金乘院え被移置候。仍て、御城繪圖四袋被差登候。
一同月　御卽位相濟付、兩御丸え御樽代肴御獻上相濟。
一同十日　慈明院樣五十回忌に付、於總泉寺一朝之御回向料銀七枚被遣。
一六月二日　根本多郎右衛門御目付役被仰付候。
一同十六日　梅津五郎三郎、六番大番與頭湊金左衛門代リ被仰付候。
一同二日三日　於總泉寺永壽院樣十七回忌御法事有り。
一同月　田安中納言樣御逝去。
一同月　御卽位相濟候付御國使者芳賀喜助被仰付候。

一同月　太田伊太夫閉門、篠田要人蟄居之所御免。

一同月　菊地新藏人御先代様より重キ御規式而已相勤候付、大番與頭格被仰付候。

一同八日　松平阿波守様御領内海部郡四和佐浦と申沖遠之處ゑ異國船流寄候處、言語不相分候得とも、阿蘭陀と相答候上長崎ゑと申書翰被相渡、同十二日出帆候由御用番ゑ御屆被遊候由、御家老加嶋備前より爲御知申來ル。

一七月　去月晦日御用番板倉佐渡守様より御留守居へ御切紙到來、當朔日登城御歸國御禮御使者、御獻上物如先例御奏者土岐美濃守殿御披露。但馬御前へ被召出、如先例太刀目錄獻上自分之御禮、御奏者牧野越中守殿御披露相濟。同日西丸ゑも登城、御獻上物幷自分太刀目錄共相濟。

一同月　壹岐守様聖堂遷座御用被蒙仰候。

一同月　本淸院様付御目付高崎惣右衞門代田中多門被仰付候。

一同月　黑澤伊兵衞大御番頭、小田野九郎大小姓御番頭、望月伊太夫御物頭、佐藤六郎兵衞大番與頭被仰付候。

一同月　瀧庄助去ル戌年不調法在之被召上候內、舊知被返置候。

一同廿日廿一日　俊交院様十七回御忌於天德寺御法事御執行。

一八月　明年御參勤御供登大山六左衞門、御膳番山下藤九郎被仰付候。

一同月　右同斷土屋彌五左衞門被蒙仰候。

一同月　御鷹方支配御刀番須藤平右衞門、本席にて御納戸役被仰付候。

一九月　在番平井喜六郎御用罷下可申、右代り福地三太郎拵出來次第罷登候樣被仰渡候。

一同月　御臺樣薨去に付、作り御使者被指出可然哉御評議之上、惇信院樣御簾中、公方樣御實母樣之節に準シ可然哉之段被仰達候。

一同月　公儀御年忌御法事每度、惣て御並樣於御國元御執行被成置候哉御留守居を以御問合之處、陸奧守樣、阿波守樣、薩摩守樣抔にては御法事每度御執行、越後守樣にては御勤と申名而已、鍋嶋樣輕重之御法事とも一向無之由。右に付、以來壽量院申出候ても御法事每に被成置候に及申間敷候由相決ス。

一同月　御臺樣御他界に付、御國使者皆川傳右衞門御申渡相勤ル。

一十月　大沼山稻荷別當大行院勸化に付役僧巡行之筈。

但延享二丑年此表ェ罷下候節、取扱之留書寺社奉行に有之由。

一同月　來年日光御社參、大納言樣御服中御延引被成置。仍近年中御社參可被遊候旨被仰出候。

一同月　支配御目付若木八右衞門不屆に付、以御條目斬罪被仰付候。

一十一月　御刀番坂本九郎右衞門病死に付、右代罷登迄組付御用之儀平澤平角假擔被仰付候處、御目付御用は引請候儀御訴訟申上候。仍て御用人片岡七十郎ェも御問合被成候得とも、此表ェ被仰達候迄

は何扣候外在之間敷申上候由。

一同月　梅津藤十郎一番御番頭、太田市兵衞本席にて御本方奉行、田中忠兵衞御物頭、金與七郎、太田重兵衞御目付、小介川庄左衞門大御番九番與頭、益田仲大小姓四番與頭被仰付候。

一同月　明年御參府御國使者小磯五郎兵衞被仰付候。

一同廿八日　御用人太田伊太夫、大番與頭茂呂永吉、大小姓與頭山縣市三郎被仰付候。

一十二月　御刀番梁市三郎、無組御刀番深谷藤左衞門、御小姓筆頭天神林源內、小貫彥九郎被仰付候。

一同六日　伊達外記、澁江內膳御相手番被仰付候。

一同月　去月廿八日夜八ッ時過松浦樣御屋敷より出火、御長屋之內七八軒燒失御差扣之義被仰上候處、不及其儀候由被仰渡候由。

○明和九辰年　十一月安永ト改元

一正月元日　屋形樣、上々樣益御機嫌能被遊御超歲、年始之御規式相濟。

一同月　寒中之御使者高畑勘助勤之。

一同月　舊臘廿七日、御用番從松平右京大夫樣御留守居御催促に付佐藤又兵衞罷出候處、御鷹之鶴一羽以宿繼御拜領、御奉書御渡被成候。右鶴御奉書とも請取御屋敷え致持參候付、其段雪途故三人御飛脚

を以被仰達、鶴御拵出來次第傳馬町問屋え被相渡、正月五日着御頂戴相濟。
但山城始御年寄中幷御用懸り、御相手番眞崎兵庫、酒出金太夫、其外御用懸之面々何も登城、御奉書之御返翰早速被差出候付、右御禮之御使者信太内藏助卽出足ス。御國使者を以、御本丸え斗干肴獻上之。

一同七日　御用所御用初に付御年寄中御局え被爲入可申候所、同日寺院御目見在之遅刻相至候付、同十一日同所え被爲入、如先例御賑々敷相濟。

一同月　御前樣手代役安藤鄕太被仰付候。

一同月　年始之御使者奥山吉左衞門勤之。

一同月　御前樣御臺所役岩堀造酒被仰付候。

一同廿八日　於金之間御拜領之鶴御披在之、御料理御囃子有之何も出席、御用懸面々え御酒御吸もの被下候。二度目之事故一役一人ツヽ罷出、御酒被下候儀は不被成置候。

一同十五日　田沼主殿頭樣御加增高五千石御拜領、御本丸御老中被蒙仰候。

一同十三日　御目付伊勢鐵太御用にて外出之處、途中より中風煩にて病死。

一二月五日　大正寺一件に付、龜田え御使者御本方奉行川井源右衞門、御用人大山六左衞門勤之。

一同月　阿曾村養宅御針醫御先代樣より御代々之勤功被思召、嫡孫より醫道御免士に被召立候。

一同三日　天神林源内御目付役被仰付。
一同月　御勘定奉行武藤七太夫、病氣にて再應御訴訟之上御役御免。
一同月　御厩別當渡部善兵衞段々被留置十ヶ年餘在番之處、御國元に實母有之對面願に付、日數六十日御暇被下置罷下ル。
一同七日　信太内藏助如先例御獻上無御滯、御禮御使者御本丸ゑ勤之。
一三月二日　御物頭大越長右衞門惣同役より申上候次第有之、役儀被召放遠慮被仰付候。
一同月　菅谷紀太郎御勘定奉行被仰付。
一同月　澁江左膳御番頭、病氣に付再應御訴訟御役御免、去月晦日御免。右代梅津賴母被仰付候。
一同七日　眞崎五郎左衞門御境目奉行、根田金藏御物頭被仰付候。
一同月　去月廿九日夜中目黑邊より出火にて御丸下を始燒失、同夜四ッ半頃、御上屋敷無殘燒失致候。右に付御前樣、本淸院樣眞先茶屋ゑ御立退、左近樣には千壽寺院ゑ暫御休らひ被成置候處、小石川通よりも又々出火千壽大橋にて鎭火。
　但上々樣御安否御尋御刀番糸賀九左衞門立歸登被仰付、九日出足。
一同月　右に付御參府當秋中迄御延引之御奉書御到來致候得とも、此度は御並樣御殘少御類燒故、此節御參勤御延引被成置候ては御首尾合如何に付、御供御人數半減被成置、當廿三日御發駕可被遊被仰出

候處、御安否御尋之御奉書一昨十二日到來、同十三日、當五月中迄被延置候段御奉書御到來。

一同月　鈴木與一左衞門兼て京都當春登之處、御用在之此度進登被仰付候。

一同月　御本方奉行太田市兵衞江戸ぇ立歸登被仰付。

一四月三日　上意之旨御書付を以被仰出候付、何も登城致候。

一同月　松野彌五郎大番頭勤方思召に不相叶候付御免に付、遠慮申立候處遠慮被仰付候。

一同四日　遊行上人湊より龍泉寺ぇ御引移候。

一同月　濱町御殿御取毀中、御屋敷ぇ御立替之上本淸院樣御引移被遊候筈に御座候處、御參府御碍に付日暮里御殿被爲入候。

一同月　菅谷紀太郎代御物頭岡半太、幷眞崎文藏、太田主鈴御小姓筆頭被仰付候。

一同十九日　岡本傳之助、山方能登、二番、六番大御番頭、幷小室源五右衞門、眞崎理左衞門、平塚惣兵衞大番與頭被仰付候。

一同廿一日　巳下刻御發駕被遊候。

一同廿五日　江田九左衞門儀、御物頭鈴木助吉代被仰付候。

一同十九日廿日　德正院樣百ヶ年御忌於總泉寺御回向御執行被遊候。

一五月　梅津與藤治御物頭病氣に付、願之通御役御免。

一同十一日　左近様附頭役木村惣兵衛病死。
一同四日　安藤彈正少弼様より御留守居御呼出にて佐藤又兵衛罷出候處、御直々被仰渡候は、龜田役人ゑ大正寺通船悉差滯候様に相聞得候付、追て御沙汰被成置候迄は是迄之通無役にて可被致通船むね、彼方役人ゑ被仰渡候次第御懇被仰出候。
一同十三日　爲上使板倉佐渡守様御出、同十四日御老中御連名之御奉書御到來、翌十五日御登城御參府御禮被仰上候。
一同月　御物頭梅津主鈴病氣に付、願之通御役御免。
一六月　御本方奉行石井嘉左衛門、御用人片岡七十郎御用在之立歸罷下ル。
一同月　江戸表御番所之外重役之面々迄、八ッ時以後より肩衣御免被仰出候。
一同月　石川文右衛門當二月中より遠慮之處、此度御條目を以遠慮被仰付候。
一同月　左近様付頭役奥山吉左衛門、御用人格を以被仰付候。
一同十三日　伊達外記病死。實弟乙之助末期養子に付知行高之内三ヶ一被召上候。
一同十三日　津輕出羽守様御城下御通行之節、須田美濃罷出。
一同十六日　阿仁善導寺無調法有之、御條目を以生涯蟄居被仰付候。
一同月　去月廿七日、於江戸御刀番後藤理左衛門無調法有之、御條目を以役儀被召放遠慮被仰付候。

一七月九日　梅津與藤治、川井兵四郎、山方三郎左衞門代御物頭、山方茂左衞門、谷田部要人、瀨谷小太郎被仰付候。

一同月　龜田大正寺一件に付、春中より青木易右衞門と申牢人內々所存相盡候付、五人御扶持被下候。

一同十六日　上野御門主樣御不例に付、於西御丸五日御忌中。右に付三御屋しき三日鳴物御停止、此表は無御構。

一八月二日　梅津主鈴代御物頭小野崎桂、鵜沼十兵衞代大番與頭山崎曾兵衞被仰付候。

一同日　夜五ッ頃大風雨にて、江戶御殿廻幷三御やしき、御長屋不殘破損、本庄川端邊より所々出火。

一八月三日　上使阿部助九郞殿を以雲雀三十被遊御拜領候。

一左近樣付御刀番御納戶役を此度役名被相改、是迄之通にて御局附御側役と被仰付候。

一九月　明年御留守詰小野寺主水被蒙仰候。

一同廿三日　茂木若狹在府屋より出火不殘燒失、茂木志津摩同所に借宅罷有候故、遠慮申立候處御免。

一同月　梅津久四郞當十九日致病死候。實子桃之助今年四歲罷成候處微弱に付、同苗五郞三郞再從伯父之儀御座候付、嫡子桃之助看抱養子願申立候處願之通被仰付。但知行高之內三ヶ一被召上候。

一同月　明年御留主詰御副役吉川和助被仰付候。

一同月　來春御下國御禮御使者眞壁掃部之助被仰付候。御相手番役。

一同廿七日　松平右京大夫樣より御留守居御呼出、大八幡社堂土地引替、御伺之通被仰渡候。
一十一月　御副役泉嘉七郞、當六月中より病氣にて願之通御免。右代豐田嘉左衞門被仰付候。
一闐信寺病氣に付願之通閑居被仰付候。
一同二日　上野御本坊より出火にて無殘燒失。
一同四日　松平右京大夫樣より御呼出佐藤又兵衞出ル。大正寺通船御物川一件無殘所相濟候て、永久御安堵に能成候旨被仰渡、御書付等末に有り。
一同十三日　奧津左京殿を以鴈二羽被遊御拜領候。
一同月　黑澤伊兵衞本席にて眞壁十兵衞代五番大小姓御番頭、幷平塚惣兵衞、嘉藤團右衞門代り御物頭、平澤小七郞、鹽谷正左衞門代大番與頭、信太傳右衞門、山方茂左衞門代り七番大番與頭被仰付候。
一同月　來十八日七日(マヽ)指月院樣三十三回御忌に付、闐信寺にて御回向被成置候。
一同月　六番大番與頭小田部新一郞、二番大小姓與頭渡邊七藏被仰付候。
一同廿五日　惣御出仕にて御登城之處、京都より年號改元被仰出候。仍て、十二月十五日より安永と改ム。
一十二月　御納戶役小林孫兵衞、兼て勤方思召に不相叶に付御役御免遠慮被仰付候。
一同月　關口半八御納戶役被仰付候。

一同月　大正寺一件御順道に相濟、其節太田伊太夫格別出精に被思召、一昨年被召上候舊知不殘被下置候。御留守居佐藤又兵衞右同斷に付、御加恩高二十石被下置候。

一同月　御前樣御着帶御祝儀被遊御整候付、山城始此表引渡より諸頭役まて被仰知候。

一同月　龜田大正寺川下船、無役通船御願之通相濟永久御安堵被思召候付、右御用掛相勤候川井源右衞門、井口長兵衞、片岡七十郞、大山六左衞門江戸在番於同所拜領小貫采女、吉川和助、御紋付御上下拜領被仰付候。

○安永二巳年

一正月元日　屋形樣、上々樣益御機嫌能被遊御超歲、於此表御年寄中御登城如例年御規式相濟。

一同二日　屋形樣御不快に付御登城不被遊候。

一同五日　御年寄樣え御回勤被遊候。

一同七日　御用所御用初に付何も登城、如例年御規式相濟。

一同月　左近樣附御側役關口半八代り渡邊五右衞門被仰付候。

一同月　御用人大山六左衞門御用在之江戸より立歸り罷下ル。

一同月　來月十三日十四日、於天德寺智淸院樣二十五回御忌御法事有り。

一同廿六日　信太小右衞代御境目奉行兼帶根本內藏丞被仰付候。

一同廿五日　御本方奉行福地三太郞、御用有之此度立歸罷下ル。
一御前樣御產前御用掛太田市兵衞、太田伊太夫、大山伊織、土屋吉兵衞、赤尾關織部被仰付候。
一二月廿九日　小野寺主水出足江戶ゑ被罷登候。
一同月　壹岐守樣御家老小野崎舍人代り高瀨丹下ゑ被仰付候。
一三月十七日　蓮壽院樣附頭役富田喜右衞門、御殿におゐて急に差塞在之手足不相叶病躰差重り、遺跡願申立同日病死。前日思召を以御加恩高五十石被下置候。
一同月　萬壽姬樣御養生不被爲成御叶去月廿日被遊御逝去候。仍て鳴物同廿九日迄、普請は同廿四日まて被停止候。
一芹田市左衞門御代官所藤琴村安七ト申もの、數年孝養相盡候付御稱美被成下候。
一三月廿六日　御吉辰に付菊地新左衞門上着に付、御前樣御着帶御儀之規式相濟。
一閏三月　左近樣附頭役奥山吉左衞門儀富田喜右衞門代被仰付候付、右代り平澤平角被仰付候。
一同月　御前樣御產之節土屋彌五左衞門御胎衣篚御役、御用人太田伊太夫、御墓目小野寺主水、後見矢取今村彌三郞被仰付候。
一御用人大山六左衞門奉行格被仰付候。
一御家老平元茂助母病死に付、奉札を以被成下御尋候。

一同十日　津輕出羽守樣御通行に付、御馳走人馬御斷之儀は去辰年迄に付御懸合無之候得共、古來之通今年より被差出候。鱗勝院脇ゑ鹽谷伯耆出ル、御進物御用御刀番梁市三郎、御用之爲メ御町奉行井口長兵衞湊ゑ罷越ス、御足輕町ゑは菅谷紀太郎出ル（御町奉行小野岡掃部病氣に付）御奏者御物頭望月伊太夫勤之。

一同十六日　御用人大山六左衞門、御膳番大山伊織御用在之立歸罷下ル。

一同月　屋形樣江戶御發駕來月廿八日と被仰出候付、御宿觸御飛脚着。

一禁裏御疱瘡、御酒湯被爲召候爲御祝儀、以御使者御太刀馬代被獻上之。京都詰合鈴木與一左衞門被仰付候。

一四月　壹岐守樣御嫡子久米之助樣、當朔日初て御目見被仰上無御滯相濟。

一同月　大番頭戶村一學、和田掃部之助病氣に付、再應御訴訟願之通御免被仰付候。

一同月廿一日　切支丹改役小野崎靱負、江尻軍兵衞無調法在之、以御條目遠慮被仰付候。

一同十六日　從兩御丸上使板倉佐渡守樣、阿部豐後守樣御出御跡國御暇被蒙仰、御先例之通御卷物銀子被遊御拜領。同月十八日御登城、御暇御禮被仰上候。

一五月三日　江戶御發駕御日限被仰出御宿觸被成候處、御前樣御安產之上可被遊御發駕被仰出候に付、御宿觸直シ有り。

一同日　巳刻過御前樣御安產御姬樣御誕生被遊候。一役之面々熨斗目麻上下にて御膳番局ゑ御悅申上

候、其外近進並已上は御內玄關ゑ御帳被指出御悅申上候。但御安產に付。

昭和九年一月

故深澤多市 校訂
國本善治 校字

秋田叢書第十二卷終

昭和十年八月十五日印刷
昭和十年八月二十日發行

深澤

秋田叢書第十二卷

不許複製（非賣品）

編纂兼發行人　秋田叢書刊行會
代表者　深澤喜佐子

印刷者　濱野英太郎
東京市麹町區紀尾井町三番地

印刷所　東京印刷株式會社麹町出張所
東京市麹町區紀尾井町三番地

秋田縣横手町
發行所　秋田叢書刊行會
代表者　深澤喜佐子
振替仙臺八二五二番